

THE RUINS OF ANCIENT SINHALESE CIVILIZATION

—in the jungle in Mahaweli Ganga basin—

SRILANKA

PART II

セイロン島の密林遺跡 (II)

AMKAS · AMKAS · AMKAS · AMKAS · AMKAS ·

AMKAS

7

法政大学セイロン島密林仏跡探査隊

The Exploration Club of Hosei University

近畿日本ツーリスト・日本観光文化研究所

本報告書を

第1次調査以来の遠征隊派遣本部長であり
第3次隊派遣中の1976年10月14日に逝去された

いまは亡き

法政大学教養部教授、前法政大学探検部部長の

鶴谷研三郎先生

にささぐ

Ruins of Ancient Sinhalese Civilization

- in the jungle in Mahaweli-Ganga basin Sri-Lanka -

(English Summary)

This is a report based on those researches into Buddhist ruins which were continuously performed in the second research project in 1975, and the third in 1976 by the Exploration Club of Hosei University over the jungle area in the basin of Mahaweli River in Sri Lanka. This report is also regarded as a continuation of that preceding report based on the first research in 1973. The first report contains a brief Summary in English, though the text is written in Japanese.

The series of these research works has for its object to accumulate fundamental plain data of unsealed ruins of Buddhist monasteries, castles or forts, and irrigation equipments which remain in the jungle area in the middle stream of the Mahaweli basin. At our first expedition, 58 places of ruins of those were visited and researched. On the occasion of the second expedition, 27 places of ruins of Buddhist monasteries and many other ruins, at the third, 38 places of those ruins were researched by our party members.

In this report, the chief explanations of these ruins data are summarized in English. We shall be very happy if these data are helpful to the further studies of those authorities in Sri Lanka which elucidate Buddhist history or Sinhalese civilization.

The composition of this report is as follows;

1. Synthetic explanation of these research works.
2. Operations of research works and outline of regions.

3. Staffs concerned.
4. Explanatory notes.
5. Data of ruins. (Japanese , English)
6. Proceeding records of each expedition team.
7. Reports of our equipments, foods, medical treatment, general account, etc.
8. List of bibliography. (books and maps)
9. List of cooperators or helpers.

Further we are deeply grateful to Mr.M.H.Sirisoma of Sri Lanka Archaeology Dept. ,Dr.L.Plematilleke of Archaeological Dept. of Sri Lanka Univ. and many officers who helped us in various ways. Last but not the least, we would also like to express our thanks to many villagers who helped us in the researching area.

調査報告書の刊行に寄せて

法政大学文学部教授 渡辺一夫

インド亜大陸に接するスリランカには、2千年の昔から、高い文化をもった人びとが住んでいた。とりわけマハウェリ・ガンガの流域は、ひとつの中心で、灌漑農業に基礎をおいた社会と、仏教を中心とする豊かな精神生活を築きあげた。現在では、その存在を証明する水路、集落、とりわけ多くの仏教遺跡が、密林のなかにむなしく残されている。

法政大学探検部は、1970年ごろからセイロン島の仏跡調査を計画し、準備をはじめていた。さいわい、多くの関係者の努力がみあって、1973年に7名の隊員を6カ月にわたってスリランカ国に派遣することができ、その報告書は「セイロン島の密林遺跡」The Ruins of Ancient Sinhalese Civilization —Srilanka—として、探検部から1975年に刊行された。そしてさらに若い隊員を加え、1975年の第2次調査、1976年の第3次調査が、ひきつづいておこなわれた。この1978年報告書は、出版物としては1975年報告書につづくものであり、内容としては1975、1976年の調査隊の成果がおさめられている。

いうまでもなく、探検には多くの困難がともなう。国情の相違のため、長期間の滞在ができなかったこと、ボートによって不利を多少克服できたが、依然として困難な密林の通過、健康をそこなういくつものおそれ、などの、いわば物理的な困難がある。さらにいくつかの国語と会話の勉強を含めた、人間関係の問題点。しかしながら、隊員はこれらを克服し、スリランカ政府当局や国立大学考古学教室の先生方が讃嘆の声を惜しまなかったほどの充実した成果を挙げ、国際間の文化交流に対しても、ささやかではあるが輝いた礎石を置くことができたことは、よろこばしい限りである。

まだまだ残されたことは多い。隊員の数が少なかったためだが、発掘調査をおこなえなかった。仏跡の遺品からその寺院の宗派を判明させることも不十分である。灌漑用水の跡から当時の農耕の規模や集落の大きさを知ること……これらは今後の解明によらなくてはならない。

成果を挙げ得たことにつき、現地スリランカ政府の惜しみない協力をはじめ、多くのかたがたから心あたたまるご援助をいただいた。巻末に名前を記し、深く感謝をささげたいと思う。

おわりにのぞみ、法政大学探検部はつぎのことを記さなければならない。それは、探検部創立以来親しく御指導をうけ、このたびの調査隊派遣に対しても本部長として数かずのお教えをいただいていた部長、鶴谷研三郎教授を喪ったことである。この機会をお借りして深く哀悼の意を表するとともに、ささやかな、しかし私たちの努力の結晶であるこの報告書を、鶴谷先生のご霊前に捧げ、先生の御霊安かれと、心からお祈り申し上げる次第である。

(法政大学 探検部部長)

密林遺跡と調査隊

伊藤 修

法政大学探検部を母体として派遣された「法政大学セイロン島密林仏跡探査隊」は、これまで3回にわたって、セイロン島（スリランカ民主社会主義共和国）のマハウエリ河中流域の密林地帯を対象に、古代仏教遺跡探索のための遠征調査を行った。本書は、その2次隊（1975年7月から9月）と3次隊（1976年8月から11月）両隊による調査活動の報告書である。

この計画の発端は、1969年の「法政大学インド洋・モルディブ諸島調査隊」にさかのぼる。モルディブ隊は、当時鎖国状態であったモルディブ共和国への入国交渉のため、長期のセイロン滞在を余儀なくされていたが、この時期を利用して、ジャングルに埋もれる遺跡群、マハウエリ河等々の情報収集、地図の購入を行っていた。

その後1971年、法政大学探検部は最上川で死者2人を出すという事故を起こし、その組織、活動等を根底から再考しなければならない事態に直面した。我々は、一年余の日々を部再建と活動における最大限の安全確保という課題にとりくみ、やがて活動を再開した。しかし、部員個々の探検活動への情熱と志向とは裏腹に、ともすれば消極的な発想による活動しか創出できなかったのもまた事実であった。

こんな時期に、セイロン遠征の計画が生まれた。部内に「セイロン遠征準備会議」を設立し、全部員に近いかたちでセイロン研究が始められた。同時に、この準備会議は、部再建の一連の作業の意

味を持つことになった。そこでは、実際的な遠征準備と併行して、組織的、個人的に「探検とは？」「遠征とは？」「部とは？」……という突き詰めが繰り返されたからである。

こうして、数多く出された活動テーマの中から、マハウエリ河中流域の仏教遺跡群探査を主眼とし、併せて周辺の水田遺跡、水田跡、集落跡の調査及び定着部落の民俗誌を作成することが選定された。この地域は、セイロン島の中では、ごく狭い範囲でしかない。しかし、人口の稀薄な一面のジャングル地帯であり、かつての人々の居住の証しが、無数の仏教遺跡、貯水池跡などとして地図に記されていることが、我々を惹き付けたことは言うまでもない。また、これらのジャングルに埋もれた遺跡には、古代シンハラ文明の滅亡の歴史が秘められていることも、我々を熱中させるのに十分であった。

紀元前5世紀インドから渡来したアーリア系のシンハラ族は、現在のアヌラダプラに最初の王朝を築き、紀元前3世紀に伝来した仏教と独自の貯水灌漑農業を基盤として王国を繁栄させていた。島の各地には、多くの寺院、仏塔が建立され、紀元1世紀頃からは、島内第一の大河マハウエリガンガ流域に貯水池群と水路網で利水する大規模な灌漑事業が着手されて、人々の精神的、物的基盤を形成していた。ところが1世紀以降、南インドのドラビタ系タミル族の侵入が繰り返され、この地域は、幾度も激戦地となった。10世紀末から

は、北端のジャフナ半島を中心にタミル人の定住が増しつづけた。戦乱が繰り返されるうちに、シンハラ族は押されて南方へと退くようになり、13世紀までのポロンナルワ時代の繁栄をさいごに衰退の道を歩んでいく。

王都であったポロンナルワの南に広がるマハウェリ河中流域は、このような歴史の中でどのような位置にあったのであろうか。史書によると紀元前3世紀頃から、マハウェリ河中流部の右岸沿いに「王の道」と称する国内最大の街道が走っていたという。それはアヌラダブラからポロンナルワを通り、マハウェリ河沿いに南下し、マヒヤンガナから南東部のルフナ公国へ抜ける道であった。タミル族の侵入時、王都を取られたり、奪還したりするたびに、シンハラ族の軍勢が王公僧侶とともに、この道を往来したのだ。我々の目標とした地域は、この街道のポロンナルワとマヒヤンガナの間にあたる地域である。この地域の放棄は13世紀以降とされ、現在は、地図上の仏教遺跡、貯水池と用水路跡、水田地を意味する地名等からのみ当時をしのぶことができるのである。

このような遺跡群に対し、我々は、スリランカ当局との交渉により、既発見及び未発見の各遺跡の位置、規模、形態などを明らかにするための基礎的データの集積を目的として実地踏査による調査活動を行うことになった。これらは、もちろん探検部の本領を発揮できるものであった。遺跡調査ならば、発掘そして様々な考古学的考証等々を行うことも可能であろう。しかし、これらは我々だけの力の及ぶところでもなく、まずは広く浅く各遺跡の基礎的データの収録をめざした。スリランカ考古学局による、この地域の遺跡調査の段階は、地図に位置を登録したのみに終わっているという実情からも、我々の活動の意義は確かなものになった。

1次隊(1973年7月から10月)は、ほぼ計画通りの活動を遂行し、相応の成果をあげることができた(『セイロン島の密林遺跡』AMKAS出版シリーズ6)。さらに、1次隊の成果と経験を生かして継続された2次隊そして3次隊によって、未踏査域は狭められ、現在まで100ヶ所近い仏教遺跡の基礎データを集積することができた。しかし、当初の計画通り、マハウェリ河中流域を全てカバーするには、未だ到っていないのが現状である。

遠征活動での強烈な刺激は、時とともに失なわれがちなものである。現在、当活動の経験者は、「スリランカ仏教遺跡研究会」を組織し、遺跡調査報告の徹底を計ることはもちろん、さらに、異文化の中での人間体験を礎に、我々に課せられた新たな課題を、今後いかに消化していくかという難題に主体的に取り組もうとしている。ともかく、この報告書によって、我々の活動が多くの方々の目に触れ、様々な角度から御批判を仰げるならば幸いである。

終りに、この遠征を通じてお世話になった多くの方々に心からお礼を申し上げたい。未熟な我々を励まし、送り出して下さった学内外の後援者各位並びに本隊に終始協力態勢を惜しまなかった現地当局、関係者各位に対し、深く感謝しなければならない。とくに、温い援助と助力を賜わったスリランカ考古学局には、我々の負うところ大である。また、1次隊に引きつづいて、日本観光文化研究所から刊行の機会を与えて下さったことは望外の喜びであるとともに、厚くお礼を申しあげたい。

(スリランカ仏教遺跡研究会代表

1次隊隊員)

調 査 隊 の 組 織

【隊派遣本部】法政大学探検部

東京都千代田区富士見2-17-1

本部長 鶴谷研三郎（探検部部長、教養部教授）

副本部長 川成 洋（探検部顧問、教養部教授）

佐藤英郎（75年度探検部副将、76年度探検部主将）

【第二次隊隊員】

隊長 八木美樹男（25才）

当時経営学部経営学科4年、探検部4回生（現OB）'72韓国親善遠征、'73第1次セイロン隊隊員など。現在東邦セルタン工業K・K勤務。

副隊長 角谷定俊（25才）

当時文学部史学科4年、探検部4回生（現OB）'72韓国親善遠征、'73対馬民俗調査など、現在、明治大学大学院博士前期課程（東洋史専攻）在学中。

記録 東昌宏（25才）

当時経営学部経営学科4年、探検部2回生（現OB）、'74天塩川ゴムボート航行など。現在三重県伊勢市在住。

装備 執行一利（23才）

当時文学部哲学科2年、法大探検部員。'77奥只見総合フィールドワーク、'78根釧原野冬期横断など、現在同学科在学中。

食糧 堀江信介（26才）

当時経営学部経営学科4年、探検部5回生（現OB）。'73黒部原始生活実験、74年度主将。現在フリー。

顧問 岡村隆（30才）

'72文学部日本文学科卒業、法大探検部OB、'69モルディブ諸島探検、'73第1次セイロン隊隊長など。現在トラベル・ジャーナル編集部勤務。日本観光文化研究所同人。

【第三次隊隊員】

隊長、食糧 田中 憲（23才）

当時経済学部経済学科2年、法大探検部員。'77奥只見総合フィールドワーク、'78屋久島屋久杉探査など。現在同学科在学中。探検部主将。

測量、装備 下坂 充（21才）

当時社会学部社会学科2年、法大探検部員。'75飯豊連峰原始生活実験、'77奥只見総合フィールドワークなど。現在同学科在学中。

会計、医療 深谷行弘（22才）

当時社会学部応用経済学科2年、法大探検部員。'75飯豊連峰原始生活実験、'78多良間島生活体験調査など、現在同学科在学中。

撮影、記録 境 雅仁（22才）

当時経済学部経済学科2年、法大探検部員、'77奥只見総合フィールドワーク、'78群馬鐘乳洞探査など。現在同学科在学中

目 次

序文 調査報告書の刊行に寄せて	(渡辺 一夫)	3
密林遺跡と調査隊	(伊藤 修)	4
第2次隊活動の概要	(八木美樹男)	8
第3次隊活動の概要	(田中 憲)	9
調査隊の組織		6
派遣本部 学術顧問 隊員 事務局		
遺跡調査報告編		
凡例		12
解説 マハウェリ河中流域の遺跡群	(岡村 隆)	15
遺跡残存の歴史的背景 分布状況と過去の調査 寺院遺跡の種類 用語解説		
1. アッレワワ部落周辺の遺跡		21
2. ピンブラッタワ部落周辺の遺跡		38
3. ピンブラッタワ部落南方の遺跡		65
4. マドゥル・オヤ東岸の遺跡		82
5. カドゥルピティヤ以南の遺跡		96
6. カドゥルピティヤ以北の遺跡		142
隊務報告・資料編		
第2次隊行動記録		177
第3次隊行動記録		179
装備報告(第2、3次隊)		182
食糧報告(")		188
医療報告(")		191
第2次隊会計報告		194
第3次隊会計報告		195
参考文献リスト		197
協賛者芳名録		203
あとがき		206

第2次隊活動の概要

八木美樹男

第2次遠征隊は、'73年に派遣された第1次遠征隊に引き続き、マハウエリ河中流域に散在する古代シンハラ文明の仏教遺跡の基礎的データを収集することを目的とした。当隊が目的とした地域は、第1次遠征隊で踏査できなかったアッレワワ部落、アララガンウィラ部落周辺とマドル川東岸の地域で、第1次遠征隊の活動域よりも、更に広域にわたる探査活動となった。

当初の計画では、第1次隊からの情報、地図上での考察から、エラワクンプラ部落にベースキャンプ(以下BCと記す)を設営する予定であったが、偵察行の結果、この部落は、ピンブラッタワ貯水池の大改造にともない、住民はすでにアララガンウィラ部落に移っており、わずかに数家族が残っているという状況で、事実上、廃村と言ってよいものであった。それで、BCとしての機能(交通・連絡の便、隊員の生活面、安全性)上、我々は、アララガンウィラ部落近くにあるピンブラッタワ小学校近くの空地にBCを設営することにした。この付近は、ピンブラッタワ貯水池の灌漑を利用した水田地帯で、さながら日本の田園風景を思わせる景観である。しかし、一歩足を伸ばすと、周囲は濃密なジャングルが無限とも思われる広大さをもって立ちほだかっている。

当隊の全調査遺跡は、27ヶ所にわたったが、多くの遺跡は、濃密なジャングルにおおわれた岩丘上に分布し、「地図」上に遺跡印がある例が多くあった。その為、第1次遠征隊の経験を踏まえて、読図によりジャングルを踏破する方法が多くとられた。現地ガイド(村人)は、遺跡(岩丘)の位置を、ジャングル内に残っている踏み跡程度の道で理解している場合が多い。すなわち、歩いた経験のある道しか彼らは進もうとしないのであ

る。それで、地図上では、近いと分かる遺跡でも、道が遠回りしていても、彼らはその道を進もうとする。我々は、そのような時には、地図とコンパスを頼りに、一直線で踏破することがあつた。ガイドも当初は躊躇していたが、次第に彼らも、道を見失ったりすると、我々のコンパスと地図を頼るようになった。

探査活動前半では、1名をテントキーパーとしてBCに残す以外は、全員で各遺跡を探索するといった集中方式をとり、各隊員がジャングルに馴れ、遺跡の調査法を十分習得した時点で、2隊ないし3隊を同時に出し、各遺跡を調査するといった分散方式をとった。これは、遺跡の調査数を増すと共に、各隊員の意識を大いに向上させた。

当隊では、遺跡がジャングル内の岩丘上に多く分布していたため、ジャングル内の野営を含む探査行を数多く行なった。そして、そのつど1名以上のハンター及びポーターを必ず雇うこととした。ジャングルでは、危険が多く、現に我々の入城期間中にも部落民が象や熊に襲われ、死亡した事件が起きている。我々が無事調査活動を終えることができたのも、彼らの協力によるものである。

こうして得た遺跡のデータはできる限り、その日の内に整理するように努めたが、最終的には、全ての探査活動が終了した後、第1次遠征隊が御世話になったセイロン大学ペラデニアキャンパスを借りて、データの細部にわたって検討を加え、カード方式にて整理した。考古学局のシリソマ氏からは、遺跡の調査方法やデータの整理に関して多くのアドバイスを戴いた。また、考古学局で予定していたセイロン島北部の遺跡調査にも、当隊に協同調査の依頼があつたのだが、日程が合わず実現できなかったのは非常に残念であった。

第3次隊活動の概要

隊長 田中 憲

第3次遠征隊の探査目的地であるマハウエリ河中流部の左岸地域は、第1・2次遠征隊の未調査地域であり、当隊の探査活動は、その未調査地域南端の開拓村（マラカ）への入域、基地設営から開始された。物資輸送のためのトラックで、コロンボから古都キャンディを経て中央高地の主要都市マタレへ、そこから中央高地を迂回するルート（マタレ—ナランダ—エラヘラ—パッレガマ—ヘッティボラ）を經由し、マラカ村へ入った。マラカ村への入域ルートには、キャンディから中央平原の要地ハサラカを経て、マハウエリ河左岸を縦貫するミニベ・ヨディ・エラ（灌漑用水路）沿いに北上するものもあるが、当隊の探査目的地がマタレ行政区の管割下であり、活動の便宜をはかるため、マタレを經由する山越えのルートを利用した。本隊の入域に先だつ現地偵察の際には、マタレの県知事をはじめとして、関係者の全面的協力を得ることができ、入域方の手配に関して便宜をはかって戴いた。

マラカ村では、村役場の脇の空地に大小のテント2張、フライ1張を設け、机、椅子を住民から借用するとともに、便所なども完備し、居住性を高めた。マラカ村での探査活動は、まず、現地の自然環境に馴れることを考え、当初は無理をせず日帰り行程で調査を行なった。周辺は開発された土地であり、比較的容易に探査活動を行なうことができた。

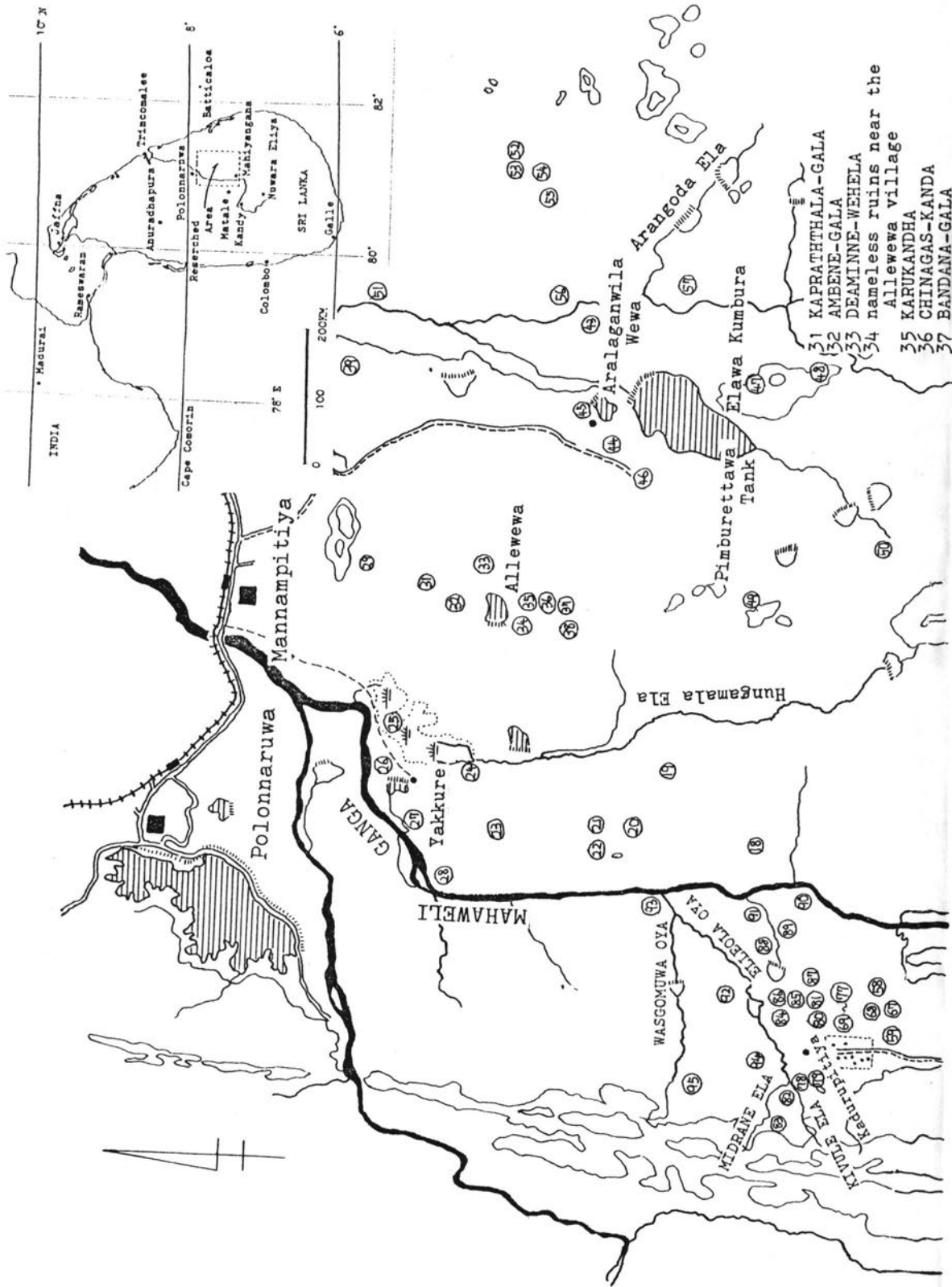
その後、雨期の接近にともない探査活動の能率を高める必要が生じ、ミニベ用水路沿いの最北端の開拓部落（カドゥルピティヤ）に第2基地を設けた。基地は、住民の好意により、部落北端の民家の一室を借用することができた。テント、装備、食糧の一部をマラカ村に残したまま、トラクター、

モーターバイクで随時マラカ村からカドゥルピティヤ部落へ物資を輸送した。カドゥルピティヤ部落では、マラカ村と同様、日帰り行程の探査を中心としたが、密林に点在する遺跡を調査するために、3度にわたり、野営を含む踏査行を行ない、遠方の各遺跡を線で結んで調査の足を伸ばした。

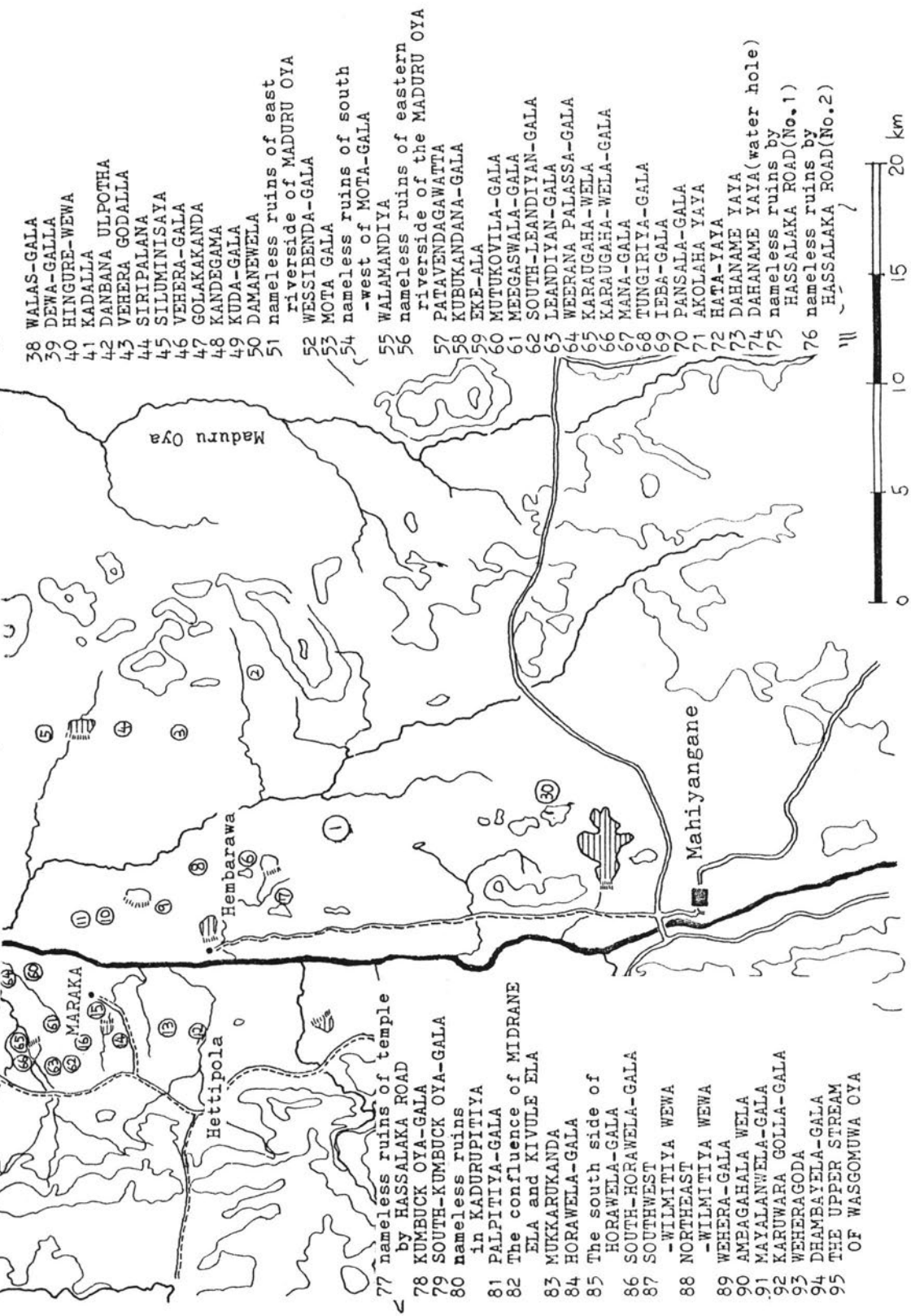
遺跡の調査は、「地図」上の遺跡に関しては、地図とコンパスを利用して遺跡地点を探査する方法を採用したが、マハウエリ河左岸地域には、「地図」に位置が記載された遺跡は少なく、そのため当隊は聞き込みに基づく探査活動を中心とした。カドゥルピティヤ部落では、ハンター、住民の協力により、毎日のように未確認の遺跡に関する情報を入手することができた。こうした情報を基に調査した遺跡は、全調査遺跡（38箇所）のうち34箇所にものぼる。遺跡の測量はクリメーター、メジャーなどによる簡易測量を行なった。探査活動終了後、測量データをマタレ、キャンディで整理し、実測図、概念図などを作成した。

探査活動中は現地のハンター兼ガイドを2名雇用した。両ハンターとも、地理、遺跡の所在に詳しく、銃の腕に優れ、力強い仲間となった。また、英語とシンハラ語のわかる通訳を雇い、キャンプ生活をともに過ごし、全探査活動に同行してもらった。

現地では官民を問わず幅広い層から協力を得ることができた。考古学局のシリソマ氏には、通関から協力要請状の発行にいたるまで、特にお世話になった。コロンボの日本大使館には、当隊の不手際から迷惑をおかけしたにもかかわらず、親身のお世話を戴いた。また、入域地区の知事や役人、村長、あるいは部落の人々にも何かと面倒を見て戴いた。お礼申し上げる。



- 31 KAPRATHALA-GALLA
- 32 AMBENE-GALLA
- 33 DEAMINNE-WEHELA
- 34 nameless ruins near the Alleweva village
- 35 KARUKANDHA
- 36 CHINAGAS-KANDA
- 37 BANDANA-GALLA



- 38 WALAS-GALA
- 39 DEWA-GALLA
- 40 HINGURE-WEWA
- 41 KADALLA
- 42 DANBANA ULPOTHA
- 43 VEHERA GODALLA
- 44 SIRIPALANA
- 45 SILUMINISAYA
- 46 VEHERA-GALA
- 47 GOLAKAKANDA
- 48 KANDEGAMA
- 49 KUDA-GALA
- 50 DAMANEWELA
- 51 nameless ruins of east
riverside of MADURU OYA
- 52 WESSIBENDA-GALA
- 53 MOTA GALA
- 54 nameless ruins of south
-west of MOTA-GALA
- 55 WALAMANDIYA
- 56 nameless ruins of eastern
riverside of the MADURU OYA
- 57 PATAVENDAGAWATTA
- 58 KUBUKANDANA-GALA
- 59 EKE-ALA
- 60 MUTUKOVILA-GALA
- 61 MEGASWALA-GALA
- 62 SOUTH-LEANDIYAN-GALA
- 63 LEANDIYAN-GALA
- 64 WEERANA PALASSA-GALA
- 65 KARUGAHA-WELA
- 66 KARUGAHA-WELA-GALA
- 67 MANA-GALA
- 68 TUNGIRIYA-GALA
- 69 IEBA-GALA
- 70 PANSALA-GALA
- 71 AKOLAHA YAYA
- 72 HATA-YAYA
- 73 DAHANAME YAYA
- 74 DAHANAME YAYA(water hole)
- 75 nameless ruins by
HASSALAKA ROAD(No.1)
- 76 nameless ruins by
HASSALAKA ROAD(No.2)

- 77 nameless ruins of temple
by HASSALAKA ROAD
- 78 KUMBUCK OYA-GALA
- 79 SOUTH-KUMBUCK OYA-GALA
- 80 nameless ruins
in KADURUPITIYA
- 81 PALPITIYA-GALA
- 82 The confluence of MIDRANE
ELA and KIVULE ELA
- 83 MUKKARUKANDA
- 84 HORAWELA-GALA
- 85 The south side of
HORAWELA-GALA
- 86 SOUTH-HORAWELA-GALA
- 87 SOUTHWEST
-WILMITIYA WEWA
- 88 NORTHEAST
-WILMITIYA WEWA
- 89 WEHERA-GALA
- 90 AMEAGAHALA WELA
- 91 MAYALANWELA-GALA
- 92 KARUWARA GOLLA-GALA
- 93 WEHERAGODA
- 94 DHAMBAYELA-GALA
- 95 THE UPPER STREAM
OF WASGOMUWA OYA

凡 例

※本編に記載した調査データは、すべて第2次(1975年)、第3次(1976年)の2度にわたる探査隊が実地踏査を通じて得たものである。

※調査データは、厳密な考古学的手法により採取したものではなく、すべて簡単な器具を用いた簡易的な実測によっている。

※データの記入方法は、スリランカ政府考古学局の確認遺跡登録方法に準拠し、第1次隊の方法を踏襲した。

※データの編集についても第1次隊の方法に準じた。調査地域を任意にブロック分けし、ブロック毎の概要、情報を述べ、続いて各遺跡毎のデータを記載した。なお、今回は各遺跡データの簡単な英文訳を付加した。

※第1次隊では水田、用水路、貯水池などの水利遺跡も調査対象としたが、今回(第2次、第3次)の調査対象は、寺院遺跡、建造物跡に絞った。したがって各遺跡に付記した番号は第1次隊からの調査遺跡の番号であるが、これには第1次隊調査の水利遺跡(27カ所)の分は含まれていない。

※各遺跡ごとのデータの内容は次の通りである。

〔和文〕①調査日時 ②調査スタッフ ③位置 ④アプローチ ⑤遺跡の全体的状況と位置関係 ⑥別名や俗説など、その他の一般的情報 ⑦各部分の状況 ⑧考察などの付記

〔英文〕①位置 ②遺跡の概要

※以上のうち崩壊や風化の激しいものについては、概要のみ記したものもある。

※各遺跡の名称は本来の(過去の)ものが不明なため、現在呼ばれている地名によった。現地で採取したシンハラ語の発音にはローマ字やカタカナに直せない微妙な発音もあることを了承していただきたい。なお、地名も不明なものについては、便宜的に仮称を付した。

※スリランカでは現在もヤード・ポンド法を用いているが、本編のデータはすべてメートル法に換算、統一してある。

※図版は、実測図をもとに平面概念図を描き、必要なものについては部分図、および写真を挿入した。なお、簡易測量で得た実測図が基になっているため若干の誤差がありうることを考える。

※遺跡の各部分の名称は、明確なものに限り記入したが、不明なものや判定不能のものについては「建造物跡」等の一般名称を用いた。

Explanatory notes

1. These are the actual survey data which are summarized in English.
2. Each of ruins has a serial number and its location. The numbers are recorded on the map.
3. The data of the second research were described by four regional groups. Those of the third research were described by two regional groups.
4. Each name of ruins and places is recorded by the present (not historical or archaeological) name as the villagers commonly say.
5. The general plane figures on this report are based on the plain measurements, but there may be a few accidental errors. Principal and important ruins are illustrated with photographs and partial magnifying figures.
6. Described items about each ruins are as follows.
 - (1) Location; location of ruins.
 - (2) Summary; general conditions and positions of essential parts.
7. Supplements about the above - mentioned items.
 - . All survey data was noted in the metric system.
 - . In the "Location", "Map" means the map (scale 1:63360, One Inch to One Mile) which was published under the direction of F.H.Gunasekara B.Sc., (Lond.) F.R.I.C.S. Surveyor General of Ceylon.
 - . About starting point in the "Location".
In case of the second research, the Base Camp was set up by the elementary school of Pimburettawa village in

Polonnaruwa District. Further the Advanced Base was set up by the elementary school of Allewewa village in Polonnaruwa District. In case of the third research, "the Maraka (B.C)" means the Base Camp which was set up by the village office of Maraka village in Matale District. And "the Kadurupitiya (II.B.C.)" means the Second Base Camp which was set up at Mr.A.G.Gamini Dayaratne's house in Kadurupitiya village in Matale District. Each point is noted on the map.

- . In the research area, the river is called as "ela", "oya" or "ganga" by villagers. But in this report, those names were standardized as "river". "Tank" means a reservoir. (On the research area, it is called "wewa".)
- . "Summary" was described with reference to "REGISTER OF ANCIENT MONUMENTS" published by the Ministry of Cultural Affairs, 1972.
- . More detailed survey data of each ruins were obtained, but in this report, only brief outline is given in the "Summary".
- . In the "Summary", uncertain types of ruins, or the ruins which we couldn't classify are described like "the remains of structure" etc.

マハウェリ河中流域の遺跡群

—基礎知識と用語の解説を兼ねて—

岡村 隆

1. 遺跡残存の歴史的背景

スリランカ（セイロン島）の主要民族アーリア系シンハラ族がインド北西部から来島・移住したのは、紀元前6～5世紀頃のこととされている。

シンハラ族は当時、島内各地に住んでいたヴェダ族などの先住未開民を制圧し、島の北西部を中心に、以後2300年間にも及ぶ「シンハラ王朝」の基礎を築き上げた。同国の史書「大史」や「島史」によると、とくにパンドゥカーバヤ王がアヌラダブラを都と定め、城塞都市を完成させてからは、国家としての機能も整い、その権威は広く島内各地に及ぶようになっていた。

インドからアショカ王の使者として来島したマヒンダ王子が、この国に仏教を伝えたのは、ちょうど王朝隆盛の途次にあるその時代——デーバナンピア・ティッサ王治世の紀元前3世紀のことである。仏教は以後、シンハラ族唯一の国家宗教となり、民族における最大の文化基盤ともなった。

王朝の繁栄は、こうした仏教文化の確立と、当時最高の技術水準を誇った貯水灌漑農業の振興に支えられ、古代シンハラ文明の形成を促した。とくにアヌラダブラは、首都であると同時に古代シンハラ文明の中心地でもあり、その高度の文化様式は、今日、発掘され観光資源に供されている遺跡群や巨大な貯水池などによって知ることができる。

しかし、このようなシンハラ文明の発展期においてさえも、その間の国情は決して平穏無事だったわけではない。しばしばインドのタミル族（ドラビダ系）が侵入して、時には首都さえもその支配下に置くことがあった。そうした戦乱の時には、シンハラ人の王公や僧侶、人民は、南方のルフナ地方に逃れ、そこで勢力の回復を計るのが常であった。

ドットゥガマヌ大王（ドットゥガマーニ1世＝在位BC101～77年）は、こうしたタミル支配の時に疎開地ルフナのマハガマに兵を挙げ、マハウェリ河東岸沿いに北上、各地でタミル軍を撃破しながら、めざましい進軍を遂げ、ついに首都を奪還した。この首都奪還と、それに先立つシンハラ族撤退の悲劇が、マハウェリ中流域のひとつの歴史の頂点となる。

しかし、それ以前からもこの河は、アヌラダブラを中心とする北部王朝と南部のルフナ地方（自治領）とを分ける境界線とされ、現在のマナンピティヤ付近にあったカッチャカティタの渡渉地点（公式入国路）を北限として、東岸沿いに交通路が南下していた。すなわち、セイロン島最古にして最大の街道がこの地方を通り、幾多の歴史的事件のたびに「王の道」として利用されていたのである。したがって、この地域に残存する多くの遺跡のいくつかは、ドットゥガマヌ大王の治世を頂点とする紀元前後のシンハラ文明の遺産であると推測しうるに足る、歴史的な根拠を有している。

アヌラダブラの王朝は、以後も数次にわたるタミル族との抗争を繰り返しながらも、紀元700年まで続き、その間、マハウェリ中流域は「王の道」に支えられて栄えた。

北のマナンピティヤは、現在の位置よりも河沿いに町が開け、カッチャカティタの渡河地点をひかえて国境の町としての役割を担った。

また、南のマヒヤンガナは「王の道」と東海岸から続く道とが合流する地点に当たり、交易物の中継が行なわれたので、経済や文化の要地として栄えた。ここの大寺院は釈迦来訪の伝説を持ち、現存する寺院ではセイロン最古のものひとつといわれる。

一方、それよりも南に位置するが、マハウェリ

西岸には5世紀頃からミニベ運河と呼ばれる長大な水路の建設がはじまった。それはやがてマヒヤンガナの対岸を越え、はるか北のマハウエリ支流アンバン・ガンガに作られたダムを經由してポロナルーワまで延長され、西岸一帯を潤して豊かな農村地帯を作り出した。

このように、初期王朝の時代から、マハウエリ中流の両岸は、開かれた場所として人間の歴史を刻んでいたのである。

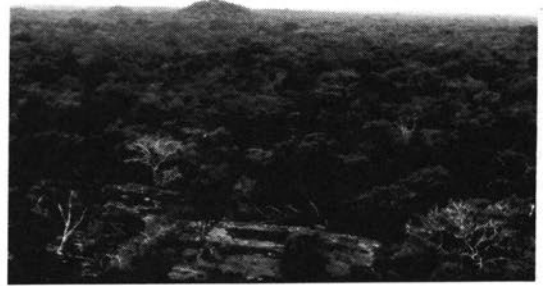
紀元700年、国王セーナ1世は、タミル族の攻勢に押されて、首都を1000年続いたアヌラダブラから、その南東80キロのポロナルーワに移した。これ以後の400年間をポロナルーワ王朝時代というが、この時代の多くはタミル族の侵入に悩まされて乱世が続いたため、セイロン史における暗黒時代とされている。

しかし、11世紀から12世紀前半にかけて、特にヴィジャヤ・バフ1世とバラクラマ・バフ大王の時代には、最大の黄金時代が訪れ、国威を海外にまで輝かせた。

バラクラマ・バフ大王は、この国中興の英主とうたわれ、国家の政治体制を固め、首都ポロナルーワを整備するとともに、各地方に1000を越える貯水タンク、多くの仏寺仏塔、侵入軍に備える砦や城塞など、多彩な施設を築いた。

もちろん、マハウエリ河の流域は首都に一段と近くなり、交通上、あるいは耕作地としての重要な位置を占めた。したがって、そこには集中的に貯水池や寺院、城塞などが築かれ、歴史上最大の繁栄をもたらすことになった。特に、現在は無人の密林となっているダストタヤカリガ・ヌワラは、宗教上の聖地として名を馳せたところである。当隊の調査した遺跡群の広がり、この時代の繁栄のよすがをそのまま空間的に示している。

しかし、この仏教の国に諸行無常の命運は避け難く、大王の死後、国内は再び乱れ、たび重なるタミル族の侵入は、しばしば首都を破壊し、国土を荒らした。再び訪れた暗黒時代の中で、やがて王朝は首都ポロナルーワを捨て、次第に南方へと落ちのびてゆく。ヤバフヴァ、ダンバーデニヤ、クルネガラ、ガンポーラ、コッテ、シタワカとめまぐるしく遷都を繰り返し、最後にキャンディー



王朝が成立した。しかし2300年の歴史を誇ったシンハラ王統も、ついには英国のキャンディー侵攻で崩壊し、完全にその伝統を絶ったのである。

マハウエリ流域は、ポロナルーワが放棄されたころから次第に荒れはじめ、北部に定着したタミル王朝の侵略、破壊が相ついだ。特に貯水池の荒廃は人々の生活手段をうばう結果となり、さらにはマラリヤの流行などによって過疎化が進み、ついには無人境と化すに到った。まさにポロナルーワ時代の栄枯盛衰の歴史とともに、この地域も、その輝かしい歴史を閉じたのである。マハウエリ河は何知らぬげに流れ続けたが、人の歴史の去った流域は、次第にジャングルが覆い、生活と文化の遺産を浸蝕風化していった。

以来数百年——、独立後再び開拓の手が入り始めたこの地域には、「王の道」はおろか、まだ満足な道路さえ作られていない。小規模な開拓部落がまばらに点在し、人の歴史は確かに再開されたが、ジャングルの壁はあまりにも厚く、埋れ果てたおびただしい遺跡の存在だけが、いにしへの繁栄の夢を湛えて人々を待っているようである。

2. 遺跡分布と過去の調査

スリランカ政府発行の1インチ=1マイルの地図上で調べると、マハウエリ河中流域、すなわちマナンピティヤ以南、マヒヤンガナ以北、アンバン河（マハウエリ支流）以東、マドゥル川以西の地域には、約70ヶ所の遺跡が記入されている。これらはいずれも1965年までに行なわれた陸地測量によって発見され、所在地点のみが地図に印されたものである。

しかし、これら既発見の遺跡のほかにも、相当数にのぼる遺跡が存在し、漸次発見されるごとに同国政府考古学局に登録されつつある。

これまでの当隊の活動でも、第1次隊が地図に記載のない遺跡を13ヵ所、発見・確認したのをはじめ、第2次隊が13ヵ所、第3次隊が34ヵ所、それぞれに地図未記載の遺跡を調査した。こうした数字から、われわれはこの限定区域内だけで、少なくとも既発見遺跡の70に倍する遺跡が存在すると推定しているが、前述のようにそれらはおおよそ同程度程度の貯水池とともにすべてポロナルーワ時代までに建造されたものである。

遺跡中の大部分を占めるのは、やはり仏塔を中心とする寺院遺跡で、多くは密林中の孤立岩丘（Galaと呼ばれる）の上に残っている。露岩上に石材などを用いて土台や敷地を作り、その上にレンガや木材、土材などで建造物が建てられたものらしい。吹きさらしの露岩上にとり残され、あるいは侵入軍タミル族に破壊されたり後世の盗掘者によって荒らされたりしたため、現在ではほとんどが崩壊、風化して、本来の形状をとどめない。これらの遺跡では敷地の形状を図面に復元することさえ困難なものもある。一部は風化土によって土台や基部のみを埋め、発掘によっては重要な資料を提供しうるものもあるが、ほとんどは埋没保存ではなく風化消滅の道をたどっているため、発掘も復元も不可能に近い。

一方、こうした岩丘上ではなく平地に建てられた寺院も相当の数があり、これはほとんど土中に埋没しているために発掘、復元への道が開けている。部分的に盗掘者によって荒らされているが、全体的には本来の形状を良好にとどめている。これらは早急に保存策がとられることが望ましい。

城塞の遺跡については、その用途や性格から、特に高い露岩上に位置するものが多く、岩盤に刻まれた階段など壮大な遺物もあるにはあるが、建造物自体は崩壊風化して残存するものは少ない。

水利遺跡、特に貯水池は、今でも多くのものが雨期に貯水能力を持ち、近在の住民の耕作に役立っている。もちろん土手が崩壊して本来の浸水範囲を変えているものが多く、特にマハウェリ東岸の密林中には水を貯めたまま捨て置かれているも



貯水池の水が村を潤す（ウィルゴムーフ）



復元されて乾期でも水のあるヘナネガラ貯水池

ものもある。西岸の貯水池のいくつかは工事によって復元され、用水路との併用によって乾期にも給水能力を持っている。

この地域で特に有名な2つの大用水路、ミニベ・ヨディ・エラとカリング・ヨディ・エラは、前者がほぼ復旧され、大量の水を運んでいるのに比べ、後者は崩壊したまま放置されている。一般に左岸域は村落の数も多く、密林の侵蝕が少ないため、用水路網も完備して、古代の灌漑農業の形態がそのままの形で復活しているといえる。

こうしたおびただしい種類、数の遺跡の分布状態から、往時の人々の生活空間の広がり想起することは、比較的容易なことといえよう。しかし、その交通網や各遺跡の関係など具体的な事実の解明については、まだそこまで調査が進んでいないのが実情である。

地図に記された各遺跡の位置は大旨正しく、信頼のおける基本資料となり得ているが、かといってこれらすべての遺跡のデータが、考古学局や大学などの研究機関によって登録、整理されているわけではない。したがって、こうした既確認の遺跡についてさえ、その規模や内容は未だ不明の状態なのである。ギランドル・コッテなど、その重要性が明白な遺跡の場合には、何らかの視察などが行なわれ、考古学的保存地として指定を受けているが、単に周囲の森林を伐採しないというだけの消極的な施策で、決して十分な保存策がとられ



ているとは言い難い。まして他の多くの遺跡地点には、何等の関心も払われず、ただ捨て置かれているのが現状である。研究機関による正式な調査が行なわれたという話は、この地域に関する限り、ほとんど聞かれない。

今後の予定についても全く不明で、予算とスケジュールの関係から、この遺跡群が当局の研究機関によって解明されるには、まだ相当の時間を要しそうである。大学独自の調査も今のところ予算の都合上、予定のできる段階ではないとのことだ。

それというも、全島に散在するこの国の遺跡の数があまりにも多いのである。それらのひとつひとつを調べてゆくことは、研究者数の少ないこの国にとって気の遠くなるような作業であろう。

しかし、セイロン史上に最も大きな地理的役割を果たし、現実に遺跡の密集度も他を圧倒するほどに高いこの地域が、なぜ見捨てられているのか。

一言で言えば、研究者のこの地域への入域と、長期の滞在が環境的に困難なためである。島内で最も濃密なジャングルが一面に覆い、マラリヤや野獣など危険な要素も多い。しかもこうした地域での調査活動には人員や装備などの面で或る種の機動性が要求される。当然、予算も大がかりとなる。こうしたことが、この地域の調査を遅らせている要因といえよう。

しかし、水利遺跡の方は、その実用性の面で早くから注目され、特に用水路跡については、復元を前提とした調査活動が進められていた。

英国統治時代の19世紀末から今世紀初めにかけて、全島におよぶ大がかりな調査が行なわれ、その後さらに継続された調査で、この国の主な古代水利施設の全容がほぼ明らかにされた。その報告書“ANCIENT IRRIGATION WORKS IN CEYLON”は2巻の大著となっている。しかし、このレポートでも、マハウエリ中流域に関しては、ミニベ、カリング用水路の2つが記録されているだけで、マハウエリ東岸の、しかもヤックレ部落以南については全く触れられていない。

現在、この地域は再開拓への途上にあり、大きな用水路や貯水池の改修には政府の灌漑局が乗り出し、小さなものについては村や部落が独自に工事を進めている。当然、それに先立つ調査も必要

なわけで、今後この地域の水利遺跡は少しずつ明らかにされるであろう。

3. 寺院遺跡の種類と構造

バラクラマ・パフ大王(在位1153~1186)以前のセイロン仏教には、現在まで続く「セイロン上座部=大寺(Mahavihara)派」の他に、無畏山寺(Abhayagirivihara)派という一大宗派があり、その他にも時代によっては祇陀林寺(Jetavanavihara)派という一派もあらわれて、ともに教義上の対立を続けていた。したがって、これらの各宗派のいずれかに属する寺が各地に建立されていたわけで、マハウエリ河流域に残る寺院遺跡にも、これら各派のそれぞれの寺が含まれると思われる。大寺派以外は、特に無畏山寺派がインドから次々に渡来した大乘系の教義を受け入れたため、寺院建築にも大乘系の影響が見られるという。セイロン大学考古学科のブレマティレカ博士らはその点に視点を当てた研究も続けている。しかし、バラクラマ・パフ大王によって、大寺派以外の宗派は禁止され、無畏山寺(アヌラダブラにある)は荒廃するままに捨て置かれた、と伝えられる(「大史」その他による)ので、この派の各寺も同様の運命をたどったのではないかと考えられる。

従ってこの地域にまだ文化が栄えていた時代から、すでに遺跡化した寺院が存在したことも推測できるのであるが、ただちに断定はできない。というのは、寺院建築の面からは、大寺派もやはり大乘もしくはインドの他部派の影響を受けているのであり、敷地形状等だけで単純に宗派を分類することはできないからである。そこで、宗派や建立および崩壊の年代を問わずに、一般的な見地からこれらの寺院の特徴を述べてみる。

セイロンの寺院の位置で特徴的なのは、多くが孤立岩丘(Gala)の頂上に見られることである。これらは主に仏塔を中心とした小規模のもので、しかも地形に応じて建てられているため、建造物の配置には厳格な法則は見られない。しかし、その一部、あるいは低地に建てられた寺院には、ある規格があったようである。

現在東南アジアに伝わる小乗仏教はすべてセイ

ロン上座部系の宗派であるが、これらに共通する寺院構成の要素は、①仏塔 ②本堂 ③ボダイ樹祭壇 ④講堂の4大建造物である。これらが寺の内院を構成し、その他に他の建造物（僧舎、水浴場、倉庫など）がある。本堂、仏塔などが複数の場合もある。これらの建造物敷地はそれぞれ特徴的な形状をしているので、形状によって見分けられる。これらの配置が明らかになり、その報告例が多くなれば、法則性の発見や碑文の発掘などによって年代や宗派の分類も可能になると考えられている。

なお、これは基本的なことだが、南方仏教は出家中心の宗教であり、その寺院も日本などのように住職ひとりて運営されるものではない。どの寺も複数の僧が、僧院としての寺を運営していたのであって、あくまでも「寺＝僧たちの生活の場」という見方をしなければならない。また、それと同時に、一般に仏塔崇拜の風習があったため、仏塔だけが独自につくられた場合も多く、それだけをひとつの寺として考えることもできるわけである。さらに釈迦成道の地ブダガヤの地にちなむボダイ樹も信仰の対象となっており、現在でも寺のない辺地の村などでは、ボダイ樹だけを祭って、それを「寺」と呼んでいる場合もある。このレポートは、少なくとも仏塔の存在した場所は寺としてあつかい、その規模の大小に関わらず並列的に項目をたてて述べたものである。以下にそれぞれの寺院遺跡で見られる建造物の説明を記す。

①仏塔 釈迦の遺骨を祭った仏舎利塔に起源するもので、サンスクリットやパーリーなど仏教用語では「ストゥーパ」と呼ばれ、またバゴダあるいはダーガバとも呼ばれる。年代によって建築用式が異なり、古くは土盛りとレンガ組みの併用でドーム状の本体を築き、内部に宝物などを収めると同時に、上部には1本あるいは2本の石柱を立て、それぞれに円盤状の岩笠をつけた。その後、上部塔の様式が進歩するにつれて、中国や朝鮮、日本などで見られる多重塔（五重塔など）の原形ができ上がった。ドームの基部は八正道の教えにちなんで八角形の基壇が作られているものが多く、四方には石造の供花台を設けて献花、礼拝するようになっていく。

②本堂 寺院境内の中心的な建物で、入口の左右にヴィシヌ、カタラガマ、スマナなどの守護神像（ガードストーン）を配置し、建物の中央奥に釈迦の座像や立像、あるいは涅槃像などが置かれている。建物の敷地形状は多く前方後方形を成し、石柱によって中央の礼拝所と、外側の廻廊部を構成している。

③ボダイ樹祭壇 釈迦がその下で成道したというインドボダイ樹の分枝（さらにその分枝が島内に広まった）を祭ったもので、注連縄を張り、根の部分に石垣で壇を築いて四囲を飾り、祭壇としたもの。木の下に礼拝所を作り、仏像やお堂が設けられることもある。

④講堂 民衆に説教するための建造物で、法堂ともいい、古くは冥想堂だったものが用いられたともいわれる。敷地の形状だけからは本来の建物の役割を断定するのは難しいが、各寺院遺跡にこの講堂か、あるいは布薩堂（僧の集会ホール）に比定されるべき建物跡が残っており、室内に多くの石柱が立っているのが特徴である。正方形の敷地をもつものが多いが、なかには円形など多様なものも残っている。

4. 用語の解説

このレポート中に多く使用される遺跡関係および地理上の用語（シンハラ語）を以下に解説しておく。

バタハ 岩に穿った天水の貯水穴で、主に岩丘上の寺院や城塞などに見られる。マハウェリ中流部は乾燥地帯に属するため、乾期には極端に水が不足する。そこで飲料水などを岩穴に貯めておくわけであるが、横にうがって日を避けた穴の水はいつまでも新鮮に保たれるのである。政府発行の地図にはWater holeと記されている。

守護神像 ガードストーンと呼ばれ、寺院建築物のそれぞれの入口の左右に対になって置かれる。石板に深い浮き彫りをほどこした像で、さまざまな仏教の守護神が手にハスの花などを抱えて立っている。

月石（半月型踏石） ムーンストーンと呼ばれる半円形の石盤で、ガードストーンの前方の地面に置かれる。表面に象や馬、鳥などが浮き彫りにさ

れて同心円状に描かれている。

らんかん ガードストーンやムーンストーンと対になるもので、ガードストーンの後方に左右1対になってその間に入口に登る石段がある。この石の手すり(らんかん)にも浮きぼりがほどこされ、象や仏教伝説の悪魔(マアラ)などが表現されている。

石笠 仏塔の古い形ではレンガ積みのでームの上に石の支柱で笠を立てた。笠は石を円盤状に削って作られ、大きなものは直径2メートル以上もある。これを石像の支柱に組み合わせるわけだが、その接続部の彫刻技術は相当に高度なものだったといわれている。

供花台 仏塔の四囲や本殿の仏像前に置かれたもので、花をささげ、香をたく台として用いられた。石像の四辺形のものも多く、なかにはレリーフ模様が彫りこまれたものもある。

岩窟寺 スリランカの仏教では古来、村落や町の寺院に住む比丘のほか、人里離れたジャングルの中に居を求め、厳しい修業を行なう出家者が多く見られた。こうした僧たちは山中の自然の岩窟に手を加え、そこに住んで冥想の日々を送ったのである。岩窟は雨水が伝い落ちてこないように、入

口の天井に水止めのトイを作っているのが特徴。**ガラ=Gala** シンハラ語で岩の意だが、多くは岩丘を指し、マハウエリ中流域の地形的特徴としてこれらの孤立岩丘が点在している。その頂上に多くの寺院が建てられ、また麓に多くの岩窟寺が作られた。

オヤ=Oya 川の意、自然の河川では大きなものから、ガンガ(河)オヤ(川)ドゥラ(小川)とそれぞれ分けて名称が付いている。

エラ=Ela 用水路のことでAllaともいう。大規模なものはヨディ・エラ(Yodi Ela)と呼ばれる。灌漑用に用いられた。

ウェラ=Wela 水田の意、転じて過去水田耕作の行なわれた場所には現在原野となってもこの名が付されている。

ワワ(ウェワ)=Wewa貯水池のこと。タンクとも呼ばれる。川の下流部あるいは低地の水流の方向に土手を築き、水を貯めるようにした。用水路と併用すれば1年中給水が可能になり、天水だけでも乾期に貴重な水を保存できる。セイロンの古代農業の象徴ともいべき水利施設で、各地に無数に造られた。現在でも用を成しているものが多い。



遺跡調查報告編

1. アッレワワ部落周辺の遺跡

Ruins, distributing in Allewewa Village area

【遺跡群索引】

- 〈 31 〉 カブラッタラガラの寺院遺跡
- 〈 32 〉 アンペーネガラの寺院遺跡
- 〈 33 〉 ダーミニヴェヘラの寺院遺跡
- 〈 34 〉 アッレワワ部落の無名パタハ
- 〈 35 〉 カルカンドの寺院遺跡
- 〈 36 〉 チーナガスカンドの不明遺跡
- 〈 37 〉 バダナガラの寺院遺跡
- 〈 38 〉 ワラスガラのパタハ

【地域および遺跡群の概要】

アッレワワ部落は、「地図」に記載されていない部落で、かねて第1次隊（1973年）が聞き及んでいたものの、当隊（第2次隊）の訪問がはじめてである。部落の歴史は新しく、10年程前にマハウェリ・ガンガの洪水により家を失ったヤックレ部落の住民が移住してきて開村したものだという。その後、アッレワワ貯水池が補修され（1968年）また近い将来にはアッレワワ南西3kmほどのところにあるカルケラワ貯水池の補修が予定されており、ジャングルへの開拓が徐々に進行中である。現在の部落の規模は、人口が450人ほどで、戸数100戸ほど貯水池の南部に農家が散在し、水田・畑が広がっている。雨期には水田耕作を行なうが、乾期にはトウガラシ、マニョーカ、さつまいも、麦などの焼畑を行なっている。全住民の80%ほどが、これらの農耕に従事し、残り20%は牛の放牧、灌漑工事、はちみつとり、イノシシ猟などに従事している。公共施設としては小学校が一つあるだけで診療所などはなく、重病人が出た時はポロンナルワまでかつぎ出さなく

てはならない。当隊の部落滞在中には、ハチミツとりがクマに襲われ、瀕死の重傷を負って町へ運び出されるという事件が起こった。さらに、つい最近の話としてヤックレからマナンピティアへ通じる道路沿いでハグレ象が出没し、1人が殺されたということも聞き及んでいる。当部落はジャングル中の開拓最前線にあるため、こういった話が絶えない。部落には雑貨屋が2軒あるが、米、ココヤシオイル、せっけん、たばこ、酒ぐらいしか扱っておらず、ほとんどの生活用品は町まで出ないと調達することはできない。町へ出るルートは3つあり、1つはマナンピティアへ抜けるルートで、この道路は生活物資を運び込む主要道となっている。もう1つはヤックレ部落へ通じる道路。ヤックレまで出れば、さらにポロンナルワ方面へ抜ける道路が通じている。最後は、当隊がベースキャンプからアッレワワへ行く時に使用したルートで、マハダマネーワワ（現在修復工事中の貯水池跡）を經由してジープ道が通っている。

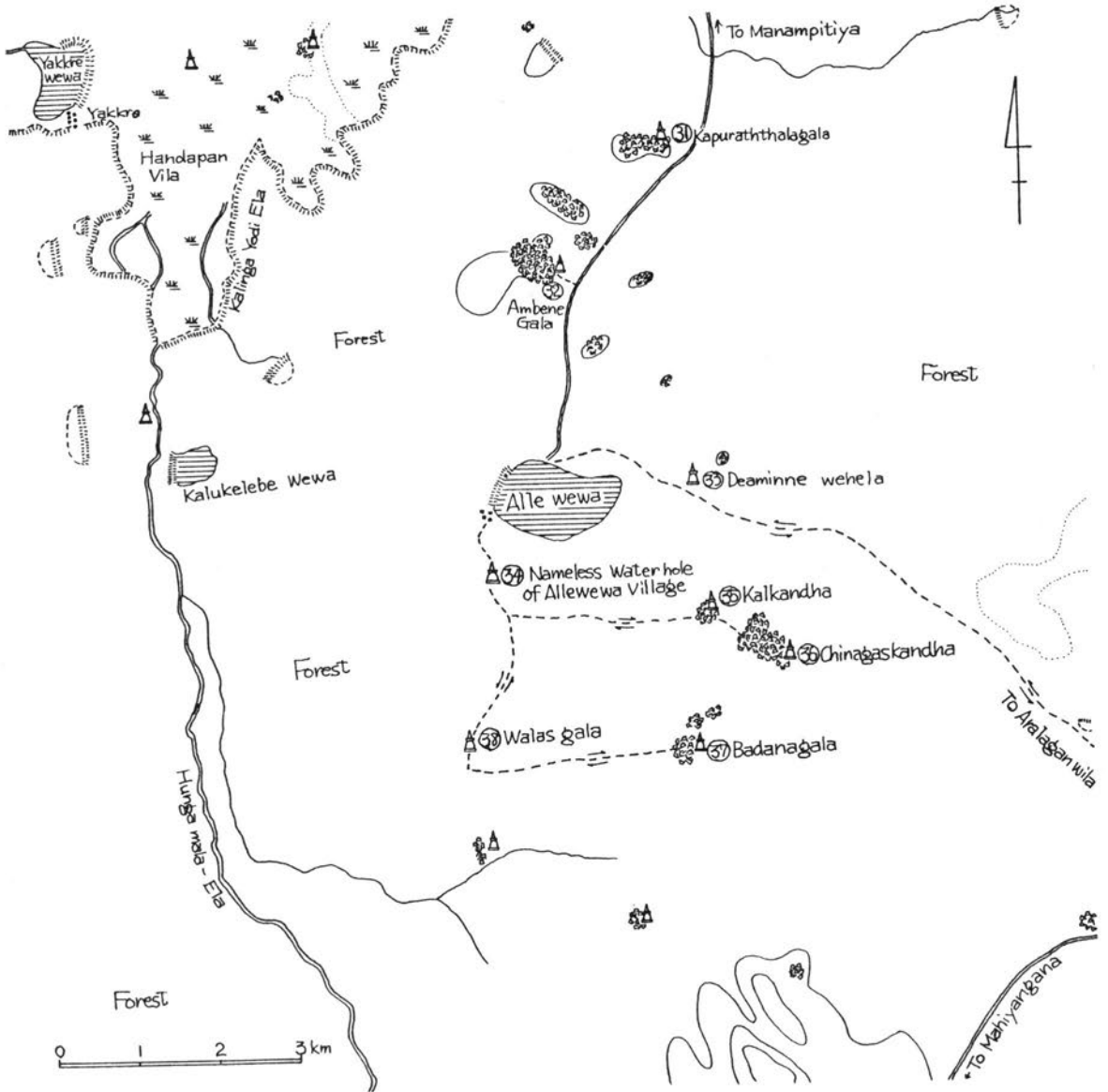
当地域の遺跡群は、アッレワワ部落を中心にして北と南に分布する。南北にはほぼ一列に並んでおり、往時にはこれらの遺跡を結んで街道が走っていた可能性がある。すべて露岩上の遺跡であるため、復元図を想像するのは困難なものばかりである。また近くに河川がないためか、パタハをもつ遺跡が多いのも特徴である。当地域内にはアプローチできず未調査の遺跡が残っており、今後補足調査の必要がある。

【当隊の活動の概要】

当地域の調査は2回に分けて行なった。第1回

は、アッレワワ部落南方の地域を探索し、第2回目は、北方の探索を行なった。2回ともアッレワワ部落の小学校に基地を置き、一日行程の探索で調査した。北部にある遺跡へのアプローチは、道路沿いであるため容易であったが、南部のものは

道がなく、濃密なジャングルに行手をはばまれてアプローチできず調査を断念したものもある。クマヤゾウの出没も多く、行動中は絶えず緊張の連続であった。



< 31 > カブラッタラ・ガラ寺院遺跡

KAPURATHHALA - GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 4 km. the north by east from Allewewa village and about 7.7 km. the east from Yakkure village. This site has a mark of ruins, a mark of Gala and noted "water hole" on the "Map".

Summary;

This site consists of three parts over the rock hill. First part is on the summit of the hill. Here are the remains of a dagoba dug into by theaves (A) and two water holes (B). On the slope of the hill below the dagoba (A), there are two water holes (C, photo. C1, photo. C2). Second part is at the southwest of the hill in the jungle. Here are the remains of a flower alter (photo. D1) and a stone Pillar (D2). Third part is the southwestern place on the rock hill. Here are the remains of three ancient structures (E, photo. E1,).

【調査】9月14日

【スタッフ】八木、東、執行、スガタバーラ（ハンター）、サナビラトツナ（ハンター）、チャンドラティサ（ガイド）〔6名〕。

【位置】アッレワワ部落の北北東4km程の地点。マナンピティアへの道の西側である。「地図」には、露岩の印と共にRuinとWater Holeの文字が記入されている。

【アプローチ】アッレワワ部落よりマナンピティアの町へと続く道を北上する。しばらく進むと左手（西側）にアンベネガラが見えてくる。この道は部落の住民が町に出る時に利用しているもの

であるが、特にこのあたりはクマが多いので注意しなければならない。アンベネガラを過ぎ、なおも進むと左手にカブラッタラガラの岩丘が見えてくる。途中から道はずれ、西にジャングルの中を進むと300m程でカブラッタラガラに出る。

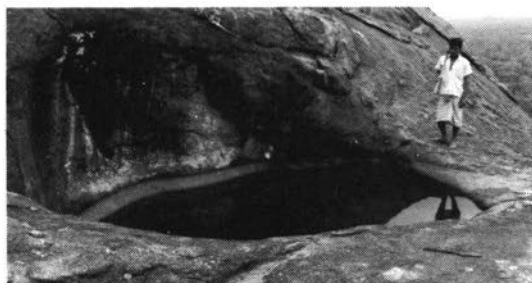
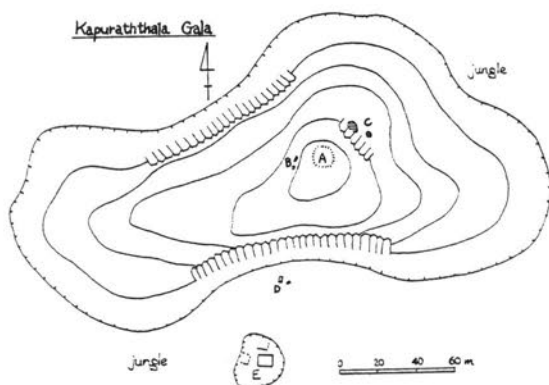
【全体的状況】この遺跡は大きく3ヶ所に分けられる。第1は岩丘の上にあるもので、4つのパタハ、仏塔跡が確認される。第2は岩丘の南西中腹のジャングルにあるもので、石柱、供花台らしきものが確認され、その他にも埋蔵物のある感じを受ける。第3は岩丘南の開けた岩の上にあるもので3つの建造物跡が確認される。

【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕直径10 m近くの仏塔跡であるが、崩壊が激しく、原形はとどめない。周囲にはレンガ片が散在し、中央には盗掘の跡がある。

〔B パタハ2個〕①長径1.2 m、短径0.8 m、深さ0.5 m程のパタハ。②長径0.8 m、短径0.5 m、深さ0.3 m程のパタハ。共に仏塔のすぐ西側に並んで作られている。

〔C パタハ2個〕仏塔東側の露岩急斜面を10 m程下った所に2つのパタハが作られている。一方



写真C1



写真C2



写真D1

は長径5 m、短径2.5 m、深さ1 m程のかなり大きなもので、今でも十分飲める水をたたえている（写真C1参照）。他方は直径3 m、深さ0.3 m程で底には泥が堆積し、草が生えている（写真C2参照）。

〔D 供花台?と石柱〕仏塔南西の岩丘をおりたジャングルの中に、2.6×1.0 mの石板（写真D1）と、露出部分が0.3×0.2×1.0 mの石柱が見られる。他にも、何か埋れていると思われるが木に覆われ確認できない。

〔E 建造物跡〕仏塔南西100 m程の岩丘のふもとに周囲をジャングルで囲まれた露岩があり、3ヶ所の建造物跡が確認できる。一番大きいものは8.5 m四方高さ0.3 m程で、石を組んで基部を成している（写真E1参照）が、崩れている所も多い。その北2 m程の所に5.5 m四方で岩盤の傾斜をうまく利用した石組が見られる。

その西方5 mの所にも5 m四角の建造物跡らしきものが見られるが、崩壊が激しく、形状は不明。



写真E1

< 3 2 > アンペーネ・ガラ寺院遺跡

AMBENE-GALA (ruins of temple)

Location;

This site is Located about 2.6 km. the north by west from the Allewewa village. This site has a mark of ruins on the "Map".

Summary;

This site is distributed over two neighboring rock hills. On top of the northern rock hill, here are the remains of two dagoba (A, fig.A, photo. A, D). The dagoba (A) has step stones, stone pillars, bricks and the remains of a stone flower alter (fig,a). At the southwest of the dagoba (A), here are the remains of four structures (B, fig.B, C, fig.C, E, F). The ancient structure (C) has six corner stones. At the northeast of the dagoba (A), here is a water hole (G). On the southern rock hill, here are two water holes (H).

【調査】9月14日

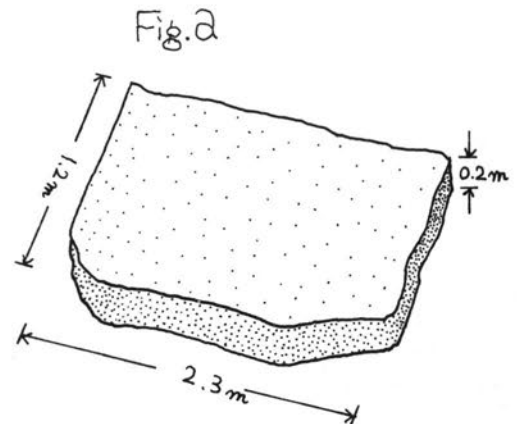
【スタッフ】八木、東、執行、スガタパーラ、サナビラトゥナ、チャンドラティッサ(6名)

【位置】アッレワワ部落の北2.5km付近。マナンピティアに通ずるジープ路の西側に位置する。「地図」には遺跡印のみ記入されている。

【アプローチ】アッレワワ部落よりマナンピティアに通ずるジープ路を北に約2.5km進んだ地点で左(西)に折れる。道はない。ジープ路よりジャングルに約500m入った地点がアンペーネ・ガラの岩丘である。

【全体的状況】アンペーネ・ガラは大きく2つの岩丘に分けられる。北の岩丘には仏塔跡、小仏塔跡(?)、建造物跡4ヶ所、パタハ2ヶ所が確認できる。南の岩丘には2つのパタハがある。この

あたりは熊の多い所らしく、岩丘にも熊の死骸があった。



【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕基部の直径が10 m程の仏塔跡で、上部には盗掘の跡がある。東側に石の階段が6段見られ、その先に供花台(2.3×1.2×0.2 m)(図a参照)と石柱を2本確認することができる。盗掘された穴から内部を見ると、石で基部を造り上げ、その周囲をレンガで囲ってあるのがわかる(図A参照)。

Fig.A

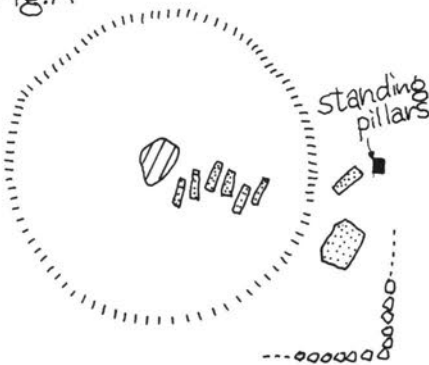
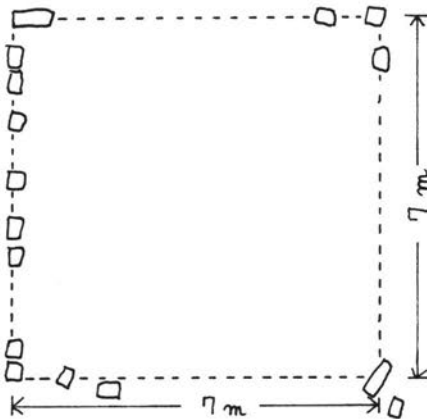
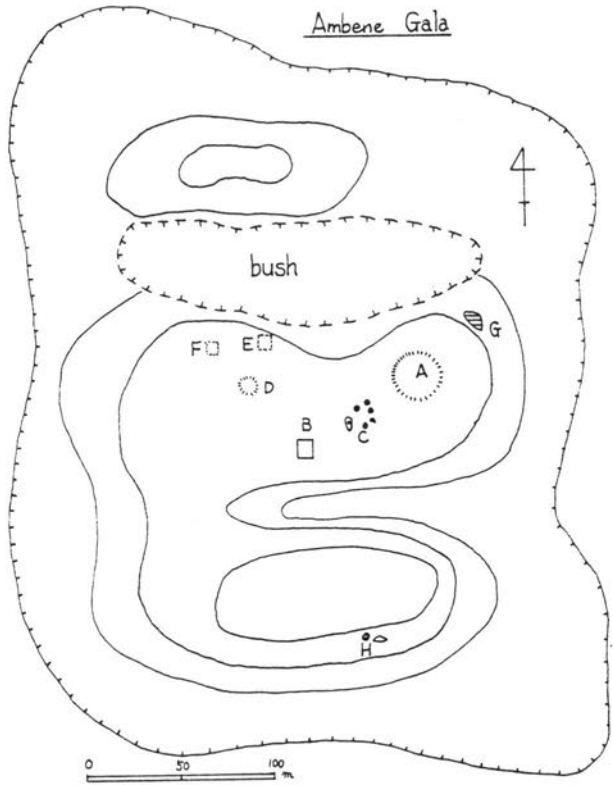


Fig.B



〔B 建造物跡〕仏塔跡の南西約30 mの所に一辺が8 mの石組みが見られるが、レンガ片などは見あたらなかった(図B参照)。

〔C 建造物跡〕仏塔跡の南西約20 mの所に礎石が6個見られる。直径40 cm程の石が5個、1 m



×2 m程の石に穴が刻まれているものが1個で、その並び方から建造物の形状を想像することはできなかった。

〔D 小仏塔跡(?)〕直径6 m程のレンガ積みであるが、崩壊が激しく基部などを確認することはできなかった。

〔E 建造物跡〕平地に一辺7 m四方の石組みが作られている。何らかの建造物の跡と思われる。

〔F 建造物跡〕Eの建造物跡の西約25 mの所に建造物跡らしきものがあるが、崩壊が激しく規模などもほとんど確認できない。

〔G パタハ〕仏塔跡の北東約30 mの所の平らな岩盤の上に、パタハ(10 m×8 m)が刻まれている。

〔H パタハ〕岩丘の南部に、小さな自然にできたと思われる窪みが数多くある。人の手の加わっているとと思われるものが2つ確認できた。

< 3 3 > ダーミニヴェヘラの寺院遺跡

DEAMINNE-WEHELA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 2 km. the east of the Allewewa village. This site is surrounded by the jungle.

Summary;

This site is on the peeled rock which is about 3 m. in height, about 50 m. from north to south. The remains of a dagoba (A, Fig.a1) is situated at the center of four remains of structures (C,E,F,G) on the rock hill. The dagoba (A) is almost good presentation. But other structures are indistinct sites. Near those structures, here are some stone plates (B, fig.B, C, fig.C). Near the eastern bush, here are the remains of a stone pillar (H, fig.H). There is another separated peeled rock over the bush from the site. here are the remains of large stone structure with some corner stones (I) on that rock. This site is small scale and violently breaking.

【調査】9月15日

【スタッフ】八木、東、執行、スガタパーラ(ハンター)、サナビラトゥナ(ハンター)、チャンドラティッサ(案内人)〔6名〕

【位置】アッレワワ部落の東または東南東、約2 kmの地点にある「地図」に名称、遺跡印ともに記載されていない遺跡。ピンブラッタワへ向かうジープ道沿いにある。

【アプローチ】アッレワワの部落から、バラリウアンダマナの開拓部落を經由してピンブラッタワ方面へ抜けるジープ道を、東ないし東南東へ約2 km行き、左手のジャングルへ100 m程入ったと

ころにある。付近一帯はジャングルで、前述のジープ道から遺跡へ通じる道はない。

【全体的状況と位置関係】高さ3 m、南北の長さ約50 m程の露岩丘上の遺跡。仏塔跡を中心に、4つの建造物跡が確認できる。仏塔跡はかなりはっきりしているが、その他の建造物跡については形状をはっきり断定することはむずかしい。なお、東の方にやぶを越えて、40×30 m程のもう一つの露岩丘があるが、そこにも大きな石組を確認できる。遺跡の規模としては小さい方で、露岩丘上の遺跡であるためか、崩壊の程度も激しい。

【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕土台部分は崩れ去って確認できないが、半径約7m、高さ約4mほどの土砂のドームである。中央には盗掘跡と思われる穴がある。その西側のドーム斜面には、長さ105cm、断面が四分の一円をした石造物(図a1)があるが、これは仏塔の土台部分、基部分形壇の一部とも想像されるが、はっきりと断定はできない。また、中心から北側には、レンガの列が約7mほど続いている(a2)。レンガの列が確認できるのは仏塔跡ではここだけである。さらに中心から南東方向には、階段跡(a3)と思われる石の列があり、おそらくここが入口方向であったろうと思われる。なお、月石や守護神像、らんかんなどは発見できなかった。

Fig. a1

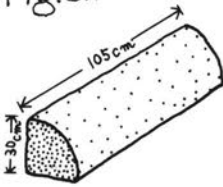
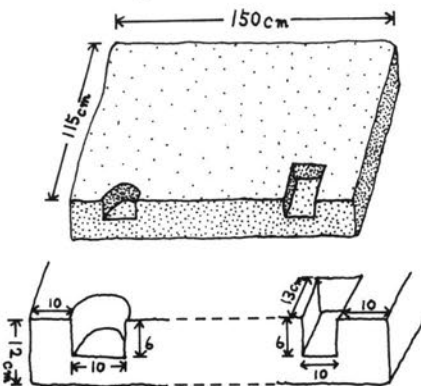
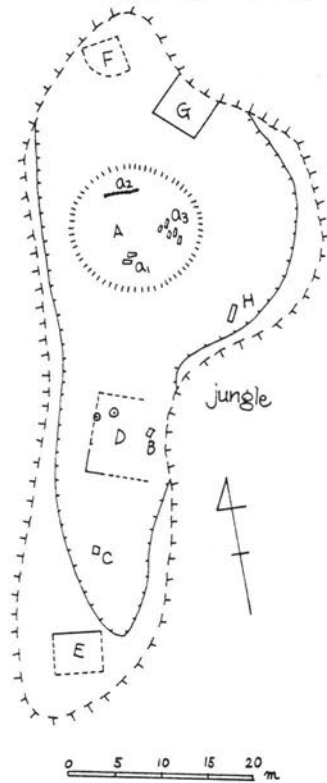


Fig. B



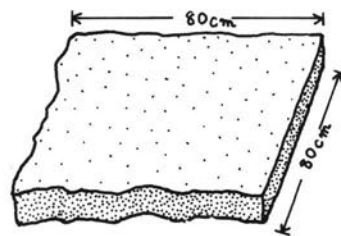
Deaminne Wehela



〔B 石板〕建造物跡Dのそばにある。一枚の平石で、その一辺には半円形と長方形の穴が刻んである。何に用いたかは不明(図B参照)。

〔C 石板〕建造物跡DとEとの中間付近に、一辺80cmほどの平石がある。四辺のうち二辺は破損している。用途は不明(図C参照)。

Fig. C



〔D建造物跡〕形状はほとんどはつきりしないが、おそらく四辺形をなしていたのだろう。四隅のうち二隅は、直角に並んだ一列のれんが積みと角に置かれた石によって、かろうじてわかる。礎石も2～3個見られた。

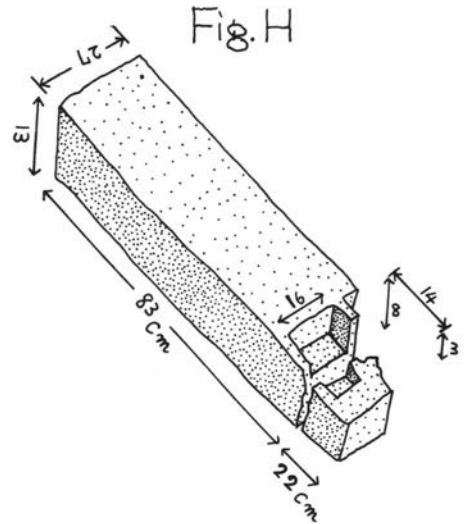
〔E建造物跡〕露岩丘を下った平地に5×4.5 mの石組のみ残っている。近くにレンガ片が数個散在する。

〔F建造物跡〕大きなふぞろいの石の石組み。人の手が加わっているということだけはわかるが、形状は不明。

〔G建造物跡〕5.5×5 mの四辺形をなしていたと思われる石組み。レンガ片が少し残っているが、何の建造物跡であるかは不明。

〔H石柱〕東のやぶ近くに長さ1 mほどの石柱と思われるものが1本だけ見つかった。一部を穿っており、おそらく他の石柱や梁と組み合わせるための穴であろう(図H参照)。

〔I建造物跡〕仏塔跡(A)の北東50 mほどのところに、やぶを越えてもう一つ別の露岩丘があり、その丘に3.2×6.0 mほどの石組みがある。形は四辺形であることがかろうじてわかる程度で、大きな石組みとレンガ片が散在しているだけである。



<3 4> 無名岩丘のパタバ (アッレワワ村)

nameless ruins, near the ALLEWEWA VILLAGE
(ruins of water hole)

Location;

This site is located about 1.2 km. the south by west of the Alleweva village.

Summary;

At the south face of the low rock hill, there is a water hole. It measures 3 m. by 1 m. and 0.3 m. in depth.

【調査】8月26日

【スタッフ】八木、角谷、東、堀江、岡村、スィリル(ハンター)、ペーマラトナ(ポーター)、ガイド1名〔8名〕

【位置】アッレワワ村小学校から南南西1.2 km、カルカンドの西北西2.6 kmに位置。「地図」には一切記入なし。

【アプローチ】パダナ・ガラへ向かう探査行の途

上で観察。バダナ・ガラへのアプローチ参照。

【概要】岩丘の南側に1つのパタハを確認。長径3 m、短径1 mのもので、他に遺跡等は見あたらず、水場として使われたものと思われる。

【考案】ワラス・ガラとの地理的關係から、両者を結ぶ道が通っていて、その水場ではなかったかと思われる。

< 35 > カルカンドアの寺院遺跡

KARUKANDHA (ruins of temple)

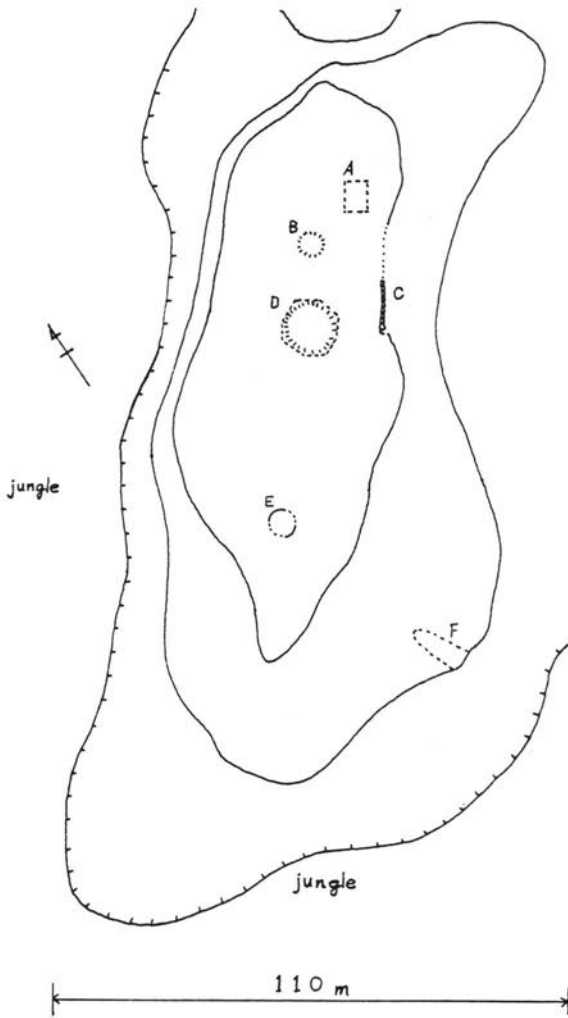
Location;

This site is located about 3 km. the south by east of the elementary school in the Allewewa village. This site has a mark of Gala and a mark ruins on the "Map".

Summary;

At the Karukandha in the jungle is an ancient site. At the northeast face of the hill, here are the remains of a dagoba (D) dug into by treasure hunters. It is about 10 m. in diameter and 2 m. in height. In the hole by treasure hunters, here is a moon stone. This measure of bowstring is 1 m. At the northeast of the dagoba (D), here are the remains of a small dagoba (B). Its diameter is about 6 m. at the base. Near the dagoba (B) are the remains of a structure (A). At the southwest face of this rock hill, here are the remains of a small dagoba (E, fig.E) with many brickbats. Its diameter is 6 m. at the base. At the south of the dagoba (D), here is a drip ledged cave with mortar (F). On the southeast slope, here are the remains of a assembled stones terrace (C).

Karukandha



【調査】8月27日

【スタッフ】八木、角谷、東、堀江、岡村、スィリル（ハンター）、ガイド1名〔6名〕

【位置】アッレワワ村の南東3km、バダナ・ガラ
の北1.6kmの地点。囲りは濃密なジャングルにおおわれている。また、ここから東南東の方向にチーナガスカンダを見ることができる。「地図」には岩丘、遺跡印は記入されているが、名称は記入されていない。

【アプローチ】バダナ・ガラへの道を途中（小学

校から2km）まで行き、ここから東へ直進。2.5km程でカルカنداに着く。踏み跡程度の道はあるが、不明瞭なのでコンパスでアプローチするしかない。

【全体的状況と位置関係】北東から南西にのびる細長い急峻な露岩丘の上に分布。頂上部の狭い平坦地に大小3つの仏塔跡（大1、小2）および1ヶ所の方形建造物敷地跡、それに住居跡の岩窟、土台を積み上げたと思われる長い石垣跡などが確認できた。いずれも風化が激しく、大仏塔と洞窟以外は、わずかに敷地の痕跡がわかる程度である。

【各部分の状況】

〔A建造物跡〕北東～南西7m、北西～南東5mほどの規模の方形敷地が不明瞭ながら確認できる。平坦で、土砂の堆積のみによってそれとわかる程度のものである。

〔B小仏塔跡〕A建造物跡の西南に隣接。風化土まじりのレンガ片の盛りで、それとわかる。直径5～6m程の基部敷地が確認できるだけで、他に痕跡は見られない。

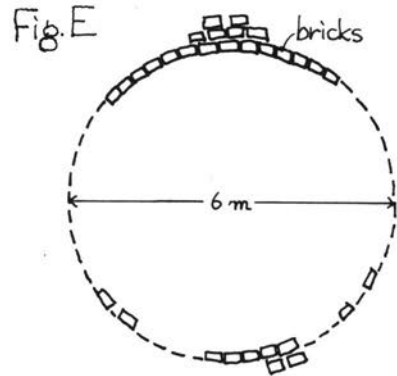
〔C土台盛上げの石垣〕南東側の傾斜地に石垣を組んで頂上部を平坦にした跡が見られる。4～5段の縦積みの石垣が現地表より露出し、約10m続いている。現在の高さは約1.5m程であるが、下部は土砂に埋れて不明である。

〔D仏塔跡〕レンガ組みのドームの跡が高さ2m程残り、あとは崩壊している。頂上中央には盗掘跡があり、穴の中にムーンストーンが転がっている。これは後に誰かがここに移したものであろう。ムーンストーンは弦部の長さが1m程の花コウ岩質のもので彫刻等は見られず、初期のものに属することがわかる。仏塔基部は明瞭でなく、わずかに八角形の下壇（プラットフォーム）の跡がみられる。仏塔自体の直径は10～12m程か。B小仏塔跡より南東15mの地点。

〔E小仏塔跡〕D仏塔跡より南西40mに位置し、

基部直径6 m程の規模のもので、レンガ組みの跡が北側と南側に明瞭に残っている(図版E)。北側のレンガ跡には10個のレンガが明瞭に円をえがき、さらに入口と思われるレンガ跡もある。囲りには瓦片も見られた。

〔F住居跡の岩窟〕D仏塔跡の南80 m、岩丘を10 m程降りたところに位置。入口で、高さ1.8 m、幅(横の長さ)4.5 m、奥行き10 mのもの。しかし、今は洞穴の奥までかなりの土砂が堆積しており、実際の高さは2 m以上あったと思われる。また天井の端(入口の上)は岩を刻んでヒサン(雨ドイ)がほどこしてあり、雨水が内部に伝わらないようにしてある。また、入口右手には幅40 cm



深さ15 cm程の穴がくりぬいてあり、明り等を置いたのではないかとと思われる。岩窟内部は漆喰の跡が横の壁に残っている。

< 36 > チーナガスカンダの不明遺跡

CHINAGAS-KANDA (uncertain ruins)

Location;

This site is located about 300 m. the east by south from the Karukandha (See No. 35).

This site is noted as "ruins" on the "Map".

Summary;

This site is distributed over three rock hills.

(I) On the northern low rock hill, here are the remains of a structures (A) and two water holes (B, C).

(II) On the southern high rock hill, here are the remains of semicircular assembled stones (D, fig.D).

(III) On the eastern high rock hill, anything might have remained, but it was uncertain for violent weathering.

This site is all weathered.

【調査】8月27日

【スタッフ】八木、角谷、東、堀江、岡村、M.
H. スィリル、S. M. ベーマラトナ

【位置】カルカランダの東南東に隣接。ジャングル
で300mほどさえぎられているが、高い岩丘な
のですぐそれとわかる。「地図」にはRuinと印
されているのみ。

【全体的概要】3つの部分から成る大岩丘地帯で
各所に遺跡所在の適所と覚しき場所があるが、実
際にはほとんど何も見出せない。北側の低い岩丘
(I)に建造物跡の崩壊土と思われる土盛り(A)
が見られ、その北東の方向に水の溜ったパタハが
2つ(B, C)あるほか、南側の最も高い岩丘(II)
に5m径ほどの半円形状の石組み(D)(図版D)、
およびパタハが各一カ所ずつ確認できるだけであ
る。東側の高い岩丘(III)には頂上部に広い平坦
地があり、最も遺跡残存の可能性が高いと思われ
たが、全く何も見出せなかった。実際にはこれら
各所にもっと多くの建造物が分布していたのであ
ろうが、極度に風化が進み、現在では何が遺跡で
あるかさえ不明となっている。そのため「地図」
にも仏跡の印でなく、ただの遺跡印(Ruinと記
載)のみが記入されている。

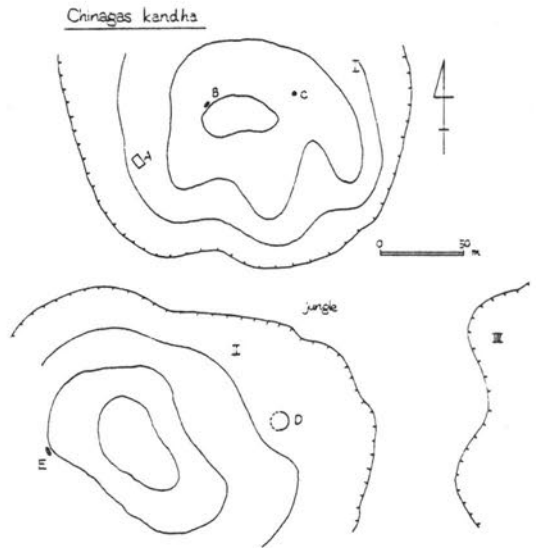
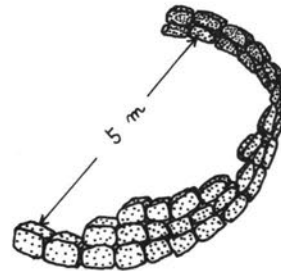


Fig. D



<37> バダナ・ガラ寺院遺跡

BADANA-GALA (ruins of temple)

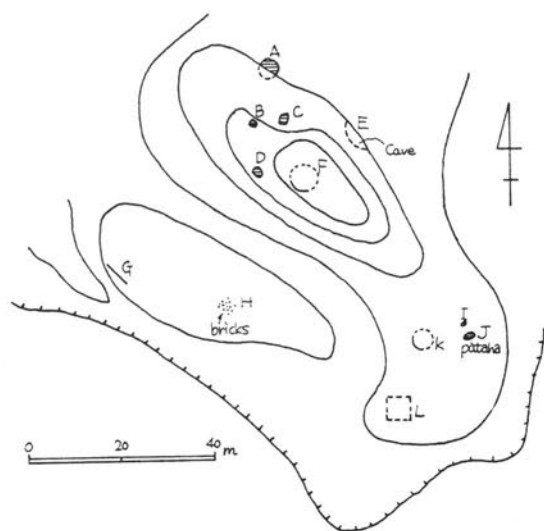
Location;

This site is located about 4 km. the south
by east from the Allewewa village. This site
has the name and a mark of ruins on the "Map".

Summary;

Badana-Gala, which is surrounded by a dense
jungle, has ancient ruins. At the summit of this
rock hill, there are the remains of a dagoba (F).

Its diameter is 6 m. at the base. At the south-east direction, there are the remains of a dagoba (K). Its diameter is 6 m. at the base. Near the dagoba (K) are the remains of a structure (L). At the northeast point on the hill, there is a cave (E). Brickbats are scattered around the entrance of this cave. At the southwest point on the hill, there are the remains of brickbats (H) and assembled stones (G) on the terrace. At the south point, here are six water holes (A, B, C, D, I, J). This site is all weathered.



【調査】8月26日

【スタッフ】八木、角谷、東、堀江、岡村、スィリル（ハンター）、ペーマラトナ（ポーター）、ガイド1名〔8名〕

【位置】アッレワワ村小学校から南南東約4km、カルカダの南約1.6kmの地点。「地図」には名称と遺跡印の記入がある。

【アプローチ】アッレワワ村小学校わきのジープ道を南西に200m程進むと、民家の桓根がある。

ここから南南西へと伸びる小径を進むと、焼畑地帯をぬけ岩丘に出る。ここにパタハが1つある。小学校より約1.2kmの地点である。更に沢を横切り、小学校から2kmの地点で南南東へ向かう。700m程進んで今度は南西へ向かうとワラス・ガラに到る。小学校から3.5kmの地点である。ワラス・ガラから東へ2.8kmでパダナ・ガラに到る。小学校からは1時間40分の行程である。

【概要】2つの岩丘から成っており、遺跡が分布しているのは南側岩丘で、高さ約80m、長さ150m、幅100mはある。二つ合わせた規模はかなりのものである。遺跡は6つのパタハ（A、B、C、D、I、J）、2つの仏塔跡（F、K）、1つの建造物跡（L）、1つの岩窟（E）、更に南西側テラスにはレンガ片（H）、組石（G）などがある。F仏塔跡は岩丘頂上にあり、南西側に土台の組石が見られ、直径約6mの規模の円状土盛りを呈しているが基部は不明瞭。ここより南東約35mにK仏塔跡が位置。これも円状の土盛りを呈しており、直径約6mの規模である。K仏塔跡の南15mに建造物跡と思われる形状を呈している石組みが残っている。規模は5m四方。F仏

塔跡より北東側 25 m 程降りたところに岩窟があり、高さ 2 m、幅 6 m、奥行 3 m の規模で、入口付近にはレンガ片が散見でき、当初、入口付近はレンガで壁がつくられていたのかもしれない。岩

丘の南西側テラスにはレンガ片数個散見できたが、建造物跡のものかどうか、形状も不明瞭である。この西に組石が見られるが、何かは不明。全体に風化が激しく明確な形状は確認できない。

< 38 > ワラス・ガラのパタハ

WALAS-GALA (ruins of water hole)

Location;

This site is located about 3.5 km. the south of Allewewa village and about 2.8 km. the west of the Badana-Gala (See No. 37).

Summary;

The small rock hill is in the jungle near the Allewewa village. On the rock hill, here are the remains of a large water hole and a slab (photo.A fig. A). Archaeology Department has suggested that this slab is unknown how to use.

【調査】8月26日

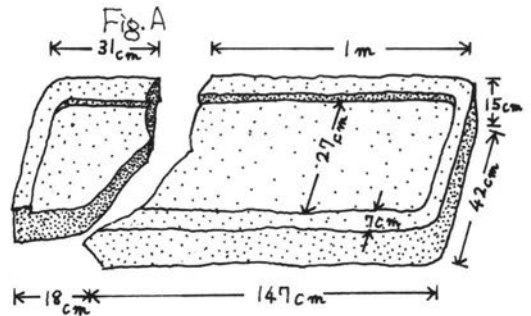
【スタッフ】八木、角谷、堀江、岡村、スィリル（ハンター）、ペーマラトナ（ポーター）、ガイド1名〔7名〕

【位置】アッレワワ村の南 3.5 km、バダナ・ガラの西 2.8 km に位置。「地図」には一切記入なし。

【アプローチ】バダナ・ガラへのアプローチ参照。

【概要】ジャングルの中にある高さ 4 m 程の露岩に、岩をくりぬいたパタハが 1 つと、燈明台？と思われる遺物が 1 つあるだけで建造物跡等はなかった。この遺物（写真 A）は、考古学局の話ではアスダラブラ等でも多数発見されているが、使用目的等については不明とのことであった。ワラス・ガラとは「態岩」の意味である。

【考察】アッレワワ村近くのもう一つの無名岩丘パタハとの関係、更にバダナ・ガラ等の遺跡との地理的關係を考慮してみると、昔、パタハと岩丘



写真A

遺跡を結んでいずこかへ伸びる道があったのではないかとも思われる。

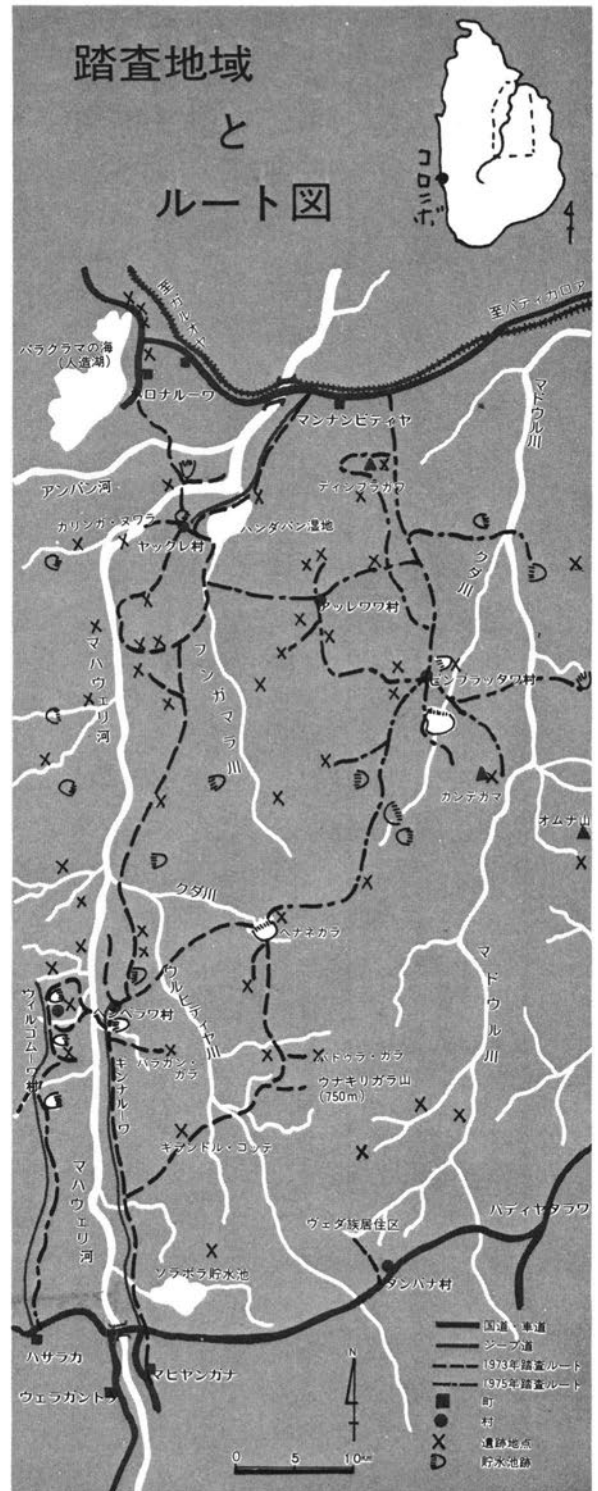
マハウェリ流域の自然

マハウェリ・ガンガは、北部中央高地の東端に各支流を集め、マヒヤンガナ以北では、ほぼ40mほどの高度差による傾斜でゆったりと北流している。熱帯森林、ブッシュに被われた流域には、点々と低丘陵地や微高地（最高2252f）があり、頂上部は大てい露岩となっている。これらをgalaと呼ぶ。この地域はドライゾーン（Aw=サバナ）に入り、年間降雨量が600~1800mmと少ないため、一名乾燥ジャングルとも呼ばれる。流域の、特に右岸域は再開発が遅れ、近年ようやくマンナンピティヤとマヒヤンガナを結ぶジープ道が着工した以外は（若干の灌漑施設の工事を除くと）ほとんど人の手の入らぬ地域となっている。密林には部落と部落を結ぶ歩道のある場所もあるが、ほとんどは踏み跡道程度のもので、人の往来も多くない。部落のすぐ近くまでが、野生動物のテリトリーである。

マハウェリ・ガンガは乾季には水位が低く、東岸の各支流にも流水はない。そのため、支流の川床は白砂を厚く堆積させて密林に伸び、野象などのけものみちとなっている。雨季が近づくと、密林の様相は一変し、木草の潤いとともにサソリやコブラ、山ヒルなどの小動物が姿を現わす。密林の各所には遺跡のほか貯水池跡が原野と化して広がり、雨季には密林の湖と化する。

ジャングルのあちこちには、焼畑に用いた場所などが、貯水池跡とともに原野となって点在するほか、古代の水田地帯跡と思われる湿地帯なども見られる。

（この項・伊藤修）



2. ピンブラッタワ部落周辺の遺跡

Ruins, distributing in Pimburettawa Village area

【遺跡群索引】

- 〈 39 〉 デーワガッラの寺院遺跡
- 〈 40 〉 ヒングールワワの無名遺跡
- 〈 41 〉 カダッラの寺院遺跡
- 〈 42 〉 ダンバナ・ウルポタの寺院遺跡
- 〈 43 〉 ウェヘラゴダッラの寺院遺跡
- 〈 44 〉 スィリパーレナの寺院遺跡
- 〈 45 〉 スィルミニサーヤの寺院遺跡
- 〈 46 〉 ヴェヘラ・ガラの寺院遺跡

【地域および遺跡群の概要】

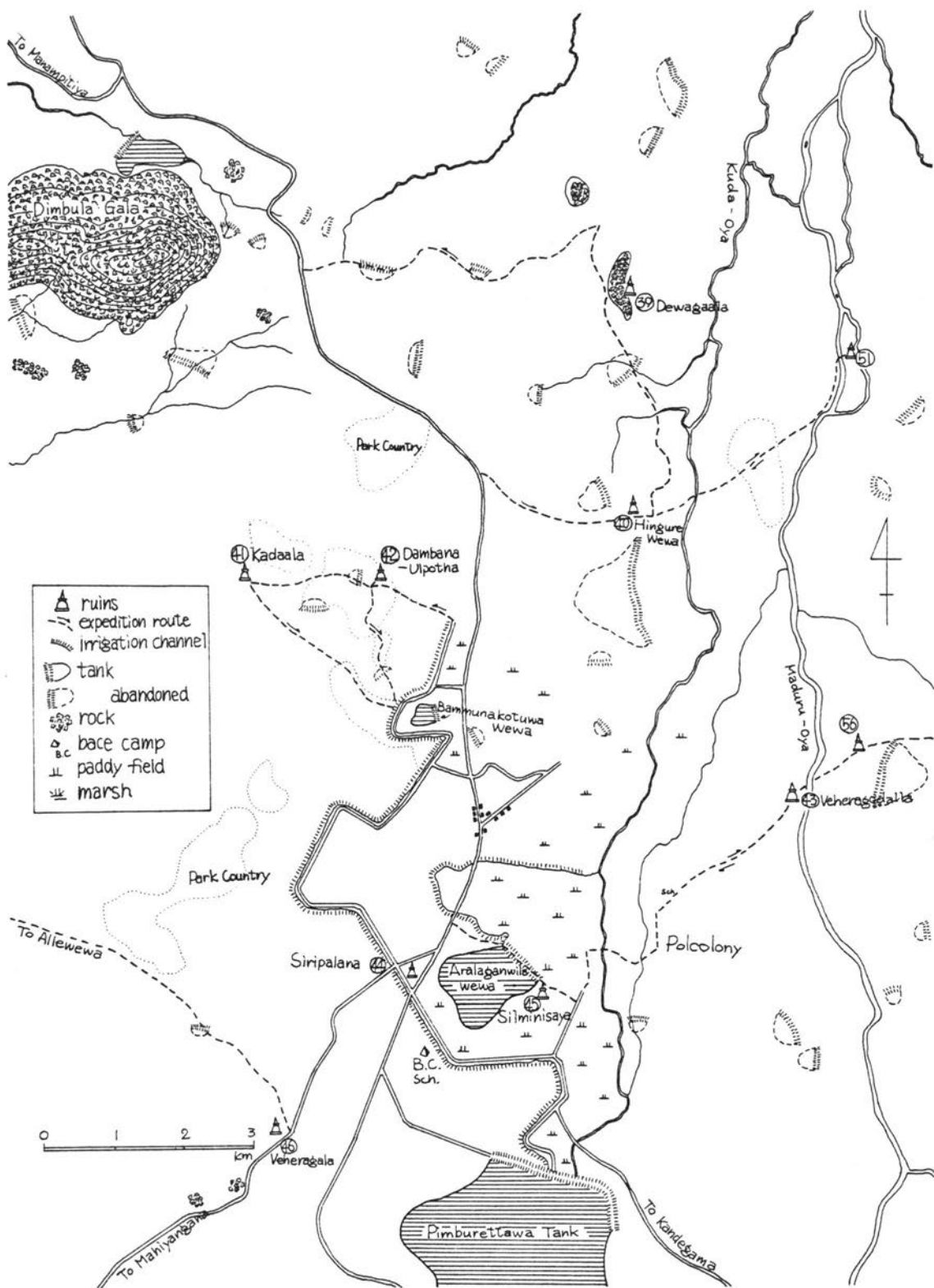
ピンブラッタワ貯水池の北部地帯は、かつてはジャングルであった。わずかにエラワクンプラ村がジャングル中の開拓部落として点在しているにすぎなかった。それが10年程前、ピンブラッタワ貯水池の完成と同時にエラワクンプラ村の住民が貯水池の北部へ移住し、また他からの入植者も相つぎ、続々と開拓が行なわれていった。その結果、現在は用水路が縦横に通じ、広々と一面の水田が開け、農家が点々と散在する純農村地帯へと生まれかわっている。ピンブラッタワ貯水池の他にもアララガンウィラ貯水池、バムナコトゥワ貯水池などや、またそれらをつなぐ水路網など着々と灌漑設備が整いつつある。この地域の季候はドライゾーンに属し、乾季に水田耕作ができるのはこれら灌漑設備の発達によるものである。交通の便はよく、ポロンナルワとの間には一部舗装された道路が通じ、1日10数回のバスの便もある。また、南のマヒヤングナへ通じるジープ道がジャングルの中を貫いている。当地域の中心部は、アララガンウィラ貯水池北方のコロンガスサンディーで、

商店が数軒、郵便局、診療所があり、定期市が週一回開かれ、たいいていの日用品、食料品はここで入手することが可能である。しかし一見開けているようにみえるこの地域も、一步部落を出ると、ジャングル地帯となり野生動物の世界となる。夜になると、部落の近くまで象や鹿その他の猛獣が跋扈し、夜間の外出を危険にらしめる。また貯水池の周辺では盛んに水牛の放牧が行なわれており、何百頭という半野生化した群れは人間に危害を加えるおそれがあるという。ただし、ジャングルにも日ごとに開拓の手がのびており、木を伐り、火をつけて焼畑を行なっている光景を所々で見ることができる。将来はピンブラッタワ貯水池を中心にして一大農村地帯が開けてゆくことだろう。

当地域の遺跡は、一カ所にかたまらずに散在しているのが特徴で、各遺跡の相互性や共通性は見出し得なかった。ヒングールワワ、ウェヘラゴダッラ、スィルミニサーヤの各遺跡は露岩上の上のものではないため、土中に埋もれ今後の発掘が期待される。特にウェヘラゴダッラは400m以上の規模にわたって建造物跡が散在し、かつては一大寺院を形成していたことが想像され注目される。

【当隊の活動の概要】

当隊(第2次隊)はピンブラッタワ小学校のすぐそばにベースキャンプを設けた。一方は水路を越えて水田地帯が開けており、背後にはジャングルがすぐ近く迫ってきている所で、部落の中心部からはやや離れている。ベースキャンプを基地として当地域の探査はすべて1日行程の探査で行なった。開拓が進んでいること、道路が発達してい



ること、人家で案内人をたのむことができたことなどの理由により、比較的遺跡までのアプローチは容易であった。ベースキャンプを訪問してくる多くの村人達から遺跡の情報を入手することができ、隊活動後半においては、ヒングールワワ、ダ

ンバナ・ウルポタ、ウェヘラゴダッラなど地図に記載されていない遺跡が明らかとなった。この他にも調査期間がなくて調査を断念したものや、我がの入手した情報から漏れた遺跡があるものと思われるので今後の詳細な再調査が望まれる。

<39> デーワガッラの寺院遺跡

DEWAGALLA (ruins of temple)

Location

This site is located about 6.5 km. the east from the Dimbula-Gala. This site has the name and a mark of ruins on the "Map".

Summary

This ruins are distributed on the rock hill which extends over about 800 m. from north to south. At the south section, here are the remains of a dagoba (B), two water holes (A, photo.A), five pedestal holes carved on the rock (C, fig. C, C1-C5, photo. C3-C5), round assembled stones (C0) and a small cave (D, photo.D). At the north section on the rock hill, here are the remains of a dagoba (J, photo.J, fig.J) with step stones and stone plates (fig.J1, fig. J2), five drip ledged caves with brickbats and rubbles (E, fig.E, F, fig.F, G, H, photo. H, fig.H), one structure with stone steps and brickbats (I, fig.I), two stone terraces (L, photo.L), one stone pillar (M, photo. M) and a flight of steps (K, photo. K) carved out of the rock.

【調査】9月21日

ワワ部落から北へのびる道沿いに3.5kmの地点。

【スタッフ】角谷、執行、スィリル(ハンター)、バンダー(案内人)〔4名〕

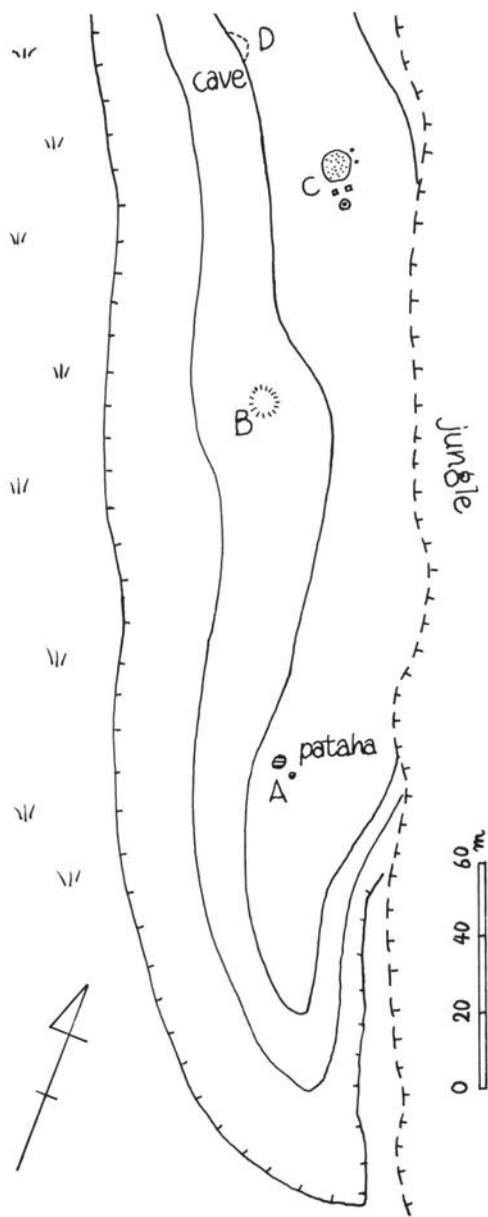
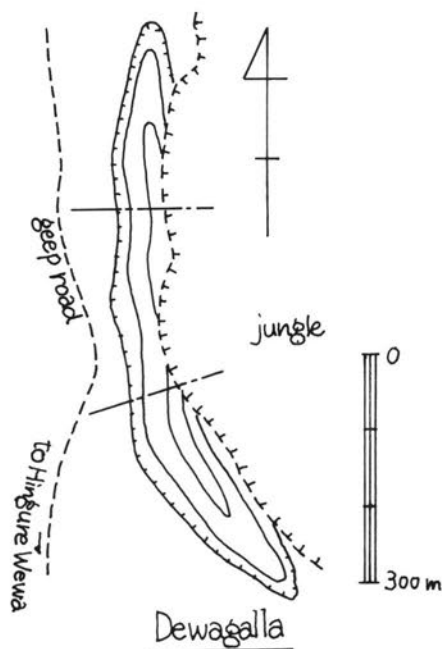
「地図」に地名及び遺跡印の記入あり。

【位置】ディンブラガラ東6.5km、ヒングール

【アプローチ】アララガンウィラ、カドゥルエラ間のバスをエコラハイ・ボーディエカの分枝点で

降りて東へ向かうと、ヒングールワワの部落に出る。ここから両側のところどころに農家の散在する道を北へ3.5km程行くと、道はジャングルの中に入り、右手にすぐデーワガッラの岩丘が見えてくる。

【全体的状況と位置関係】岩丘は南北へかなり長く(約800m)延びている。東側斜面は頂上近くまで樹林が押しよせてきているが、西側の道に面した斜面には樹木は生えていない。遺跡はこの岩丘上の南部と北部に分布する。南部にはパタハ2つ、仏塔、岩盤を穿った大小の柱穴5つ、岩窟などがある。北部には仏塔、建物跡、岩窟5つ、階段、石垣などがある。露岩丘上の遺跡にしては崩壊の程度は少ない方と思われる。



【各部分の状況】

((南部))

[Aパタハ]デーワガッラで、パタハがあるのはこの2つだけで、2つとも規模は小さく、ほぼ円形のパタハである。大きい方(写真A参照)は長径1.10m、短径0.90m、深さ1.50m。小さ

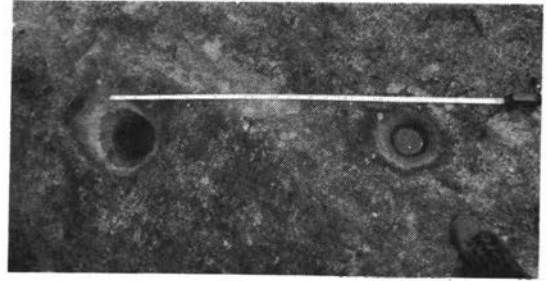
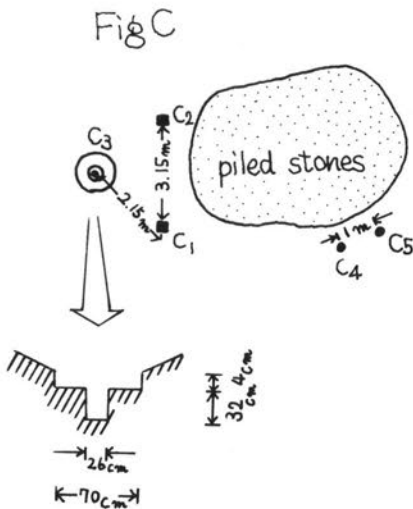


写真A

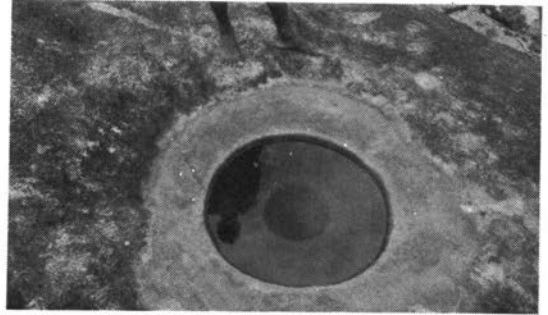
いは直径0.70m、深さ0.60mである。

〔B 仏塔?〕Aの北北西約220mの地点にある建物跡。直径6.0mで円錐状に土砂が盛り上がっているが、中央にくぼみがある程度で、あとは石片の山である。付近にレンガ片を確認することはできない。崩壊が激しく、何の建物跡であるか断定するのはむずかしいが、おそらく仏塔跡であろう。

〔C 大小の柱穴〕大きな石が高さ5mくらいに積み重なっている(C0)まわりに、図Cのごとく大小5つの穴が穿ってある。形も様々で、円形や四角形のものが混じっている。これらの穴は、仏像や石柱などを立てるためのものであろうか。C0の西側にあるC1、C2は1辺が約20cmの四角形。C3は二重に穿ってあり、深さが32cmとかなり深い(写真C3参照)。これと同じ種類のものは、ウィルゴムア・ガラ、オッゴムア・ガラ(1973年調査)などにもある。C0の南東側にもC4、C5という丸い穴があり、C4は直径12cm、深さ10cm、C5は直径20cm、深さ10cmである(写真C4・C5参照)。



写真C4 C5

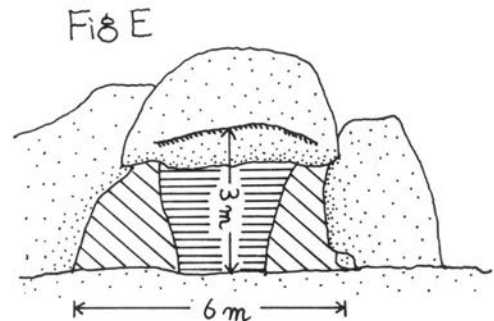


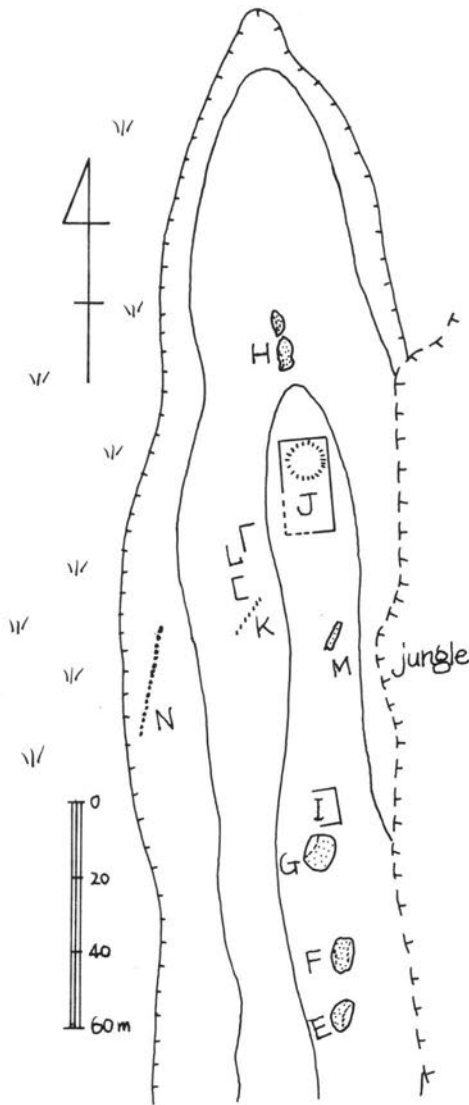
写真C3

〔D 洞窟らしきもの〕岩丘の西斜面にある、幅1.5m、高さ0.9m、奥行2.6mの穴であるが、人の手が加わっているかどうかは不明。もし人が住んでいるとしたら、この穴の高さは低すぎる。寝ころぶことしかできないだろう。ただ洞窟特有の湿った臭いがする。入口の向きは南西方向。

((北部))

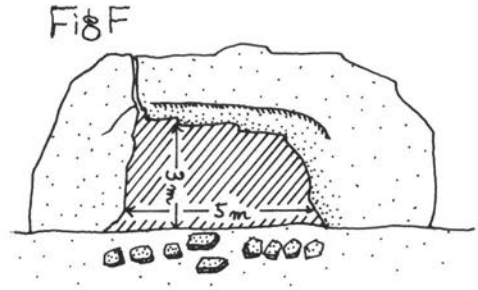
〔E 岩窟〕岩丘の上にある岩を穿った岩窟。地表から雨止め(ヒサン)までの高さが3.0m、幅6.0m、奥行2.3m。雨止めははっきり残っている。入口の向きは東(図E参照)。





〔F岩窟〕Eと同様の岩窟であるが、2つの入り口を持つ吹き抜け構造になっていて、両側の入り口に雨止めがある。高さが3.0 m、幅5.0 m、奥行6.0 mである。また、周辺にはレンガ片が散在し、東側の入り口付近には一列の石積みがあり、階段跡と思われる石積みが正面についている（図F参照）。

〔G岩窟〕他と同様な岩窟であるが、岩の頂上部分、高さ約10 mの平らな部分に、細かなレンガ

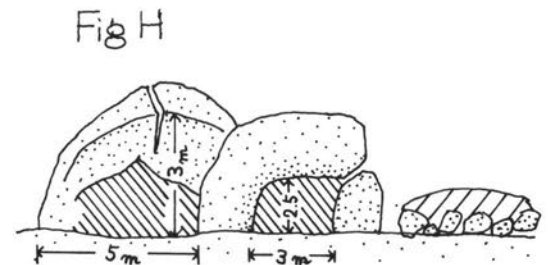


片が散乱して、何かの建物があったことを示している。元の形状を想像することは不可能。その下にある岩窟は、高さ2.4 m、幅8.0 m、奥行5.0 mで、入口は西を向いている。下にはレンガが敷きつめてある。

〔H岩窟と盛土〕他と同様の岩窟。接近して2つの岩窟が並んでいる。南側のものは高さ2.5 m、幅3.0 m、奥行2.5 mで吹き抜けており、入口の向きは南西と北東方向。一方、北側の岩窟は、高さ3.0 m、幅5.0 m、奥行2.7 mで、入り口の向きは南西である（写真H参照）。ともに岩窟の下にはレンガ片が認められる。また南側の岩窟の南側には、不明瞭な石組みと盛土がある（図H参照）。



写真H



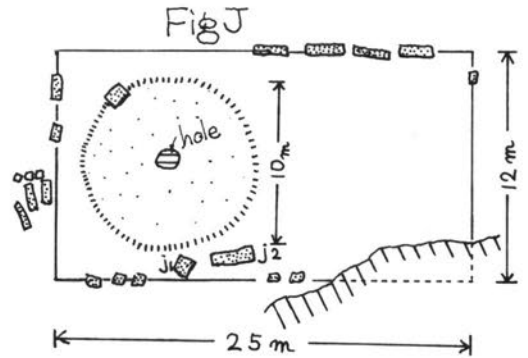
〔I建物跡〕石組みは一辺約10mの方形を成していたと想像されるが、西側の一边は草むらに隠れてははっきりしない。11、12のような石や階段跡らしき石のある東側が入口であったと思われる。レンガ片は数個発見できただけである（図I参照）。



K参照）。



写真J



〔J仏塔跡〕12.0×25.0mの長方形の石で囲んだ土盛の土台の上に直径10mの円形の仏塔跡がある（図J参照）。堆積している土砂（風化土）の高さは約3m。中央に盗掘跡があるが、中を覗くと明瞭なレンガ組みがわかる。階段跡と思われる石が残っている北側が正面であろう。月石、守護神像、らんかんなどは見あたらない。また、j1やj2のような石造物が、仏塔の斜面にころがっている。j1は段々のついた方形石板（図j1参照）。j2は階段に使用されていたと思われる石で、他の石造物と組み合わせるための彫り込みがしてある（図j2参照）。

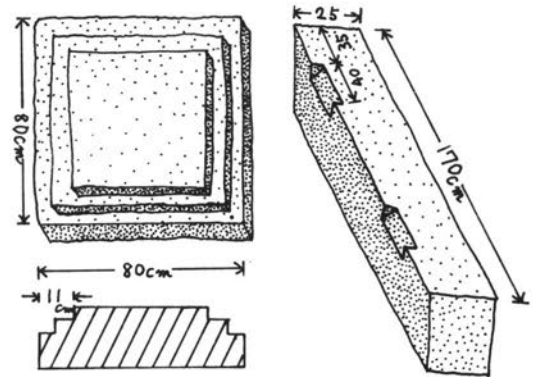
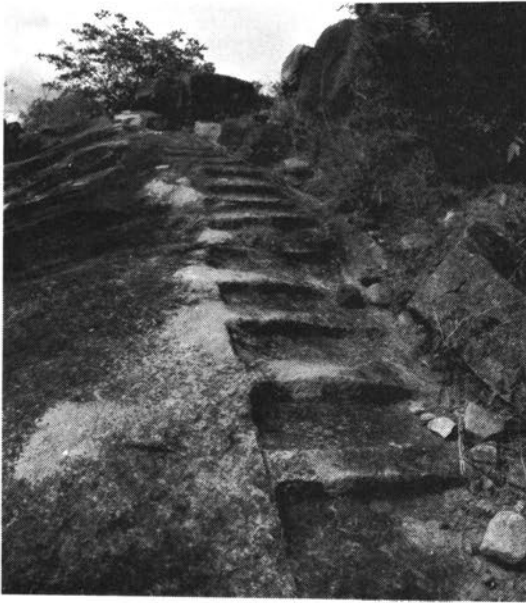


Fig j1

Fig j2

〔K階段跡〕仏塔跡（J）の南南西約18m地点の斜面に、岩丘を刻み込んだ階段跡がある。本来は岩丘の麓から仏塔へ向かって（南南西から北北東へ）ずっと続いていたのであろうか。現在は4.5m、14段分だけ残っている。各ステップの幅は55cm、奥行（ピッチ）は約35cmである（写真

〔L建造物土台？〕仏塔跡（J）の西方約11mの斜面に、石を積み上げてつくった石垣状の土台らしきもので、斜面の上に平らなテラスをつくった跡であろう。幅7.5m、高さ約1mである。さらにその下5mのところにも幅6.5m、高さ1.5mの別の石垣状の土台がある（写真L参照）。



写真K

〔M石柱〕建造物跡Iの北北西約40m地点に写真Mのような石柱が一本倒れている。長さ3.6m、根本付近の幅0.45mで、ほぼ円筒形をしており、先へいくほど細くなっている。周辺にはそれ以外

に何も見つからず、他の場所から運ばれてきた可能性も強い。

〔N石垣〕岩丘を降りた西の平地に、南南西から北北東へ約30mの長い石垣が延びている。これは一段か二段の低い石垣である。



写真L



写真M

<40> ヒングール・ワワの無名遺跡

HINGURE-WEWA (nameless ruin of temple?)

Location;

This site is located about 2.5 km. the east by south from the Ekolahay-Bodieka Junction which is located about 9 km. the north from the Bace Camp (in the Pimburettawa village).

Summary;

This ruins are situated on the hill which is adjacent to the road. Here are the remains of fifteen stone pillars (A), and four slabs.

【調査】9月15日

【スタッフ】角谷、堀江、スィリル(ハンター)、ガイド1名〔4名〕

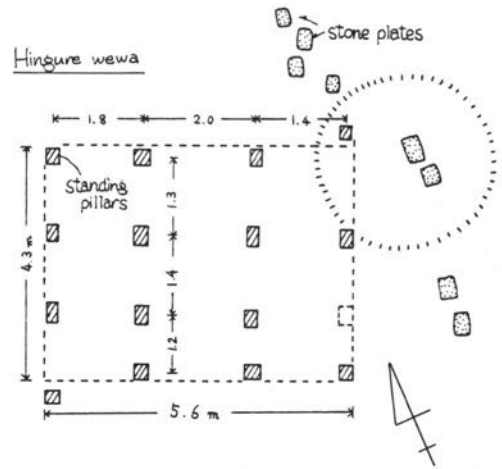
【位置】マナンビティヤとピンブラッタワワを結

ぶバス道の途中、ベースキャンプより北9kmのエコラハイボーディエカより東南東2.5km。デーワガラの南3.5kmに位置。丘陵地帯の頂上付近にあり、道路わきに見ることができる。「地図」に

は一切記入なし。

【アプローチ】我々はマナンピティヤへ向うバスで途中のエコラハイボーディエカまで行く。ここより南東に伸びる道を200m行くと、ジープ道と交差するが、更に南東に伸びる道を進む。この付近は広い水田地帯で民家も点在している。途中、道は北北東へ大きくカーブするがエコラハイボーディエカより約1.3kmで右手に折れる。南へ500mで道は二手に分かれるが、丘陵へ伸びる左手の道を南南東へ進むと、丘の上、左手に遺跡を見ることができる。エコラハイボーディエカより2.5kmの行程である。

【概要】丘陵地帯を横切る道路の頂上付近。道路と隣接しており、容易に見ることができる。確認できたのは建造物（講堂又は本殿）跡の石柱と石板だけであった。石柱は15本の配列が見えるが1本は確認できなかった（図参照）。石柱の1本を実測すると25×20cm角で、表出部分の長さは約55cmである。石板は建造物跡の東側で4枚、南東側で4枚、うち2枚は土盛り状の中央部の穴の中に見られた。この石板は100×70×



20cmのもので、他の7枚も同様の規格である。考古学局の説明でも使用目的等は不明とのことである。建造物跡の東側に隣接するように土盛りがあり、その中央部が掘られている。その中に前述の石板2枚が見られる。この土盛りを仏塔跡と推測するにはレンガ、石積みなどもなく、あまりにも建造物跡に接近していることから遺跡ではないとも思われる。その他、敷地形状を示すものは確認できない。

<41> カダッラの寺院遺跡

KADAALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 5 km. the south by east from the Dimbura-Gala and about 3 km. the northwest from Bamunakotuwa Tank. This site has a mark of ruins, but no name on the "Map".

Summary;

This site is on the low rock hill. At this site, here are the remains of a dagoba (A1, fig.A1), small dagoba (A2), image house (C, photo.C, fig.C1, fig.C2) with some stone plates, water holes (B1

photo.B1, B2) and four structures with some stone plates (D1-D3, photo. D2, fig.D3, photo D4, D5). At the foot of the western slope, here are three corner stones. At the west face of the rock hill, here are the remains of ancient letters carved out of the rock (E, fig.E). This site is comparatively small scale.

【調査】9月11日

【スタッフ】執行、堀江、スィリル(ハンター)、アップハーミー(案内人)〔4名〕

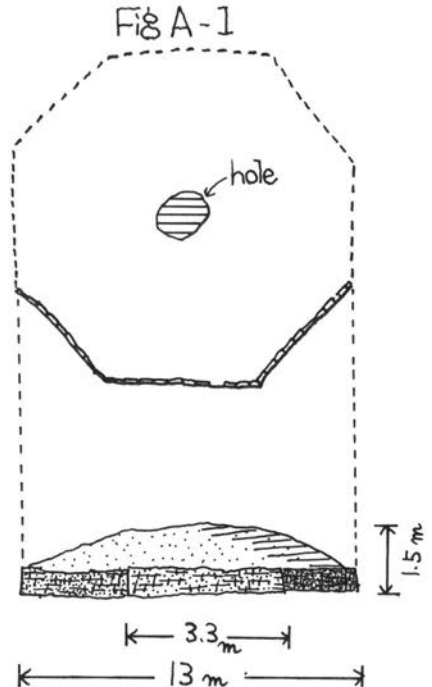
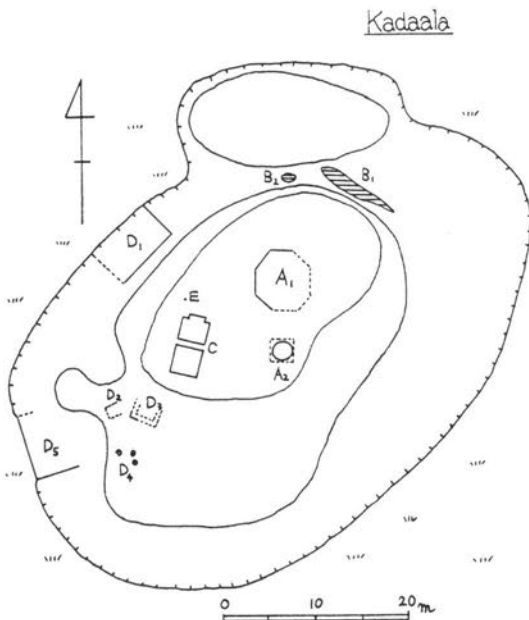
【位置】ディンブラガラ南南東約5kmの地点。また、バムナコトワ貯水池の北西約3kmの地点。「地図」には遺跡印のみ記入され、名称は付加されていない。

【アプローチ】ダンバナウルポタの遺跡(該当のアプローチを参照)から開けた平原地帯を西へ向かう。一度だけジャングルに入るが、すぐに平原に出て西または南よりに進む。ダンバナウルポタの遺跡から2.5kmで目的地のカダラの岩丘に到着。

【全体的状況と位置関係】高さ5m、長さ約100m程の岩丘の上に造られた遺跡で、仏塔、小仏塔(?)、本堂を中心として、パタハ2つ、その他4カ所の建造物跡などが確認できる。また西側の斜面には、岩盤に刻み込まれた古文字がある。建物は平石とレンガにより造られており、規模としてはやや小さい寺院遺跡である。

【各部分の状況】

〔A1 仏塔跡〕直径13m、高さ1.5mのレンガで構成された仏塔跡で、土台部分は一辺3.3m位の石組みが一部残存して本来は八角形もしくは多角形をなしていたものと思われる。月石、守護神



像などは見あたらず、どこが入口方向であるかは不明。中央部には盗掘跡があるが、あとはレンガ片の山である(図A1参照)。

〔A2 仏塔跡?〕A1の真南1.4m付近に高さ50cm程の円錐状の小山がある。レンガ片が若干見られるだけで、あとは土砂が堆積している。土台部分は、一辺5mの正方形である。小仏塔であるか否かはわからず、他の建造物である可能性も考えられる。

〔B1、B2 パタハ〕岩丘の北のふもとに大小2つのパタハが隣接してある。ともに露岩を穿って作られたもので、大きい方のパタハ(B1)は長さ19.5m、幅3mとかなり大きく(写真B1参照)、小さい方のパタハ(B2)は長さ3m、幅1m、深さ1mである。



写真B1

〔C 本堂跡?〕5.5×5.0mの四辺形の建物(C1)と6.0m×7.3m程の建物(C2)が接して前方後方形状に建てられている。基部のみが残っていて、平石と、大きさの不統一な石組みでできており(写真C)、ところどころ四方に図C-2のような、角が切り取られた平石が散在している。C1の方は基部の上にさらに基部をのせた二段構造である。またC2の方は、北面に2×0.4mほどの石が数個あり、階段跡のようにも見受けられる。なお、この建造物は、岩丘上の中心的な位置にあることと、前方後方形の形状から考えて本堂跡であった可能性が高い(図C1参照)。

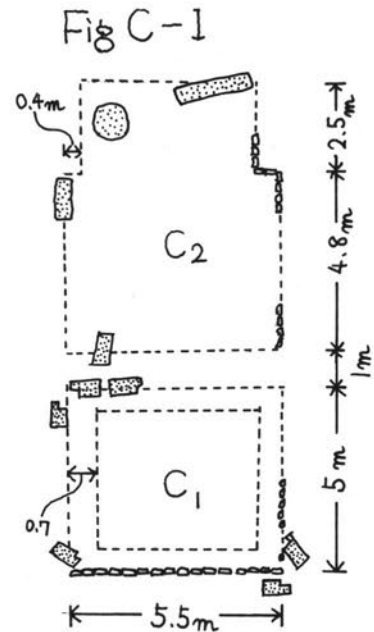
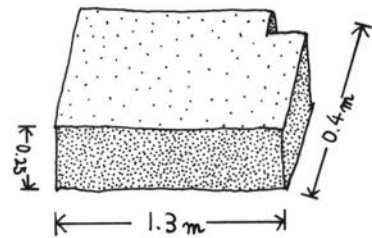


Fig C-2



写真C

〔D1 建造物跡〕0.5×1m、0.5×0.3mなど大きさの不統一な石で構成されており、形状は10×15m程度の四辺形をなしていると思われるが、

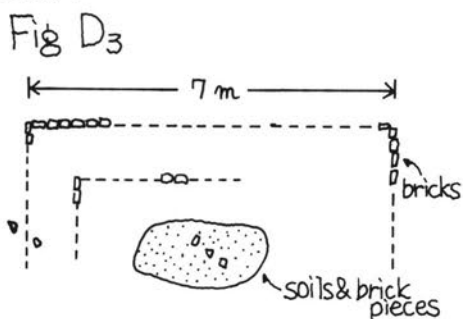
崩壊が激しく明瞭でない。レンガ片その他は確認できない。

〔D2 建造物跡〕一段のレンガの列がわずかに確認できるのみである。また、その敷地内には、方形石板(140×65cm)とカギ状の石(70cm×50cm)がある(写真D2)。方形石板は、その一辺に半円形の穴(直径10cm)が2つ穿つてある。用途は不明。敷地全体が草むして風化が著しい。

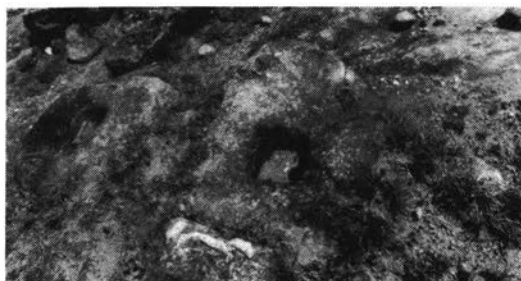


写真D2

〔D3 建造物跡〕風化が激しく、形状がはっきりしないが、ほぼ四辺形の石組みの土台を成していると思われる。その内部に、さらにもうひとつの土台部分と思われるものが確認でき、中央部には、レンガ片の混じった土盛が残っている(図D3参照)。



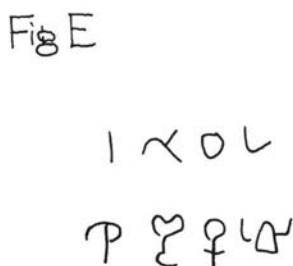
〔D4 礎石〕岩丘の南側、急な斜面の下に礎石が3つ散らばっている。本来の位置から斜面をすべり落ちたものであろう(写真D4参照)。



写真D4

〔D5 建造物跡〕岩丘の南西、岩丘が地面に接続している部分から地面に四辺形と思われる石組み(9.5×11m)が確認できる。建造物の土台とも考えられる。

〔E 古文字〕岩丘西斜面に文字が刻み込んである。露岩の上を直接彫り込んであるため、風化、剝落が著しい。一部がわずかに確認できただけである。右上部には白ペンキで「3・11・74」と記されており、考古学局の調査がすでに行なわれていることを示している(図E参照)。



< 4 2 > ダンバナ・ウルポタ (ニダハン・ガラ) の寺院遺跡

DANBANA - ULPOTHA or NIDAHAN - GALA

(ruins of temple)

Location;

This site is located about 1.8 km to the

north by west from the Bamunakotuwa Tank in a straight line.

Summary;

This ruins are situated on the four rock hills which extend from east to west in parallel with each other. On the end of west rock hill, here are the remains of two structures (1-A, 1-D, fig. 1-D), a dagoba (1-B, fig. 1-B), an artificial big stone (1-C, photo. 1-C), a water hole (1-E), a stone wall (1-F), a quarry (1-G) and a stone structure which is like a bench (1-H, fig. 1-H). On the second rock hill from the end of western rock hill, here are the remains of a dagoba (2-A) and two structures (2-B, 2-C, fig. 2-C). On the third rock hill from the end of west rock hill, here are the remains of a quarry (3-A, photo. 3-A. fig. 3-A). On the end of east rock hill, here are the remains of a water hole (4-A) and a structure (4-B, fig. 4-B).

【調査】9月10日

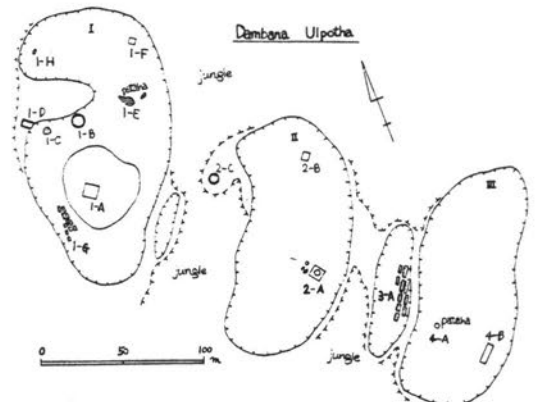
【スタッフ】八木、東、マティン(ガイド)

〔3名〕

【位置】アララガンウィラ部落の北にあるバムナコトゥワ貯水池から北北西1.8km地点。ダンバーナウルボタの三角点からは南西400m程の所である。「地図」に遺跡の印はない。

【アプローチ】アララガンウィラ部落よりマナンピティアに通じる道路を北に行く。しばらく進むとバムナコトゥワ貯水池に通じる分れ道に出る。その道を北西に進み、水路にかかった橋を渡り草原を1km程進む。草原地帯を過ぎ、ジャングルをぬけると露岩に出る。そこから北東に1kmほど進むと遺跡のある露岩に出る。

【全体の状況】露岩は4つに分かれ、それぞれに興味深いものが見られる。一番西の露岩には仏塔跡らしい円形の石積み、建造物跡が2つ、パタハ、ベンチ状の石、石切り場、人手を加えた形跡のあ

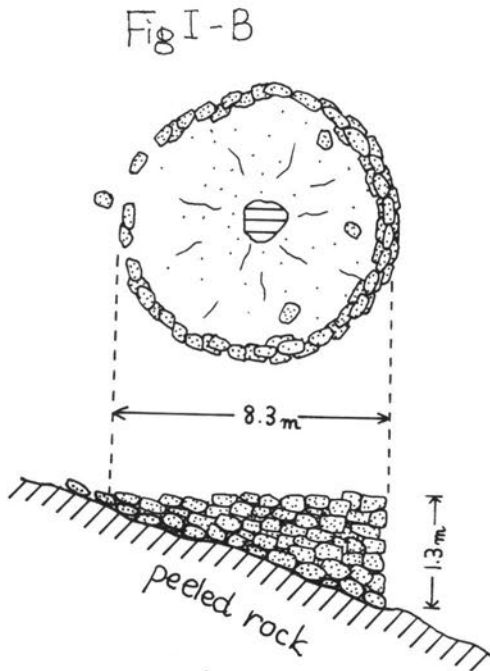


る巨石などが見られる。二番目には、仏塔跡と建造物跡が2つ見られる。三番目は、石切り場のみで、一番東に位置する露岩には、パタハと建造物跡が見られる。この遺跡は、現地では「宝の隠された岩」の意味の名前で呼ばれており、盗掘の跡が非常に多い。

【各部分の状況】

〔1-A 建造物跡〕11.0×9.3 mの石組みによる建造物跡で、北面と南面の一部にはっきりとした石の並びが見られる。周囲にはレンガが散らばり、中心部には盗掘の跡がある。

〔1-B 仏塔跡?〕直径8.3 mの円形状に組まれた石垣で、北側は露岩が窪んでいるため下部から1.3 mの高さに石が積みれ上部は平坦になっている。他の仏塔跡のような盛り上がりがないので仏塔であったかどうかは分からない。中心部に盗掘の跡あり(図1-B参照)。



〔1-C 巨岩〕高さ6 m程の巨岩が、岩盤の上に置かれている。下部が細く削られているため、上部がひさしのようにになっている。露岩の上に立つ

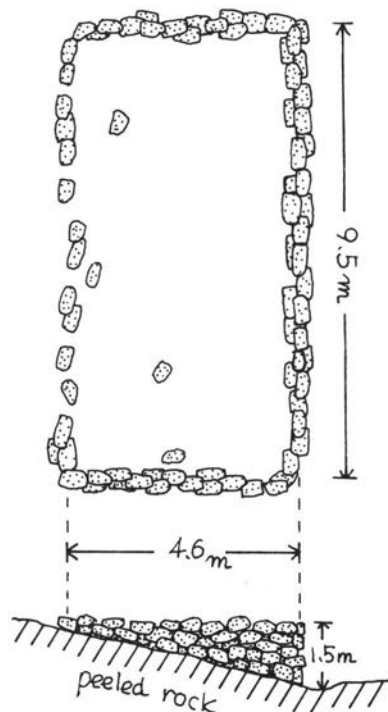
と、この岩がその奇妙な形のため非常に目立つ(写真1-C参照)。



写真1-C

〔1-D 建造物跡〕9.5×4.6 mの石積みで、遺跡の東端に位置し、1-Cの巨石とならんでいる。北側は露岩の端にあたるため1.5 m程の石積みがなされている。何の建造物跡であるか定かでない(図1-D参照)。

Fig. I-D



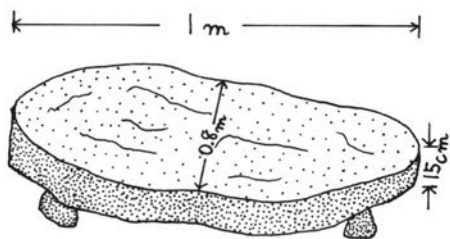
〔1-E パタハ〕第一の露岩（西端）のほぼ中央に位置し、2つのパタハが接して作られている。1つは長径10m、短径5m、深さ1m程のもので、周囲には泥がたまっており、草がはえている。他方は、長径6m、短径1.5m、深さ1m程で、今でも飲めそうな水がたまっている。

〔1-F 石組み〕パタハの北方40mの所に石組みが見られる。50cm程の石で組まれた4m四方の石組みである。また、そのすぐ北にも幅3mの石組みが見られるが、長さは確認できない。

〔1-G 石切り場〕この遺跡には2カ所の石切り場が見られる。その内の一つがこれで、第一の露岩の南東部に位置する。長さ20m、幅4m程でかなりの数の細長い石が見られる。

〔1-H 石で組まれたベンチ?〕1×0.8×0.15m程の石板の下に石が三個入ってベンチのような形をなしている。これが古い物かどうかわからないが、人為的なことは確かである（図1-H参照）。

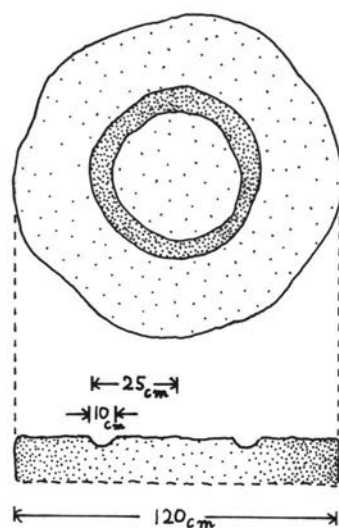
Fig I-H



〔2-A 仏塔跡〕第二の露岩に位置するもので、8×9m（角が崩壊している為正確ではない）の石積みで岩盤を平らにし、基盤を成している。この基盤の上に直径4.8mの石積みがあり、仏塔の基部を成している。中心は他の遺跡同様盗掘されている。北西面にステップ石らしきものが3本見られる。南東面には基盤の石積みが露呈しており階段のようにも見られる。他の面は、確認できない。

〔2-a 仏塔跡の石笠〕仏塔跡の西に直径1.2mの円形の石板が見られる。おそらく仏塔上部の傘と思われる。中心から半径25cmのところ幅10cm深さ2cmの溝が同心円状に彫られているが、裏面は確認できなかった（図2-a）。

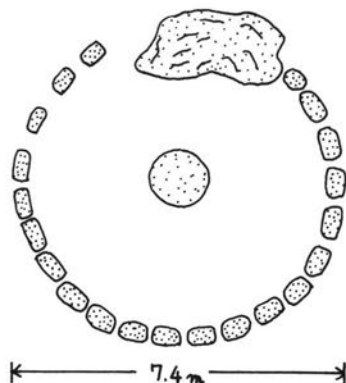
Fig2-a



〔2-B 建造物跡〕50cm程の角ばった石によって組まれた5m四方の石組みで、内側にも数個の石が見られる、何であるかは不明。

〔2-C 円形石積み〕第一と第二の露岩の中央、少し低くなった土の部分の上に位置する。1m程の石で図2-Cのように美しく並べられている。

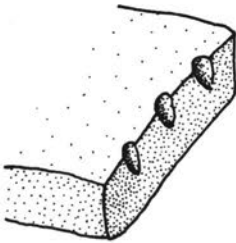
Fig2-C



北側に一個不自然なくらい大きい石がおかれている。中心に盗掘の跡が見られ、30cm程掘ると岩にあたる。これは岩盤ではなく、石の蓋のように見えるが定かではない。

〔3-A 石切り場〕第三の露岩は、やや小さく、石切り場となっている。ここは岩がはがれやすく、自然に2×1×0.3m程の石材ができており、それを切って細工したらしい(写真3-A参照)。タガネを打ち込んだ跡のある岩も見られる(図3

Fig.3-A



- A参照)。

〔4-A パタハ〕第四の露岩の西に位置する長径2.5m、短径2mのボール状のパタハである。深さは1m程であるが、水はたまっていない。



写真3-A

〔4-B 石組〕3×1.2m程の石組みである。それぞれの石は密には置かれていない。建造物跡のようにも思えるが定かではない。

<43> ウェヘラゴダッラの寺院遺跡

VEHERAGODALLA (ruins of temples)

Location;

This site is located about 2 km. the northeast from the polcolony in a straight line. The polcolony is situated about 3 km. the northeast from Aralaganwila wewa.

Summary;

This ruins are situated in the plains which extend to the west bank of the Maduru River. Here are the remains of a stone wall (A), four rectangular structure which have stone pillars (B, C, fig.C, photo.C, D, photo.D, N), two scattered brickbats (E, F), rectangular arranged stone (G), five indistinct structures (H, I, J, K, L) and a dagoba (M).

【調査】9月6日

【スタッフ】八木、角谷、東、執行、岡村、M、H、スィリル、S、M、ペーマラトナ、マドゥルオヤ部落住民数名

【位置】マドゥルオヤ部落（ボルコロニー）から北東2キロ地点のマドゥル川西岸に隣接。川をはさんでバンメヴィレ・ワワの対岸に当たる。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】ボルコロニーの部落からチガヤの草原を北東方向に進む。時に牛車のわだちが見られるが、ほぼ道はなく、草原を直進するしかない。マドゥル川から100mと離れていないので川沿いにもアプローチできる。

【全体的概要】マドゥル川西岸に広がる草原の中に広く分布する遺跡である。付近の他の遺跡と異なり、平地に建てられた寺院であるため、大部分は地下に埋れていることが考えられる。現在明確に地表に現われているのは、仏塔のほか、4ヶ所

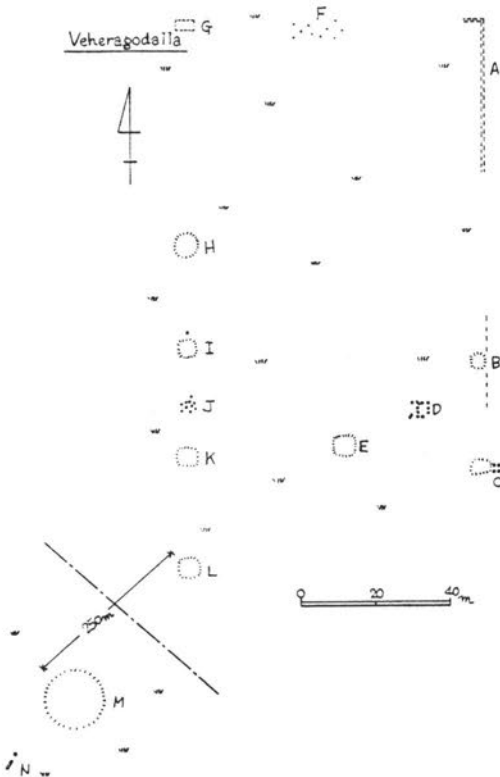
の石柱群の立つ建造物、および外壁を成していたと思われる石垣の跡などであるが、それ以外にも数ヶ所、周囲より土地が隆起して建造物の埋没を思わせる場所や、角石、レンガ片の散乱する場所などがある。なお、仏塔と他の建造物群の残る地域とが、やや離れすぎており、両者が同一の遺跡に属するとすれば、400m四方にも及ぶ巨大な寺院境内が想定され、この広大な地域にさらに多くの建造物が存在したことが考えられる。しかし、一面の草原に被われて全体を調べ尽くすのは容易ではない。

【各部分の状況】

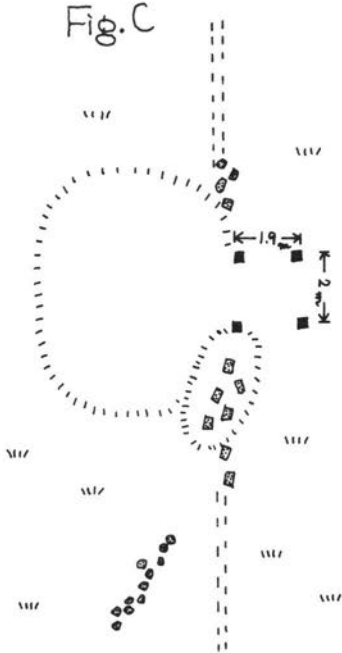
〔A - 外壁跡〕外側（川岸側）より土地が約50cmほど盛り上がり、そこを区画するかのように所々に石組みの跡が見られる。しかし多くは角石の散乱のみで、明瞭な石垣の形状は確認できない。土手状の盛り上がりは長く南北に続いているが、東西方向に向かう区画点については確認できなかった。往時、四辺形につらなって境内を区画していたものかどうか不明である。

〔B - 建造物跡？ および外壁の連らなり〕5m四方ほどの方形の土地の隆起がみられ、何らかの建造物跡であることが想定できるが、周囲の角石の散乱以外に格別の痕跡もなく、詳細は不明である。また、角石の散乱はA地点につらなってそのまま南北に続いており、この建造物が外壁と接続して何らかの役割を果たしていたことが考えられる。

〔C - 石柱の立つ建造物跡〕4本の石柱が等間隔で正方形（2m×2m）を成して立っている。それ以外に同地点には石柱は見られないが、西に接して土地の盛り上がりがあり、また外壁状の角石の散乱地点にも接しているため、前方後方形の敷地の凸部、あるいは外壁中の門の跡であることが考えられる。後方（西側）の盛り土は5m四方以上の広さを持ち、東側の辺に石の散乱が見られるが、それ以外は全く不明瞭である。また、石柱自



体は現地表より1 mの高さが露出し、下部は埋れているため本来の高さ、および礎石の存否などは不明(図Cおよび写真C参照)。



写真C

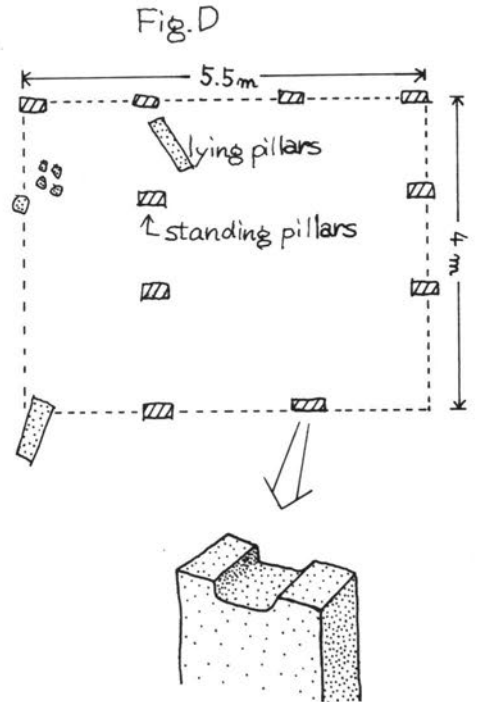
〔D - 石柱の立つ建造物跡〕ほぼ東西南北に平方な配列で、5.50 m × 4 mの敷地内に9本の石柱が立ち、2本が倒れている。本来は4本 × 4本の配列で16本の石柱が立っていたものと考えられ、地下にその他の遺物が埋れていることが想定される。形状からして、おそらく講堂の跡である可能性が高い。石柱の規模はまちまちだが、太いものは40 × 20 cm、小さなものでも25 × 25 cmほ

どの切断面をもち、必ずしも均整のとれた形状を成してはいない。しかし上端部にはいずれもハリ置き用の凹状の彫り込みが見られ、天井を支えていた跡が明らかである。現地表より120 cmほどが露出し、下部は土に埋れているため本来の高さは不明(図Dおよび写真D参照)。

〔E - 盛り土とレンガ片の散乱〕D地点の石柱群の南西(215°)方向約20 mの地点に位置。不明瞭ながら建造物の遺跡らしき6 m四方ほどの土盛りが見られ、堆積土に混じって若干のレンガ片



写真D



が散見できる。他に建造物の痕跡を示すものはない。土地の隆起は周囲の平地より50 cmから1 mというところ。

〔F - ヤブの中のレンガの散乱〕チガヤの草原の中で部分的に広がる広葉低木のヤブに覆われ、地面に多くのレンガ片が散乱している。この地点に何らかの建造物が存在したかどうか定かではないが、場所的にAとG（後述）との中間地点に当たるため発掘の必要はありそうだ。

〔G - 四辺形の角石の配列〕南北2.5 m×東西5 mの区画に角石が配列よく並べられている。状況から後世の人の手になる疑いが濃い、場所的にはH～L（後述）まで続く建造物群の線上にあり、何らかの遺跡が存在した地点を示す可能性がある。

〔H - 円状の盛り土〕G地点の南方60 mの地点に直径5 mほどの円形状の土盛りが見られる。その南東側に角石が若干散乱しており、遺跡を示す可能性があるため発掘の必要が認められる。

〔I - 石柱の立つ盛り土〕Hの南方約27 m地点。約5 m径の円状盛り土の上に石柱が1本立っているのみ。他は倒れて埋れたのか明らかでないが、何らかの遺跡地点を示すことは確かである。

〔J - レンガ片の散乱〕I地点の南15 m地点にレンガ片が集中的に散乱している。土盛りは見られず、他に遺跡を示すものもないため全く不明。

〔石柱群を持つ盛り土〕なだらかで規模不明の盛

り土の上に石柱が1本立ち、4本が倒れている。他には何も確認できない。

〔L - 盛り土〕直径6 mほどの盛り土（形状不明瞭）の上に草木がはびこっているだけの地点。遺跡の可能性はあるが定かではない。

〔M - 仏塔〕他の遺跡地点より250 mほど南西に離れている。直径15 mほどのスソを持つ小高い丘となって外形は崩壊し、土砂の上に草が茂っている。頂上部は周囲の平地より4 mほどの高さで、中央に盗掘の跡があり、5 mほど下に掘つてある。上部からのぞくと、内壁はレンガ組みが明瞭に残っており、その構造がよく理解できる。

〔N - 石柱の立つ建造物跡〕Mの仏塔の麓から南西へ15 mの地点。平坦な草原に石柱が1本立ち、1本が倒れている。それ以外に建造物の痕跡は見られない。

【付記】マドゥル川とその西の支流クダ川にはさまれた広い平野の中に位置し、おそらく、往時は豊かな農村（水田）地帯に抱かれて寺院が存在したであろうと思われる。断定はできないが、各遺跡の分布から400 m四方ほどの境内が想定でき、当隊のデータ以外にも多くの建造物跡が発見される可能性が高い。同所の平野の各所に遺跡を思わせる土盛りが点在するが、堆積土に被われて不明なため、大がかりな発掘調査が望まれる。

<44> スィリパーレナの寺院遺跡

SIRIPALANA (restored temple)

Location;

This site is located about 500 m. the west from the Aralaganwila Tank.

Summary;

This restored temple (photo.B, fig.) are situated in the cave which was dug on the rock hill.

Here are the remains of three slabs which may be flower altars (photo.A) and three Buddha images which were made of wood.

【調査】8月16日

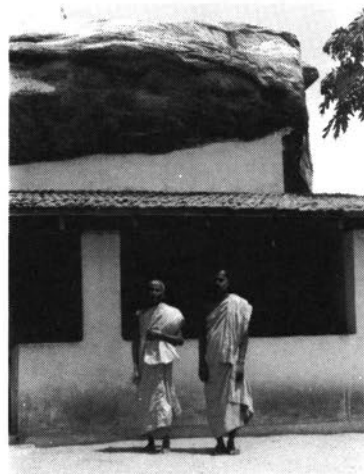
【スタッフ】東、岡村

【位置】アララガンウィラ貯水池の真西約500m地点の用水路沿いに位置。アララガンウィラ部落の南端部に当たる場所。「地図」には寺院印の記入はあるが名称は付されていない。

【全体的状況】地表に露出する大きな岩丘を穿って造られた洞穴内の寺である。旧来の寺院遺跡を復元して造られており、内部の構成は過去のものと同じかどうか不明だが、規模は同程度と見て良いだらう。間口10m、奥行き5mほどの小さな寺で、図のようにひさしの下の前室以外は全く岩室の中に入っている。内部は前室、本堂、および僧舎に分かれ、天井に当たる岩の内壁は白くしっくい塗られている。岩室以外に遺跡の名残りを示すものは少なく、庭に建造物の一部と思われる線模様入りの石板（供花台か）が3枚ほど積んである（写真A参照）のと、本堂に保管されている出土品らしき木製の仏像（立像、高さ20cmほどのもの）が3体見られる程度である。この寺はこの村に入植がはじまる以前から比丘ひとりが住んでいたとのことだが、9年ほど前に復元がなされ、現在に到っている。また、この寺の名称はもともとエラワクンブラにあった寺の名を、貯水池復元工事に伴う棄村と同時にこの寺に移したものとされる。現在3人の比丘が住み、寺を守っている（写真Bおよび図版参照）。



写真A



写真B

<45> スィルミニサーヤの寺院遺跡

SILUMINISAYA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 200 m. the

east from the east corner of the Aralaganwila Tank.

Summary;

This site is surrounded by bush. Here are the remains of a dagoba (A) with a stone umbrella (fig.A1, photo.A1) and two stone pillars (fig.A2, fig.A3), two structures (B, fig.B1) with stone pillars, a flight of steps (D) with a balustrade which has a simple relief (fig.D), a water tank (E, fig.E) which made of stone and three flower altars (F, G, figG, H).

【調査】8月16日

【スタッフ】岡村、東〔2名〕

【位置】アララガンウィラ貯水池の真東に位置。北西から南東に延びる同貯水池の土手の東端から東へ200mの地点。「地図」には遺跡印のみ記入がある。

【アプローチ】アララガンウィラ部落より灌漑事務所の前の道を通り、貯水池の北東部に位置する整備された土手に入る。土手は「地図」とはやや異なり、いく分曲がりながら貯水池の最東端部まで延びて、そこで切れている。土手の端から歩道に沿って東のブッシュ帯に入ると遺跡に出る。また、遺跡からさらに貯水池の東側を南下するジープ道があり、ピンブラッタワ部落へのバス道に通じている。

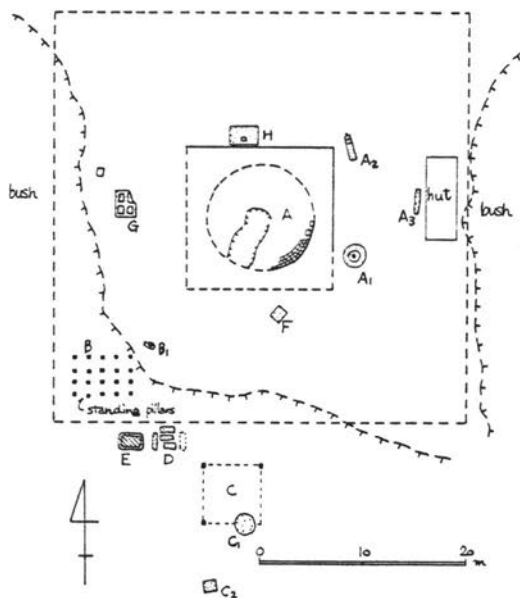
【全体的状況】仏塔跡を中心に2つの建造物跡が確認できる。仏塔の上部塔を構成する岩の笠と支柱および斜立柱(?)が残っており、刻みのある供花台やらんかんの破片なども見られる。境内は約40m四方ほどの土台の上に位置し、真中に仏塔、南西角に本殿あるいは講堂、南辺の土台下にもうひとつの建物という配置である。しかし境内の東および南側は濃いヤブに覆われているため調査が行き届かず、これ以外の遺跡があることが十

分考えられる。

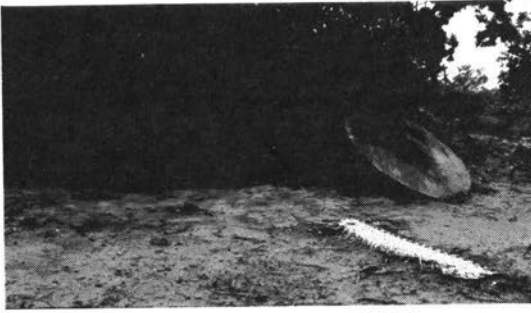
【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕一辺14mほどの四角形の土台の上に位置。土台の規模から類推して直径(基部)10~12mほどの仏塔であろうと思われる。現在東南部の基部付近以外は外面へのレンガ壁の露出は見られず、風化土の上にヤブがはびこっている。ただし内部は発掘の跡が見られ、南西角に向かっ

Siluminisaya



て相当に掘り込まれ、内壁のレンガ組みが明瞭にわかる。この仏塔の東側の斜面下に、上部塔を構成していたと見られる石の笠（写真および図A1）と2本の柱（図A2、A3）が転がっており、仏塔本来の姿が理解できる。



写真A1

Fig.A1

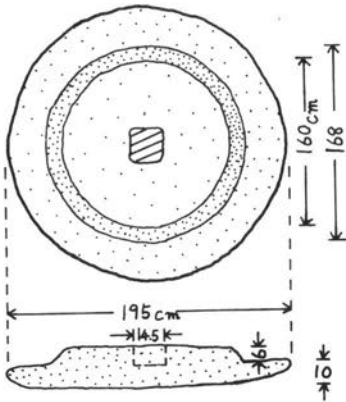


Fig.A2

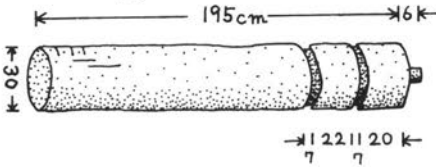
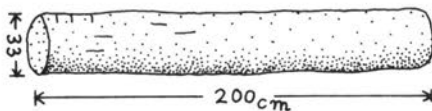
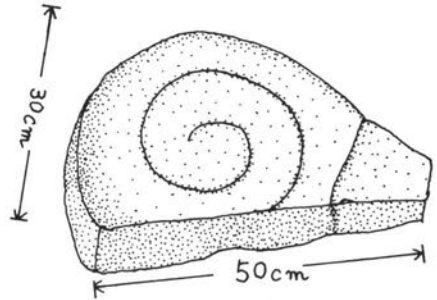


Fig.A3



〔B本堂あるいは講堂跡〕5.70 m × 4.40 mの四辺形敷地内に5本 × 4本の計20本の石柱が立ち並ぶ建造物跡である。石柱は円柱、角柱とりまぜた形で、中には石板状の巾の広いものもある。小さいもので断面の一边が2.5 cmほど。高さは1 m弱が地表より露出し、下部は深く埋れている。石柱以外には建造物跡を示すものはほとんどないが、付近に入口のらんかんと見られる渦巻模様入りの石板（図版B1）が1個転がっているのが見られた。

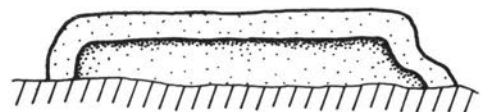
Fig B1



〔C建造物跡〕内院を区切ると思われる40 m四方の土台の南の外側に位置し、深いヤブに覆われている。石柱が2 - 3本と円盤状の石、それに四辺形の石板が近くに見られる以外は全く不明。石柱の間隔から推察して、最底5 m以上の敷地をもつ建造物があったと思われる。

〔D内院へ上る階段とらんかん〕内院南西のやや西よりの部分に位置し、ちょうどC建造物のすぐ西を通って内院に上るような格好になる。崩壊した石板のステップが4枚ほど見られ、その西側に隣接してらんかんの左片方だけが土に埋れて、わずかに上部だけをのぞかせており（図D）、そ

Fig.D

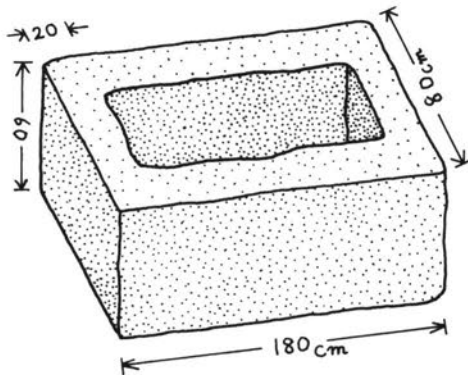


にはごく簡単な浮きぼりが見られる。右側のらんかんは土に埋れているのか、発見できなかった。〔E石の水漕〕清め用に用いられたものか、石で造られた大きな水漕が内院へ上る階段の左手（西）に見られる（図E）。外形 $1.8 \times 0.8 \times 0.6$ mの大きさで、石の厚さは 20 cm程。一つの岩から造られた大きな水漕である。

〔F供花台〕仏跡南側に位置する“MALASUNA”（供花台）。 1.55×1.65 mの平石板で彫刻はない。

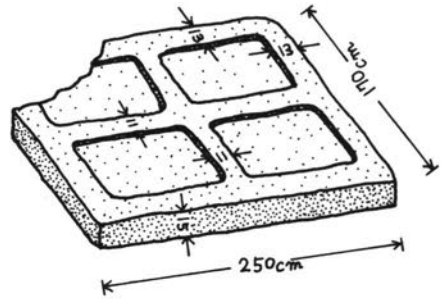
〔G供花台〕仏跡西側に位置するMALASUNA。

Fig. E



2.50×1.70 mの彫刻のある立派な台である（図G）。これがおそらく正面にあったものであろう。

Fig. G



〔H供花台〕仏跡北側に位置するMALASUNA。 2.70×1.10 mの平石板。現在この上に仏壇がもうけられ、座仏がすえられており、時おり参拝者のあることを示している。

【考察】仏塔中心の寺院で、仏塔の四方に供花台が備えられ、参拝者は四方からこの塔を拝したのらしい。上部塔の形態からも、この仏塔がきわめて初期のものに属することがわかる。すなわち仏塔崇拜時代のものか。上部塔のもうひとつの円柱（斜立柱）が仏像の代わりのシンボルであるという。

<46> ヴェヘラ・ガラの寺院遺跡

VEHERA-GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 3.5 km. the southwest of the Aralaganwila village, and about 3.5 km. the west of the north end of the Pimburettawa Tank. This site has the name and a mark of ruins on the "Map".

Summary;

This site is on the rock hill which extends over about 200 m. from north to south, about 100 m. from east to west. Southern place of the hill, here

are the remains of a dagoba (A, fig.A, photo. A1) dug into by thieves. Surrounding the dagoba, here are the remains of four stone flower alters (A2, photo.A2) and a stone umbrella (A1). A square platformed base (B) adjoined the dagoba (A).

At the northwest end of the base (B), here are the remains of a flight of stone steps. At the southwest of the rock hill, here are the remains of a flight of steps from the foot to near the dagoba (C, photo.C). On the center of the rock hill, here are the remains of a ancient image house (F) with two moon stones and pieces of stone balustrade, the remains of a structure (G), and water hole (E, photo.E). By the water hole (E), there are the remains of a stone plate and a corner stone. Four remains of small dagobas are also placed here (H, I, J, K). Close to the image house (F, fig.F) here are ancient Sinhalese letters cut on the rock (L, fig. L, M, fig.M). Also this site has a indistinct remains of structure (D). On a small rock hill which is the east of this rock hill, here are the remains of ancient structure (N) and two water holes.

【調査】8月17日

【スタッフ】八木、堀江、岡村、ラナシンハ(ガイド)、スイリル(ハンター)〔5名〕

【位置】アララガンウィラ部落の南西約3.5km地点。ピンブラッタワ貯水池の北端からは、ほぼ真西に同じく3.5kmほど。「地図」に2個の仏跡印と、“VEHERAGALA”の地名記入がある。

【アプローチ】アララガンウィラから南下しピン

ブラッタワ貯水池の西岸に続く道を行く。道は途中で同貯水池の北岸土手に出る道と分かれ、さらに南下する。やがて本道より分岐して「地図」上のウルポッタ部落(Ulpothtegama)へ入る道が現われ、この道を選ぶ。この道は「地図」には記入されていないがジープも通れる立派な道である。ウルポッタ部落の、「地図」に“Spring”と記された地点より西に入る歩道があり、そこを

西進。数軒の民家とヤブ状の原野を過ぎ、やがてヘナネガラ方向へ続くジープ道を横切ると、すぐ西側（正面）に大きな岩丘地帯が現われる。数ヶ所に分かれて広がる岩丘の中で、最高々度を持つ岩の上に遺跡が分布している。アララガンウィラ部落から徒歩約1時間の行程。

【全体的状況】南北200m、東西100mほどの岩丘上に、仏塔をはじめ、本殿、およびその他1~2の建造物、最低3ヶ所以上の小仏塔などの痕跡が見出せる。さらに岩の東側より仏塔方向に上る斜面には露岩に階段が刻まれ、また岩丘中央部には岩の窪みを利用した池（パタハ）があり、その近くの2ヶ所の地点に古文字が刻まれている。

仏塔の周囲には供花台の石板、仏塔の上部塔を構成していた石笠などが残り、また本殿近くにも半月形踏石（ムーンストーン、刻み模様なし）および建造物入口の欄干の破片（単純な模様入り）などが散在している。

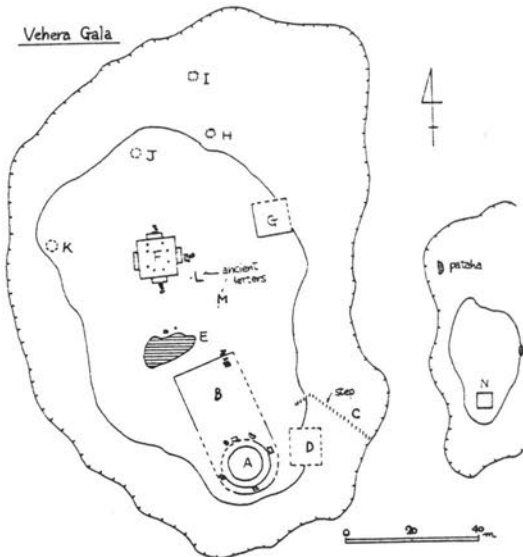
ところで、「地図」上には同地点に2個の遺跡印が記入されているが、この遺跡の東50m地点の岩盤（ヤブで隔てられている）に1ヶ所、四辺形の建造物跡とパタハ等が見られ、これが他の1つを表すのではないか。両者とも同一遺跡に属す

と思われるので、ここでは全てをひとつの遺跡としてあつかう。

【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕半径10m程の円形土台に20×33mほどの方形土台が接続した前方後円状の広いテラスらしきものが確認でき、そのテラスの南側の円形土台上に位置する。仏塔は基部より約1.5mほどの高さまでが残り、上部は破損している。発掘の跡が見られ、レンガを再度組み直した跡もある（写真A1参照）。この部分で半径約4.20mである。この仏塔の四方には供花台の石板があり（写真A2参照）、南側のそれはやや小さいが、残りの3枚はほぼ同じ大きさ（85×85×20cm）である（彫刻模様なし）。また仏塔の上部塔の石笠の破片が2個確認でき、二重以上の多重塔を成していたものらしい（図A参照）。

〔B 仏塔土台と接続した方形土台〕前方後円状土

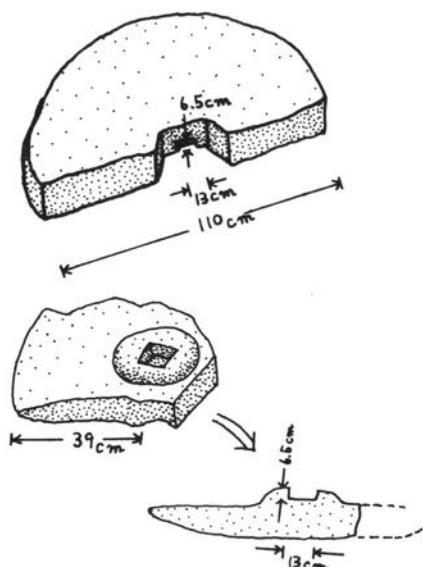


写真A1



写真A2

Fig. A



台の前方部分に当たる場所であるが、後円部分との接続は明瞭でない。この土台（テラス）上に何らかの建造物があったものか、あるいは内院のような区画の敷地となっていたものかは明らかでない。現在、土砂が堆積し、草ヤブと化している。土台を構成する石積みは2～3段構えになっていたようであるが、ほとんど崩壊していて定かではない。北西面の端付近に階段の跡と思われる石板（ $150 \times 50 \times 30 \text{ cm}$ ）が8枚ほど見られ、ここがこの土台上への上り口となっていたようである。

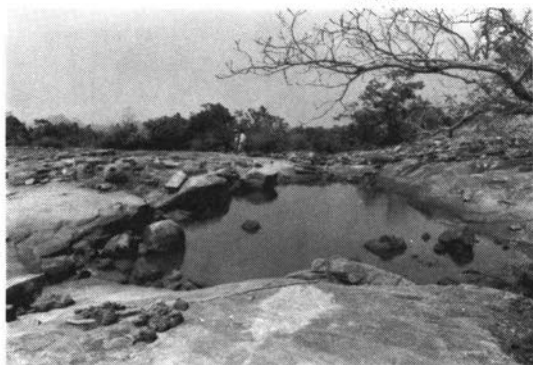
〔C岩盤に刻まれた階段〕岩丘の東側の麓から一旦西北に向かって上り、途中で曲って仏塔方向に伸びている。39段ほど確認できるが上部は風化して消えている。一段の大きさは幅 110 cm 、奥行き 45 cm 、高さ 10 cm ほどで、ほぼ統一されている。この階段を下りた東側の岩盤にも建造物跡（N）があり、傾斜も急なため（約 15° ）に刻まれたものであろう。ただし、ここが寺院の正面であったかどうかは不明（写真C参照）。

〔D建造物跡？〕 10 m 四方ほどの石積みの跡らしきものが認められるが、風化が激しく、何であるかは不明。

〔E池〕ほぼ岩丘の中央部に位置し、岩の窪みに若干手を加えてできたものようである。南北（短径）約 9 m 、東西（長径）約 18 m 、深さ 1 m 以上の比較的大きなものである（写真E参照）。北



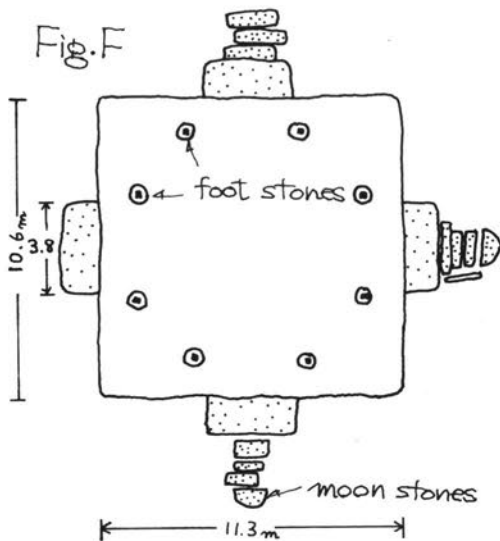
写真C



写真E

側の岸には供花台のような石板が一枚と柱礎石が1個見られるが、建造物が近くにあったものかどうかは不明。

〔F本殿〕約11m四方の正方形土台の少なくとも3辺以上にそれぞれ入口があったものらしく、東側と南側の入口付近に各1個、計2個のムーンストーン(半月形踏石)が見られる。東面にはムーンストーンと共に階段の欄干の破片も残っている。共に彫刻もなく、きわめて単純なものである。西側を除いて3辺とも階段(入口)跡が明瞭であるが、西側だけは土砂に埋れて不明。ここにも入口があったかも知れない。基部は2段構え以上の段状積みになっているとも考えられるが堆積土に覆われて不明。柱礎石が各入口の左右に1個ずつ並び、八角形の建物があったことがうかがわれる(図F参照)。



〔G建造物跡〕本殿より東北東に30mの地点に建造物の跡が見られる。規模は12m四方である。基部となる岩盤の東側が傾斜しているため、1m程の高さの石積みが見られるが、一部は崩壊している。他の部分との対比から構堂とも思われるが、石柱等は見あたらない。

〔H小仏塔跡?〕3m四方以内の小さな区域に、

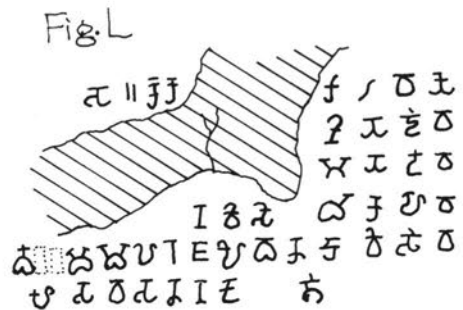
円状にレンガ片が敷き積まり、何らかの建造物跡を示している。小仏塔跡であろうか。

〔I小仏塔跡?〕Hと同様であるが、四辺形状の敷地跡が見られる。

〔J・K小仏塔跡〕Hと全く同形状で、建造物自体は跡形もないが、敷地にレンガ片がぎっしり敷き積まっている。一説では、かつてこの遺跡には計6個の小仏塔跡が見られたというが(ガイドの小学校長の話)、現在はH~K以外には確認できない。

〔L・M岩に彫られた古文字〕露岩のはぼ中央、Fの建造物跡の近くに彫られている。L、Mの二カ所に見られるが、一部岩がはがれて判読できない。(図L・M参照)

〔N建造物跡〕多くの遺跡のある露岩の東50m程の所に、ヤブをへだてて別の岩盤があり、その上に5m四方の敷地形状とパタハを2個確認できた。



3. ピンブラッタワ部落南方の遺跡

Ruins, distributing in South area of Pimburettawa

【遺跡群索引】

<47>ゴラカカンダの岩窟

<48>カンデガマの大寺院遺跡

<49>クダガラの寺院遺跡

<50>ダマネウエラ部落の寺院遺跡

【地域および遺跡群の概要】

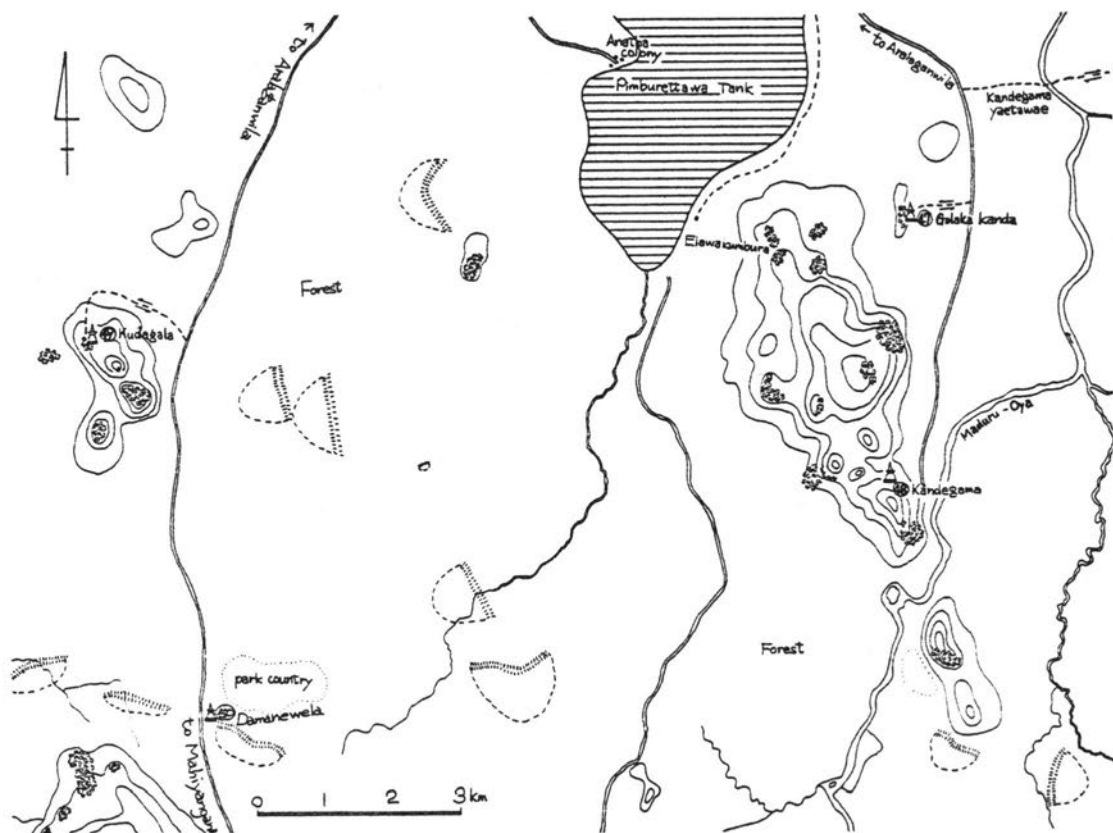
ピンブラッタワ部落の南方には、1960年代の半ばに古代のものを復元したピンブラッタワ貯水池が南北に長く広がり、それを挟む形で2本の道路が南下している。まず東側の道路は、カンデガマの山塊とマドゥル川の間を通り、途中で川を越えてオムナ・ガラ（部落がある）方面に続いている。オムナ・ガラの付近は材木の伐採地になっているらしく、トラックが連日、材木を運びだすのが見られた。ゴラカ・カンダの岩窟とカンデガマの大寺院跡はこの道路沿いにあるが、その周囲は厚い密林で被われ、カンデガマ・ヤーエタワエ部落付近を除けば、カンデガマの復元寺院の近くが一部開墾されているにすぎない。これはピンブラッタワの住民が、同寺院住職の食糧確保のため、わざわざ農作に訪れて畑としているものである。

一方、貯水池の西側を南下する道は、クダガラの東麓を経てダマネウエラ部落を通り、さらに第1次隊調査のヘナネガラ経由でダンバナ（ヴェダ族部落）、マヒヤングナへと通じている。この道路沿いは、クダガラ山麓など所々で焼畑農耕が見られ、数年ごとに場所を移動していく開拓農家が点在する。ここも周囲はほとんど密林で被われ、唯一の定住村落ダマネウエラに約300人が住んでいるのみである。

なお、10年ほど前まではこの地方の一大中心地であったエラワクンプラの部落は、貯水池の復元で耕地を失い、北のピンブラッタワ部落に人口のほとんどが移ったため、現在は2～3戸の開拓農家があるだけである。また貯水池東岸のアナサ・コロニーでは5～6家族が貯水池でコイ漁を行ない、町に出荷している。貯水池の南岸一帯は水辺のジャングル（貯水池の水は北方にのみ供給される）であるため、象や鹿、野生の水牛などが多く、また野生のトマトやニガウリ（いずれも指先大）、菜っ葉など自然の恵みも豊かである。

【当隊の活動の概要】

ジャングルも奥地になり、遺跡数も少ないこの地域では、野営を含む数日間の探査活動が主となった。日帰り調査したのは、コロンボから新聞記者が同行したカンデガマ寺院跡だけで、この時はトラックに便乗し、ほぼ全員で一気に調査した（スィルミナ紙で報道）。ゴラカ・カンダの調査と、エラワクンプラ部落、アナサ・コロニーなどの貯水池南岸の探査行は、それぞれ1～2人の隊員がガイドをつけて個別に行ない、遺跡以外の地域情報も多く入手することができた。一方、貯水池の西側を南下する道路沿いは、トラクターをチャーターし、クダガラ山中に1人、ダマネウエラ方面に2人を投入した。クダガラでは、ガイドのほか開拓農民の協力で岩窟の壁画など貴重な遺跡を調査できたほか、ダマネウエラ調査班は隊員2人のみでヘナネガラから第1次隊の基地だったヘンベラワ部落までジャングルを踏破し、第1次、第2次両隊の調査区域を接続させることに成功した。



< 47 > ゴラカカンドの岩窟

GOLAKAKANDA (cave in the rock)

Location;

This site is located about 3.2 km. to the north from the Kandegama (See No. 48) in a straight line.

Summary;

This ruins are situated on the mountain. On the halfway up the hill, here are the remains of a cave (A, photo.A) which constructed with four large rocks. At the both wings in the cave, two small rocks are placed one by one. Under the cave (A) here are another remains of a cave (B, photo.B) which has a cut gutter on the ceiling (photo.b).

【調査】9月18日

【スタッフ】東、スイリル、ダルマダーサ

【位置】カンデガマの寺院遺跡の北約3.2km。ピンブラッタワ貯水池の東。アララガンウィラ部落よりカンデガマに通ずる道の西方約500mの場所に位置する山(ゴラカカンダ)の、東斜面中腹にある。

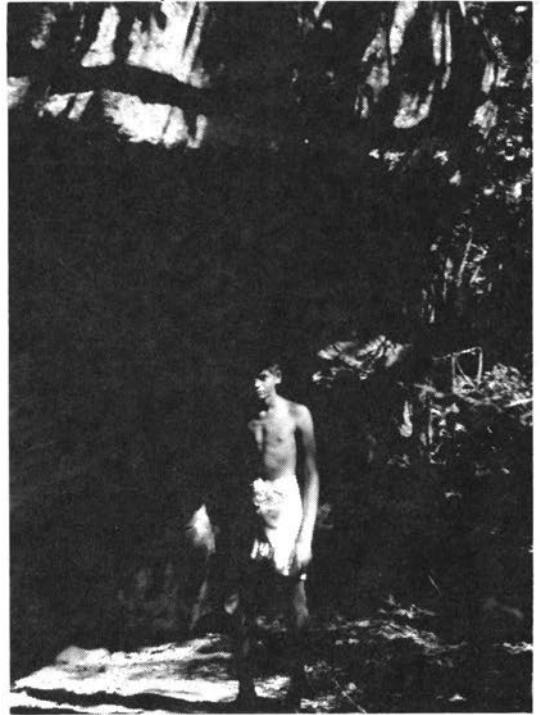
【アプローチ】アララガンウィラ部落よりピンブラッタワ貯水池に向かう水路沿いの道を進む。

2.5km程で水路沿いの道をそれ、カンデガマに向かう道に入る。途中クダオヤ(川)を渡り、南(カンデガマ方向)の道を約6.5km進むと右手(西)に低い山が見える。それがゴラカカンダ山である。カルカカンダを195°の方向に見る地点でジープ路を離れ、踏み跡道を240°の方向に向かう。300m程で山麓に着く。山麓には巨大な岩が多くあり、そこを越えて200m程山に登った地点に岩窟がある。山頂はそこから30m程である。

【全体的状況】ゴラカカンダの山頂(約130m)に近い中腹に僧舎であったと思われる岩窟が2つある。この山には岩窟以外に遺跡らしきものは何もなく、レンガ片さえ見出せない。

【各部分の状況】

〔A岩窟〕頂上に近い岩窟。4つの巨岩の組み合わせを主として出来ており、両翼に小さな岩が置かれている。屋根に当たる部分は2つの巨岩から成り、その一方(入口から向かって右側)の入口天井には岩どい(水切りの雨どい)が刻まれている。他方にはその痕跡はない。規模は間口1.2m、高さ2.70m、奥行き3.60m程(写真A参照)。
〔B岩窟〕Aの岩窟より少し山を下った所にある。一つの巨岩を削って作ってあり、その岩窟の入口天井に岩どいが刻まれている(写真b参照)。規模は間口8.80m、高さ2.60m、奥行き3.50m程。奥の部分には巨岩をささえるために小さな岩が多数組み込まれている(写真B参照)。



写真A



写真b



写真B

<48> カンデガマの大寺院遺跡

KANDEGAMA (ruins of temples)

Location;

This site is located about 12 km. the south by east from the Pimburettawa in a straight line.

Summary;

This ruins are distributed on the two rock hills. On the northern rock hill, here are a reconstructed temple (I-A, photo. I-A) and a reconstructed monastery (I-C, photo. I-C). And also here are the remains of six caves (I-B, I-E, photo. I-E, I-F, I-G, I-H, I-I) and ancient letters (I-D, photo. I-D, fig. I-D) which are carved on the rock.

On the southern rock hill, here are the remains of the Garnesh's room (II-A), recumbent Buddha's (II-B, photo II-B1-B3, fig. II-B), seated Buddha's room (II-C, photo. II-C) and a corner stone (II-D, fig. II-D).

At the foot of the southern rock hill, here are the remains of a dagoba (III-A, fig. III-A), eight corner stones (III-B), a Image House (III-C, photo. III-C1, C2, fig. III-C), two structures (III-D, fig. III-D, III-H, photo. III-H1, H2, fig. III-H), two groups of stone pillars (III-E, fig. III-E, III-F, photo. III-F), and a small dagoba (III-G).

【調査】9月3日

【スタッフ】八木、角谷、執行、堀江、岡村、スィリル(ハンター)、ラナシンハー(ピンブラッタワ小学校長)、ウィーラワルダナ(スィルミナ紙記者)〔8名〕

【位置】ピンブラッタワ村の南南東約12kmの地点。ピンブラッタワ貯水池の南東岸から南へ5、6kmも伸びる大きな連山(最高点325m)の南

端部付近に位置。南部の2つの岩峰にまたがって数ヶ所の遺跡が分布する。「地図」には地名記入はあるが、遺跡印、寺院印ともに記入なし。

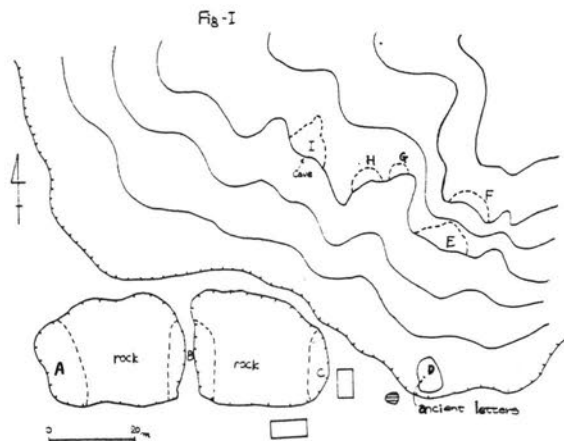
【アプローチ】アララガンウィラ村よりピンブラッタワ貯水池の東を通過して南下するジープ道(材木搬出用のトラック道)を行く。「地図」には貯水池岸沿いに山塊の西麓を通過して南に続く道が記されているが、この道ではアプローチできない。

途中で貯水池の土手付近より分岐して連山の東麓を南下する道を選ぶ。この道は連山の南端部、すなわち遺跡地点付近で左（東）に折れてマドゥル・オヤ（川）まで続いている。遺跡は、この道のカーブ地点より右（西）に入る分岐道の奥（岩峰直下、ジープ道より300m程の距離）にある。ここは古代岩窟寺を復元した新寺院（遺跡地点Ⅰ）で、ここより更に南奥部のもうひとつの岩峰中腹に涅槃仏のある岩窟がある。この地点へのアプローチは 일단ジープ道に戻り、大きく南に巻いて密林を行き、歩道ぞいに急斜を登る。ここが遺跡地点Ⅱで、新岩窟寺から徒歩約40分の行程である。遺跡地点Ⅲへは、ここを下って沢を越え、やや西にいったん回り込んで南南東に続く踏み跡道がある。

【全体の概要】大きな連山の最南部に属する2つの独立岩峰にまたがって多くの遺跡が分布する。踏査した範囲では、北側岩峰の中腹から麓にかけて無数に見られる岩窟群（一説では100を越えるといい、その最下麓の数ヶ所が復元寺院として現在用いられている＝遺跡地点Ⅰ）と、南側岩峰の中腹（頂上岩壁直下）にある涅槃仏等を有する岩窟（遺跡地点Ⅱ）およびその南麓の平地（密林）に広がる仏塔を中心とした寺院（遺跡地点Ⅲ）との3ヶ所に大別できる。このように広い範囲に亘って数ヶ所の遺跡が分布するため、それぞれの地点に対する調査も十分でなく、またこれ以外にもさらに多くの遺跡地点が発見される可能性が考えられるので、さらに詳しい調査が必要とされる地域である。

【遺跡地点Ⅰ】

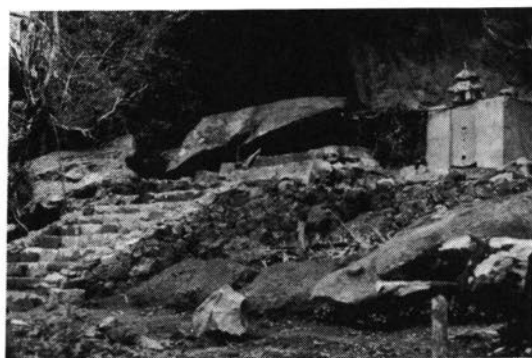
〔概要〕岩峰の中腹から西麓にかけて各所に多くの岩窟が見られる。いずれも間口天井のひさし状の部分に雨ドイが刻まれ、一部には雨ドイ沿いに古文字の文章が刻まれたものもある。最下麓のものは現在、岩寺として復元されており、本殿と僧



舎とが完成している。この比丘の話では、これらはすべてアヌラダプラ時代初期（紀元前）のもので、数百の比丘がこの山中の岩窟で修行していたという。現在ここに住んでいる比丘たちにも岩窟の正確な数はわからないらしく、100窟以上はあると信じられている。

【各部分の状況】

〔A復元された寺院の本殿〕山麓の独立した巨石の一部。ひさしまでの高さが10m、幅20mもある大きな岩室で、ここに仏壇が置かれ本殿となっている。現在石積みの床と参拝口の階段を工事中。天井には古代の人の手になる雨ドイがある（写真Ⅰ-A参照）。

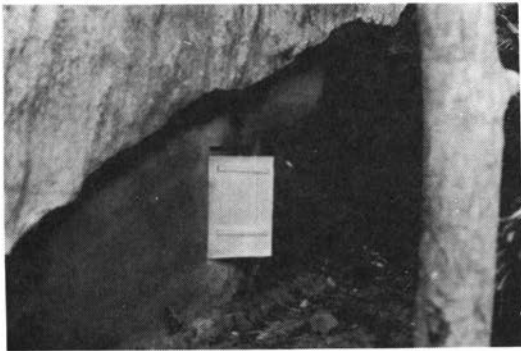


写真Ⅰ-A

〔B2つの岩の間の室〕ほぼ接するように隣接して立つ2つの岩の崖下に、双方に穿って室が出来ており、下を沢が流れている。ここにも天井の一

部（西側）に雨ドイが彫ってあり、過去に利用されたものようだ。現在沢の上をまたいで床を取り付けるべく、水路と高床の工事中である。

〔C復元された僧舎〕細長い吹きさらしの岩室だった遺跡の岩窟に、コンクリートで外壁を付け、完全な部屋としたもの。過去何らかの方法でこうした部屋がこの場所に作られていたものかどうかは不明。現在ここで3人の比丘が寝おきしている（写真I-C参照）。



写真I-C

〔D古文字の刻まれた岩〕現在の僧舎より20m程北の比較的小さな独立岩に文字が刻まれている。岩の表面の大きさは2.5×2m。平坦な岩の面に古文字が3行のみ確認できた。この古文字は考古学局の話では紀元後1世紀のものとのこと（図および写真I-D参照）。

〔E岩窟〕巨石が多く堆積する急斜面の上部に位置。このちょうど真上にあるF岩窟と上下2層の形状を呈している。間口幅15m、奥行き最高13m、間口高さ4m程の規模。天井に雨ドイの刻みあり（写真I-E参照）。

〔F岩窟〕E岩窟のすぐ真上にある穴。E岩窟の2階のような格好であるが穴自体は連結していない。入口はE岩窟よりやや奥（山側）にある。間口15m、奥行き5m、高さ6m。内壁に漆喰の塗り跡がみられ、天井には雨ドイが施されている。

〔G岩窟〕E岩窟のやや左上方向に位置。左隣のH窟と真横に並んでいるが床部はH岩窟よりやや



写真I-D

Fig I-D

Y 0 7 W R H N Y
 { 0 0 E ↓ 5 2 U 4 X 4 Y U W
 U 2 3 4



写真I-E

高い。間口6m、奥行き3m、高さ5m。内壁に漆喰が塗られ奥壁中央の一部が四角くはげ落ちている。これは過去、ここに壁画があつて、それが持ち去られたためと言われているが不明。天井には雨ドイが施されている。

〔H岩窟〕G岩窟の左に隣接。この前庭とG岩窟の前庭とは、そこに登る小さな階段（岩盤に刻まれている）で結ばれている。E岩窟方面から道が続いていたと思われ、G岩窟に行くにはまずこのH岩窟の前を通らねばならない。規模は間口8m、奥行き5m、高さ4m。

〔I岩窟〕間口10m、奥行き最高15m、高さ

は間口で5 m、奥で1 m程の規模。間口天井に見られる雨ドイの掘り込みは深く、見事である。雨ドイにそって天井の内側に古文字のきざみがある。床から高く暗いため採集不可能であった。

【遺跡地点Ⅱ】

〔概要〕遺跡地点Ⅰから南約1 kmに位置。山頂から垂直に降りる岩壁の直下の岩窟を利用し、奥に涅槃仏が東向きに安置されている。この涅槃仏はポロナルーフ時代（8世紀～12世紀）のものと言われ、全長1 0.8 m、高さ2 mで比較的大きな規模のものである。涅槃仏の頭部、腹部は盗掘されており、ここに宝物等がつけられていたと言われる。また、足のつめ、ローマダート（ひたいの飾り）等も金で作られていたと言われている。現在、この盗掘跡の修善が途中まで行なわれ、中断している。涅槃仏はレンガでその素形を形作っており、その上に漆喰で上塗りがなされている。涅槃仏の前にはレンガ積みの壁が建っており、またちょうど顔の部分が見えるように窓が施されてある。このレンガの中には絵や装飾を施したものがあり、魚の絵のレンガ片を確認できた。レンガ壁の前は石積みになされ、その下に礎石を1つ確認

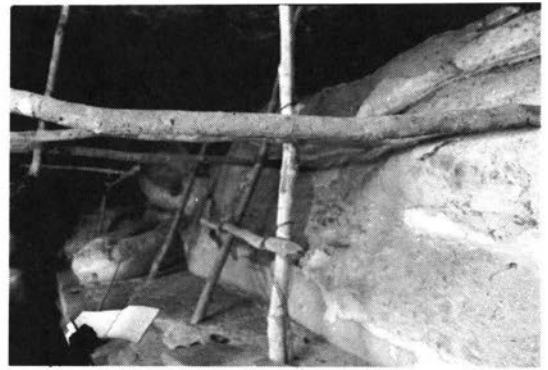
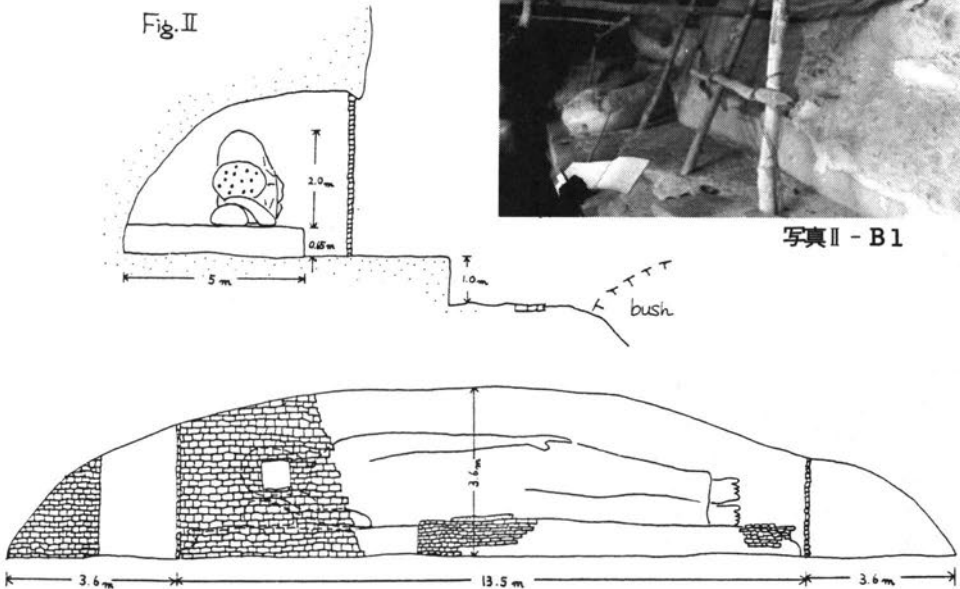
した。岩窟の全体の規模は幅2 0.3 m、高さ3.6 mで、3つの部分より構成されている。向かって左が小さく区切られた部屋となっており、ガネッシュが祭られ、中央部が涅槃仏、右も部屋となっており、座仏が祭られている。これらの部屋の仕切りはいずれもレンガ壁でできている。

【各部分の状況】

〔A ガネッシュ像の部屋〕一つの岩窟を3つに仕切ったうちの向かって左側の部屋で、ガネッシュ像が安置されている。レンガと漆喰で造られており、首の部分が落とされて無くなっている。部屋の大きさは間口3.6 m、奥行き4 m程の小さなもの。

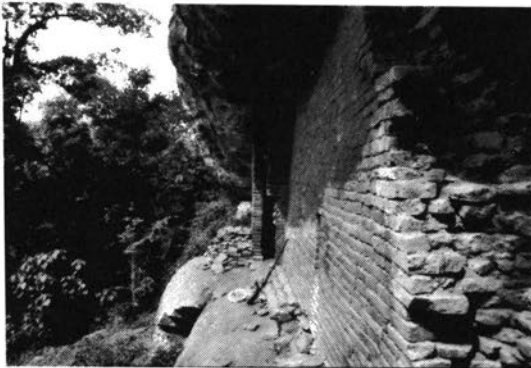
〔B 涅槃仏の部屋〕レンガ壁で3つに仕切ったうちの中央の部屋で、長さ1 3.5 m、高さ3.6 m、奥行き5.0 mの部屋の中に、全長1 0.8 m、高さ2.0 mの涅槃仏が東の方角に顔を向けながら安置されている。この涅槃仏は素形をレンガで構成しており、その表面に白い漆喰を塗って形が仕上げ

Fig. II

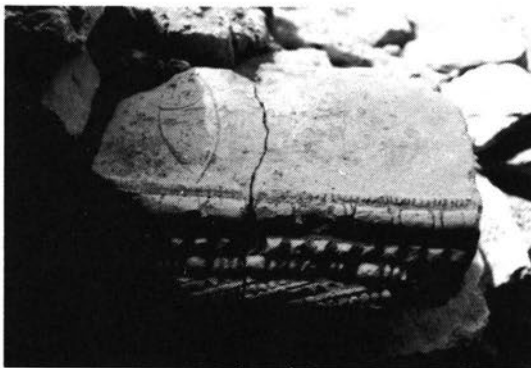
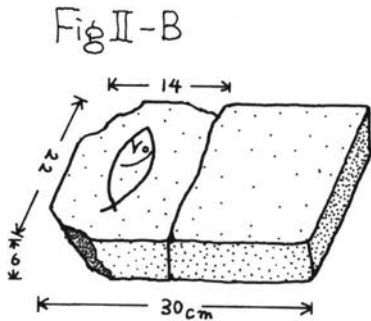


写真Ⅱ - B1

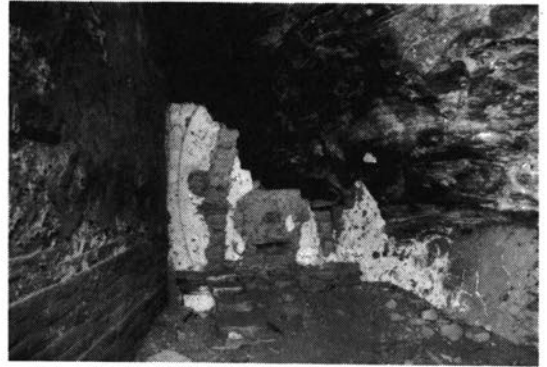
られている。この涅槃仏の頭部、腹部は盗掘されており、ここに宝物等が入っていたと言われる（写真Ⅱ-B1）。涅槃仏の前にはレンガ積みの壁が建っており、また丁度顔が拝める所に窓が設けられている（写真Ⅱ-B2参照）。このレンガ片の中には絵を彫ったレンガがあり、魚の絵が確認できた。またこのレンガの側面に装飾模様が施されているのも確認できた（図Ⅱ-Bおよび写真Ⅱ-B3参照）。



写真Ⅱ-B2



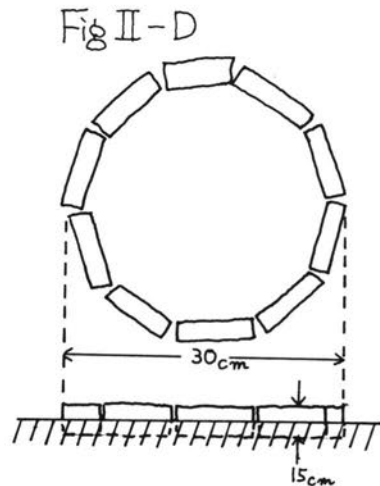
写真Ⅱ-B3



写真Ⅱ-C

〔C座仏の部屋〕3つに仕切ったうちの向かって右側の部屋で、座仏が安置されている。座仏はレンガを積み上げたその表面に浮き彫りを施してあるもので白い漆喰で仕上げている（写真Ⅱ-C参照）。

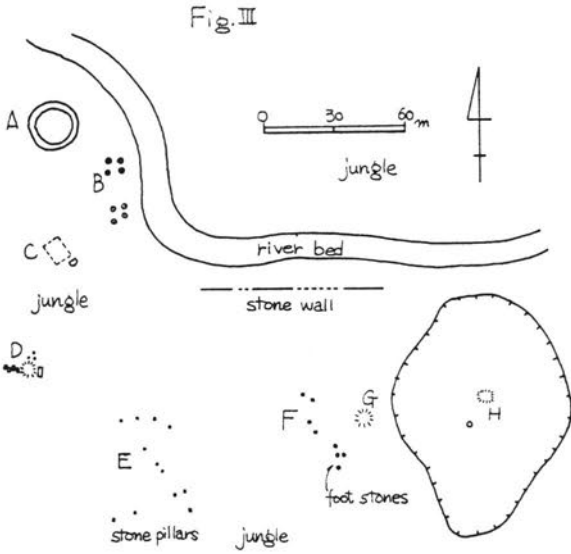
〔D岩窟前の礎石〕岩窟の手前通路より谷側に1 m程の高さの石垣があり、そこから谷側1.5 m程のところレンガで構成される礎石1つが確認できる。穴の径は30 cm、深さ15 cmである（図Ⅱ-D参照）。



【遺跡地点Ⅲ】

〔概要〕遺跡地点Ⅱより南南東の方角に、水の枯れた（乾季）沢があり、その南側の密林に最小限200 m四方以上もの広範囲に亘って寺院遺跡が確認できる。主な遺物は仏塔、小仏塔らしき小山、

石柱群、本殿跡、礎石等で、また100m四方の岩丘もあり、ここにも礎石、建物跡等が確認できる。沢のすぐ南岸には2m程の高さの石垣が南北に、およそ80mも延びているのが確認できる。これはおそらく境内を支える為か、水から守る為のものであろう。遺跡境内の規模が大きい為、あるいは濃密な密林中であるために、測量は困難である。しかし、更に日数を費して詳しく調査すれば新たな遺物が確認できる可能性がある。

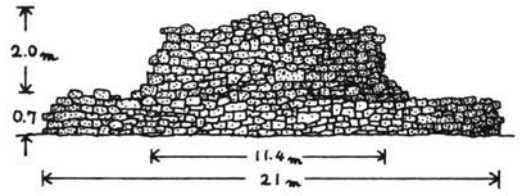


【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕涅槃仏（遺跡地点II）の南南東600m程のところであり、大きな規模のものである。仏塔を形づくるレンガ積は二段から成っており、下段は直径21m、上段のレンガ積みは11.4mもある。下段のレンガ積みの下部には岩板も使用されており、厚さ15cm、長さ68cm、奥行きは測ることができなかつた。仏塔はすでに盗掘されており、直径1.3m、深さ4m程の盗掘跡がある。ここに使われているレンガは平均29×26×8cmのもの（図III-A参照）。

〔B 2つの建造物跡の礎石〕A 仏塔の南東15mの地点に礎石が4個見られる。東に沢が流れ、傾

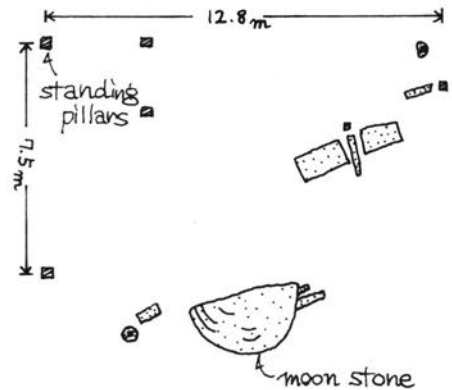
Fig. III-A



斜地となっているため礎石が移動した可能性があるが、約5m四方の建造物跡を示すものと思われる。また、この北にも同じような4個の礎石が確認でき、規模も同程度である。

〔C 本殿跡〕A 仏塔跡の南25mの地点。ムーンストーン（月石）をはじめ、石柱、礎石を確認できる。らんかん、守護神像は見られなかつた。本殿敷地の規模は石柱の位置から推定すると最低12.8×7.5cmの規模と思われる（図III-C参照）。

Fig. III-C

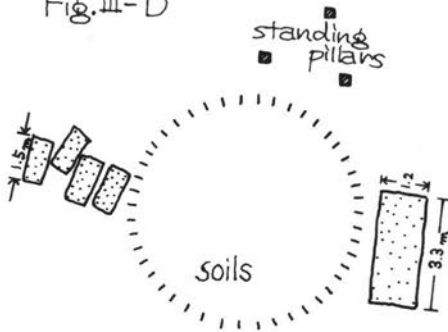


写真II-C1

ムーンストーンは他で見られぬほどに大きなもので、弦部が3.50m、弦の中心から半径が1.50mもある(写真III-C参照)。

〔D建造物(小仏塔?)跡〕はほぼ円形をした土盛りを中心に、西側に階段跡、東側に供花台、北側に石柱3本が確認できる。階段跡は4枚の石板から成り、1枚が0.4×1.5mの大きさ。供花台は大きく、1.2×3.3m。模様はない。石柱は高いもので1m程である。北側の石柱が別の独立した建造物跡のものであれば土盛りは小仏塔跡と断定できる。しかし、接続しているならば、何の建造物であるかは不明(図III-D参照)。

Fig. III-D



〔E石柱群〕A仏塔の南南東約70mの地点。約35m四方にわたり石柱30本以上が確認できる。保存状態は悪く、ほとんどが倒れている。敷地が広いので、密林の中であること、また、保存状態が悪いこと等により、敷地形状、使用目的等は不明。ただし、一辺が34°方向に延びる方形のようにも想定できる。かなりの大規模な講堂跡か、いくつかの建造物が重なりあったものとも想定せられるが断定できない(図III-E参照)。

〔F石柱群〕G小仏塔跡(?)の西に石柱が4本見られる。高さ2.5m程のかなり大きなもの(写真III-F参照)。配置がバラバラで、他の石柱が埋もれていることも考えられ敷地形状を想定できない。また、その石柱の南東に直径50cm程の石に、15cm角の穴が彫られた礎石が4個確認でき

た。

〔G小仏塔跡?〕F石柱群とH建造物跡の間にある。直径5m程で、レンガ片が多く散乱し、30cm程の盛り上りを示しており小仏塔跡ではないかと思われる。中心部には盗掘跡と思われる落ち込みが見られる。

Fig. III-E

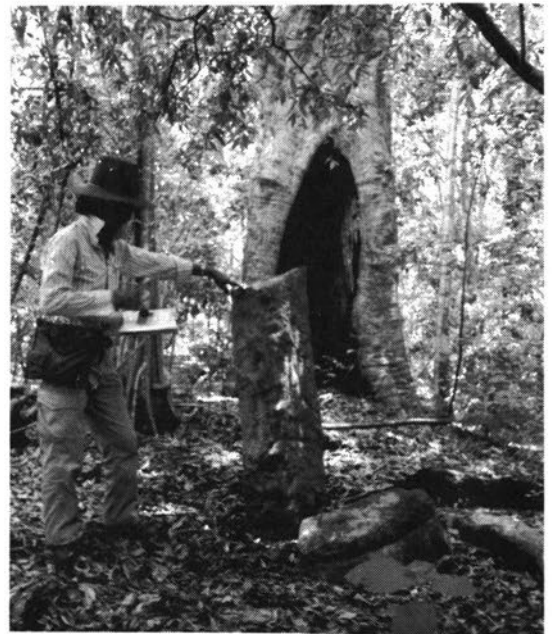
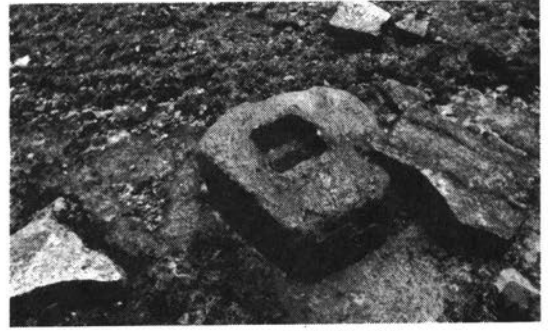
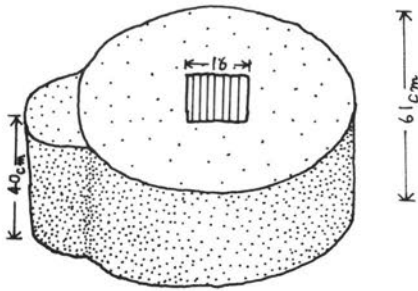


写真 III-F

〔H建造物跡〕小仏塔跡の東に低い露岩が広がっており、その中央部に建造物跡と思われる土盛り状のものが残っている。形状ははっきりとわからないが、その近くに2つの礎石を確認(写真Ⅲ-H1・H2および図Ⅲ-H参照)。また、この建造物跡から南西20mほどの場所に外径7.2cm、内径2.6cmの仏像芯立てと思われる穴がある。

Fig.Ⅲ-H



写真Ⅲ-H1



写真Ⅲ-H2

< 49 > クダガラの寺院遺跡

KUDA-GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 16 km. the south-west of the Aralaganwila village and has a mark of Gala on the "Map".

Summary;

Here is an ancient drip ledged cave (A, fig.A) at the foot of the rock hill. Here are several stone steps (D, E, photo.E) at the north of the cave (A). At the north of the entrance of the cave (A), here are the remains of a brick wall (2 m. inwidth) which supposed to cover almost all length of the entrance (F). The remains of fresco (N, photo.N) is also found in the cave.

The archaeology Department of Sri Lanka suggested that this fresco has been painted at 12th. century. Moreover here are the remains of a wooden statue (K, photo.K), a round throne stone (I, fig.I), some corner stones (H, fig.H, M, fig.M) and stone flower alter (G, fig.G) in the cave (A). Close to the cave (A) are the remains of an ancient structure (B, fig.B, C).

【調査】9月17日

【スタッフ】八木、スガタパーラ（ハンター）、サナビラトゥナ（ハンター）、キリバンダ（ガイド）、ジャヤワルデナ（ガイド）〔5名〕

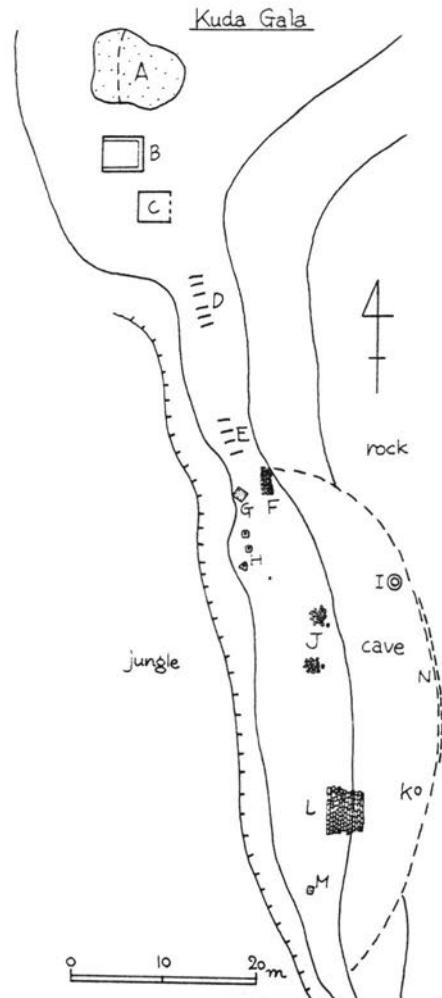
【位置】アララガンウィラ部落の南西16kmの地点。「地図」には“KUDAGALA-NORTH”と記された山の北西部に露岩の印だけがあり、遺跡印はない。

【アプローチ】アララガンウィラ部落からヘナネガラ貯水池、ヘンベラワ部落を経てマヒヤングナに続く通称「マヒヤングナ・パーレ」を南下する（パーレとは「道」の意。現在ヘナネガラ貯水池までジープ道がつけられ、将来はヘンベラワまでのジャングルを拓いてマヒヤングナと結ぶらしい）。途中、ヴェヘラガラ遺跡を右に過ぎ、カラボラカンダ山を右手に見ながら進むと、続いてクダガラ山が見えてくる。「地図」ではこの道はカラボラカンダの北を通るように記されているが、これは誤りで実際は東を通っている。

「地図」上の“KUDAGARA-NORTH”を西に回り込んだ地点にある分岐を東に折れて進むと、4軒ほどの開拓農家がある。道はさらにクダガラ山の北を大きく回りこみ、カラボラカンダ山の近くまで続く。2つの山の間を流れる沢に沿って進む、やがて南に折れるとクダガラの岩窟へ到る。

【全体的状況】山の中腹の露岩断崖にある自然窟に手を加えて作った岩室と、巨岩の下をくりぬい

た岩窟、それに緩斜面上の建造物跡からなる遺跡である。岩窟の壁には仏画が描かれ、木製の像なども見られる。



【各部分の状況】

〔A岩窟〕直径10 m程の巨岩の下方をくりぬいて空間が作られている。岩の上部切口には雨落ち（トイ）がぎざまれている。僧の住居跡であろうか（図A参照）。

〔B建造物跡〕4 m × 3 mの土台部分だけが残っており、レンガの上にシッキイを塗ってなめらかに作られている。風化状態から見ると、この遺跡中でも他の部分よりは新しいと思われる（図B参照）。

Fig. A

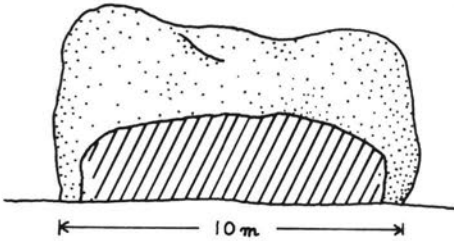
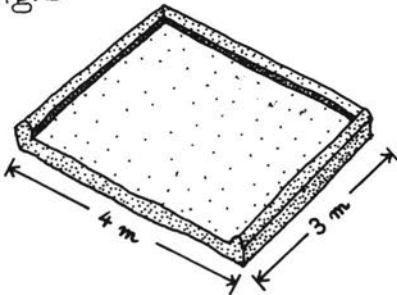


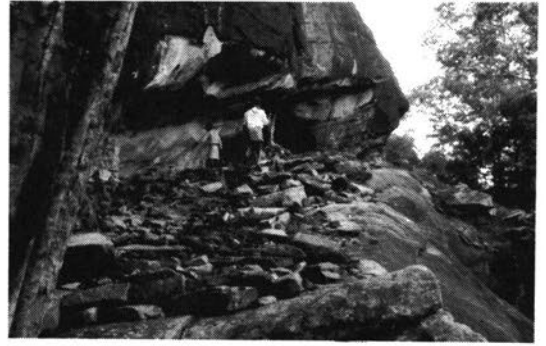
Fig. B



〔C建造物跡〕5 m四方の石組みによる建造物の基部と思われる。これもBと同じく比較的新しいものようだ。

〔D・E階段〕1.5 m程の石で作られた階段で、Dには6段、Eには4段確認できる（写真E参照）地形からして二つがつながっていたとは思えないが、他にもまだ階段があることは考えられる。

〔Fレンガ積み〕岩窟の入口の北に位置し、1.5 m程の高さに積み上げられて端は岩窟上部と接しているが、中央寄りは崩れている。現在、幅は2



写真E

m程で、あとは崩壊している。

〔G石板〕50 × 65 × 16 cmの石板の上部を凹状に削ってある。供花台かと思われるが定かではない（図G参照）。

〔H礎石2個〕四角形と三角形の礎石が見られる（図H参照）。四角形のは57 × 55 × 28 cmで中央に25 cm四方で深さ2 cmの彫り込み、そ

Fig. G

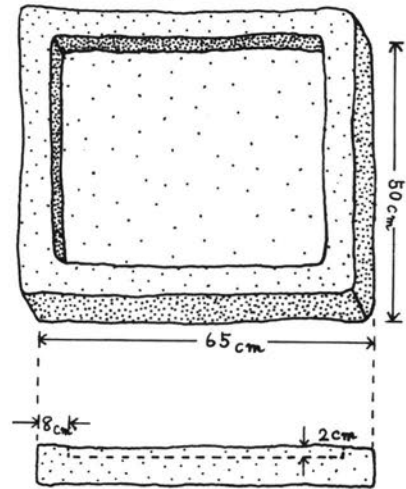
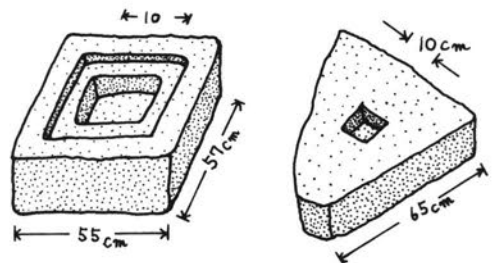


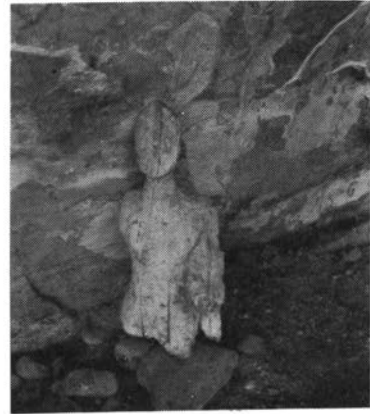
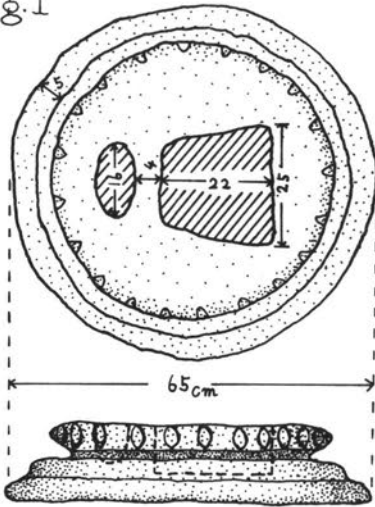
Fig. H



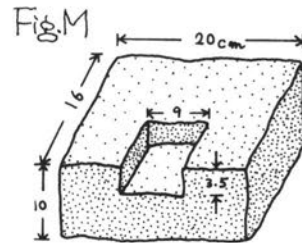
してその内に10cm四方の穴があいている。三角形のものは一辺65cm程で中央に10cm四方、深さ5cmの穴が彫ってある。

〔I仏座〕直径65cm、高さ25cm程の円形の仏座で、図Iのように数段の細工がなされている。中心には上底16cm、下底25cm、高さ22cmの台形の穴が彫ってあり、その後に楕円の穴が彫ってある。周囲には蓮華の模様が刻まれている。

Fig.I



写真K



写真N

〔Jレンガ積み〕後世の人が崩れ落ちたレンガを一ヶ所にまとめたもの。Fのレンガ積みとも関係すると思うが入口の部分の覆っていたレンガの残骸と思われる。

〔K木製立像〕木製の立像で顔の部分は剝がされている。右手は肩から無く、左手はひじから先がない。木はかなり重い木で、表面は白く塗られている。下半身は焼かれたらしく切れ口が炭化している(写真K参照)。

〔Lレンガ敷き〕レンガを敷きつめて床を覆っている。岩窟全面でなく、この部分だけである。

〔M礎石?〕20×16×10cmの石の端に、9cm四方で深さ3.5cmの穴が刻まれている(図M参照)。

〔N壁画〕岩窟の壁にシッケイを塗り、その上に壁画が描かれている。仏陀の画を中心にさまざまな仏教画が描かれたもの。色彩はかなり色あせており、一部鉛筆で上からなぞったような跡も見られる。シッケイが剝がれ落ちている部分も多い(写真N参照)。

【註】考古学局もすでに同遺跡の調査を行なったもようで、この壁画については、およそ8世紀頃のものだと推定しているという。

< 5 0 > ダマネウエラ部落の寺院遺跡

DAMANEWELA (ruins of temple)

Location;

This site is located in the Damanewala village which is about 25km. the south by west from the Aralaganwila in a straight line.

Summary;

The ruins are distributed over the flat ground. Here are the remains of a stone wall which is 60m. around.

Inside of a stone wall, here are the remains of a dagoba (A), three rectangular structures (B, E, F) which have a stone foundation, a brick foundation and some stone pillars, the remains of a image house (C) which has a brick foundation, a moon stone, a guard stone, a flight of stone steps with a balustrade, three stone pillars and two stone plate, the remains of a religious hall (D) which has a stone plate and a stone foundation. Outside of a stone wall, here are the remains of a temple (G) which has a stone foundation and a flight of steps with a balustrade. Apart from this, there are the remains of a balustrade and a stone plate (H).

【調査】9月17日

【スタッフ】堀江、岡村、M. R. ラナウィーラ、
A. M. サナビラトッナ〔4名〕

【位置】アララガンウィラ村から南下してヘナネ
ガラ方面に到るジープ道沿い。ダマネウエラ部落
のほぼ中心部に当たる位置である。「地図」には

DAMANEWELA の地名の南東側に仏寺跡の印が記入されている。

【アプローチ】アララガンウィラからジープ道を南下、ダマネウエラ部落はアララガンウィラから南南西へ道沿いに25キロほどの地点。マヒヤンガナ方面からもダンバナを経て通じる道がある。

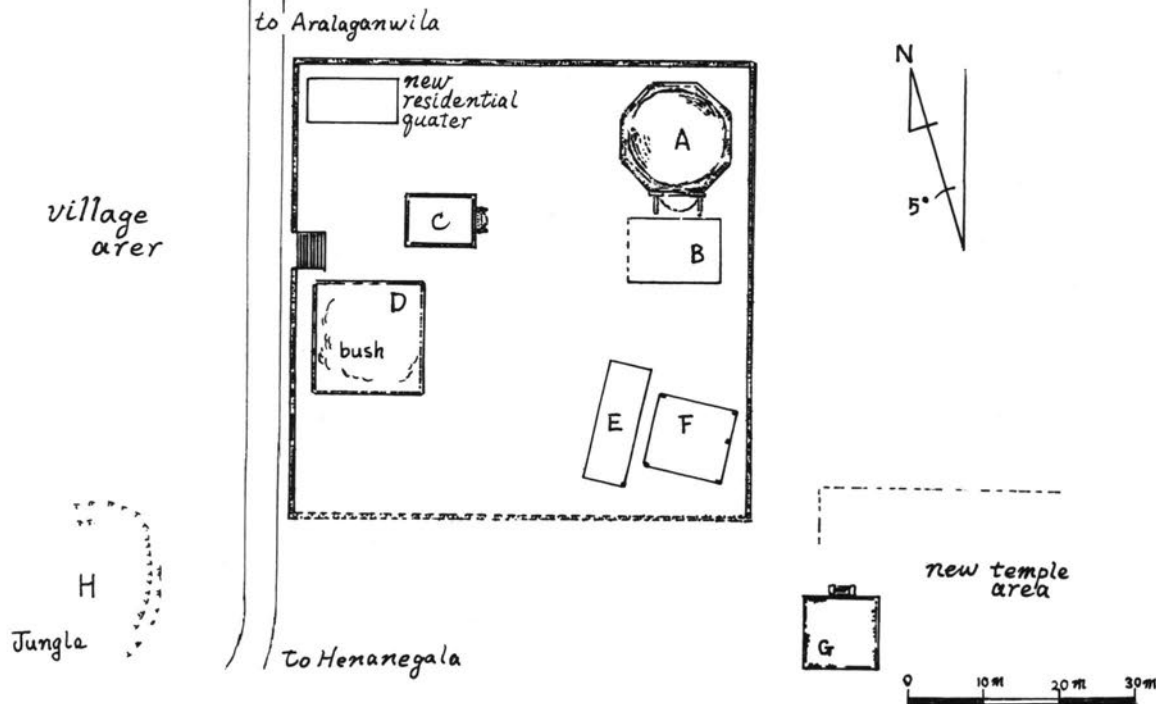
【全体的状況と位置関係】遺跡地点に新寺が建立され、比丘1人が寺および遺跡を守っているため保存状況は良好である。しかも新寺は遺跡境内の北西端にある小さな庫裏(僧舎)を除いて、すべて境内の外側に建てられており、遺跡自体は独立した存在として村人の信仰を集めている。新寺建立の過程で若干の発掘、復元がなされたらしく、仏塔が崩壊しながらもその外形をよく示しているほか、本殿および講堂の各付属物などが明瞭に残され、一部は埋没地点から掘り出されて遺跡の周囲に並べられている。

約60m四方の区画が石垣によって盛り上げられ、周囲の平地より1~2mほど高い境内を形成しており、その上に仏塔はじめ本殿、講堂、その他の建造物遺跡が見られる。また、同境内を離れた南東側の新寺の区画にも若干の遺跡が見られ、さらに境内西麓を南北に走る現在のジープ道をはさんで、その南西側にも遺跡が残存する。こうした点から、当隊調査区域の外側にさらに多くの遺跡の残存が予測され、相当に広い区域が寺の外院を構成していたことも考えられる。

【各部分の状況】

〔A-仏塔〕崩壊していた仏塔を同所のレンガのみで一部再構築した跡がみられ、ドームの下部はきれいに組まれてその形状を明示している。上部は崩壊したままだが2.5mほどの高さを誇り、境内で最も目をひく秀でた遺跡となっている。下壇

DAMANEWELA



は一部がまだ地下に埋れているが、ドーム直下の八角形基壇の上辺のみが地表に現われ、典型的な仏塔建築の様式をわずかに伝えている。

基部の直径は約15mほどで、南側に参拝所があったものらしく、ムーンストーン、ガードストーン(模様なしの平盤石)、石の供花台などが形状よく残っている。

〔B-建造物跡?〕仏塔の南(仏塔参拝所側)に隣接する形で、方形の区画を成す石組みが地表に露呈している。地下に埋れた石の列が、わずかに上辺のみ露出して並んでいる程度にしか確認できないため、実際にこの上に建造物があったものかどうか定かでないが、南北9m、東西12mのこの範囲が何らかの区画であったことは間違いない。石組みの上辺部分以外には、その区画内にも他の痕跡は見られない。

〔C-本殿跡〕南北7m、東西9mほどの規模で東側に参拝口をもつ。石組みの土台の上にレンガ造りの建築があったらしく、下部のレンガ組みが3~4段のみ残っている。入口にはムーンストーン、ガードストーン、らんかんにはさまれた石の階段などが明瞭に残るが、らんかんに単純な線模様のレリーフがある以外、ムーンストーン、ガードストーンにも彫刻は見られない。内部の石柱は南辺の2本と北東端の1本以外には見当たらず、地下に埋れたか持去られたものと思われる。供花台と見られる石板が2枚、同敷地内に転がっている。基部の形状と参拝口の各構成物が明瞭に残っているだけでも貴重な遺跡といえよう。

〔D-講堂〕建造物の崩壊によってできたと思われる堆積土の上にヤブがはびこり、内部は不明だが、約15m四方の敷地が、ところどころ露呈した石組みによって知れる。周囲には、ここから出土したと見られる灯明台の石板などが置かれている。堆積土の盛り上がりは厚く、高さ2mほどの

小山となっているため、石柱などはその下に埋れていると思われる。

〔E-建造物跡?〕5m×12mほどの区画が、地表からわずかにのぞいているレンガ組みによってわかるが、他の部分とレンガの列の示す方位が異なっている。あるいは時代を異にするものかもしれない。現在この敷地上に草ぶき屋根の壁抜き小屋が建てられている。

〔F-石柱を有する建造物跡〕Eとともに、敷地の向きが他の部分とは異なっている。すなわち、石柱の配列が、Eとは平行だが、本殿(C)、講堂(D)とは約159ほど右回り方向にずれている見当になる。ヤブに覆われて基部は不明だが、石柱が5本ほど確認でき、それによって最低10×12mほどの敷地を持つ建物があったことがわかる。

〔G-外院部の仏殿〕内院境内の南東角より約10m離れて、10m四方ほどの敷地をもつ仏殿があったことがわかる。現在この敷地の一部に小仏殿が作られているが、本来の敷地の広がりや、地表より露出した石組み土台によって知ることができる。北側に参拝口があり、石段とらんかん(単純な線模様の浮き彫りがある)が残り、現在のお堂にそのまま利用されている。

〔H-不明遺跡〕さほど詳しい調査は行なわなかったが、内院の南西側のジープ道をへだてた部分にも石の彫刻物(らんかん、石板など)が見られ、この付近にも外院の建造物があったことが考えられる。

【付記】おそらく、内院および外院からなる大規模な寺院であったと考えられるが、内院部のEおよびFの敷地方位のゆがみや、外院部の遺跡が不明なことなど、いくつかの疑問が残る。新寺の住職の話では、この遺跡は500年ほど前のものであろうというが、根拠は不明である。

4. マドゥル・オヤ（川）東岸の遺跡

Ruins, distributing in the east bank area of Maduru-Oya

【遺跡群索引】

- <51>マドゥル・オヤ東岸の寺院遺跡
- <52>ウェンベンダ・ガラ寺院遺跡
- <53>モタ・ガラ寺院遺跡
- <54>モタガラ南西のバタハ群
- <55>ワラマンディヤ寺院遺跡
- <56>マドゥル・オヤ東岸の無名バタハ
- <57>バタヴェンダガワッタ寺院遺跡

【地域および遺跡群の概要】

マドゥル・オヤは、マヒヤンガナ南東のビビレ (Bibile) 付近を源として北流し、ウェリカランダ付近で東へ大きく流れを変え、パティカロア北方のラグーン (礁海) を経て、インド洋に注いでいる。乾期 (3月～9月) は、水量も少なく、深い所でもヒザあたりであり、徒渉も可能である。しかし、雨期に入ると、水量は大幅に増える。事実、探査行動中の9月20日には、増水の為に、徒渉不可能となっている。ここで言うマドゥル・オヤ東岸とは、ヒングール・ワワ部落からピンブラッタワ・タンクにかけての東側のマドゥル・オヤ東岸の地域である。この地域は濃密なジャングルを形成しており、その間に所々、草原地帯が点在している。マドゥル・オヤの東岸からは、行政区がパティカロアに入る (マドゥル・オヤの西はポロナルーワの行政区に入る) こともあって、開拓もマドゥル・オヤ東岸にまでは進んでいない。マドゥル・オヤ (西岸) 付近の開拓民も、狩猟で入るぐらいであり、そのことは、この地域が動物の豊富なことをも物語っている。事実、マドゥル・オヤ近くの開拓民の民家近くには、木の上に象の避

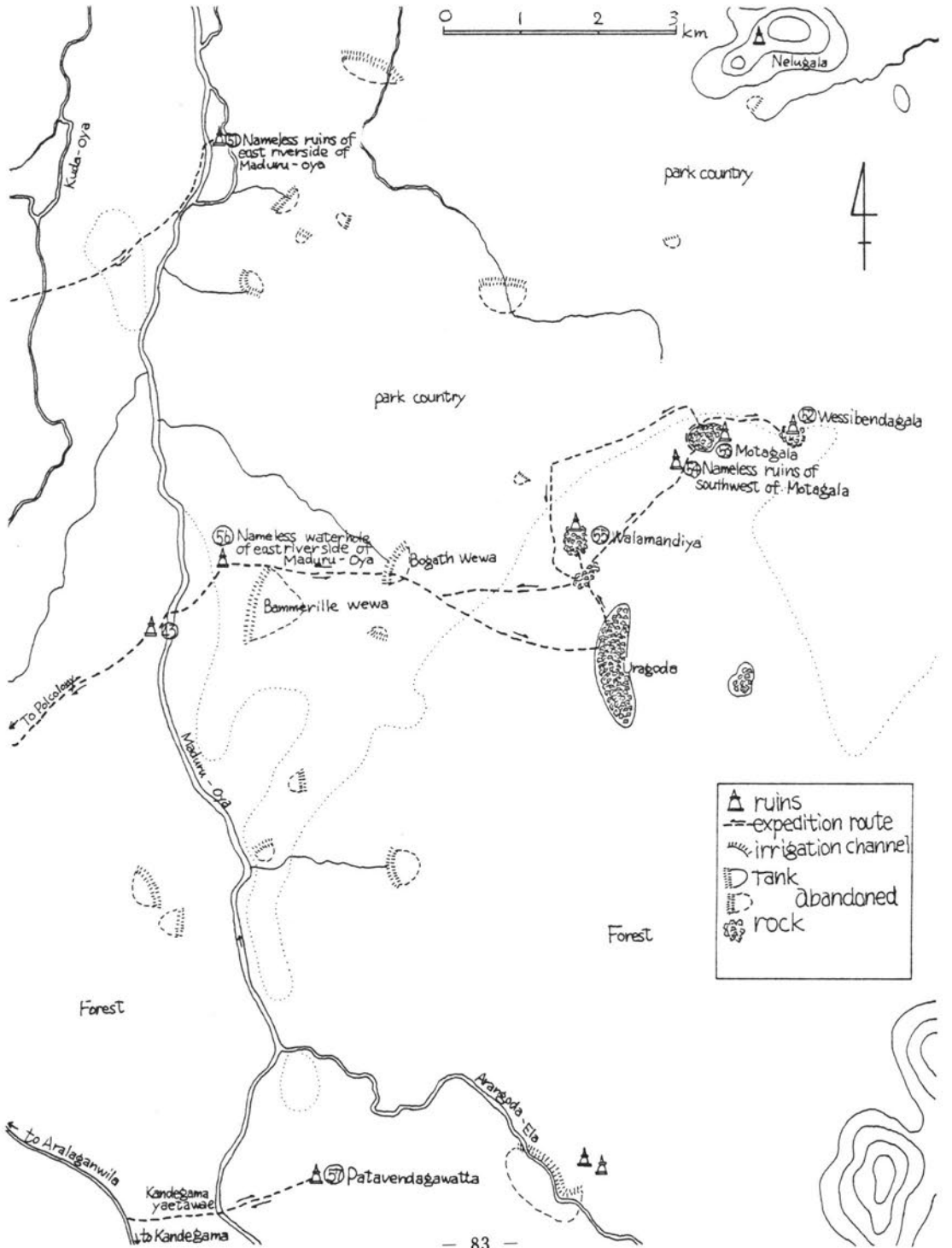
難小屋を設けているし、象の足跡も至る所で見ることができる。この地域の遺跡は、計7ヶ所で、そのうち3ヶ所は、岩丘上にある遺跡である。ワラマンディヤの寺院遺跡は相当大規模な遺跡ではあるが、風化が激しく、わずかにその痕跡を残すのみである。岩石上の遺跡は、一般的に風化が激しく崩壊も相当進んでいると言える。バタハは2ヶ所を確認。マドゥル・オヤ東岸の無名バタハは、草原地の僅かな露岩上にあり、モタ・ガラ南西のバタハ群は岩丘上に掘られたものである。マドゥル・オヤ東岸の寺院遺跡は、マドゥル・オヤの運んだ土砂に埋もれており、また、バタヴェンダガワッタの寺院遺跡はジャングル内に埋もれている。こうした遺跡は、保存もよく、石柱の配列も残しており、今後の発掘等の本格的な調査が期待される。

【当隊の活動の概要】

この地帯の探査活動は、ワラマンディヤ、モタ・ガラ、ウェンベンダ・ガラの遺跡探査を中心とした4日間の探査行と、ベース・キャンプからの日帰りの探査行に分けることができる。まず、4日間の探査行は、ベース・キャンプよりボルコロニーに行き、ここの小学校に泊まる。ここの村人の案内もあって、ウェヘラゴダッラの遺跡、マドゥル・オヤ東岸の無名バタハを調査することができた。ここから先は、村人の案内もなく、地図とコンパスを頼りに東へ進み、ウラゴダの岩丘に出て、ここから北へ進んでワラマンディヤに到達した。更に、ワラマンディヤを基点に、日帰りでモタ・ガラ、ウェンベンダ・ガラを調査し、ワラマンディヤに戻る。ジャングルの中での露営を経験するこ

とになる。4日目、ウェシベンダ・ガラから西に進み、マドゥル・オヤに出て、ベースキャンプに戻る。日帰りの探査行は隊活動の後半に行なわれ

た。2人一組で探査を行ない、村人の協力もあって、それぞれ、地図に記入されていない遺跡を確認できたことは、大きな成果であった。



< 51 > マドゥル・オヤ東岸の寺院遺跡

eastern riverside of MADURU-OYA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 4 km. the north-east from Ekolahay - Bodieka junction on the way from the Pimburettawa to the Mananpitiya bus road.

Summary;

This site lies next to the Maduru River. Here are the remains of a dagoba (B, fig.B) dug into by thieves with bricks, stone plate (fig.B1), stone column (photo.B1), one corner stone (fig.B2, photo.B2) and three stone pillars (fig.B3). At the west of the dagoba (B), here are the remains of a structures (A) with fifteen stone pillars (fig.A), stone plate (fig.A2, photo. A2), circular brick line and many brick bats. At the south by east of the structure (A), here are the remains of a dagoba (C, fig.C) with brickbats and a pillar (fig.C2). At the north of the structure (A), here are three stone pillars (fig.D). This site must have been almost buried under the ground.

【調査】9月15日

【スタッフ】角谷、堀江、スィリル(ハンター)、ペーマラトナ(ポーター)、ガイド1名〔5名〕

【位置】ピンブラッタワからマナンピティヤへ向かうバス道上、エコラハイ・ボーディエカより北東4km程にあるマドゥル・オヤ(川)の東岸に隣接している。「地図」には一切記入なし。

【アプローチ】ヒングールワワの無名遺跡わきを通る道を下り(ヒングールワワの無名遺跡のアプローチ参照)、東北東へ伸びる小径を進む。15

分程で小川に出る。更に同方向に進むとマドゥル・オヤに出る。下流へ1km北上すると、東岸に遺跡を見ることができる。

【全体的状況と位置関係】マドゥル・オヤに隣接しており、この川が運んだ土砂等によって埋もれたものと考えられる。仏塔跡、石柱の配列がきれいに残っている建造物跡、レンガ片が散見する土盛り状のもの、その他、平石、石柱、レンガで円状に組んだ土盛り、礎石等が見られる。その他にも土砂に埋もれたり、流失した部分はかなりある

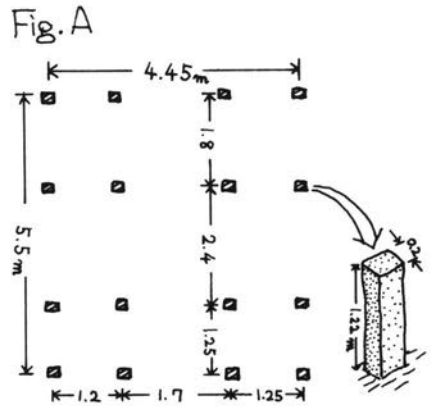
のではないと思われる。寺院の敷地形状を示すものは確認できない。

【各部分の状況】

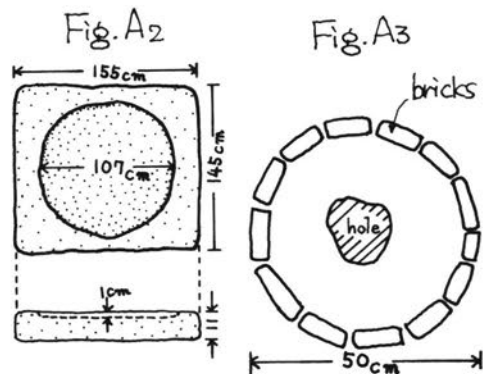
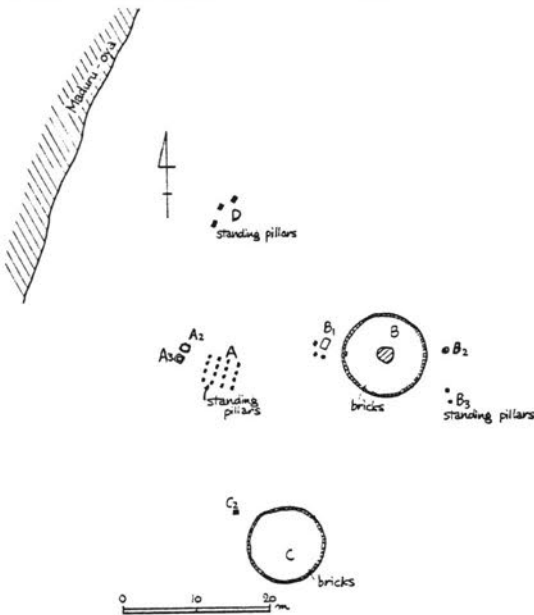
〔A 建造物跡〕B 仏塔跡の西 2.2 m に位置。5.5 × 4.45 m の区域内に 15 本の石柱が残っており保存状態は良い（図版 A）。石柱は 20 × 20 cm 角で表出部分の長さは 1.22 m である。周りにはレンガ片も多く見られる。この建造物の西側に四角形の平石があり、規模は 155 × 145 cm、厚さ 11 cm のもので、表面には深さ 1 cm の彫り込みがほどこされている。考古学局の話では、小仏塔の礎石と思われるものでアマラダブラ、ジャフナでも確認されているそうである。また、このような平石は時おり、入口に置かれ足を洗う為にも使用されたようであるとのこと（図版 A 2、写真 A 2）。この平石の北側に隣接して、更にレンガが直径 50 cm 程の規模で円状に組まれており、中央が掘られている。遺跡かどうか、また、後世の人によってなされたものか全く不明、その他用途等もはっきりしない。

〔B 仏塔跡〕仏塔基部は崩壊が激しく、形状は不明瞭で中央部は盗掘されている。直径 1.26 m、

高さ 1.9 m 程の規模のもので、レンガの山となっている。レンガの大きさは、30 × 22 × 8 cm のものが使われている。この仏塔跡の西側に平石、石柱 2 本、円柱石 1 本、東側には礎石 1 個、石柱 1 本がある。平石は 2.9 × 1.25 m のもので、約 3 cm のふち取りがしてある。仏塔近くにあり供花



写真A2

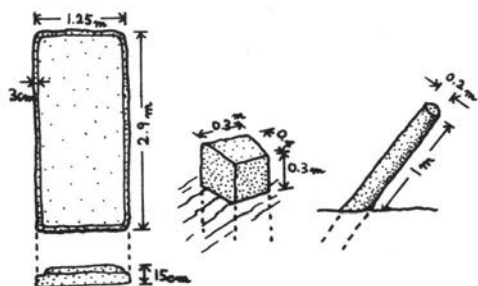


台とも考えられる(図版B 1)。石柱は 30×40 cm角で、表出部分は約 30 cm。この2本の石柱に隣接して、円柱状の石が1本、 1 m程露出しており、直径 20 cmのものである。用途等は不明(写真B 1)。仏塔東側の礎石は直径 70 cm、中央に 18×18 cm角で深さ 11 cmの穴がある。礎石は下部が埋もれており厚さは測れなかった(図版B 2、写真B 2)。更に石柱2本が仏塔跡より南東約 10 mの地点に、 1 mの間隔をあげ、露出している。石柱は 19×32 cm角で、表出部分は約 1.2 m。先述の礎石と関係あるかもしれないが、石柱の用途等は不明(図版B 3)。



写真B 2

Fig. B1



写真B 1

Fig. B2

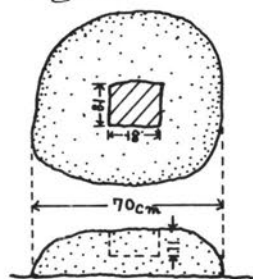


Fig. B3

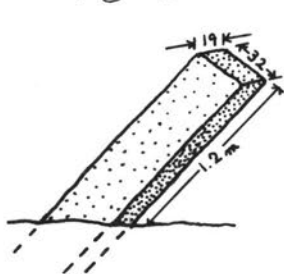


Fig. B

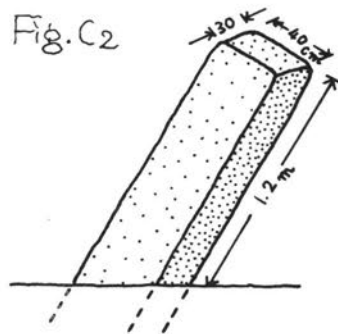


〔C 仏塔跡?〕A 建造物跡より南南東約 25 mに位置。崩壊が激しく、基部にレンガ片が多数見られ、若干のふくらみが見られる程度で、形状もはっきりしてなく、盗掘跡もない。従って仏塔跡と断定することはできず、全てが不明瞭である(図版C)。この北東側に、 40×30 cm角の石柱が1本見られ、表出部分は約 1.2 mのもので、他に何も確認できない(図版C 2)。

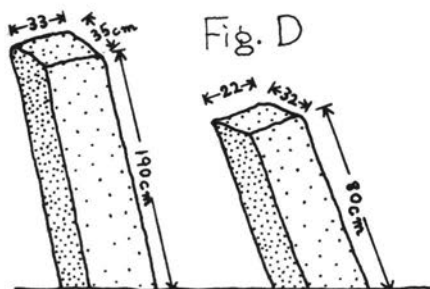
Fig. C



Fig. C2



〔D地点〕A建造物跡の北29mに位置。3本の石柱が露出しており、うち1本は35×33cm角で、2m近く露出している。他の2本は32×22cm角で80cm近く露出している。建造物跡とも思われるが敷地形状も全く不明で断言できない(図版D)。



<5 2> ウェシベンダ・ガラの寺院遺跡

WESSIBENDA-GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 3.5 km. the east by north of the Walamandiya (See No. 55).

This site has the name and a mark of ruins on the "Map".

Summary;

At the summit of the rock hill, here are the remains of a dagoba (A). Many brickbats are scattered arround the dagoba (A). At the south-east of the dagoba (A), here are the remains of a structure (B) with brickbats. Another remains of structure (C,) is there about 60 m. the northwest of Wessibenda-Gala in the park country. This site is all weathered.

【調査】9月7日

【スタッフ】八木、角谷、スイリル(ハンター)
〔3名〕

【位置】モタ・ガラの東700m、ワラマンディヤの東北東3.5km。「地図」には名称、遺跡印の記入あり。モタ・ガラよりウェシベンダ・ガラがよく見え、目と鼻の先である。

【アプローチ】モタ・ガラ頂上より一旦、北側に降り草原地帯に出る。草原地帯に出るとウェシベンダ・ガラが東に見えており直進すればよい。約

700mの行程である。

【全体的状況と位置関係】岩丘は長さ150m、幅80m程で南東から北西へ伸びている。この岩丘上に仏塔跡、建造物跡の2つの遺跡があるだけで他には何も無い。この岩丘頂上付近より北西60m程の草原地帯の中、わずかな露岩上に建造物跡がある。特に岩丘上の遺跡は風化が激しく、形状も不明瞭である。

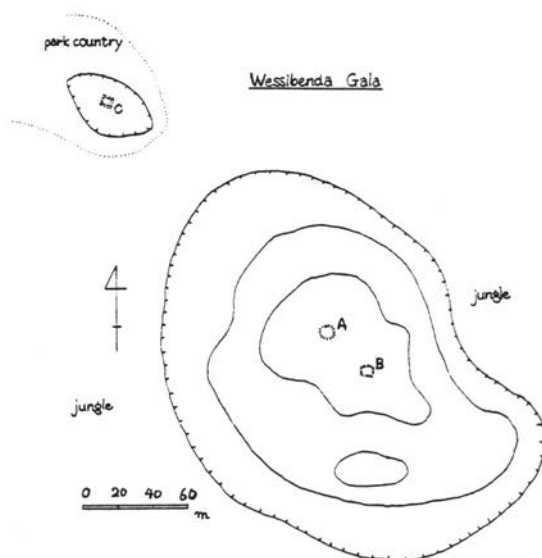
【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕岩丘頂上付近に位置し、直径約7.5

mの円形状の土盛りが残っている。風化が激しく、基部も不明瞭で、小さなレンガ片が散乱している程度である。中央部は盗掘跡らしきものが若干見られるが、全体にはつきりしていない。

〔B建造物跡〕A仏塔跡より南東約25mに位置。これもレンガ片と若干の土盛り状のものが残っている程度で、敷地形状も不明瞭である。

〔C建造物跡〕岩丘頂上より北西約60mに位置。建造物跡の敷地形状を示す二段のレンガの並びが明瞭に残っている。外部は5.7×5.5m、内部は4.0×4.2mの規模、周りにはレンガ片も散見できる。わずかに露出した露岩上にあるが、何の建造物跡かは不明(図参照)。



< 5 3 > モタガラ の 寺院 遺 跡

MOTA-GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 0.8 km. the west from the Wessibenda-Gala (See No. 52). This site has the name and a mark of ruins on the "Map".

Summary;

On top of the rock hill, here are the remains of two dagobas (A, B). At the southwest side of the rock hill, here are the remains of large assembled stones (D). On a small rock hill which is situated at the south direction of the large rock hill, here are the remains of a water hole (C) with some brickbats.

【調査】9月7日

【スタッフ】岡村、東、執行〔3名〕

【位置】マドゥル・オヤ(川)の東方にあるワラマンディヤ岩丘から北東へ2.3km、ウェシベンダ

・ガラ(岩丘)の西0.8kmの地点。「地図」上に遺跡印、名称ともに記入されている。

【アプローチ】ワラマンディヤ岩丘から北東へ道のないジャングルを約2.3km進む。また、モタ・

ガラのスグ北にはジープ道が走っているの、この道路を利用することもできる。

【全体的状況】岩丘は地表から50m以上の高さがある。斜面も急な所が多い。その頂上付近に仏塔跡らしきものが2つ残っている。また、岩丘の南、崖下には、パタハ1つと石積み跡が確認された。

【各部分の状況】

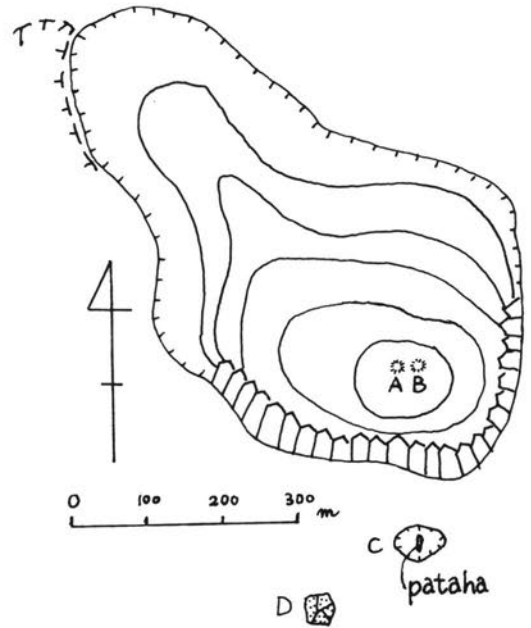
〔A 仏塔跡〕半径2.5m、高さ0.5mのドームを成している。崩壊が激しく、風化した石と砂だけがわずかに形を残しているだけである。

〔B 仏塔跡〕Aの仏塔跡から東へ15mの地点に位置する同形状の仏塔跡である。半径2.5m、高さ0.4m。Aの仏塔跡と同じくほとんど崩壊してしまっている。

〔C パタハ〕岩丘の南側、崖下に、小さな別の岩丘があり、そこに2m×1mのパタハがある。付近にはレンガ片が散在しているが、建造物跡などは確認できなかった。

【付記】岩丘の南西に人工のものであるのかどうかは不明だが、長さ2m以上もある巨石が2段に

Mota Gala



積み上げてある。レンガ片などは発見できなかった。もし人の手が加わっているとすればドルメンである可能性もある。

< 54 > モタ・ガラ南西のパタハ群

south west face of MOTA-GALA
(ruins of water holes)

Location;

At the point about 300 m. the southwest of the Mota-Gala (See No. 53), there is a small rock hill. This site is located about 2 Km. the northeast of the Walamandiya-Gala (See No. 55) and about 700 m. the west of the Wessibenda-Gala (See No. 52).

Summary;

There are five water holes on the small rock hill. Each of those water holes is nearly round

(See the fig. and the photo.).

【調査】9月7日

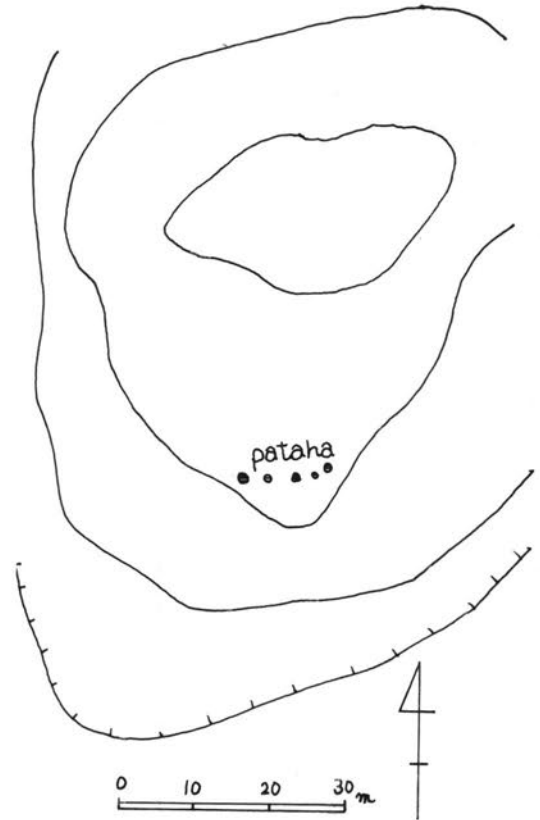
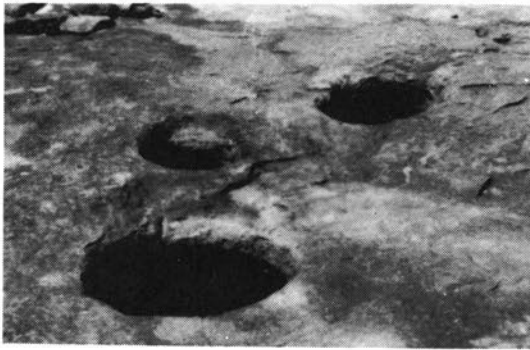
【スタッフ】八木、角谷、東、執行、岡村、スィ
リル(ハンター)、ペーマラトナ(ポーター)
〔7名〕

【位置】ワラマンディヤの北東2km、ウェシベン
ダ・ガラ(岩丘)の西700mに位置。パタハ群はモタ・
ガラ頂上付近の遺跡より南西側の一段低い岩丘上
の南に位置する。

【アプローチ】モタ・ガラへのアプローチ参照。

【概要】なだらかに北東へ伸びる岩丘の南側に位
置し、5つのパタハが東西に連らなっている。5
つとも、ほぼ円形をなしており、西側からそれぞ
れ長短径、130×100cm、70×50cm、70
×65cm、45×45cm、72×65cmの規模の

ものである。深さはまちまちであるが、一番深い
もので40cmある。しかし、西側から2番目のパ
タハは浅く水も溜ってなく、パタハかどうか疑う
余地あり(図および写真参照)。



<55> ワラマンディヤの寺院遺跡

WALAMANDIYA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 2 km. the south-
west from the Mota-Gala (rock hill) and about
6 km. the east by north from the Veheragodella.
This site has the name and a mark of ruins on
the "Map".

Summary;

This ruins are distributed on the rock hill which extends over 500 m. from the north to south. On the north face of the rock hill, here are the remains of three structures (A, photo.A, B, C,). Two of them (A, B) are rectangular site. On the top of the rock hill, here are the remains of a dagoba (E) almost break down except the basis and a structure (F). Carved out of the rock on the north slope are the remains of a flight of steps (D) providing access to the top. At the south face of the rock hill, here are the remains of two indistinct structures (G, I) and two water holes (H, J, photo.J). East side of the top, here is a flat place but no ruins. This ruins are comparatively big scale.

【調査】9月7日

【スタッフ】八木、角谷、東、執行、岡村、スィル(ハンター)、ペーマラトナ(ポーター)
〔7名〕

【位置】ウラゴダの北0.7km、モタ・ガラの南西2km、ウェヘラゴダラの遺跡から東北東6kmのところ位置。「地図」に名称と遺跡印あり。

【アプローチ】マドゥル・オヤ小学校を北東に2km行くと、ウェヘラゴダラの遺跡に到る。ここから南東に向かい、マドゥル・オヤ(川)を渡渉し、北東に1.2km進むと、草原の中の小さな露岩丘に着く。ここが「マドゥル・オヤ東岸の無名パタハ」である。この付近まではマドゥル・オヤ部落の住民も地理を知っているのだが、これより先は知らないという。マドゥル・オヤ(川)以東の地域は、全く未開のジャングルで、部落もない。パタハから一旦、東南東に向かいジープ道を横切ってジャングルに入る。目的地まではずっと濃密

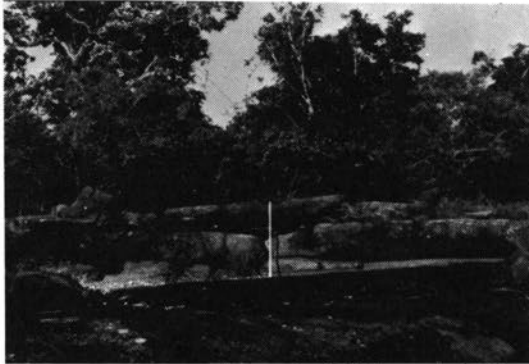
なジャングルで、やぶこぎを強いられる。なおも東南東に進み、パタハから1.5kmのところまで今度は北東に向かう。1.3kmで小貯水池跡に出る。そこから東へ3km直進すると、南北に細長く延びているウラゴダの岩丘に出る。ここより北へ600m~700m行くと再度別の岩丘に出るが、この岩丘より高く、北の方に見えるのがワラマンディヤの岩丘である。50m程で到着。

【全体的状況と位置関係】南北に500m以上も延びる細長い岩丘上に遺跡が分布し、北部に3つの建造物跡、中央部の岩丘頂上付近に1つずつ仏塔跡と建造物跡、岩丘南部に2つの建造物跡と2つのパタハがある。北の2つの建造物跡は、長方形の形状を確認することができる。頂上付近の仏塔跡は土台部分の石積み跡がわかるだけで、仏塔自体は完全に崩壊している。南部の2つの建造物跡は石積み跡があるだけで、はっきりとした形状は確認できない。また、頂上の東側の一段低い所

に平地が広がっているが、遺跡は確認できなかった。規模としては比較的大きな寺院跡である。

【各部分の状況】

〔A建造物跡〕岩丘の一番北端に、3.5 m × 5 m の非常に細長い石積みが残っている（写真A参照）。石積みはほとんど一段であるが、北の一边は一部三段積みまで残っている。石柱、レンガ片などは確認できない。何の建造物跡であるかは不明。



写真A

〔B建造物跡〕Aから南東へ1.3 mの地点に、一边3.6 mのほぼ正方形の石組みがある。レンガ片、石柱などはない。

〔C建造物跡〕岩丘を東へおいた平地の上にある。4 × 1.0 mのころうじてわかる程度の石組みである。他には遺物は何もない。

〔D階段跡〕建造物跡Cより岩丘上へ登るための階段であろう。岩盤を刻み込んである。完全に風化、崩壊して、階段の大きさ、形状などはわからない。

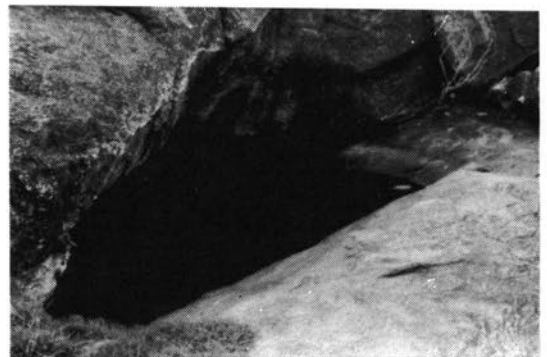
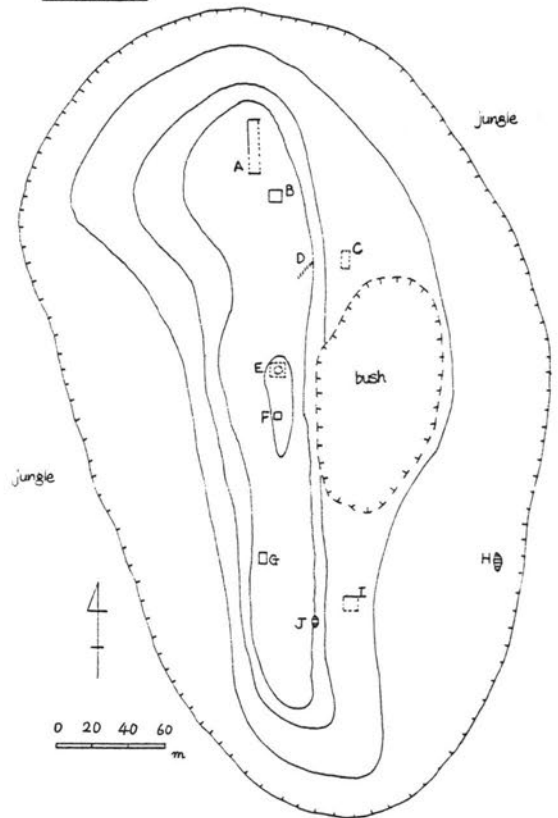
〔E仏塔跡〕岩丘頂上付近に位置する。仏塔自体は完全に崩壊している。中央に円塔状の積石がしてあったが、これは後世の人の手によって積まれたもので、本来の形状ではないと思われる。しかし土台部分はわずかに2段構えの基壇が確認でき、1.0 m四方ほどの下壇の上に、6 ~ 7 m四方の上壇があったもののように思われる。

〔F建造物跡〕E仏塔跡の南2.0 mのところにある石積みの土台。4.0 × 4.0 mの正方形をな

してあり、周囲の平坦な岩盤より30 cmほど盛り上がり平らになっている。

〔G建造物跡〕E仏塔跡の南、約120 mのところであり、石積み土台跡が確認された。6.0 × 4.0 mの長方形をなしているようであるが、はっきりと断定はできない。

〔Hパタハ〕E仏塔跡の南東、岩丘南東の端にある Walamandiya



写真J

る。かなり大きなパタハで、10.2×3.6 mの南北に細長いもの。深さは30 cm以上あり、調査時点では水が溜っていた。

〔I建造物跡〕一辺約8.3 mのほぼ正方形をした石組みであるが、明瞭ではなく、断定することはむずかしい。長さ2.2 mの石柱が一本だけ倒れているが、ほかにはレンガ片すら確認できない。

〔Jパタハ〕E仏塔跡の南南東180 mの地点、少し岩丘を降りたところにある。岩丘斜面を横にくりぬいて作ったもので、浅い洞窟状になっている。幅4.5 m、奥行き3 m、高さ2 m程のもので、深さも30～40 cmあった。調査時点では水が溜っていた(写真J参照)。

<56> マドゥル・オヤ東岸の無名パタハ

nameless ruins of eastern riverside of MADURU-OYA
(ruins of water-hole)

Location;

This site is located about 300 m. the west from the southern extremity of the Bammerville Tank.

Summary;

On the low rock hill in the park country, here is a water hole. It measures 7 m. by 2 m. and 20 cm. in depth (See the photo.).

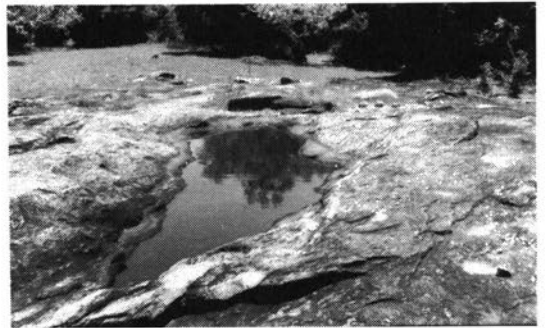
【調査】9月6日

【スタッフ】八木、角谷、東、執行、岡村、スィリル(ハンター)、ペーマラトナ(ポーター)
〔7名〕

【位置】バメビッレ貯水池の南端土手より西300 m、ウェヘラゴダッラ遺跡より東2 kmに位置。「地図」には一切記入なし。

【アプローチ】ワラマンディヤへ向かう探査行途上で観察。ワラマンディヤへのアプローチ参照。

【概要】草原地帯の中の低い露岩上に彫られたパ



タハで、長径7 m、短径2 mの南北に細長いもの。深さは約20 cm、水も溜っていた(写真参照)。

< 57 > パタヴェンダガワッタの寺院遺跡

PATAVENDAGAWATTA (ruins of temple)

Location;

This site is situated at the place between the Maduru River and the Arangoda River (Hikkagala River). This site is located about 2 km. the northwest from the Veheragodella (rock Hill).

Summary;

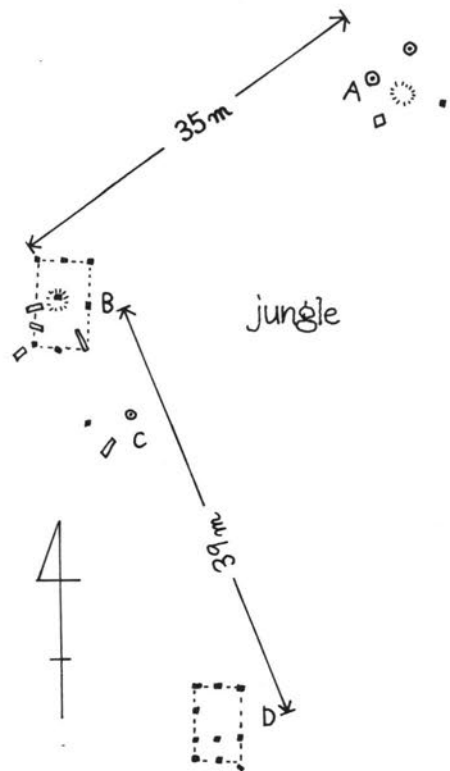
This site is surrounded by the jungle. This site has the remains of small dagoba (A), stone structures (B, fig.B, D,) and uncertain small premises with a stone pillar, a corner stone and brickbats (C). The dagoba (A) has two disk stones (a1, fig.a1) which is 1.3 m. across. The structure (B) and (C) are rectangular sites being constituted of stone pillars. One square stone plate (fig.a2) and stone pillars also remains here.

【調査】9月20日

【スタッフ】八木、執行、ティッサハーミ（ハンター）、グナダーサ（案内人）〔4名〕

【位置】マドゥル・オヤ（川）とアランゴダ・エラ（川）（またの名をヒッカガラ・エラ）にはさまれた地域にあるジャングルの中の遺跡。「地図」には遺跡印、名称ともに記載されていない。アランゴダ・エラがマドゥル・オヤに合流する地点から、南南東へ約2kmの地点。また、ウェヘラゴダラの岩丘から北西へ約2kmの地点。

【アプローチ】カンデガマに向かうジープ道（通称カンデガマ・パーレ）を途中で東へ折れてカンデガマ・ヤーエタワエという開拓部落に着く。ここから踏み跡程度の道を、東へ1.5km程歩くとマドゥル・オヤ（川）へ出る。そこを渡渉して道のないジャングルの中を南東へ向かう。すぐに右



手に小さな沼が見えてくる。さらにジャングルの中を3km程で到着。

【全体的状況と位置関係】付近は見通しのきかない密林で、遺跡自体にも土砂が堆積し、その上に樹木がはびこっている。しかし、かえってそのために地下に埋もれた部分の発掘が、今後期待される。建造物としては、直径1.3mもある大きな石の円盤(岩笠)がある仏塔跡。長方形の形状を示す2つの建造物跡。形状不明の建造物跡。以上のかなり小規模な構成で成り立っている。

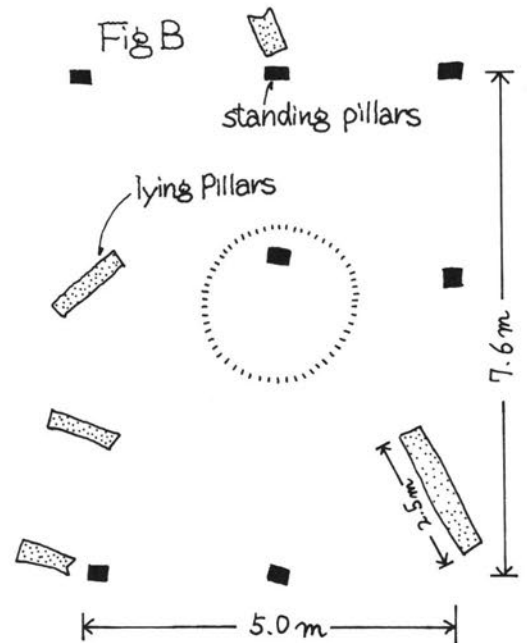
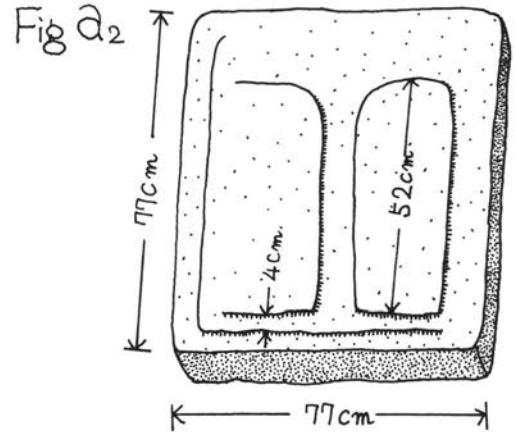
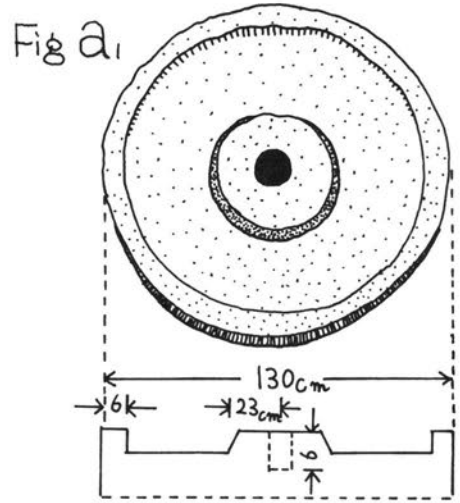
【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕中心の盛土は、遺跡が完全に崩壊、埋没した単なる地面の凸部にすぎない。その北西側には直径1.3mの非常に大きな石造の円盤(a1)が2枚ある。これらは仏塔上部塔の笠である(図a1参照)。a2(図a2参照)は、一辺77cmの正方形の石板である。模様が彫り込んであり、周囲のヘリには3cm位の縁取りがしてある(仏足石か?)。a3は折れた石柱で、これ1本しかみつからなかった。

〔B 建造物跡〕石柱が7.6m×5.0mの長方形に並んでいるのがわかる。中心にやや盛り上がった部分があり、まわりにはレンガ片が散在している。石柱はほとんど途中で折れているが、地表に露出している部分だけでもかなり長く、一番長いものは2.5mもある。おそらく講堂か本堂の跡であろう(図B参照)。

〔C 建造物跡〕Bの南1.0m付近に、礎石1つと石柱1本、それにレンガ片の散在を確認できた。本来の形状はまったくわからない。

〔D 建造物跡〕石柱が、5.0m×3.2mの長方形に並んでいる形状がはっきりわかる。おそらく本堂か講堂跡であろう。石柱の大きさは様々であるが、地表に出ている部分では、平均すると、縦×横×高さが30×40×45cmである。一番高い石柱は60cm、一番低い石柱は15cmである。なお縦3本横4本の構成と思われる(図D参照)。



5. カドゥルピティヤ以南の遺跡

Ruins, distributing in South area of Kadurupitiya

【遺跡群索引】

- <58>クブカンダナ・ガラの寺院遺跡
- <59>エケ・アラの寺院遺跡
- <60>ムトッコヴィラ・ガラの寺院遺跡
- <61>ミーガスワラ・ガラの遺跡
- <62>南レンディヤン・ガラの寺院遺跡
- <63>レンディヤン・ガラの遺跡
- <64>ウェーラナ・バラッサ・ガラの遺跡
- <65>カラウガハウエラの寺院遺跡
- <66>カラウガハウエラ・ガラのバタハ
- <67>マーナ・ガラの遺跡
- <68>トゥンギリヤ・ガラのバタハ
- <69>イエバ・ガラの寺院遺跡
- <70>パンサラ・ガラの寺院遺跡
- <71>アコラハ・ヤーヤの寺院遺跡
- <72>ハタ・ヤーヤの遺跡
- <73>ダハナメ・ヤーヤの遺跡
- <74>ダハナメ・ヤーヤのバタハ
- <75>ハサラカ道路沿いの無名遺跡 (No.1)
- <76>ハサラカ道路沿いの無名遺跡 (No.2)
- <77>ハサラカ道路沿いの無名寺院遺跡 (No.3)
- <78>クンプック・オヤ・ガラの遺跡
- <79>南クンプック・オヤ・ガラのバタハ
- <80>カドゥルピティヤ部落の無名遺跡
- <81>バルピティヤ・ガラのバタハ

【地域および遺跡群の概要】

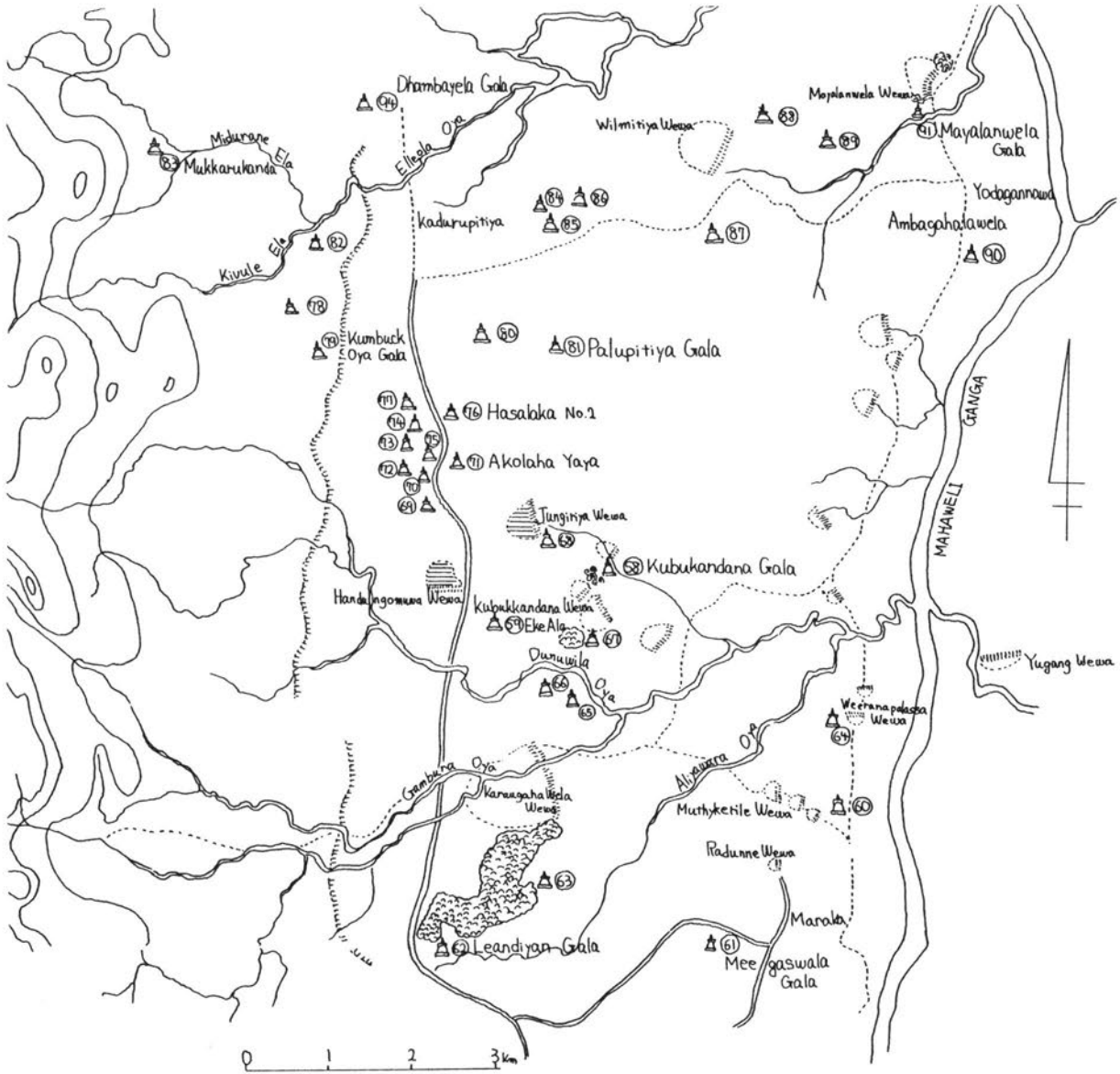
マハウェリ河中流部の左岸地域は、セイロン島中央高地の西端山麓に続く平原であり、そこには中央平原（ピンテンネ平野）の地形的特質である多くの露岩丘が点在する。マハウェリ河を軸とする中央平原一帯の生活は、水利用が可能か否かによって決定される。この点からいえばマラカ村からカドゥルピティヤ部落までのマハウェリ河左岸地域は、マハウェリ河上流から水を引き上げたミニベ用水路、マハウェリ河支流のアリヤウエラ川、ガンブラ川、ドゥスウィラ川を利用し、また水利遺跡を復活させることにより、かなり開発が進められている。特にマハウェリ河左岸を縦貫するミニベ用水路沿いには多くの村落が集中し、雨期ともなれば青々とした水田地帯が広がる。ミニベ用水路沿いの最奥の部落がカドゥルピティヤ部落であり、部落以北は未だ開発が及ばず、多くの野生動物が生息する濃密なジャングル地帯である。また道路は比較的よく整備され、南のハサラカ（国道分岐点）からミニベ用水路沿いにカドゥルピティヤ部落に至るパス道を主道とし、多くのジープ道が村落間を結んでいる。

この地域の遺跡はミニベ用水路に沿ったものが多く、一部の遺跡は改修され現在でも村人の信仰の対象として、小さなお堂が建てられたり、花や線香がそなえられたりしている。しかし、一方では開拓のために崩壊してしまった遺跡も数多い。

【当隊の活動の概容】

この地域における当隊の活動は、主に村落の周辺に限られ、日帰り行程の調査によって多くの遺跡のデータを集めることができた。前半はマラカ村を、後半はカドルピティヤ部落を活動の基地

とし、住民から入手した情報を基に調査を行なった。開発された地域であるため、住民からの情報は多量に入手することができた。しかし、情報を入手しながら調査の及ばなかった遺跡もあり、この地域には、まだ相当の遺跡があると考えられる。



< 5 8 > クブカンダナ・ガラの寺院遺跡

KUBUKKANDANA - GALA (ruins of temple)

Location;

The site is located about 5.1 km. the north-west from the Maraka (B. C) in a straight line. This site has the name and ruins mark on the "Map". The ruins are designated as "Archaeological Reserve" by the government.

Summary;

The ruins are situated on the rock hill which extendsover about 300m. from north to south, about 200 m. from east to west, and is about 60 m. in height. The site consists of three sections.

(1.) The first section. This part extends from the center point to the northwest on the summit of the rock hill. Here are the remains of two dagoba-one is dug out by thieves and the other is being reconstructed (A, B, photo.A fig.A, photo.B) - and two water holes (H, I). There are six small holes which are carved on the rock (J, K). A long flight of steps which is carved out on the northwest slope. Along these steps there are the remains of many small holes (L). On the south slope, there is a long flight of steps which carved out the rock with many small holes arranged in a line parallel to the steps (G,). The steps provides access to the base of the dagoba (A). The steps continue about 30 m.

(2.) The second section. This part extends over the east foot slope of the rock hill. Here

are the remains of a drip - ledged cave which measures 4 m. in height, 3.7 m. in width, 3.4 m. in depth (D, photo.D1, fig D, photo.D2) and one ruined dagoba with many bricks (C, photo.C, fig.C) and a small water hole (F).

Here are the remains of stone plates, a cobra hood rock inscription, a round stone plate and corner stones in a cave (photo.D3-D5, fig.D 2 fig.D3). The remains of a foundation of the brick wall, brickbats and a corner stone are near the entrance of the cave. Carved cut of the rock of the south side slope by the cave (D) are the remains of a flight of small steps (E, photo.E).

(3.) The third section. This part extends over the flat place of the south face of the rock hill. Here are the remains of a square structure with many brickbats (M). At the east by south of the structure (M) are the remains of a structure with a terrace made of stone and a corner stone (N. fig.N).

At the south of the structure (M) are the remains of a group of standing stone pillars with many brickbats (O, photo.O, fig.O). At the south-east of the structure (M) are the remains of a structure with brick foundations (P, photo.P, fig.P), one moon stone (photo P1) and four corner stones. At the east side slope of the structure (M) are the remains of a long flight of stone steps (Q, photo.Q) which extends over about 20 m. from east to west. At the south-west of the structure (M) are the remains of a square throne stone (R, photo.R, fig.R). At the

west of the structure (M) are the remains of inscriptions (ancient letters) carved out of the rock (S, photo.S). At the west of the inscriptions (S) are the remains of a structure with scattered corner stones (T. fig.T). The ruins are severely weathered, but this site is one of the biggest ruins which we researched in this occasion.

【調査】9月17日、18日、25日

【スタッフ】田中、下坂、境、深谷、サイネリス（ガイド・ハンター）、ワサンタ（通訳）、チャンドラグプタ（スィルミナ紙記者）、スィリナマ（マラカ村長）、ブンチパンダ（ポーター）（9名）

【位置】マラカの北西約5.1 km、ハンドゥンゴムワ貯水池の東約1.4 kmの岩丘群の最も大きな岩丘上に位置する。「地図」には名称、遺跡印及び“Archaeological Reserve”の記入がある。

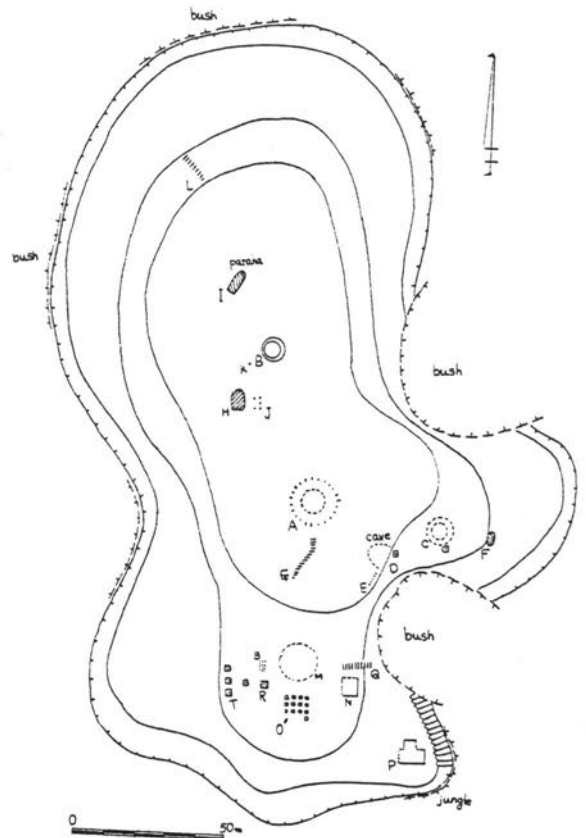
【アプローチ】マラカ村からマラカ道路（通称）を約2 km北上すると広い耕作地に出る。そこから耕作地の中を北西に1.5 km進むと、川幅約5 mのドゥヌヴィラ川に達する。乾期には水量が少なく徒渉も楽である。川を越えると南北に延びるジープ道に出会う。その道を更に2 km北上すると左手（北西方向）に岩丘群が見えてくる。その中で一番大きな岩丘（クブカンダナ・ガラ）をめざし北西へ約1 km直進すると、大小の岩丘に囲まれたクブカンダナ・ガラに到着する。

【全体的状況と位置関係】遺跡は東西約200 m、南北約300 m、高さ約60 mの岩丘上に広く分布し、ほぼ3つの部分に大別できる。まず、岩丘頂上部中心から北西にかけて確認できる仏塔跡、パタハ、岩盤に彫られた階段跡。次に岩丘南側中腹部の平坦な岩盤上に見られる仏座、建造物跡、

階段跡、古文字など。第三に、東側急斜面の僧舎跡と思われる岩窟、仏塔跡、階段跡などである。

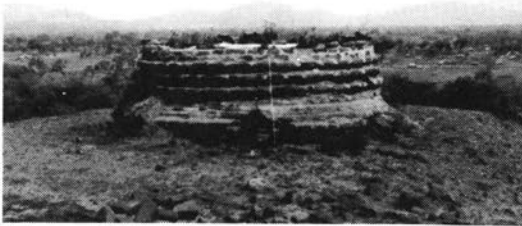
【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕岩丘の頂上部南に位置し、この遺跡の中では最大の仏塔である。20 m四方にわたり土砂が流出し、風化が激しく、本来の敷地形状は定かでない。仏塔の中心部には直径6 m、深さ1.



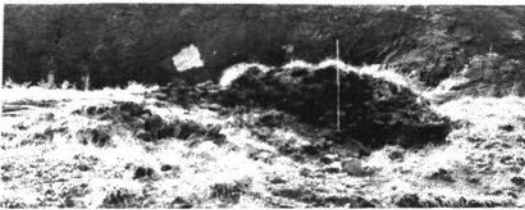
6 mほどの盗掘跡があり、東側部分に土台とドームの区切りが確認できる。

〔B 仏塔跡〕A 仏塔跡の北40 m、岩丘頂上物北端に位置する。土台もすべてレンガ積みで、半径1.9 m、高さ1.2 m。岩盤上40 cmまでは古いレンガ積みで、その上にくずれたレンガを使用して現在新しい仏塔を建造中である(写真B参照)。



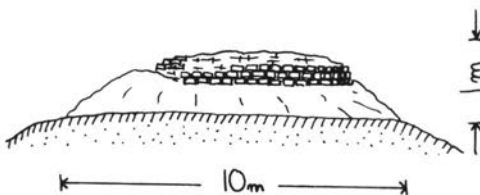
写真B

〔C 仏塔跡〕東側斜面中腹部、D 岩窟の北東20 mに位置する。風化、崩壊が激しく、10 m四方にわたってレンガ片が散在している。敷地形状は不明。仏塔跡中央部は盗掘により陥没している。中央部より西側半分にレンガ積みが高さ1 m、幅2 mにわたり残存している。これらのことから仏塔のドームは半径約3 mと推測することができる(写真C、図C参照)。

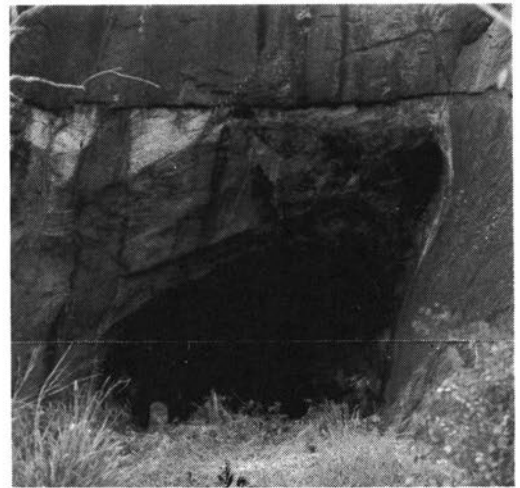
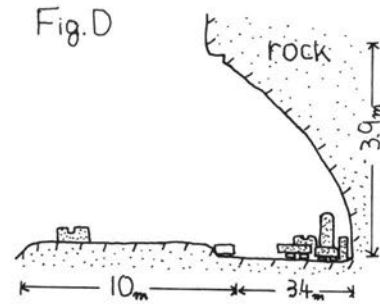


写真C

Fig. C



〔D 岩窟〕A 仏塔跡の南東20 m、東側急斜面直下に位置する。高さ4 m、間口3.7 m、奥行き3.4 m(写真D1、図D、D2参照)天井の端には岩を刻んだヒサシがほどこされ、雨水が天井伝いに内壁を伝って入り込まないようにしてある(写真D2参照)。内部には供物台などの平盤石、コブラの浮彫が施された白い石碑、円形の平盤石、礎石が置かれている(写真D3、D4、D5、図D3、参照)。ヒサシの直下にはレンガ壁の土台が横一列に並び、岩窟前面の壁を形成していたものと推測される。さらにその外側には土に埋もれた礎石があり、レンガ片が散在していることから、建造物があったのではないと思われるが定かではない。



写真D1 写真D2



写真D3



写真D4



写真D5

〔E ステップ〕岩窟の南側斜面に位置し、幅20 cm、長さ30 cm、深さ15 cmの長方形に刻まれたステップが6 cm間隔で南西方向に6.7 mにわたり17段続いている（写真E参照）。

〔F パタハ〕C 仏塔の東20 mに位置する。岩盤の亀裂を利用して穿ったパタハで、長径1.5 m、短径0.7 m、南北に細長く魚形をしている。

〔G 岩盤に刻まれた階段〕A 仏塔跡の南側斜面に約30 mにわたり幅1.8 mの階段が刻まれている。階段の両脇に手すりの柱を立てるのに用いたと思われる四角い穴が1.9 mおきに計11ヶ所並んでいる。階段の総数49。

〔H パタハ〕B 仏塔跡の南西12 mに位置する。長径10 m、短径6.5 m、南北に細長く現在でも水を貯えているが、底には石片や土砂が多量に堆積している。

〔I パタハ〕B 仏塔跡の西北西23 mに位置。北東から南西に細長く、長径10.5 m、短径2.3 m。土砂が堆積し、草むしている。

〔J 柱穴群？〕H パタハの東に隣接して、3 m四方の上に5つの小穴（12×14×7 cm）が掘られている。建造物の柱を立てるために利用されたものと推測されるが、建造物自体の形状は不明。

〔K 柱穴？〕B 仏塔跡の西7.1 m、平らな岩盤上に半径21 cm、深さ20 cmの穴が穿ってある。付近にはレンガ片もなく、1つだけ孤立している。用途不明。

〔L 階段跡〕岩盤に刻まれた階段跡が岩丘の北西斜面に麓から中腹上部まで続いているのが確認できる。中腹下部では風化が激しく途切れているが、全長はかなり長いものである。階段の右脇に風化して丸みがかった小さな穴が数個見られる。これらは手すりの柱を立てるのに使用されたものと推測される。



写真E

〔M 建造物跡〕岩丘南側中腹部中央の平坦な岩盤上に位置する。半径10mにわたりレンガ片が大量に散在している。土台の石垣は土に埋もれ明瞭ではなく、正確な敷地形状は確認できないが、ほぼ一辺18mの正方形である。

建造物跡東側に隣接して石段がくずれおちている。
〔N 建造物跡〕M 建造物跡の東南東約15mに位置する。長辺7m、短辺4mの長方形のテラスで、土台は、谷側が高さ1mにわたり石が積みあげられ内側にはレンガの風化土が堆積し盛り上がっている。建造物自体の敷地形状は不明で、礎石が1つ見受けられる程度である(図N参照)。

〔O 石柱群〕M 建造物跡南西5mに隣接している。6m四方内に高さ125cm、幅25cm、厚さ25cmの石柱が16本等間隔に立ち並び、石柱と石柱の間にはレンガ片が埋もれている。建造物跡の明確な敷地形状は確認できない(写真O、図O参照)。

〔P 建造物跡〕M 建造物跡の南東約28mに位置する。平坦な岩盤上に前方後方形のレンガ積みの土台跡が確認できる〔写真P、図P参照〕。内側にはムーン・ストーンと思われる半円形の半径40cm、厚さ9cmの表面が削られた石板が見うけられる(写真P2参照)。また、4個の礎石が確認できる。



写真O

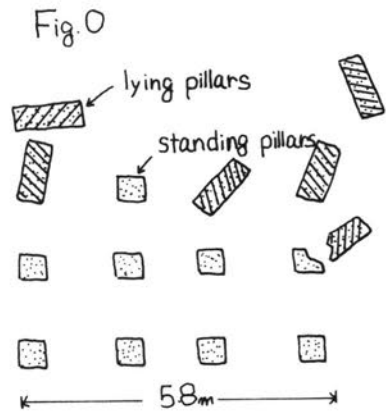


Fig.N

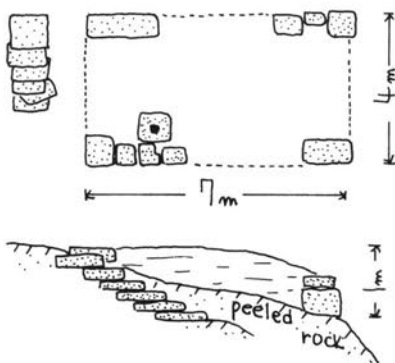
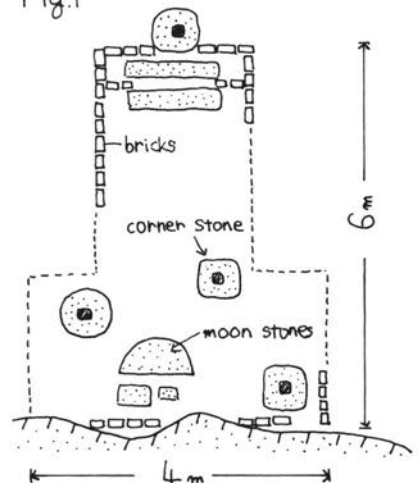


Fig.P

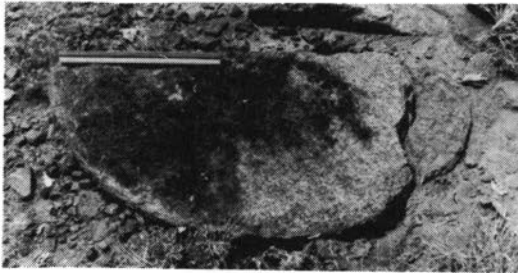




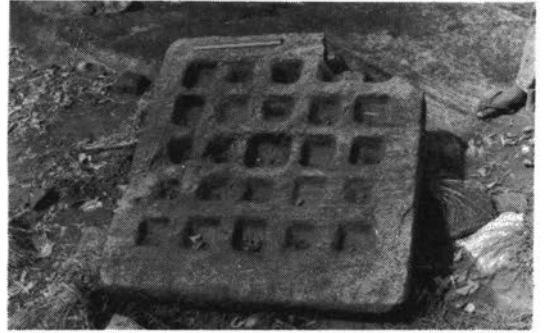
写真P



写真Q



写真P2



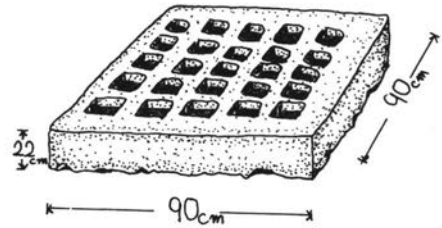
写真R

〔Q階段跡〕M建造物跡の東約10mの地点より、東側斜面上に東西20mにわたり石段が組まれている。石段に使われている石材の大きさは180×24×13cm。段数64段。階段の上半分はほぼ原形をとどめている（写真Q参照）。

〔R仏座〕M建造物跡の南西10mに位置する。仏座の大きさは一辺が90cm、厚さ22cmの正方形。原形をとどめている。他の位置から運ばれてきたものらしく仏座だけが放置されている（写真R、図R参照）。

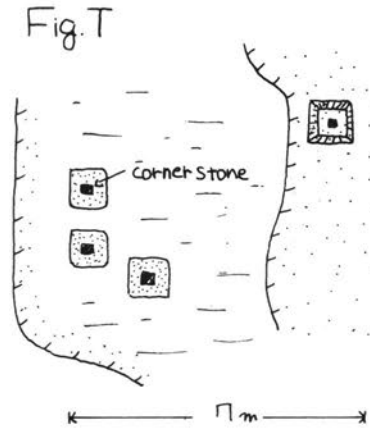
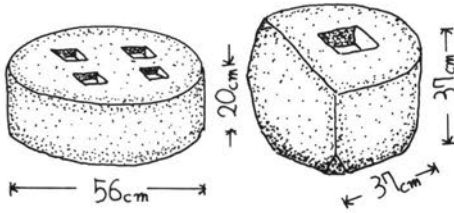
〔S岩盤に刻まれた古文字〕M建造物跡の西約10mの地点。幅5m、高さ1.2mほどの岩壁に横4列、2.5mにわたり古文字が刻まれている。風化が進みあまり鮮明ではない（写真S参照）。ブラフミー系の古代シンハラ文字だが村人の話によると彼らはこれを「ナガラアクル」（ヘビ文字）と呼びヘビを信仰する種族が書きつけたものだと伝えている。

Fig. R



写真S

(T 建造物跡) M 建造物跡の西約 15 m に位置する。古文字の刻まれた岩盤に隣接して礎石が点在している。礎石以外に建造物跡を示すレンガ片などは見受けられない。礎石の移動した形跡が見られ、本来の敷地形状は不明 (図 T 参照) 。



< 5 9 > エケ・アラの寺院遺跡

EKE - ALA (ruins of temple)

Location;

The ruins were found in the field surrounded by arable lands. This site is located about 4.3 km. the south from the Kadurupitiya (II.B. C) in a straight line.

Summary;

Here are the remains of a rectangular stone wall which is almost buried under the ground. The length of one side of the wall is 5.3m.(A). The remains of two corner stones are by the west side of the wall and stone pillars which formed the entrance are by the south side of the wall. The southwest of the wall are the remains of a stone plate (B, fig. B). The southeast of the wall are the remains of a dagoba dug into by thieves on the rectangular base platform with stone steps (C, fig. C). The southwest of the dagoba are the remains of a ruined image house with many bricks (D, fig. D). The remains of

the Buddha statue and a sacred foot print stone half buried under the ground are also found at the same location. The statue is about 2m. in height and made of granite (E, fig. E1 - E5, photo. E1 - E6). At the site also are the remains of two foundations of structures with many bricks (F, G).

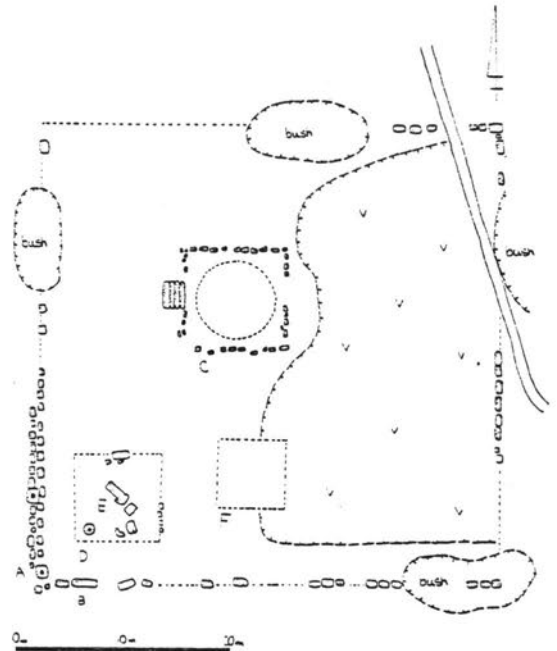
【調査】10月25日、26日

【スタッフ】田中、ウパーリ、ジナダーサ(3名)

【位置】カドゥルピティアの南方約4.3km。ハサラカ道路とハンドゥンゴムワ小学校へ通じるジープ道の分岐より、南南東800mの地点。ハンドゥンゴムワ貯水池の東に広がる水田地帯の中央部に位置する。「地図」には名称、遺跡印ともなし。

【アプローチ】カドゥルピティアよりハサラカ道路を南下する。約1時間ほどでハンドゥンゴムワ貯水池の北端に到着する。そこにある茶店のわきを東に入ると南側に人家がある。その人家のわきを通り、ハンドゥンゴムワ貯水池より水を引く水田の畦道を南へ約500m進み、そこから南東へ約400m行くと遺跡に到着する。乾季であれば、ハサラカ道路から東へ直進することも可能である。

【全体的状況と位置関係】水田地帯の中央部の1m程高くなった土地にある遺跡。遺跡は開墾をまぬがれた約100m四方の土地にあり、一面草に被われている。その草地の中に53m四方の外壁跡があり角石が地表に露出している。また中央部には残存度のよい仏塔跡がある。仏塔跡の南西には本堂があり、そこには倒壊した仏像がある。本堂の南西の外壁沿いに2個の礎石がある。また、外壁の南側には倒壊した石柱があり、入口があったと考えられる。その他にもレンガが散在した建造物跡がある。



全体的に残存度がよく、発掘が期待される遺跡である。規模も大きく、当隊が発見した仏像も表面が風化しているものの主要な部分が残存し、重要な遺跡の一つである。しかも、遺跡の多くの部分は土砂に埋もれており、発掘をすれば復元は十分可能である。しかし、この土地も現在は開墾中であり、数年もすれば全く崩壊してしまうであろう。現在、仏塔跡の東と北の一部は基壇のすぐわきまで畑で、東側もまた外壁の10m手前まで水田として耕作されている。

【各部分の状況】

〔A外壁跡〕外壁と思われる石垣が東西・南北に

5.3 m 四方の正方形を形成している。外壁の外側には建造物跡と思われるレンガ材が集中している場所もあり、また遺跡の西側から建材の角石を運び去ったという村人の話から、外壁の外側にも建造物があったことは十分考えられる。外壁の南辺と西辺の角石の並びは残存度が良好で、西辺の石列は1.6 mにわたって2列になり、ここには2個の礎石が確認できる。南辺には、石柱が倒壊しており入口であったと考えられる。

〔B石板〕近くの人家に遺跡より運び込んだという石板があった。外壁の南西の角より西方へ2.5 mの地点に掘りおこした跡がある。石板は73×38×1.4 cmで直方体、表面は滑らかである。上面にはひょうたん形のくぼみがあり、かなり原形を留めているが、用途は不明である。(図B参照)。

〔C仏塔跡〕外壁の東辺から2.7 m、南辺より3.1 mの地点に仏塔跡がある。地表より3 mほど小高く、土砂が流出している。仏塔は草におおわれ、ヤブと化し、最上部には5 mほどの木もはえている。仏塔の残存度は良好であるが、盗掘によってレンガ片と土砂が流出し、正確な高さなどは不明。盗掘跡は2年前に村人が掘ったもので、深さ3 m、基壇まで到達している。盗掘跡の内部はレンガが積みあげられた様子がよくわかる。東側には盗掘時の土砂運搬用の溝が幅1 mにわたって掘られている(図C参照)。仏塔の基壇は、東西・南北の方位に面し、西側には階段跡がある。石組みは東西1.6 m、南北1.8 mであるが、高さは土砂が流出しており確認不可能。仏塔の基壇などは発掘をすればかなり形状は明らかになるであろう。

〔D本堂跡〕倒壊した仏像があるので間違いなく本堂であると思われる。仏塔跡の南西1.5 mに位置する。草におおわれ、多数のレンガ片が散在し7 m四方にわたり土盛り状となっている。南側には地表に表出したレンガの並びが見られるが全体は地下に埋没しているので、その形状は全くわか

Fig. B

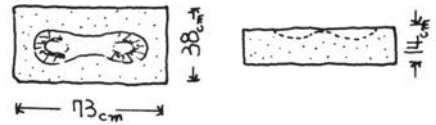
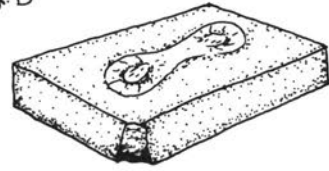


Fig. C

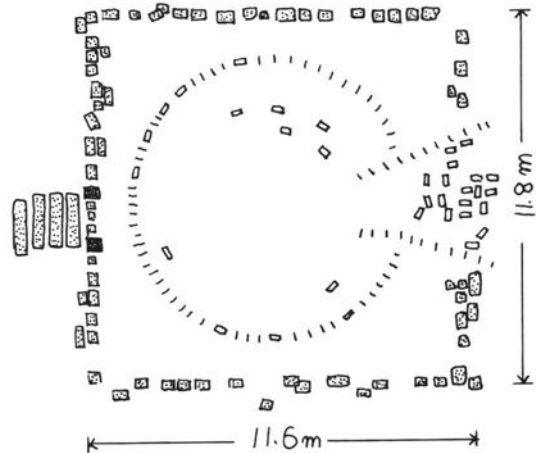
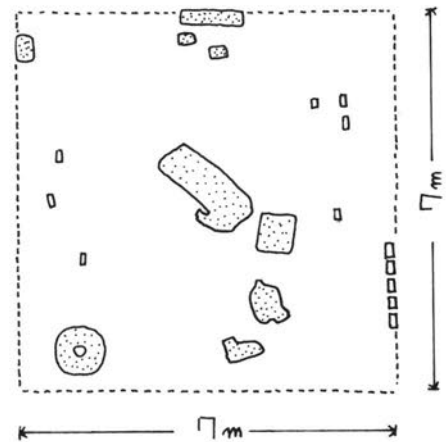


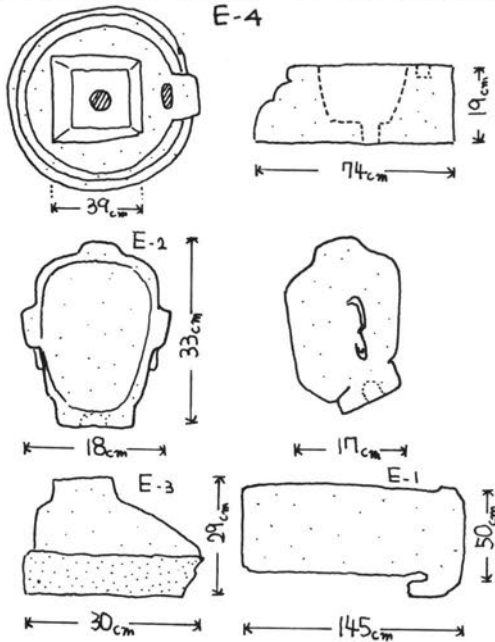
Fig. D



らない。中央部の盗掘跡には仏像の胴体部がうつぶせに倒壊している。盗掘跡から見ても、全体は地下1 mほどに埋没していると思われる。仏像の胴体部の下には仏足石が埋もれている(図D参照)。

〔E 仏像〕本堂跡に胴体部があり（写真E1、図E1参照）、前面部が埋もれている。

また、頭部（図E2）、足部（写真E3、図E3）、仏座（写真E4、図E4）が周囲に散在している。仏像は立像で各部分に分解しているとはいえ、主要部は残存しているので形態はよくわかる。岩質は花崗岩で表面は風化している。仏像は頭部、胴体部、足部、仏座を組み合わせた完全体では高さ2mほどになる。また、両腕は発見できなかった。頭部、両腕と胴体の結合部分には直径1cmほどの穴があり芯を入れていたと思われる（写真E5、図E5）。足部と胴体の結合状態は不明。足部は仏座にはまりこむようになっている（写真E6参照）。



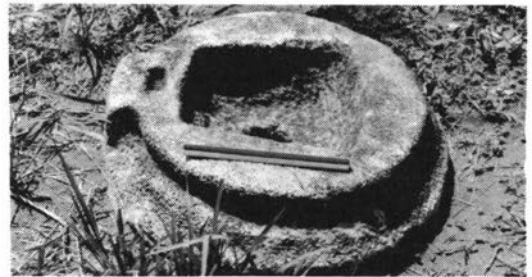
写真E1

〔F 建造物跡〕仏塔跡の南10mに建造物跡と思われる6m四方にわたり小高く盛りあがった場所がある。多数のレンガが地表に表出しているが、全体は地下に埋もれ、その形状を知ることはできない。

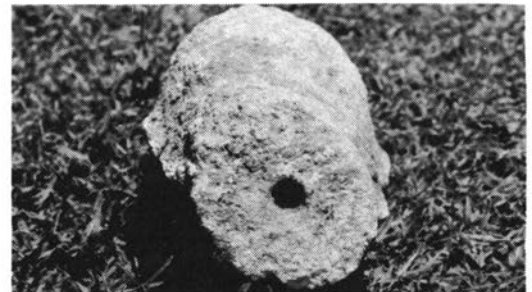
〔G 建造物跡?〕外壁の外側、本堂の西5mほどの地点にも建造物跡とおぼしきレンガ片の散在した場所があるが、その確認は不可能である。



写真E3



写真E4



写真E5



写真E6

<60> ムトゥコヴィラ・ガラの寺院遺跡

MUTUKOVILA-GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 1.9 km. the north-west from the Maraka (B.C) in a straight line.

Summary;

The ruins are situated on the rock hill (Mutukovila-Gala) which extends over 250m. from north to south, 100m. from east to west. The remains of three water holes are dotted on the rock hill (E, F, G, photo. E, photo. G). The remains of a groove run zigzag to the water hole (G) on the slope of the hill (H). On the center point by west, here are the remains of a platform with two flights of stone steps and a stone flower alter (A, fig. A, fig. A1). On the northeast side of the hill, here are the remains of a stone foundation of a terrace (B). On the east by north side of the hill, four corner stones from a line from east to west (C, fig. C, photo. C). On the southeast side of the hill, here are the remains of seven corner stones which form parallel lines (D, fig. D). This site is all weathered.

【調査】9月19日

【スタッフ】境、下坂、ワサンタ(3名)

【位置】マラカの北西約1.9 km。ラドゥンネ貯水池の北約0.5 kmに位置する。南南西方向にマラカ・ガラ、北西方向にマーナ・ガラを望む。「地図」には遺跡印が記入されている。名称はなし。

【アプローチ】マラカ村からマラカ道路を約1 km北上すると右手(北東方向)にラドゥンネ貯水池

が見えてくる。貯水池の北側に小規模な岩丘群があり、その岩丘群をめざして進む。遺跡は中央の岩丘上に位置。

【全体的状況と位置関係】岩丘は南北250 m、東西100 mほどの規模で、西側斜面は土に覆われている。頂上の本堂(古い土台の上に新しい本堂が建てられ、現在でも村人の参拝が行なわれている)を中心に北側斜面に石組みのテラス、岩の

窪地を利用して掘られたパタハがある。

【各部分の状況】

〔A 本堂〕土台は半径約4 mの土盛りとなっており、北側に石組みが若干残っているだけで正確な敷地形状は確認できない。本堂の南側には石段と思われる石材が散在しており、西側には幅1.5 mの石段が4～5段確認できる（図A参照）。本堂の正面（東側）には供花台と思われる長方形の石板が置かれている（図A1参照）。

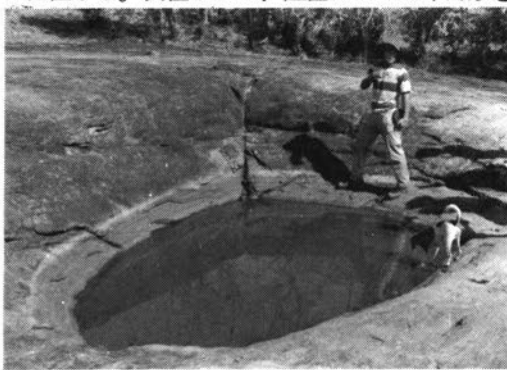
〔B 建造物跡〕本堂の北東15 mの斜面にテラスを形成している石組みが崩れながらも東西に約11 mの長さで残っている。

〔C 建造物跡〕本堂の北東10 m、B建造物跡の南に隣接し、平らな岩丘上に4個の礎石が東西1列に並んでいる。ただし同礎石の本来の位置は不明（写真C、図C参照）。

〔D 礎石群〕本堂の南東30 m、頂上部の斜面に礎石が等間隔に平行して並んでいる。数年前までは礎石と礎石の間約1.7 mに石板が敷かれ階段を形成していたということだが現在は確認できない（図D参照）。

〔E パタハ〕本堂の北80 m、頂上部より一段低い岩盤上に位置する。長径6 m、短径3.2 mの南北に長い楕円形のパタハ（写真E参照）。

〔F パタハ〕Eパタハの北東20 m、岩丘の北端に位置する。長径3.8 m、短径2.8 mの半円形を

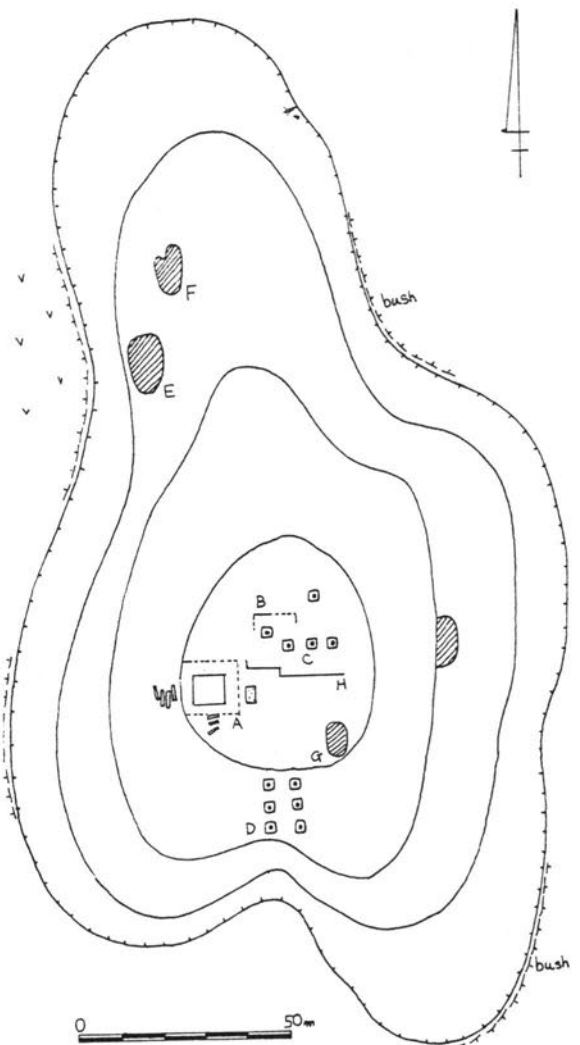


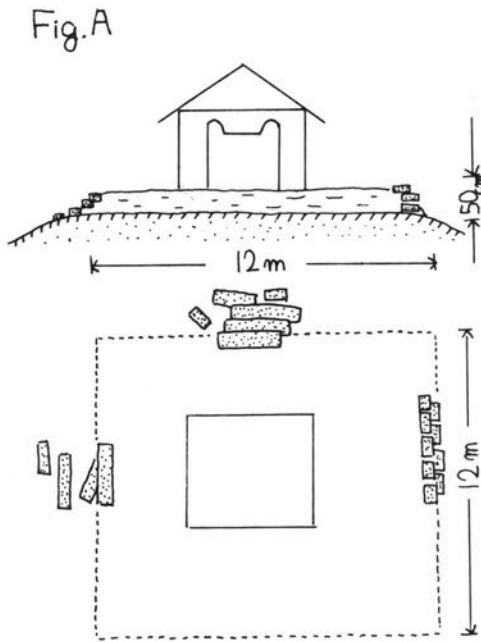
写真E

しており、深さ50 cm程度の浅いパタハ。

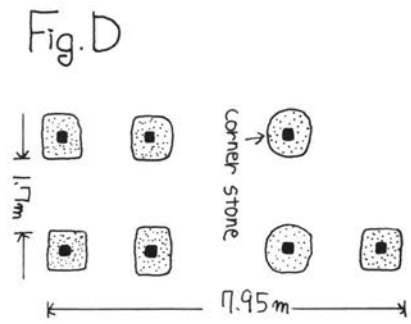
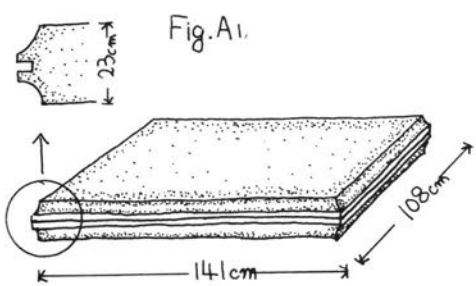
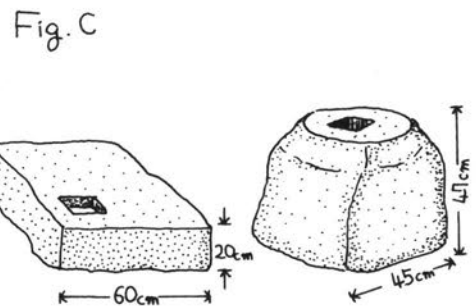
〔G パタハ〕本堂の東南東20 m、傾斜の緩やかな岩盤上に位置する。パタハの東側には堆積した土砂を掘り出してできた土盛りがある。長径4.7 m、短径2.6 mの南北に楕円形のパタハ。

〔H 溝〕本堂の正面からC建造物跡を横切り、人為的に彫られた幅10 cm、深さ10 cm程の溝がGパタハの方角へジグザグに伸びている。全長約16 m。用途は不明だが、C建造物の排水目的、及びGパタハへの集水のためのものではないか。





写真C



<6 1> ミーガスワラ・ガラの遺跡

MEEGASWALA-GALA (ruins of cave and water hole)

Location;

This site is located about 1.2 km. the west from the Maraka (B.C) in a straight line.

Summary;

This ruins are situated on the rock hill which is about 400m.in the circumference, about 500m.in height. On the halfway up the hill, here are the remains of a cave (A) in which

there are the remains of a flower altar.

On the east by north slope of the rock hill,
there are the remains of a flight of steps which
is carved on the rock (B, photo, B). On the
south by east slope of the hill, there are the
remains of six water holes (C, fig. C, D, E, F, G, H).

【調査】9月24日

【スタッフ】境、深谷、ワサンタ(3名)

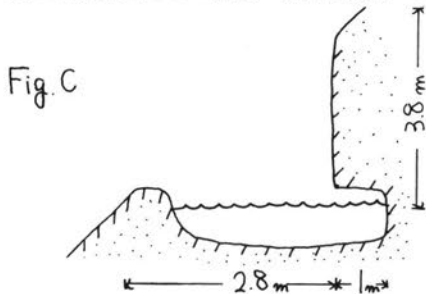
【位置】マラカの西約1.2 kmに位置。西北西にレンディヤン・ガラ、東南東にマラカ・ガラを望む。「地図」には名称、遺跡印ともなく、岩丘印のみ記入されている。

【アプローチ】マラカの西約1 kmに位置する中規模な岩丘群を目指し耕作地の中を進む。正面の岩丘群中央の高さ約50 m、周囲約400 mの規模の岩丘が、ミーガスワラ・ガラである。南東側斜面に礼拝堂を望むことができる。

【全体的状況と位置関係】岩丘南東斜面の岩窟を中心に大小6つのバタハが確認できる。頂上部のわずかな平坦地以外は斜面が急勾配で、岩盤の風化も激しく、建造物跡を示す石積みやレンガ片などは確認できない。

【各部分の状況】

〔A岩窟〕岩丘南東斜面下部に位置する。岩窟の前面には木造建築の入口があり、6年前に新しく建てられたものである。岩窟の間口の幅5.5 m、高さ3.5 m、奥行き6.2 m、奥には祭壇が設けられ、現在も礼拝堂として村人の信仰を集めている。



〔B岩盤に刻まれた階段〕岩窟の東約3 m地点より東北東斜面にかけて17段の階段跡が明瞭に残っている。全長5 m、幅40 cm。1段の高さは約7 cm(写真B参照)。

〔Cバタハ〕岩窟より西約10 mの急斜面上に位置する。山側に深く掘りこまれ、水の蒸発を防いでいる。バタハの大きさは長径3.8 m、短径2.5 m、深さ1 m。土砂の堆積も少なく現在でも使用可能(図C参照)。

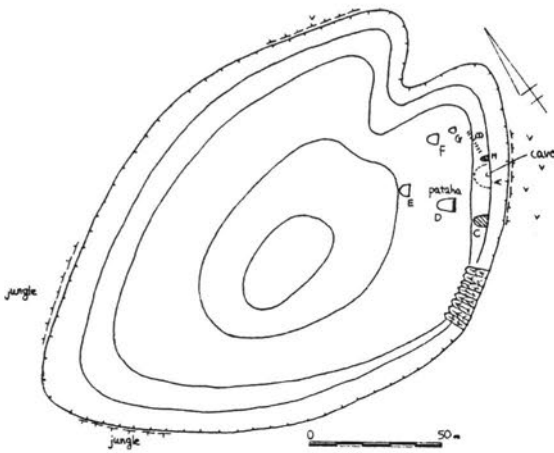
〔Dバタハ〕Cバタハの北約10 m、岩窟のほぼ真上に位置する。バタハの大きさは長径8.5 m、短径4.5 m。表面は草むして土砂に埋もれている。自然の岩盤の窪みを利用して、谷側を角石で壁を組み、せき止めただけのもの。石積みは、幅50 cm、長さ1.5 mにわたり、50 cmほどの高さで残っている。

〔Eバタハ〕岩窟の北北西約50 mに位置する。岩盤の窪みを利用して作られ、長径6 m、短径3.2 mの細長いバタハ。内側は土砂が堆積し草むしている。

〔Fバタハ〕岩窟の北約50 mに位置する。バタハの形状は長径2.2 m、短径1.5 mほどのひょうたん型。

〔Gバタハ〕Fバタハの南西約30 mに位置する。石片や土砂が多量に流れこみ草むしている。長径3 m、短径2 m。

〔Hバタハ〕岩窟の入口に隣接し、岩盤に垂直に穿つてある。バタハの大きさは長径1 m、短径0.7 m。



写真B

<6 2> 南レンディヤン・ガラの寺院遺跡

SOUTH-LEANDIYAN-GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 4.3 km. the west from the Maraka (B.C) in a straight line.

This site has a mark of Gala on the "Map".

Summary;

This ruins are situated on the low rock hill which is about 200m.in the circumference, about 10m.in height. On the summit of the hill, there are the remains of a dagoba dug into by theaves with many brickbats (A, fig. A). At the west by south of the dagoba, there are the remains of a flight of stone steps which is about 2m. in width (B). At the northwest of the dagoba, there are the remains of a structure with three corner stones (C, photo.C). At the west by north of the dagoba, there are the remains of a stone statue whose height is about 1.5m. But its shape is not clear (D, fig. D, photo. D1 - D3). The remains of a corner stone are also here.

【調査】9月23日

【スタッフ】境、深谷、ワサンタ、サイネリス(4名)

【位置】マラカの西約4.3 km地点の孤立岩丘上に位置する。「地図」には名称、遺跡印ともになし。遺跡の北約200 mに周囲約6 km、高さ約120 mの巨大岩丘あり。この岩丘は「地図」に印あり。

【アプローチ】マラカよりハサラカ道路へ通じるバナサテ道路(通称)を北西へ約2 km進む。両脇に耕作地帯が広がり、西方にひととき巨大な露岩丘が見える。その岩丘の南端を目指し耕作地を横ぎり、アリヤワラ川を越え更に1.5 km進むと高さ10 m、周囲約200 mの岩丘に到着する。

【全体的状況と位置関係】岩丘は仏塔跡のある頂上部以外は周囲の耕作地とさほど高低差がない。岩丘の表面は土砂でほとんど覆われ、仏塔の北西側に位置する建造物跡や石像付近一帯はヤブが生い茂っている。岩丘の麓では現在新しく寺院を建設中で完成も間近である。

【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕岩丘の頂上に位置する。土台の石垣は土に埋もれ、正確な敷地形状は不明。中央部には盗掘跡があり、内部のレンガ組みを露呈させている。高さ1.6 m、半径5 mにわたり土盛り状に崩壊し、レンガ片が散在している(図A参照)。

〔B 階段跡〕A 仏塔跡の西南西約50 mに位置する。大小4~5個の角石が幅約2 mに階段状に並べられているが、大部分が土に埋もれ2段しか確認できない。

〔C 建造物跡〕A 仏塔跡の北西30 m、岩盤上の平坦地に礎石が南北一列に3個並んでいる。土砂の中に半ば埋もれ、礎石以外には建造物跡を示すレンガ片などは確認できない。この礎石の位置関係だけでは建造物の敷地形状は推測できない(写真C参照)。

〔D 石像〕A 仏塔跡の西北西約100 m、C 建造

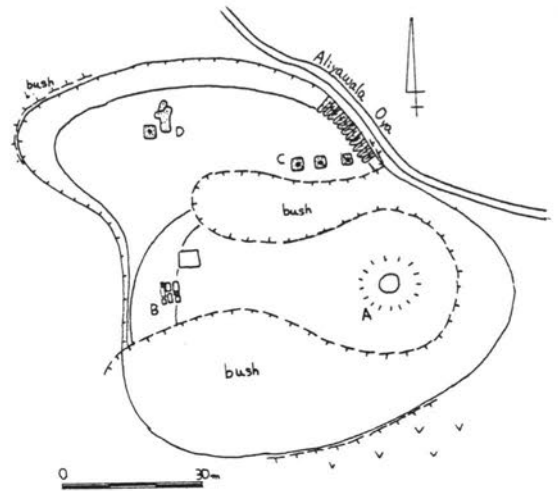
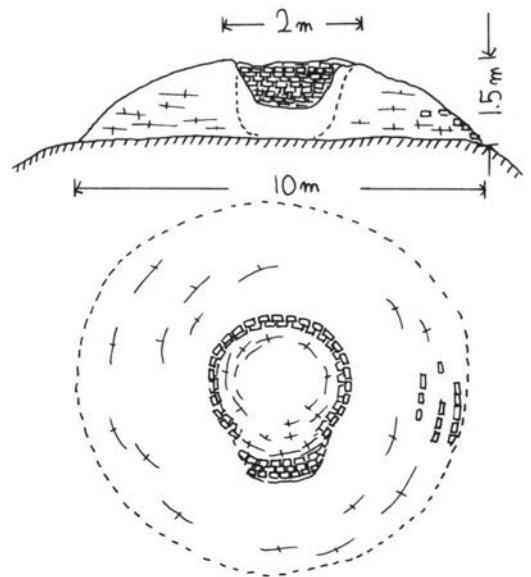
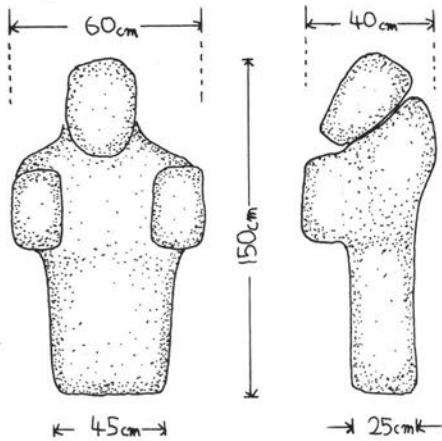


Fig. A

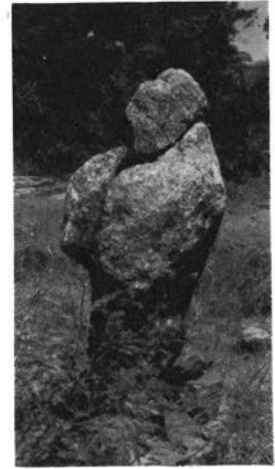


物跡と同じ岩丘の平坦地端に位置する。石像は頭部と胴体の2つに割れたものを積み上げてある。高さ1.5 m、幅50 cm、顔の凹凸はなく、腕も肩よりわずかに突き出ているだけで、かろうじて形がわかる程度(写真D1、D2、図D参照)。石像の脇に礎石(写真D3)がある。

Fig. D



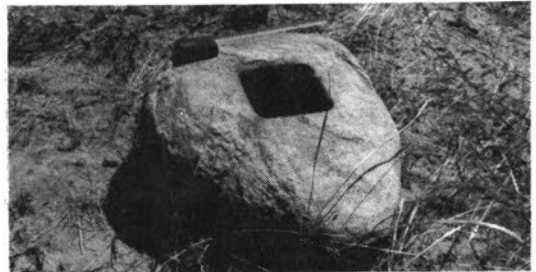
写真D1



写真D 2



写真C



写真D3

< 6 3 > レンディヤン・ガラの遺跡

LEANDIYAN-GALA (ruins of cave and water hole)

Location;

This site is located about 4 km. the west from the Maraka (B.C) in a straight line. This site has a mark of Gala on the "Map".

Summary;

The ruins are situated on the large rock hill (Leandiyán-Gala) which is about 6km.in the circumference, about 120m.in height. At the point about 100m.the southwest from the summit of the hill, there are the remains of a cave which is

3.4m.in height, 2.2m.in width, 3m.in depth with some fragment of stone plates inside (A).

At the point about 100m the south from the summit of the hill, there are the remains of a water hole with small cave which is 50cm. in hight, 1 m. in width, 80 cm. in depth (B).

At the point about 120 m. the south from the rectangular water hole (C).

At the point about 200m.the northwest from the summit of the hill, there are the remains of a water hole (D). At the foot point about 300m. the east from the summit of the hill, there are the remains of a triangle water hole (E).

【調査】9月23日

【スタッフ】境、深谷、ワサンタ、サイネリス(4名)

【位置】マラカの西北西約4km地点の巨大岩丘上に位置する。「地図」に岩丘の印あり。名称・遺跡印はともになし。

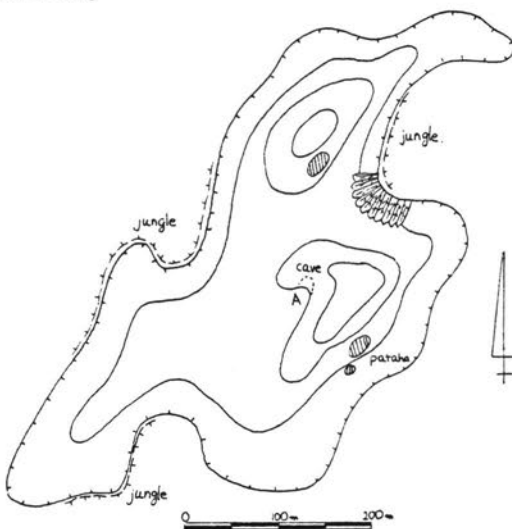
【アプローチ】南レンディヤン・ガラ寺院遺跡<62>参照。

【全体的状況と位置関係】岩丘は、高さ120m、周囲6kmほどの規模の巨大な露岩丘で、ほとんど樹木もない。頂上からはワスゴムワ自然保護区一帯を見わたすことができる。岩丘の東側は耕作地が広がっているが、西側は濃密なジャングル地帯で、この付近は野象が数多く生息している。岩丘の東斜面に岩窟と4つのパタハが確認できる。岩丘の北側に隣接して寺院遺跡<62>があることからその付属遺跡の可能性もある。

【各部分の状況】

〔A岩窟〕岩丘の頂上より南西約100mに位置する。高さ3.4m、幅2.2m、奥行き3m。内部には石板のかけらが散乱している他には何もない。他の遺跡の岩窟でみられるような天井のヒサンはほどこされていない(写真A参照)。

〔Bパタハ〕岩丘の頂上より南約100mに位置する。長径1.4m、短径3.6mの規模をもつ東西に細長いパタハである。このパタハの西辺に接して高さ50cm、幅1m、奥行き80cmの岩穴がうがってある。



〔Cバタハ〕岩丘の頂上より南約120mに位置する。深さ60cm、一辺約1mの方形のバタハ。

〔Dバタハ〕岩丘の頂上より北西約200mに位置する。長径10.5m、短径5m、東西に細長いバタハ。バタハの内部は土砂が堆積して草むしている。

〔Eバタハ〕岩丘の頂上より東約300m、岩丘の麓の岩盤上に位置する。長径32m、短径10mほどの三角形のバタハ。乾期のため水は溜まっていないが、現在でも付近の村人が利用している。通称「イーバンバタハ」と呼ばれている。

<64> ウェーラナ・パラッサ・ガラの遺跡

WEERANA PALASSA-GALA

Location;

This site is located about 2.4 km. the north by east from the Maraka (B.C) in a straight line.

This site has a mark of ruins on the "Map".

Summary;

The ruins are situated on the rock hill (the Weerana Palassa-Gala) which extends over 190m. from north to south, 155m, from east to south about 20m. in height. The east foot of the hill, there are the remains of a water hole which measures 3.2 m. by 7m. (A). At the south side of the water hole, here are the remains of a cave which measures 2m. in height, 1.4m. in width, 4.5m. in depth (B,). Many bricks are there near the entrance of the cave. On the summit of the hill, here are the remains of two flat piles of soil. But those are indistinct site. Some rubbles and bricks lie scattered on the north foot of the hill.

【調査】10月17日

【スタッフ】田中、下坂、境、ワサンタ、サイネリス(5名)

【位置】マラカの北北東2.4kmの地点の岩丘上に位置。「地図」に岩丘の印はあるが、名称、遺跡

印はない。西北西の方角にマーナ・ガラを望む。

【アプローチ】マラカの主道を北上し、クブカンダナへ続く道との分岐を東に折れ、脇に民家と水田を見ながら進む。ラドゥンネ貯水池へ続く道との分岐点を通り過ぎ、さらに200mほど進んだ

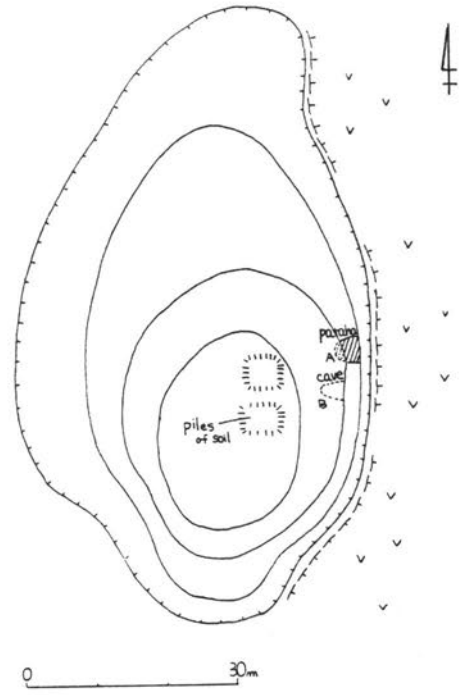
地点から道はずれ、北西方向に水田の畦道に沿って行くと前方にウェーラナ・バラッサ・ガラが見えてくる。

【全体的状況と位置関係】岩丘の規模は東西155m、南北190mで、高さ20m。周囲には耕作地が広がっている。岩丘は頂上部から北へ伸びる露岩部とその脇に広がる草地とに分かれ、風化が著しく、明確な建造物跡は確認できない。北東側緩斜面には石片が散在し、北側緩斜面の麓にはレンガ片と石片が散在しているが、何を形成していたものかは不明。また、頂上部の北側には2ヶ所隣接して10m四方の土盛りがあり、石片が散在しているが、これらが建造物跡であると判断するのは困難である。南東斜面の中腹にはパタハと岩窟がある。

【各部分の状況】

〔Aパタハ〕南北3.2m、東西7m、深さ50cmのパタハであるが、北側横壁部は奥に3mほど岩盤を深く穿っており、貯水量を増加させている。現在も、付近の住民がその水を利用している。

〔B岩窟〕岩窟は入口の高さ2m、間口1.4m、奥行4.5mで、奥に入るにつれ狭くなり、最深部の高さは0.9mとなっている。岩窟の入口付近にはレンガ材が散在しており、入口の壁を形成し



ていたものと考えられる。岩窟内に遺跡物はなく、また、他の岩窟に見られる雨よけのヒサンもない。

岩窟より2.5m西方に長さ1m、幅30cm、奥行2m程の亀裂があり、その西にステップが2段彫られている。また、その上部5mの地点にパタハとおぼしき長径1m、短径50cm、深さ30cmの窪みがあり、水が溜まっている。

<65> カラウガハウェラの遺跡

KARAUGAHAWELA

Location;

This site is located about 5.4km. the south by east from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

Great many bricks and rubbles lie scattered in the fields within 30m.around.

Some of bricks are patterned wave lines on those faces (photo). The remains of three corner stones are also here (fig. B, C, photo. C, D). This site have been destroyed for cultivation. Formerly there must have been more site here.

【調査】10月26日

【スタッフ】下坂、サイネリス、ウバーリ(3名)

【位置】カドゥルピティヤの南南東5.4 km、マラカの西北4.1 kmの地点で、ブッサラ・ガラ群から東約0.6 kmの小岩丘群に囲まれた耕作地の中に位置する。北北東にマーナ・ガラを望む。「地図」には遺跡印はなし。

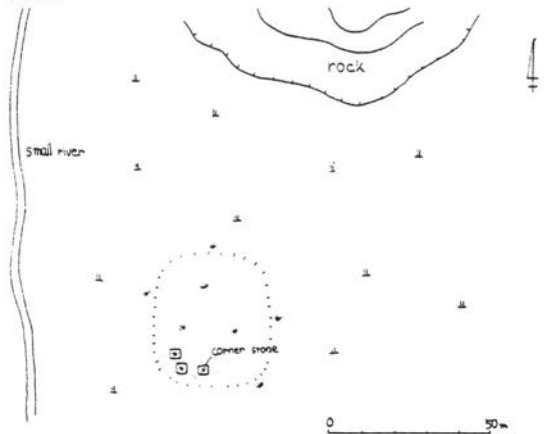
【アプローチ】カドゥルピティヤよりハサラカ道路を南下。約1時間程でハンドゥンゴムワ貯水池の北端に到着する。そこから耕作地の中を南南東に行くと、エケアラの寺院遺跡<60>に着く。その地点より、東へ畦道沿いに約500 m行くとジープ道(通称ブッサラ・ヤーヤ)に出る。更に南西へ耕作地の中を進むと遺跡に到着する。

【全体的状況と位置関係】5つほどの低い露岩丘が遺跡の周囲にあり、その裾には数戸の人家が建てられている。遺跡付近は大部分が開墾された耕作地となっている。寺院のあったと思われる地域は、一部畑と化し、その他の部分は、草が繁茂するままに放置されている。この土地は、地表が人為的に攪拌されており、遺跡全体の形状を確認することは困難である。しかし、ほぼ30 m四方にわたる多量のレンガ片の散在とその南西端に残る3個の礎石から、ここにある程度の規模の遺跡が存在したことが推測される。但し村人の話によると遺跡のレンガや石材などは、村人の住居の建築材として耕作時に掘り起こし、運び去ってしまったそうである。遺跡付近にはこのように掘り起こし、集積されたレンガ片や石片の山がいくつか

見られた。

【各部分の状況】

〔A 散在するレンガ片〕 土に埋もれているものや、無造作に地表に露出しているものなど、その状況は様々である。レンガ片は $21 \times 17 \times 6$ cmの大きさのものが多く、他に $32 \times 18 \times 5$ cmのものも多数散在する。また、大きさが $41 \times 22 \times 8$ cmと非常に長いレンガ、端がなめらかに弧を描いているレンガ、表面に3~4本の波模様の溝がはいったレンガ片などを確認した(写真A1参照)。



写真A

<66> カラウガハウエラ・ガラのパタハ

KARAUGAHAWELA - GALA (ruins of water hole)

Location;

This site is located about 5.6km the south by east from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

Here are the remains of a water hole (photo. A) and two grooves on the low rock outcrop which extends over 76m. from north to south, 24m. from east to west, about 5m. in height.

【調査】10月26日

【スタッフ】下坂、サイネリス、ウパーリ(3名)

【位置】カドゥルピティヤの南南東5.6km、マラカの北西4.3kmの地点で、プッサラ・ガラ群の東、約0.6kmの小岩丘上に位置。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

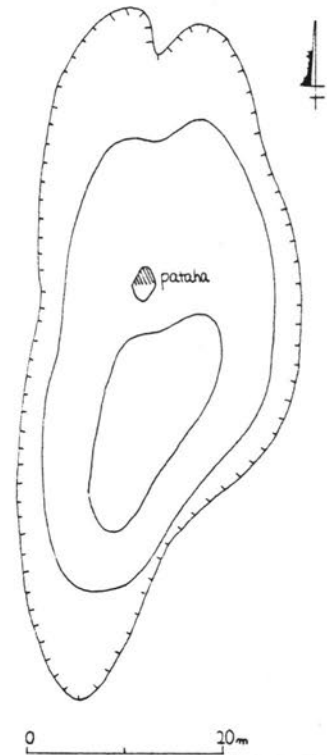
【アプローチ】カラウガハ・ウエワの寺院遺跡(<65>のアプローチ参照)より、東南東に向かって約150m耕作地を横断して進むと到着。

【全体的状況と位置関係】耕作地に囲まれた、南北に細長い露岩丘の中央部にパタハとパタハ状の溝がある。岩丘は南北76m、東西24mの規模で、高さ約5m、南東端は大きく崩れ、南側の頂上から北へなだらかに傾斜している。樹木が生い茂って露岩丘を取り巻いている。

【各部分の状況】

〔Aパタハ〕南北に細長くひし形をしている。断面は二段になっており内側は長径2.0m、短径1.7mで、外側は長径4m、短径2.4m。深さは最深部が1.6mである(写真A参照)。

〔Bパタハ状の溝〕Aパタハの南東0.67mに位置。南北に細長く、魚型の流線型をしており、長径83cm、短径15cmで深さは60cm。



写真A

<67> マーナ・ガラの遺跡

MANA - GALA

Location;

This site is located about 4.3km. the north-west from the Maraka (BC) in a straight line. This site has a mark of ruins on the "Map".

Summary;

The ruins are situated on the rock hill which is about 1km. in circumference, about 320m. in diameter, about 40m. in height .

The rock hill is surrounded by the arable lands. This ruins are situated on top of the rock hill. This ancient site is almost weathered and a new temple is building on those site. So the whole scle and form of the ruins are not clear. There is a new small image house which bears a dagoba on the roof (B), a concrete gatepost, a concrete base of a structure, and a large base platform which is piled up with rubbles. All of this site was nearing completion. At the north of the small image house, here are the remains of a brick lines. Around the small image house, here are the remains of brick bats which are buried in the ground.

【調査】10月18日

【スタッフ】下坂、深谷、ワサンタ(3名)

【位置】マラカの北西約4.3kmの平原にある孤立岩丘上に位置。クブカンダナ・ガラの南南西約1km。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】マラカより、ジープ道(通称マラカ道路)を約2km北上すると、アリヤワラ川の渡渉地点に出る。そこからすでにマーナ・ガラを望むことができ、岩丘を目指しながら北西方向へ約

2.2km耕作地を直進し、ギャンプラ川を渡り、さらに1km行くと到着。



【概要】マーナ・ガラは平原状の耕作地に囲まれた、周囲約1km、直径約320m、高さ約40m、おわん型の岩丘である。調査当時、この岩丘の頂上部では、風化、崩壊した遺跡の敷地跡を利用して、新しい寺院が建設中で、仏塔を屋根にいただいた小さな御堂がすでに完成し、新しいレンガ等の建材も設置されていた。遺跡物としては寺院の石積テラスの土台の内側、新しい御堂の北側約1

mの地点に、東西に1mほどに渡って伸びるレンガ列が土砂に埋没しているのが確認されるのみである。また、それと連続して、御堂の周辺の地面には、多数の埋没したレンガ片が見られた。レンガの大きさは、24×24cm、24×34cm、24×53cmなどであった(埋没のため厚さは不明)。遺跡全体の規模、形状は、全く不明である。

<68> トゥングリヤ・ガラのパタハ

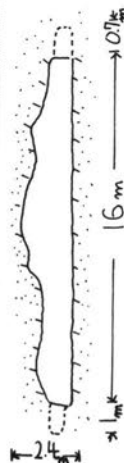
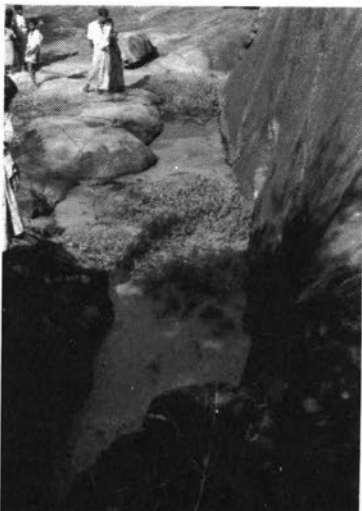
TUNGIRIYA-GALA (ruins of water hole)

Location;

This site is located about 5.9km. the north-west from the Maraka (B.C) in a straight line.

Summary;

The ruins are situated on the small rock hill whose height is about 30m and circumference is about 300m. The east slope of the rock hill is covered with grass and woods. At the south foot of the rock hill, there are the remains of a water hole (photo. fig.).



【調査】9月26日

【スタッフ】田中、境、深谷、サイネリス、ワサ
ンタ(5名)

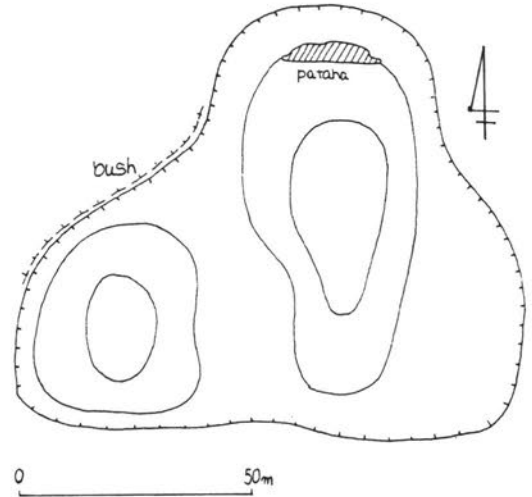
【位置】マラカの北西約5.9km、トゥングリヤ貯
水池の堤防の南端の小岩丘に位置する。「地図」
には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】マラカの北西約4.8kmに位置する
クブカンドナ・ガラより耕作地の中を北に約0.8
km行き、マダカンド道路と呼ばれるジープ道に出
る。その道を横切ると正面にトゥングリヤの部落
が見えてくる。村の中心から貯水池の堤防まで道
が続いており、堤防沿いに南へ約50m進むと小

岩丘に着く（クブカンダナ・ガラ寺院跡<59>のアプローチ参照）。

【全体的状況と位置関係】岩丘の規模は周囲約300m、高さ約30mの小さなもので、東側斜面は草木が岩盤上を被っている。建造物跡は見当たらず、南側岩壁の下にバタハが1つあるのみ。

【概要】バタハは長さ16m、幅2.4m、深さ0.5mの規模で比較的大きなものである。両端には細い穴が1m以上掘り込まれており、貯水能力を高めている。おそらく自然の岩の割れ目を利用して穿ったものと推測される（写真及び図参照）。



<69> イェバ・ガラの寺院遺跡

IEBA-GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 2.9km. the south from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

The ruins are situated on the rock hill which is about 20m in height, about 100m in diameter. On top of the southwest side of the rock hill, there are the remains of a dagoba dug into by theaves (A, fig. A). At the foot of the west side of the rock hill, there are the remains of three structures (B, fig. B, C, fig. C, D). At the west of the dagoba, there are the remains of a water hole (G, photo.G).

Weathering is intense on the whole.

【調査】10月24日

【スタッフ】田中、サイネリス、ウバーリ、ジナ
ダーサ（4名）

【位置】カドゥルピティアの南方2.9km、ハンドゥンゴムワ小学校の南東約1kmに位置。ミニベ用水路に沿うハサラカ道路の西約200mにある孤

立岩丘上に位置する。「地図」には、岩丘印、名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティアよりハサラカ道路を約2km南下。ミニベ用水路を渡り、ハンドゥンゴムワ小学校に至るジープ道を南西方向に進む。小学校を通過し500mほど行き、東側のヤブを抜けるとイエバ・ガラに到着する。

【全体的状況と位置関係】岩丘の頂上よりハンドゥンゴムワ貯水池を南に望み、周囲には、ミニベ用水路に沿って雨期耕作地（水田）が広がっている。岩丘はほぼ円形でおわん型をしており、東西・南北に100m四方の規模で、高さは約20m。頂上部の南東寄りに仏塔跡があり、ゆるやかなスロープの頂上部には、他の建造物が存在した可能性もあるが、全体的に風化が激しく確認は不可能。岩丘の西の麓には建造物跡と思われる石組みの土台がある。また、岩丘の頂上部の西端にボダイ樹が植えられており、岩盤を穿ったパタハが仏塔跡の南西にある。全体的に遺跡の風化が激しく、近年の開発時に村人が建造材のレンガや角石を持ち去ったため、ほとんど痕跡をとどめていない。

【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕頂上部の南東寄りに位置する。直径約30mにわたって土砂が流出し、高さ1mほどの裾の広い土盛り状になっている。仏塔の土台を形成している石組み跡が12m四方で正方形を成し、レンガも多く散在する。土台の石組みは、土砂に埋もれているものの、その敷地形状を確認できる。南側中央部には石組み列が切れ、石組みに対し直角にレンガ列があるところから、ここに入口があったのではないかと考えられる。盗掘跡が2ヶ所あり、内部にはレンガ片が詰まっている。盗掘後の崩壊が激しく、仏塔自体の高さ、形状などは不明である（図A参照）。

〔B 建造物跡〕仏塔跡の北西70mの現在ボダイ樹のある斜面の麓のテラス状になった部分に角石

組みによる建造物跡がある。西側に入口があり、そこだけ石組みの並びが突出している。形状は不明瞭でテラス状の部分は崩壊している。岩盤は西側に傾斜しているので、石組みは東側から西側にかけて、斜面に対しテラス状に水平を保つようになされており、西側の石組みの高さは1.5mである。角石の大きさは様々で、大きなもので70×30

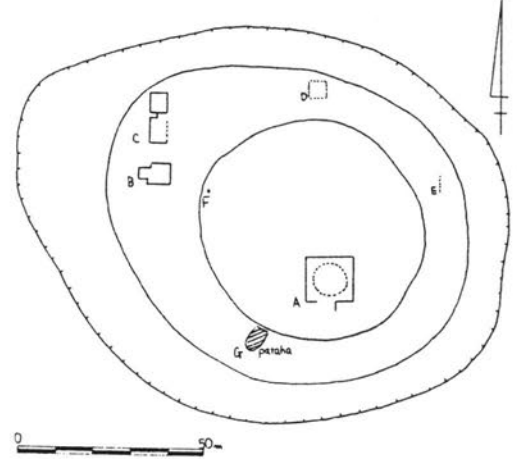
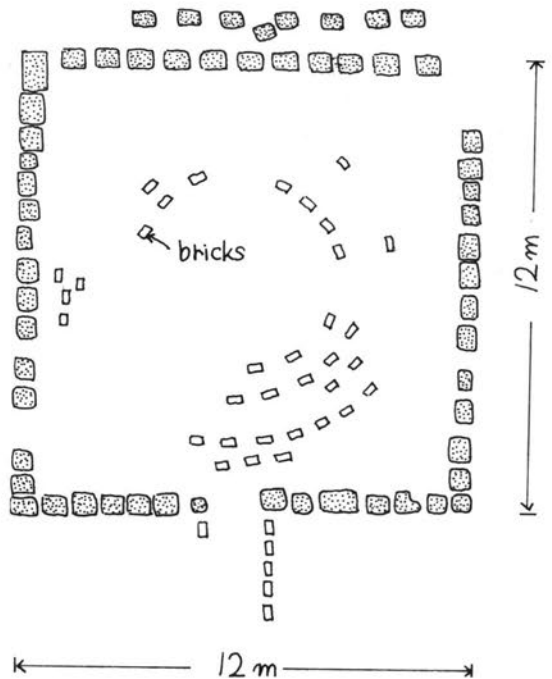


Fig.A



×45cm、小さなものは30×30×20cmほどである。石組みの内部は土砂と石片が堆積しているが、レンガは確認できない(図B参照)。

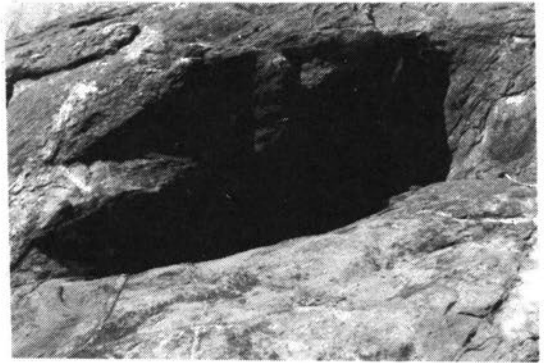
〔C建造物跡〕全体の形状は不明瞭であるが、石組みの幅が全て50cmでその並びを形成した長方形の敷地形状が確認できる。岩丘の斜面に対し、テラス状に高さ50cmほどに水平を保っている(図C参照)。レンガ、石柱もなく現在は石組み跡が残るのみ。

〔D建造物跡?〕仏塔跡の北60mに位置。村人の話によると、ここには7年前まで建造物がありレンガが多量に残存していたが、他の遺跡と同様、村の開発時に村人が建材として持ち去ってしまったとのことである。現在は北側に傾斜した斜面に土砂が堆積し、わずかのレンガ片が確認できるのみである。

〔E建造物跡?〕岩丘の東の急斜面に、石組み跡らしきものがあり、テラス状になっているが崩壊が激しく確認不可能。

〔Fボダイ樹〕仏塔跡の北西50mに、高さ2mのボダイ樹がある。岩盤の裂け目に植えられ、7年前よりそこにあったそうだが、まだ若いボダイ樹であると思われる。

〔Gバタハ〕岩丘の南西側の斜面にあり、入口は小さいが奥に深く、内部はかなりの深さで穿つてある。少なくとも4m以上の深さがある。バタハの大きさは、長さ1.5m、幅0.5mほどであり、人為的な溝が掘られている(写真G参照)。



写真G

Fig. B.

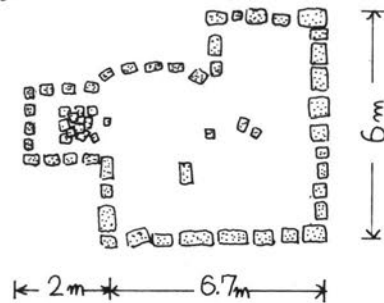
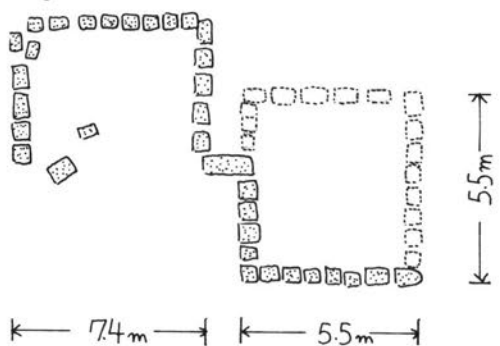


Fig. C.



<70> パンサラ・ガラの寺院遺跡

PANSALA-GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 2.6km. the south from the Kadurupitiya (II.B.C) in a striaght line.

Summary;

The ruins are situated on a rock hill which is surrounded with bush. The rock hill extends over 150m. from south to north, 20m. from east to west, and its height is about 20m. Here is a new house in which one Buddhist monk lives on halfway of south slope of the rock hill. This ruins are wheathered intensely, so except the remains of some brickbats, nothing is found here.

【調査】10月24日

【スタッフ】田中、ウバーリ、サイネリス、ジナダーサ(4名)

【位置】カドゥルピティヤの南約2.6km、ハンドゥンゴムワ小学校の東約500mに位置。「地図」には名称、遺跡印ともになし。東にミニベ用水路を望む。

【アプローチ】カドゥルピティヤからハサラカ道路を約2km南下し、ミニベ用水路を渡り、ハンドゥンゴムワ小学校へのジープ道を進む。ハンドゥンゴムワ小学校を通過し、200mほど行くと、東にミニベ用水路へ通じるジープ道がある。この

ジープ道を東へ500mほど進むと、20mほど道からそれた岩丘上の遺跡に到着する。

【概要】岩丘は楕円形で、南北150m、東西20m、高さ20mほどの規模である。岩丘の周囲はヤブに覆われ、南側には畑が広がっている。現在、岩丘の南斜面の中腹に新築の僧侶の家がある。住居の東、岩丘の麓には新しい本堂が建設中である。しかし、遺跡自体は風化、崩壊が激しく全く不明。確認できたのは数個のレンガ片だけであった。現在は、古い遺跡の残存物が新しい寺院の建設に利用されていることを知るだけで遺跡の確認は不可能である。

<71> アコラハ・ヤーヤの寺院遺跡

AKOLAHA-YAYA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 2.2km. the south from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

This site is situated on the low rock hill which extends over 195m. from north to south, 35m. from east to west. On the center point of the hill, there are the remains of dagoba dug into

by theaves (A, fig. A). At the west of the dagoba, there are the remains of a ruined foundation of the platform made of stones (B). At the south of the dagoba, there are the remains of stone foundations of a structure (C). At the north of the dagoba, there are the remains of fan-shaped double stone lines which incloses hollow place on the rock (D, fig. D). This site is all weathered.

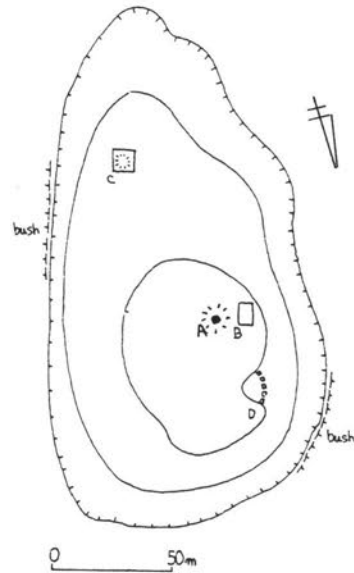
【調査】10月23日

【スタッフ】下坂、サイネリス、ウパーリ(3名)

【位置】カドゥルピティヤの南2.2 kmの地点で、ミニベ用水路沿いのハサラカ道路東側のわきの岩丘上に位置。ハサラカ道路からハンドゥンゴムワ小学校へ向かう支道との分岐より南方250 m。この付近はアコラハ・ヤーヤ(11番目の土地の意)と呼ばれる。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティヤより、ハサラカ道路沿いに約2.3 km南下した地点に雑貨屋がありそのわきを東へ折れると到着。

【全体的状況と位置関係】岩丘はほぼ南北に細長く伸びており、南側斜面は緩やかで、ハサラカ道路わきまで達している。岩丘の規模は、南北19.5 m、東西3.5 mで、周囲は耕作地となっており、岩丘上の一部とその下端には灌木が生い茂っている。岩丘の表面は著しく風化し、その岩盤の剝離した石片が周囲に多数散在している。岩丘のほぼ中央に、ほとんど崩壊しつくして小レンガと低い土盛りだけが残る仏塔跡があり、その西の少し下った所に仏塔の基壇を形成していたと思われる石積みがある。また、仏塔跡の南の斜面上に建造物跡とみられる乱れた石列と土盛りがあり、北側斜面には窪地を利用した扇状の列石がある。



【各部分の状況】

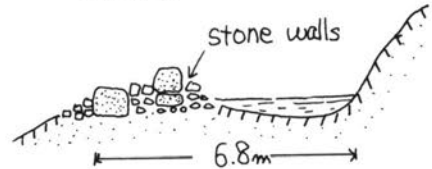
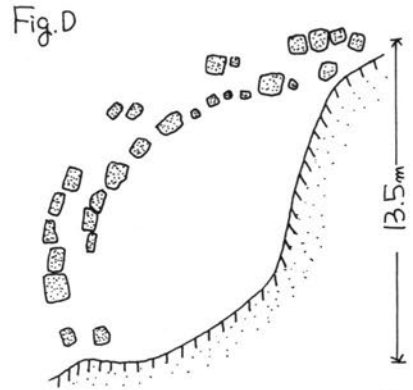
〔A 仏塔跡〕風化、崩壊が著しく、わずかに、長径9.1 m、短径7.1 mの低い土盛りと、5~8 cm角のレンガ片数個と、風化作用によるレンガ土の堆積と、小石片が見られるのみである。また盗掘跡らしい直径2 m、深さ4.5 cmの穴が土盛り上にある(図A参照)。

〔B 仏塔基壇の石積み〕仏塔跡の西側の盗掘跡から西方7 mに位置。幅1~1.8 m、長さ3.9 mにわたり石が積まれている。石積みの南側部分は比較的整った形で残っており、人為的に積まれた

ものであることがわかる。北側部分はやや崩れた大きい石片が並び、斜面上の石と土砂をせき止める形になっている。幾つかの石材の大きさを羅列してみると、 $28 \times 14 \times 50 \text{ cm}$ 、 $42 \times 19 \times 69 \text{ cm}$ 、 $23 \times 10 \times 60 \text{ cm}$ などとなっている。この石積みは、仏塔の基壇の一部だと推測されるが、風化崩壊が著しく、付近に同様のものは見られない。おそらく崩れて岩丘の下に落ちたのだろう。

〔C建造物跡〕風化、崩壊が著しくおおよその規模がわかるのみである。土台石の一部が残っており、縦横 5.3 m のほぼ正方形を形成している。土台を形成している石材の大きさは、 $45 \times 30 \times 17 \text{ cm}$ 、 $40 \times 35 \times 25 \text{ cm}$ 、 $60 \times 34 \times 14 \text{ cm}$ などとなっている。

〔D扇状列石〕仏塔跡の北約 16 m の地点の露岩のくぼみを取り巻くようにして、大小の石を堤のように積み上げた二列の扇形の列石がある。石列の両脇には小石や土砂が積み上げられており、中のくぼんだ部分は土砂が堆積し、ほぼ平らになっている。列石は 1.35 m にわたり、内側の列は半径 $5 \sim 7 \text{ m}$ で、外側の列との間隔は $1 \sim 1.8 \text{ m}$ となっている。崩壊が進んでおり、列石も多くが失



われ小石や土砂も流出している部分が多いが、おおよその形は推測できる。角石の大きさは $90 \times 55 \times 30 \text{ cm}$ 、 $55 \times 45 \times 35 \text{ cm}$ 、 $45 \times 20 \times 17 \text{ cm}$ などとなっている。用途は不明である（図D参照）。

<72> ハタ・ヤーヤの遺跡

HATA-YAYA

Location;

This site is located about 2.4 km . the south from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

Here are the remains of a small water hole on the flat rock outcrop which extends over 33 m . from north to south, 13 m . from east to west (photo.A).

【調査】10月23日

【スタッフ】下坂、サイネリス、ウバーリ(3名)

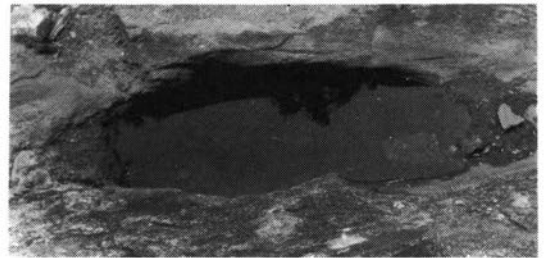
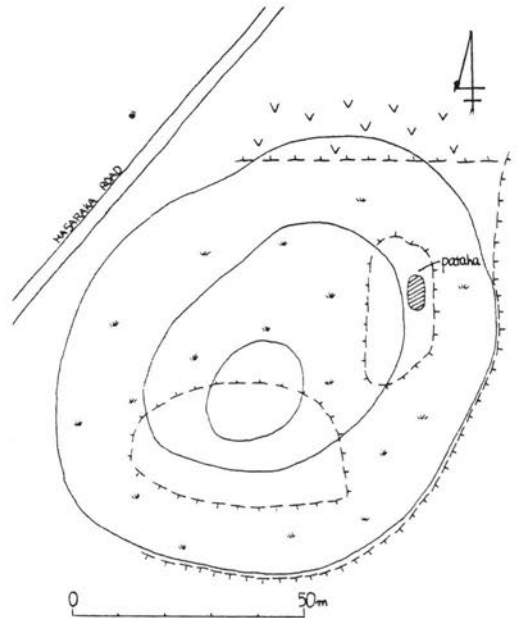
【位置】カドゥルピティヤの南2.4kmの、ハンドゥンゴムワ小学校の北東約200mの丘陵上に位置する。この付近はハタ・ヤーヤ(7番目の土地の意)と呼ばれている。「地図」には、名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティヤからハサラカ道路沿いに2kmほど南下すると放水堤があり、そこからミニベ用水路を渡り、南西へ向かうハンドゥンゴムワ小学校への支道を400mほど進む。そこから西へ向かって緩やかな上りの小道へ入り、約150m行くと丘の上の露岩にある遺跡に到着する。

【全体的状況と位置関係】緩やかな丘陵上に露岩部分があり、そこにバタハがひとつある。また、そこから9mほど東の地点には、村人の話によるとそこを掘り返した時、多数のレンガ片が発見されたとのことであったが、現在、地表にはそれらしき跡はなく、草に被われて確認できない。露岩部分の規模は、南北3.3m、東西1.3mで、その西側には樹林が広がり、あとは草地となっている。露岩上に他の建造物跡は認められない。

【各部分の状況】

(Aバタハ)丘陵の西に位置する露岩上にあり、長径2.15m、短径0.8mでひょうたん形をして



写真A

いる。村人の話によると、以前、このバタハは人為的に埋められてしまったが、再び貯水能力のある状態に戻されたとのこと、その痕跡がバタハの両角に残されている(写真A参照)。

<73> ダハナメ・ヤーヤの遺跡

DAHANAME-YAYA (ruins of stone pillars)

Location;

This site is located about 2.1 km. the south from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

At the neighborhood of this ancient site,

cultivation is rather advancing and some houses exist. This ruins are situated in a field which is surrounded with few woods. Here are the remains of a group of stone pillars (A, photo A, fig. A1) a few brickbats and a ruined dagoba (B). About 20m. the west from the remains of the group of stone pillars, there is a small rock outcrop which extends from south to north.

【調査】10月22日

【スタッフ】下坂、深谷、サイネリス、ウバーリ、ジナダーサ(5名)

【位置】カドゥルピティヤの南約2.1kmの地点。ミニペ用水路沿いの遺跡群のひとつで、ミニペ用水路の西側、ダハナメ・ヤーヤ(19番目の土地の意)と呼ばれる地域に位置。「地図」には、名称、遺跡印ともになし。

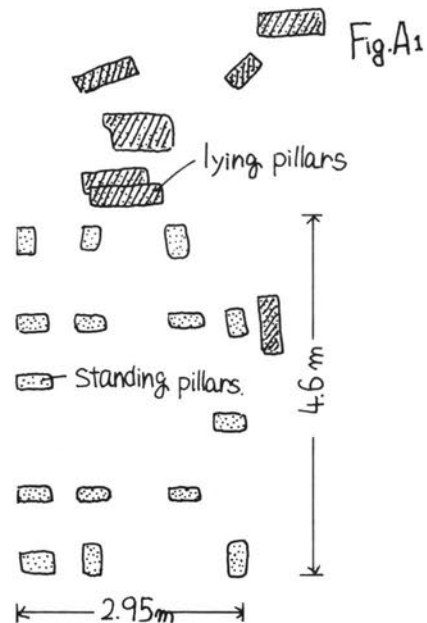
【アプローチ】カドゥルピティヤからハサラカ道路沿いに450mほど行った地点で、西わきの細道に折れ、耕作地と農家の間を縫って南西へ向かい1kmほど進んでから、ほぼ真南に進路を変え、400m行くと少し幅の広い道に出る。それに沿って160mほど行った地点より、さらに南東に折れ耕作地と草地の間を100mほど進むと到着。

【全体的状況と位置関係】付近はかなり開墾の進んだ地域で、周囲には人家が点在している。遺跡は低木に囲まれた畑の中にあり、石柱群から南東22mの地点に仏塔跡らしきものがある。また、その石柱群の西20mには、南北に細長く伸びた平面的な露岩があり、表面の風化が激しいため確認は困難であるが、ここに建造物があったことも推測される。村人の話によると、石柱群の周囲の地表下2.5m付近に、30m四方にわたり、土台石らしきものが埋まっているとのことだが、確認はできなかった。また、2年前まではもっと多量のレンガがあったそうだが、付近の住民が持ち去

ってしまい、現在はごく少数を残すのみである。

【各部分の状況】

〔A石柱群〕石柱群の敷地は、ほぼ長方形で東西南北の方位に面している。直立した石柱は15本で、0.5m~2mほどの間隔で並んでおり、大きさは幅20~34cm、厚さ10~21cm、高さ45~60cm(地表上の高さ)。ほかに倒壊した石柱片が4本ほどある。東側には、入り口と思われる2段の石段があり、さらにその東側には、長方形の平石盤がある。大きさは87×53×16cm。石盤のほぼ中央には、深さ3cm、直径20cmのすりばち型のくぼみがある。石柱は下部が土に埋も



れており、正確な高さはわからない(写真A、図A1)。

〔B仏塔跡〕直径約10mにわたって多数のレンガ片が、散在しており、そのほぼ中央には、わずかな土の盛り上がりも見られる。崩壊が著しく、原形を推測することは不可能。



写真A

<74> ダハナム・ヤーヤのパタハ

DAHANAME-YAYA (ruins of water hole)

Location;

This site is located about 1.8km. the southwest from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

On the ground which slopes from north to south, there are three rock outcrops which extends from south to north in parallel with each other (See fig.). Among the three rock outcrops, the ruins are situated on the end of east and west rock hill. On the end of west rock hill, there are the remains of three water holes (A, B, C, photo. A). On the end of east rock hill, there are the remains of a water hole (D, photo.D).

【調査】10月22日

【スタッフ】下坂、深谷、サイネリス、ウバーリ、ジナダーサ(5名)

【位置】カドゥルピティヤの南西1.8kmの地点。ミニベ用水路沿いの遺跡群のひとつでダハナム・ヤーヤと呼ばれる地域に位置。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】ダハナム・ヤーヤの遺跡(<73>のアプローチ参照)から、北へ120mほど進むと、東西へ伸びる小道に達する。その道を横切りさらに100mほど行ったところで農家の脇を通

り北西に進路を変えて畑の中を300mほど進むと到着。

【全体的状況と位置関係】北から南へ緩やかに傾斜した土地に、南北に細長く平行に伸びた3つの小さな平坦な露岩丘があり、そのうち西端の露岩上に3つ、東端の露岩上に1つのパタハがある。周囲の土地はすべて開墾され、畑となっており、付近には数戸の農家がある。岩丘の西約200mのところから奥へジャングルが広がっている。どの露岩上にも建造物跡やレンガ片は見あたらない。東側の2つの露岩は表面が著しく風化しており、

その上に樹木が生い繁っている。西端の露岩から順番に a、b、c とすると、a は南北 60 m、東西 24 m、b は南北 75 m、東西 20 m、c は南北 70 m、東西 48 m である（図参照）。

【各部分の状況】

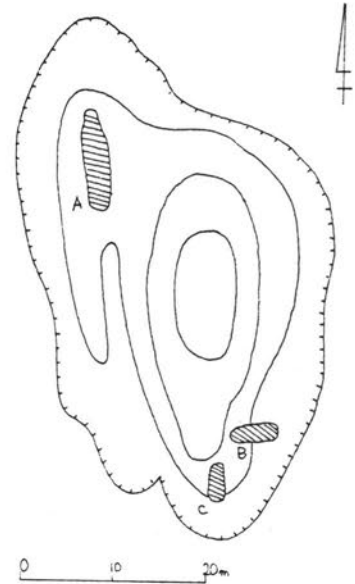
〔A パタハ〕露岩<a>の北西斜面に位置し岩の節理にそって南北に細長く、魚形をしている。大きさは長径 9.5 m、短径 2.6 m、深さ 70 cm で、藻の浮いた水をたたえている（写真 A 参照）。

〔B パタハ〕露岩<a>の南東斜面に位置し、ほぼ東西に細長く、魚形をしており、大きさは、長径 6 m、短径 1.7 m、深さは北側 1 m、南側 0.6 m で、水はなく底は草むしている。

〔C パタハ〕露岩<a>の南端に長径 6.4 m、短径 2.7 m のパタハ状の窪地があるが現在水はなくその形状も不明瞭である。

〔D パタハ〕露岩<c>の中央北寄りに位置し、長径 1.32 m、短径 0.7 m の楕円形をしている。

深さは、東側 60 cm、西側 30 cm。南側は表面よりさらに 50 cm ほど奥深く穿ってある（写真 D 参照）。



写真A



写真D

<75> ハサラカ道路沿いの無名遺跡 (No.1)

nameless ruins by HASALAKA ROAD (No.1)

Location;

This site is located about 2.2km, the south from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

The ruins are situated on the rock hill which

extends over 70m from north to south, 20m. from east to west, and is about 4m. in height. Here are the remains of five holes which form a line from south to north.

【調査】10月24日

【スタッフ】田中、ウバーリ、サイネリス、ジナダーサ(4名)

【位置】カドゥルピティヤより南へ約2.2 km。ハサラカ道路とハンドゥンゴムワ小学校に至る道の分岐地点にある。ミニベ用水路のすぐわきに位置。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティヤより、ハサラカ道路を南へ2 km進み、ミニベ用水路をわたり、ハンドゥンゴムワ小学校に至るジープ道を20 mほど進むと人家がある。その裏手の小岩丘上に遺跡がある。

【全体的状況と位置関係】ハサラカ道路の西30 mほどにある、南北に細長くひょうたん型をした岩丘である。長径70 m、短径20 m、高さ4 mほどの小岩丘である。中央部に南北に連続した5個の小さな穴が岩盤に直接掘られているのみである。ハサラカ道路をはさんで、東100 mほどにあるアコラハ・ヤーヤの遺跡<71>の付属遺跡の可能性もある。5個の穴は人為的に掘られたものであり、こうした穴は他の遺跡にも多く残存する。おそらく柱を立てたものであろうが、詳しいことは不明。しかも、5個程度の数では、その形状や用途を知ることもできない。

<76> ハサラカ道路沿いの無名遺跡 (No.2)

nameless ruins by HASALAKA ROAD (No.2)

Location;

This site is located about 1.6km. the south by east from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight straight line.

Summary;

The ruins are situated on the small rock hill which has a small hole on the top.

【調査】9月26日

【スタッフ】田中、境、深谷、ワサンタ、サイネリス(5名)

【位置】カドゥルピティヤの南南東1.6 kmのハサラカ道路脇の小岩丘上に位置。「地図」に名称・遺跡印ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティヤよりハサラカ道路を約1.6 km南下する。

【概要】耕作地に囲まれた高さ5 mほどの低平な岩丘で、北側半分はほとんど土砂に覆われ、草木が生い茂っている。岩丘の頂上部の岩盤に掘られた直径20 cm、深さ10 cmほどの穴1個と数個のレンガ片が確認できるが、建造物跡は全く確認できない。村人が岩盤に文字が刻まれているというので調べてみたが、風化が激しく確認は困難。

<77> ハサラカ道路沿いの無名寺院遺跡 (No.3)

nameless ruins of temple by

HASALAKA ROAD (No.3)

Location;

This site is located about 1.6km. the south by west from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

The ruins are situated on the low rock out-crop (the Kumbuck Oya Gala) which extends over 150m. from north to south, 100m. from east to west, about 7m. in height. At the center point by west on the rock, there are the remains of a broken dagoba dug into by theaves with many rubbles and one flower altar made of stone (A, Fig. A, fig. A-2). At the southwest of the dagoba, there are the remains of parallel brick lines and two corner stones (photo. B3) and many rubbles (B). At the east side on the rock, here are the remains of three corner stones (photo. C1) and many rubbles (C). At the east of the dagoba, here are the remains of a rectangular foundation made of stones and many bricks (D). At the west of the dagoba, many rubbles lie scattered on the rock (E). At the northeast side in the bush, here are the remains of stone walls which extend over 30m. from north to south (F). At the south side on the rock, here are the remains of five small water holes (G). This site is all weathered.

【調査】10月11日

【スタッフ】田中、下坂、深谷、サイネリス、ウ
バーリ、ワサンタ、ペーマダーサ(7名)

【位置】カドゥルピティヤの南南西約1.6 kmに位

置。ハサラカ道路の西側に広がる焼き入れされた
草原とジャングルとの境界にある。この遺跡は新

ミニペ用水路沿いにある遺跡である。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

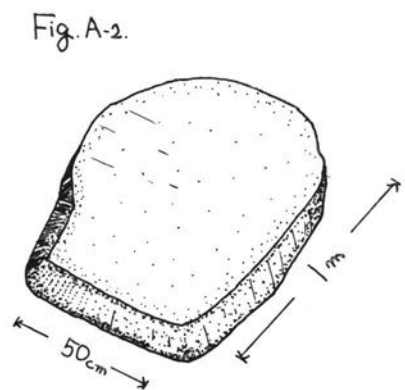
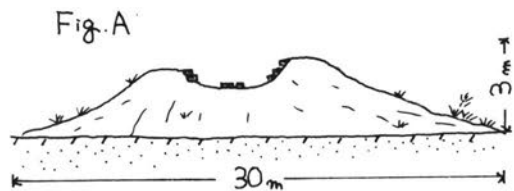
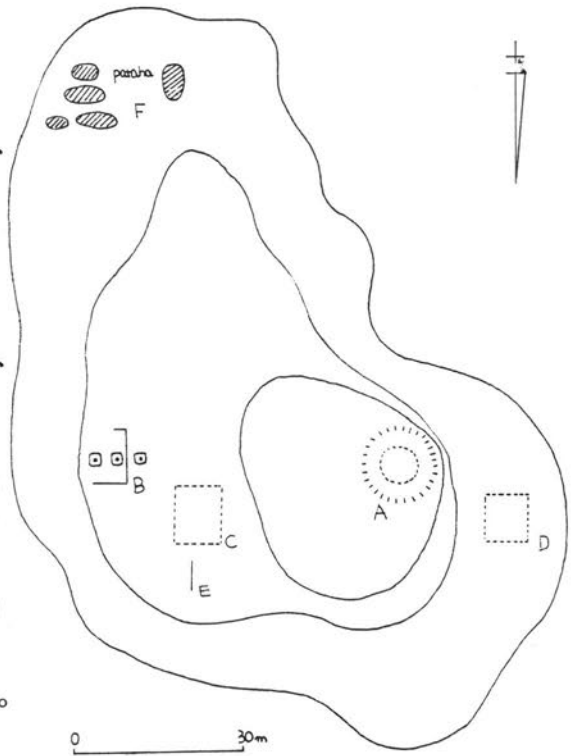
【アプローチ】カドゥルビティヤよりハサラカ道路を500mほど南下し、ミニペ用水路をわたり、焼き入れされた草原を南南西に直進する。約1km進むとヤブに被われた岩丘に到着する。

【全体的状況と位置関係】岩丘は南北150m、東西100mほどで、高さは最上部7mの低いものである。周囲をカトゥーと呼ばれる茨に囲まれ、ヤブに被われている。ヤブの中に遺跡物がある可能性もあるが発見は困難である。

遺跡は全体的に風化が激しく、立体的復元は不可能であると思われる。岩丘の西側に仏塔跡、南端にパタハ群、仏塔跡の東側に2つの建造物跡、南と西側に建造物跡らしきものがある。各建造物跡には礎石、倒壊した石柱などが残存する。また岩丘北東側にはヤブの中に外壁らしき石垣がある。ヤブに被われているので、遺跡全体の形状を知ることが難しい。

【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕岩丘の中央部の西側に位置する。30m四方にわたってレンガ材が赤土と化した土砂が流出している。高さは約3mで、盗掘跡があり、崩壊が著しい。盗掘跡は深さ1.3mほどで、東西に土砂運搬用の溝が続く。全体的にかなり大きな仏塔であったと思われるが、崩壊が激しく、土砂やレンガ材が流出し、その形状、正確な規模などは不明である。土砂の上にはヤブが広がり完全に仏塔跡をおおい隠している(図A参照)。仏塔の周囲には数多くの石片が散在する。20~30cm四方、厚さ10~12cmほどのものに崩壊している。仏塔跡の最上部にあり、弧を描いているところから仏塔の岩笠の崩壊したものではないかと思われる。また1m四方、高さ15cmの石板がある(図A2参照)。供物台と思われるが不明である。



〔B 建造物跡〕仏塔跡の南東約20mの地点に、少し開けた狭い露岩地帯があり、そこに2つの礎石と土に埋もれたレンガ列と石片が散在している。また、その露岩地帯の西側はヤブになっており、その中にも若干のレンガ片と石片が見られる。敷地形状はわからないが、何らかの建造物跡であることは確実である。

<B-1 レンガ列>露岩部のほぼ中央に2本のレンガ列がほぼ東西に平行に伸びている。2本のレンガ列の間隔は55cmで、それぞれ長さは5.8mと6.8mとなっている。明らかに建造物の一部を形成していたと分かるが他の部分は土に埋もれたり崩壊しており全体の敷地形状は不明。代表的なレンガの大きさは20×20×15cm。

<B-2 礎石>露岩部の南西角に位置。全体の大きさは60×45×52cmで柱穴の大きさは16×16×20cm。柱穴のある面をほぼ北に向け斜めに倒れている。

<B-3 礎石>露岩部南側のヤブとの境に位置。全体の大きさは40×32×48cm、柱穴の大きさは15×15×13cm(写真B3参照)。

<B-4 石臼状の石片>露岩部西側のヤブの中に位置。原型はすりばち状の穴を穿った臼状の石で、2つに割れている。周囲にはレンガ片が散在する。

〔C 建造物跡〕仏塔跡の東70mの岩丘中央部の建造物跡である。岩盤上に角石が散在しているが、自然石か或いは石積みなのか区別し難いものが多い。しかし、3つの礎石と東側に石積み跡があるところから建造物跡であると思われる。全体的に風化、崩壊が激しく敷地形状さえ定かではない。

<C1 礎石>84×75×32cm、柱穴20×18×12cm(写真C1参照)。

<C2 礎石>82×70×40cm、柱穴19×19×12cm。

<C3 礎石>60×53×50cm、柱穴20×20×12cm。

〔D 建造物跡〕仏塔跡の東約40mに位置し、各辺が東西南北の方位に面した長方形(6×6.5m)の石片の列がある。全体的に風化が激しく敷地形状は不明である。周囲には多量のレンガ片が散在する。

〔E 建造物跡?〕仏塔跡の西約25mに位置し、角石が10m四方にわたり散在している。また、そこから更に西側のヤブの中にも多くの角石が埋もれている。しかし、建造物跡であるのかどうかは不明な点が多い。

〔F 外壁〕仏塔跡の北約40mのヤブの中に石積みの列がある。石積みは東西に約30m続き、3~4段に石が積まれている。外壁の全体的規模は確認不可能。

〔G パタハ群〕岩丘の南端に5つのパタハがある。岩盤の亀裂を利用した小さなものである。



写真B3



写真C1

<78> クンブック・オヤ・ガラの遺跡

KUMBUCK OYA - GALA

Location;

This site is located about 1.6km. the south-west from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

The ruins are situated on the low rock hill which extends over 50m. from north to south, 30m. from east to west, about 5m. in height. At the northeast side of the hill, there are the remains of double rectangular brick walls and brick lines (A, fig. A), two corner stones (B, C, photo.C) and one sacred foot print stone (D). This site is all weathered.

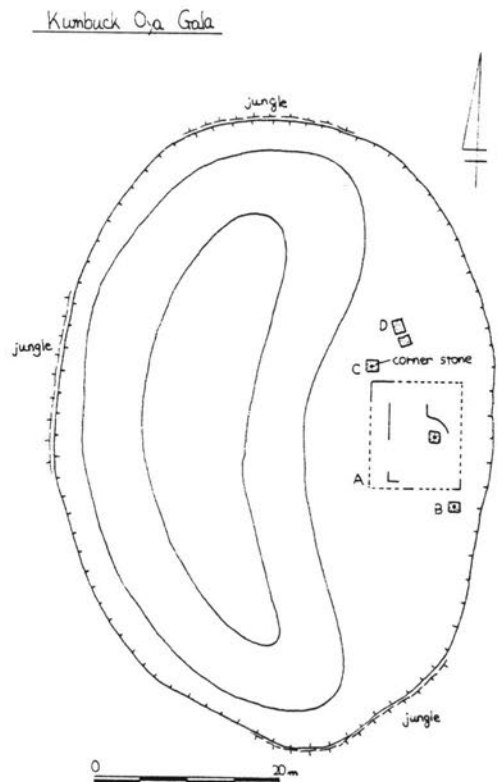
【調査】10月6日

【スタッフ】田中、境、深谷、ワサンタ、サイネリス、ウバーリ(6名)

【位置】カドゥルピティヤの南西約1.6 kmに位置。旧ミニベ用水路沿いの遺跡であり、用水路の西50 m程に位置する。クンブック・オヤとは、旧ミニベ用水路(ミニベ・ヨダ・エラ)の通称。旧ミニベ用水路沿いには多くの遺跡があるが、この遺跡もその一つである。「地図」には名称、遺跡印ともなし。

【アプローチ】カドゥルピティヤよりミニベ用水路沿いのハサラカ道路を約1 km南下。ミニベ用水路を渡り、西へ進む。焼き入れされた草原を行き、約1 km進むとジャングルに入る。北西方向にジャングル内の小道を行くと旧ミニベ用水路(通称クンブック・オヤ)に出会う。遺跡はそこから西へ50 m程の地点にある露岩丘上に位置する。

【全体的状況と位置関係】ジャングル内の東西約30 m、南北約50 mの楕円形をした露岩丘上に



位置する遺跡である。高さは5 m程で、低く平坦な露岩であり、周囲はヤブに被われている。露岩の北東側に建造物跡があり、2個の礎石と供物台がある。しかし、他の遺跡物はない。全体的に風化が激しく、立体的復元は不可能である。

【各部分の状況】

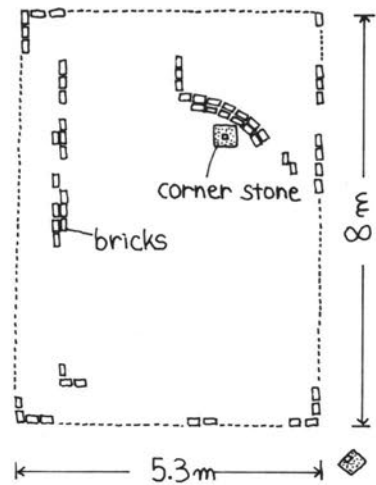
〔A 建造物跡〕露岩の北東側に位置する。敷地には東西南北方向に、レンガ材の内壁と外壁が残存している。外壁が8×5.3 m、内壁は6.5×3.5 mの長方形を成している。レンガ材の内壁、外壁は崩壊し部分的に残存しているだけで、他の部分はレンガ列があるだけである。内壁の北東側の角のレンガ列は2列で半円形を描いている（図A参照）。

〔B 礎石〕建造物跡の南東部角に位置する。2つに割れている。大きさは60×60×30 cm、柱穴は15×15×13 cmである。表面に模様等はない。

〔C 礎石〕建造物跡の西側の内壁の内側に接して位置する。大きさは50×55×15 cm、柱穴は19×19×11 cmである。表面に模様等はない（写真C参照）。

〔D 仏足石〕建造物跡の北西側にある。仏足石は割れており、復元することはできなかった。表面

Fig. A.



写真C

には模様が描かれている。仏足石は一辺1 m程の正方形のものであったと思われる。

<79> 南クンブック・オヤ・ガラのパタハ

SOUTH-KUMBUCK OYA-GALA

(ruins of water hole)

Location;

This site is located about 1.9km. the southwest from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

The ruins are situated on the flat rock outcrop which extends over 47m. from east to

west and 110m. from south to north. On top of the south side of the rock outcrop, there are the remains of two water holes (A, B).

【調査】10月21日

【スタッフ】下坂、深谷、ワサンタ、サイネリス、
ウパーリ（5名）

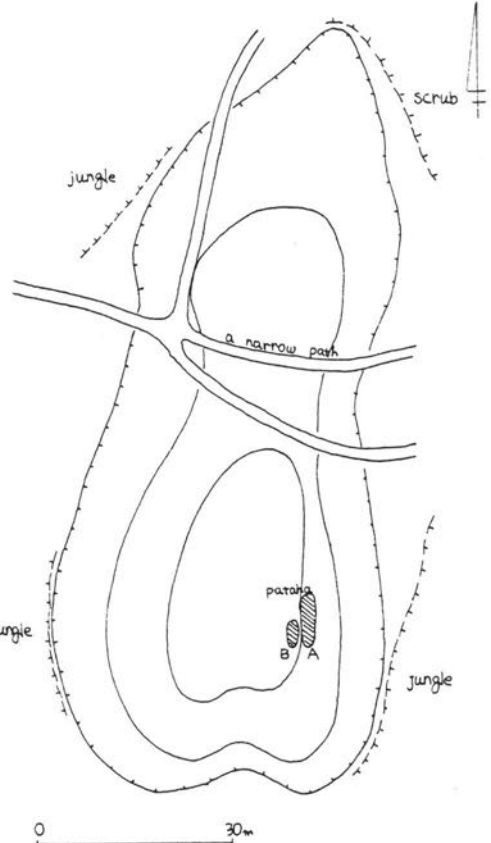
【位置】カドゥルピティヤの南西1.9 km、ハンド
ウングムワ貯水池の北西2.9 km。ジャングル内の
低い露岩丘上に位置。「地図」には名称、遺跡印
ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティヤより、ハサラカ
道路沿いに2 km南下、ミニベ用水路を渡り北西に
道を折れ西北西に約1.3 km進むとジャングルに達
する。そこから、ジャングル内へと続く小道を3
00 mほど行くと遺跡に到着する。

【全体的状況と位置関係】岩丘は平面的で、ジャ
ングルに囲まれており、南北110 m、東西47
m規模で、表面の風化が著しく、岩片が多数散在
している。また、岩丘中央部には、東西に伸びる
小道と北へ向かう支道がついている。南側頂上付
近に2つのパタハがあるのみで、建造物跡、レン
ガ片などの遺跡物は確認できなかった。

【各部分の状況】

〔Aパタハ〕パタハの大きさは長径8.4 m、短径
1.5 m、深さ60 cm。南北に細長く、魚形をして
いる。貯水機能は十分果たしているが、岩盤に節理
にそって割れた岩片がパタハの端を埋めている。



〔Bパタハ〕パタハの大きさは長径6.2 m、短径
1.5 m、深さ20 cm。Aパタハの西に位置し、南
北に細長く三日月形をしている。水を貯えている
が浅いためそれほど貯水能力はない。

<80> カドゥルピティヤ部落の無名遺跡

nameless ruin in KADURUPITIYA

Location;

This site is located about 1.1km. the south-
east from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight
line.

Summary;

Here are the remains of two water holes and grooves covered on the flat rock outcrop which extends over 75m. from north to south, 30m. from east to west.

【調査】10月25日

【スタッフ】下坂、サイネリス、ジナダーサ(3名)

【位置】カドゥルピティヤの南東1.1kmの地点の小露岩丘上に位置。「地図」には、名称、遺跡印ともになし。南東約200mに造成中の新ウィルミティヤ貯水池がある。

【アプローチ】カドゥルピティヤよりハサラカ道路に沿って370mほど南へ行き、ヨダガンナワに向かうジープ道に入り、草地や畑、水田を見ながら、900mほど行った地点で、さらにウィルミティヤ道路と呼ばれる道へ入り、350mほど進むと到着。

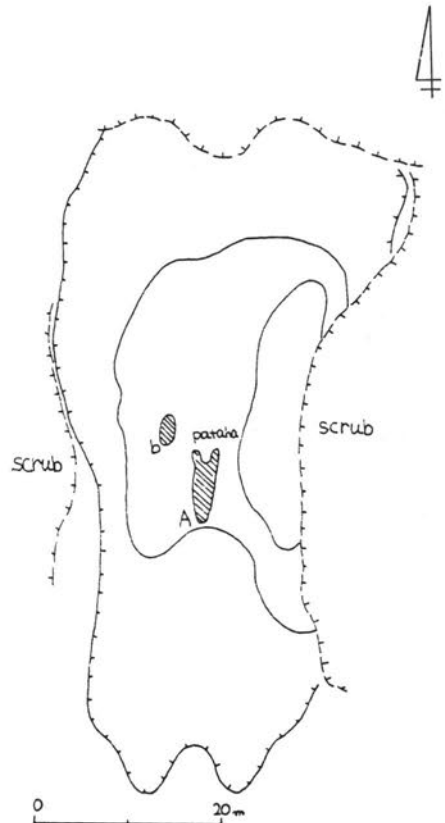
【全体的状況と位置関係】露岩丘は平面的で、南北75m、東西30mに広がり、高さは2mほどで北から南へ全体がゆるやかに傾斜している。また周囲は切り開かれた草地となっており、南側は露岩が多いが、北側は堆積した土砂にほとんど覆われており、その裏手の草地の土壌とそのまま連続している。大小2つのバタハは、露岩丘の中央やや西寄りに位置している。

【各部分の状況】

〔Aバタハ〕バタハは、長径8.5m、短径2m、深さ0.25mで、南北に細長く、岩盤上に広く浅く削られている。北側へ幅5~20cmの溝が2本流れ込んでおり、その溝は北西の方向に伸び、合流して10mほどの長さにわたっている。

〔Bバタハ〕二段の形状になっており、外側は、長径1.3m、短径60cm、深さ7cm、内側は長径63cm、短径26cm、深さ20cmである。非常に

小さいものではあるが、その形状から人為的なものと思われる。南北に細長く、南側が深くなっている。やはり、幅15~50cmの溝が、北端から北北西の方向へ5mほど伸びている。水はなく、土が堆積している。



<81> パルピティヤ・ガラのパタハ

PALUPITIYA - GALA (ruins of water hole)

Location;

This site is located about 1.8km. the south-east from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

Here are the remains of a water hole on the small rock hill which extends over 76m. from north to south, 30m. from east to west, about 10m. in height.

【調査】10月25日

【スタッフ】下坂、サイネリス、ジナダーサ、
(3名)

【位置】カドゥルピティヤの南東1.8 kmに位置す

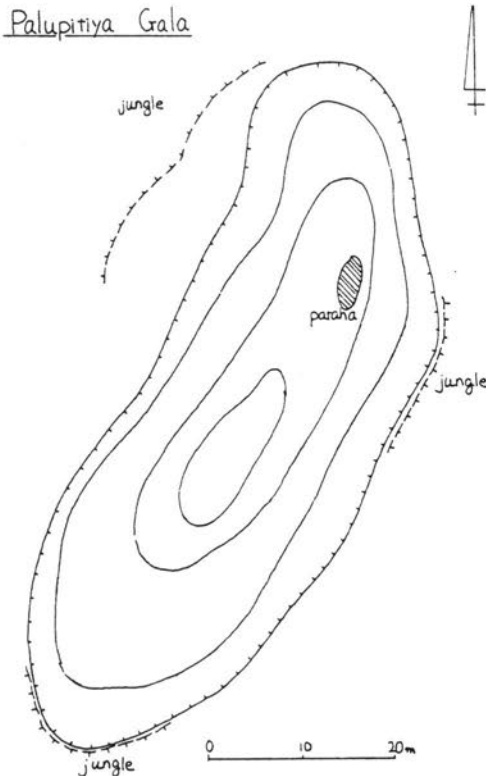
る露岩丘上にある。西方0.5 kmの地点には、新ウィルミティヤ貯水池がある。この露岩丘上から、マーナ・ガラを南に望む。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティヤ部落の無名遺跡<80>より南東へ180 mほどウィルミティヤ道路と呼ばれる道沿いに行くと、新ウィルミティヤ貯水池の大きな堤防の西端へ出る。その堤防に沿って東へ進み、さらに畑を横断して東北東へ160 mほど行くと、ジャングルに達する。そこからジャングル内の小道を南東へ100 mほど進むと到着。

【全体的状況と位置関係】周囲はジャングルに囲まれ、南側には開けたウィルミティヤが望める。岩丘は、南北76 m、東西30 mの規模を持ち、高さは約10 mではほぼ南北に細長い形をしている。岩丘の表面は、風化が著しく、剝離した大小の岩片が散在しているが、レンガ片や、建造物を形成していたような石材片などは見られない。岩丘の頂上の中央より少し北へ下った地点に、パタハがひとつある。

【各部分の状況】

〔パタハ〕長径2.0 m、短径0.92 mで深さは62 cm。瓜形をしており、現在も水をたたえている。



6. カドゥルピティヤ以北の遺跡

Ruins, distributing in North area of Kadurupitiya

【遺跡群索引】

- <82> ミドゥラネ・エラ — キヴレ・エラ合流点
の遺跡
- <83> ムッカカランダの寺院遺跡
- <84> ホラウエラ・ガラの寺院遺跡
- <85> ホラウエラ・ガラ南の岩窟
- <86> 南ホラウエラ・ガラのバタハ
- <87> ウィルミティヤ・ウエワ南西の遺跡
- <88> ウィルミティヤ・ウエワ北東の遺跡
- <89> ヴェヘラ・ガラの寺院遺跡
- <90> アンバガハラ・ウエラの遺跡
- <91> マヤランウエラ・ガラのバタハ
- <92> カルワラ・ゴラ・ガラの寺院遺跡
- <93> ウェヘラゴダの寺院遺跡
- <94> ダンバイエラ・ガラの遺跡
- <95> ワスゴムワ・オヤ上流部の寺院遺跡

【地域および遺跡群の概要】

カドゥルピティヤ部落からワスゴムワ・オヤまでのマハウエリ河左岸地域は、大きな村落もなく全くの密林地帯となっている。ただし、ミドゥラネ・エラ上流部には焼入れ畑による小部落が建設中であり、マハウエリ河沿いには材木伐採現場や宝石掘りのキャンプが点在する。カドゥルピティヤ部落からは、ワスゴムワ・オヤに至る道が北へ、マハウエリ河に至る道が東へ延び、マハウエリ河沿いには、マラカ村とワスゴムワ・オヤを結ぶトラクター道がある。こうした道跡やジャングル内の小道、水系に沿って、貯水池跡や水田跡などがあるが、それらも放置されたままで、未だ再開発の及ばない最奥地となっている。特にワスゴムワ・オヤ以北は国の自然保護区に指定され、野生動

物が多く生息する濃密なジャングル地帯となっている。

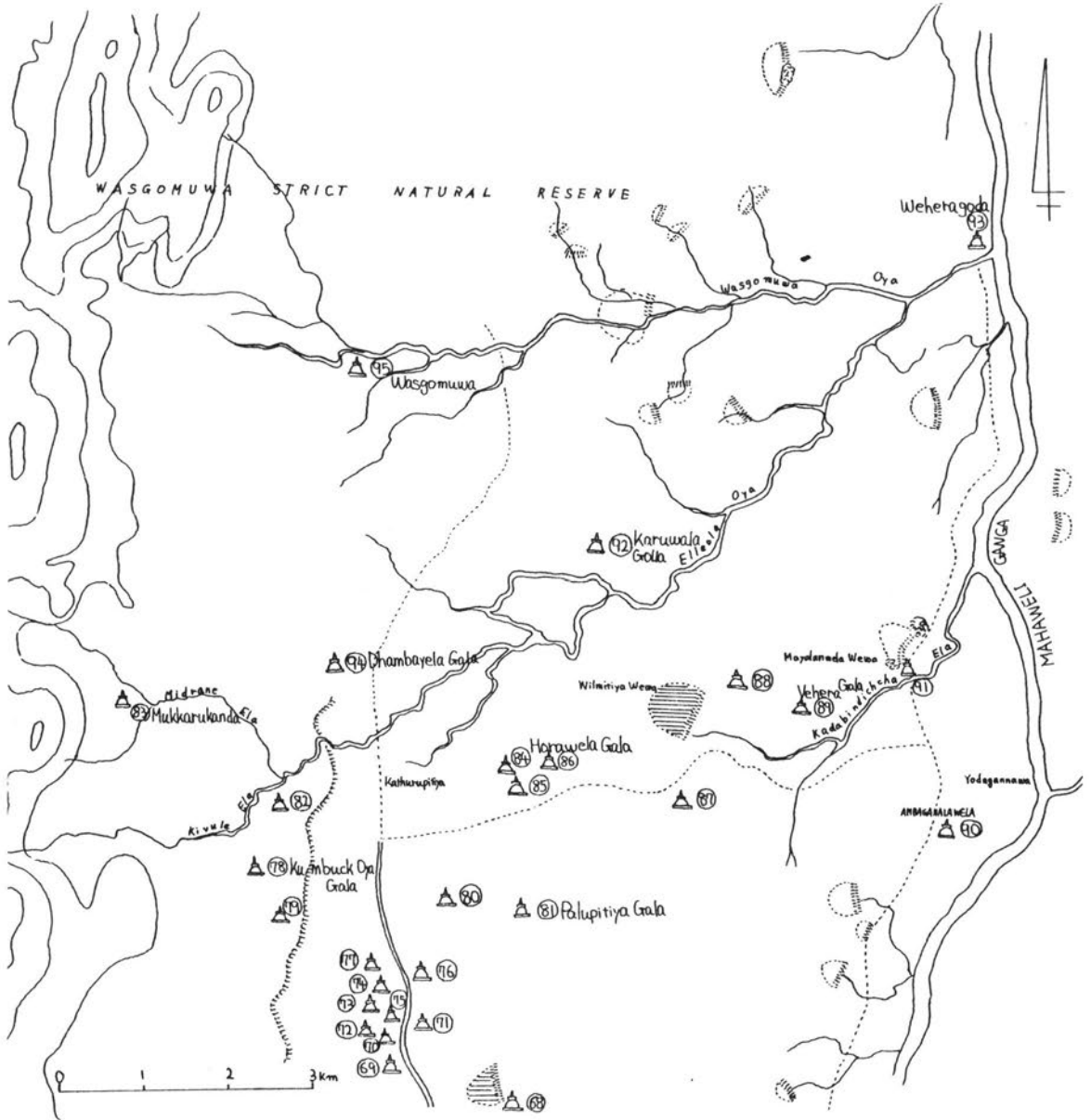
遺跡は水系に沿って位置するものが多く、ジャングルに点在する露岩丘上にあるものと、ジャングルの侵食作用により地下に没したものがある。後者の遺跡は、発見も困難で、発見したとしても地下に埋没しているため敷地形状など不明な点が多い。

【当隊の活動の概要】

この地域での探査活動は、日帰り行程の調査と併せて2～5日間の露営による探査行で行なった。最初の探査行はカドゥルピティヤ部落から東方向へのジープ道を通ってマハウエリ河に至り、そこからベヘラ・ガラ、マヤランウエラ・ガラの遺跡調査を行なう。その後、ジャングルを北上し、ワスゴムワ・オヤとマハウエリ河の合流点に至る。ウェヘラゴダの遺跡探査後、エツレオラ・オヤの河床を通ってカドゥルピティヤ部落に帰着した。2度目の探査行は、カドゥルピティヤ部落から北上し、エツレオラ・オヤを越え、ダンバイエラ・ガラの遺跡を調査した後、ワスゴムワ・オヤ上流部に向かい、ジャングルのヤブをかき分け北上した。この時は、好運にも野営しようとした露岩丘に遺跡を発見することができた。3度目の探査行は、カドゥルピティヤ部落から最初の探査行と同じルートを通り、途中、南ホラウエラ・ガラのバタハを調査し、マハウエリ河に至った。アンバガハラ・ウエラの遺跡調査の後、マハウエリ河沿いに南下し、マラカ村に帰着した。他の遺跡は、全てカドゥルピティヤ部落での聞き込み情報に基づき、日帰り調査で行なった。

また、ワスゴムワ・オヤ以北（自然保護区）の
密林遺跡に関しては調査が及ばなかった。この地

域の遺跡については、第4次遠征隊以降の調査子
定に組み入れてある。



<82> ミドゥラネ・エラーキヴレ・エラ合流点の遺跡

the confluence of MIDURANE ELA
and KIVULE ELA

Location;

This site is located about 2.7km. the west by north from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

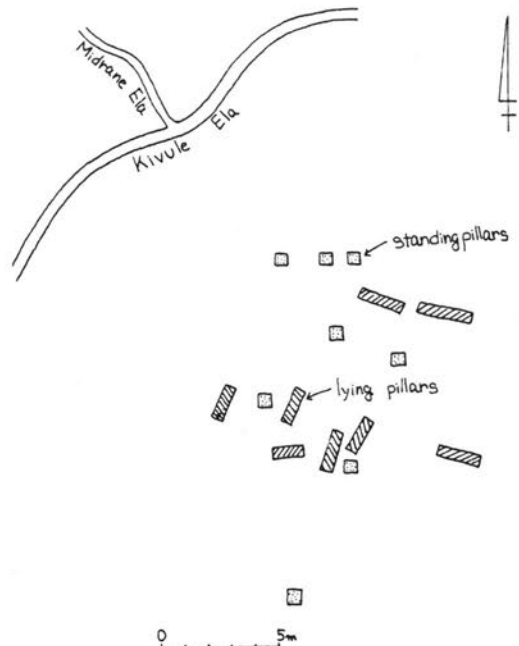
The ruins are situated in jungle. The remains of a group of broken stone pillars and many bricks are there. Most part of the ruins seems to be buried in the ground. The remains of 17 pieces of stone pillars are scattering within 20m.around and its general form is not clear utterly. Some of these pillars are carved wave patterns on these corners and the longest pillar which is entirely exposed on the ground is 2.3m.in height.

【調査】10月6日

【スタッフ】田中、境、深谷、ワサンタ、サイネリス、ウパーリ(6名)

【位置】カドゥルピティヤの西北西約2.7kmのジャングル内に位置する。ミドラネ・エラ(用水路)とキヴレ・エラの合流地点より南南東約100mの位置。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティヤより、ワスゴムワ川へ通じるジープ道(通称ワスゴムワ道路)を北上するとエッレ川に到着する。その地点より、エッレ川の河床沿いに、上流へ南西方向に進む。1.5km程行くとミドラネ・エラとキヴレ・エラの合流点に到着する。そこから、ジャングルに入り南南東に100m程進むと、石柱が散在した遺跡に着く。



【概要】ジャングル内の遺跡であり、周囲はヤブと化している。遺跡は倒壊した石柱群と多数のレンガ材が散在するのみで、遺跡物の大部分は地下に埋没していると思われる。石柱は約20m四方にわたり分布しているが、全体的形状は全く不明である。石柱は確認できたもので17本あり、大

部分は地中に埋没し、長さなど確認できないものが多い。地上に完全に表出している石柱で最長のもは2.3m程で、地下に埋没している石柱なども高さは同程度であると思われる。何本かの石柱の角には波形模様が彫られている。

<83> ムッカルクンダの寺院遺跡

MUKKARU-KANDA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 4km. the west by north from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

This site extends over the small flat ridge which is about 50m in width in the jungle. At the east end of the ridge, there are the remains of a structure with pillar stumps, rubbles, bricks (C-c, photo C2, fig. C), broken stone plate (C-a, photo.C1) (A,B,C). At the north of the center point of the ridge, there are the remains of a structure with rectangular stone foundation (D, fig. D). At the center point by west of the ridge, there are the remains of many stone pillars, pillar stumps and brickbats (E, F, fig. E1, fig. E3, fig. E4, fig.F, fig. F1, photo F1). At the south of the center point of the ridge, there are the remains of two lines of foundation of stone walls which run from east to west (G,H). At the southwest side of the ridge, here are the remains of inscriptions (ancient letters) which are carved out of the rock plate (I-a, photo I1, fig. I), stone pillar stumps and rubbles (I-b).

At the northwest side of the ridge, there are the remains of a foundation of a stone wall (J). At the southwest end of the ridge, there are the remains of a stone pillar which has patterns (K, photo.K, fig. K), some pillar stumps (M, L-a, L-b), cobra hood rock inscription (L-c, photo.L, fig. L) and a short stone lines from east to west (L-d).

【調査】10月10日

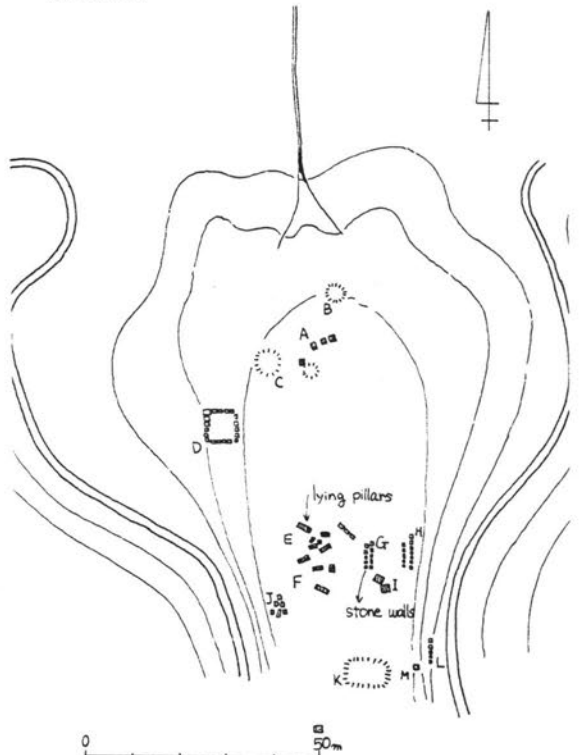
【スタッフ】田中、下坂、深谷、境、サイネリス、ウパーリ、ワサンタ、ソーマパーラ(8名)

【位置】カドゥルピティヤより西北西4kmの地点。「地図」には名称、遺跡印ともなし。ミドラネ・エラとその支流にはさまれ、山地より伸びた台地上に位置する。

【アプローチ】カドゥルピティヤから北西と西南西の方向へ交互に縫うようにして進む。しばらく平原の道を600mほど北北西に向かって進んだ後、ジャングル内へ続くマハ・カドゥルピティヤ道路と呼ばれる道にはいり、それに沿って進む。そこを400mほど西へ行くと、少し開けた耕作地へ出る。さらに500mほど先でエッレ川を渡り、やがて再びジャングルへ入り、キリオエ道路と呼ばれる道に沿って行く。そこから1.6kmほど進むと焼き入れが行なわれたばかりの空地へ出る。進行方向に向かって左手にジャングル、右手に切り開かれた平地を見ながら、さらに西に進み、400mほど行って再びジャングルへ。そこから100mも行かない地点でミドラネ・エラ(川)と出会いさらに100mほど先で、川の分岐に出る。そこでミドラネ・エラ(川)の支流を渡り、小さな沢沿いに300mほど行った地点より、北上すると到着。

【全体的状況と位置関係】山地を背に、ミドラネ川と支流にはさまれた細長い幅50mほどの台地

上に、東から、レンガ、石材の散在、石盤、石柱群、外壁、文字石盤等が分布している。他にも石片やレンガ片が多数近くの川に落ち込んでいる。わずかに残存している石材、レンガ片の位置などによって、2つの建造物跡と外壁、内壁と思われるものが確認できるのみである。外壁、内壁等は、両側を流れるミドラネ川が、かなり台地を浸食しているため、大部分が落ち込んでいる模様で不明瞭である。



【各部分の状況】

〔A 石材〕台地の最東端の沢の縁に、大きさがそれぞれ $30 \times 25 \times 40 \text{ cm}$ 、 $25 \times 25 \times 50 \text{ cm}$ の2つの石材がころがっている。石柱の破片であると推測される。

〔B レンガの散在〕台地の最東端付近に、 $20 \times 20 \times 5 \text{ cm}$ から $30 \times 40 \times 8 \text{ cm}$ ほどのレンガ片が多数散在。ひとつだけとびぬけて大きい長さ 50 cm のレンガ片があったが、大部分土中に埋もれ、正確な大きさは確認できなかった。それ以外にも石片、レンガ片が付近に多数散在。

〔C 建造物跡〕明確な土台などは見られず、敷地形状も明らかではないが、付近に大きな石盤やレンガ片と石材が集中的に残されていることから建造物跡であることが推測される。以下、各部分を説明する。

<a 石盤>連続的に並んで土に埋もれた3つの断片よりなる。風化が進み、ところにより若干厚さが異なっており、いたる所苔むしているが、不鮮明ながら、表面には線刻があり、縁には4段に削って加工が施されている。大きさは、全体を想定すると $2.1 \times 1 \times 0.15 \text{ m}$ である。この付近には、大きさ $22 \times 22 \times 7 \text{ cm}$ のレンガが多数散在している（写真C1参照）。

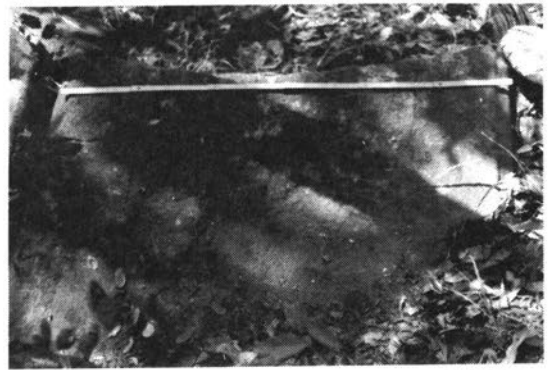
<b 石柱>断面は台形をしており、土中に一部分が埋まっている。大きさは $44 \times 12 \times 46 \text{ cm}$ で、倒壊した石柱の一部と思われる。この周囲にもやはり多数のレンガ片が散在。

<c レンガおよび石片群>断面が半円形をした $20 \times 16 \times 36 \text{ cm}$ 、 $20 \times 12 \times 40 \text{ cm}$ の大きさの2つのレンガが5 mの間隔を置いて地面にころがり（写真C2、図C参照）、その周囲には、整ったもので $22 \times 22 \times 7 \text{ cm}$ の大きさのレンガがやはり多く散在。また、付近には石片も多く散在している。

<d レンガ片群>一辺が $5 \sim 10 \text{ cm}$ 程度に細かく

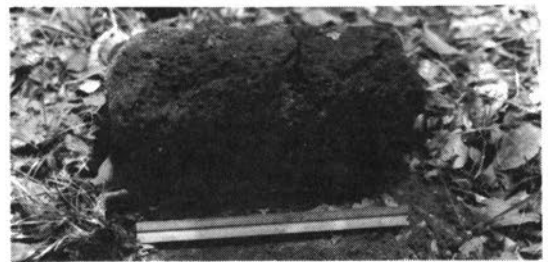
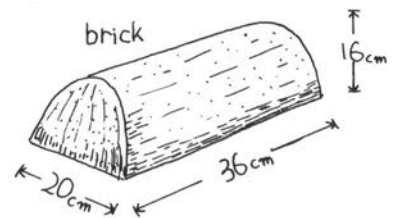
不規則に欠けたレンガ片が、無数に3 m四方に集中的に存在している。

〔D 建造物跡〕台地の中央北側に位置する。建造物を形成していたと思われる石積みがあり、約 30 cm 四方の石材が縦横 7.3 m にわたって散在している。レンガ片はあまり見られず、単に建造物の土台であったとも考えられる。石材がある地点は、他の場所より高く盛り上がり、仏塔跡であるとも考えられる。また北側は急斜面で石積みも大きな石が使われており、3段に積まれているのが確認できる（図D参照）。



写真C1

Fig.C.



写真C2

〔E石柱群〕台地の中央寄りの地点に6 m四方にわたって石柱が数本倒れている。大きさはまちまちであるが、中には他の遺跡では見られない凹型をした特徴ある石柱があった。おそらく、石柱の頭部であると思われる。以下各石柱の大きさを記す。
 ① = 35 × 24 × 130 cm (図E1)。② = 25 × 16 × 60 cm、40 × 16 × 54 cm (2つに折れている)。③ = 40 × 10 × 130 cm (図E3)。
 ④ = 32 × 10 × 230 cm (図E4)、⑤ = 43 × 13 × 115 cm、⑥ = 25 × 5 × 64 cm、25 × 10 × 28 cm、40 × 20 × 50 cm、23 × 16 × 65 cm (4つに折れている)。

〔F石柱群〕台地の中央西側の北寄りに位置。E石柱群とあわせて1つの建造物跡を構成していたとも推測できる(図F参照)。石柱の数は5本で、1本だけほぼ完全な形で倒れており、長さは2 m、幅30 cm、厚さ30 cm(写真F1、図F1参照)。また、この付近には、レンガ片も散在しているが、レンガ自体は風化が著しく、レンガ土と化しているものもあった。

〔G内壁〕台地の中央南側に位置。東西32 mにわたって続いており、位置関係から内壁であったと推測される。石垣に使用されている石材はかなり大きく、50 cm四方ほどのものが多い。現在は上の部分は崩れ去り、下部の一段を残すのみである。



写真F1

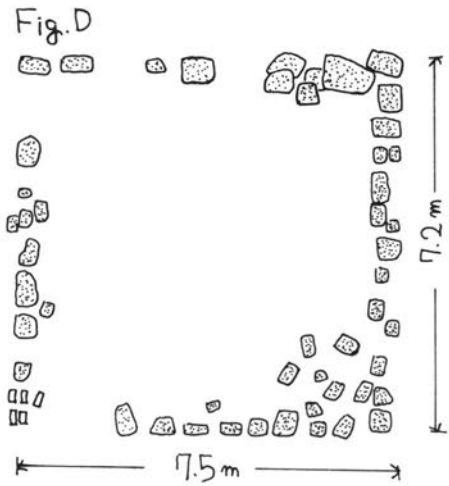


Fig. E・F

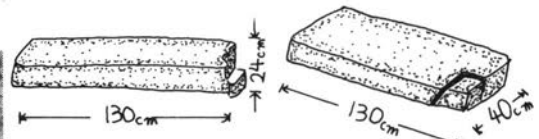
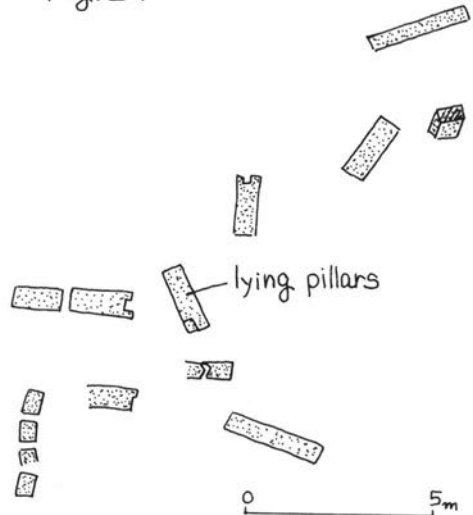


Fig. E1

Fig. E3

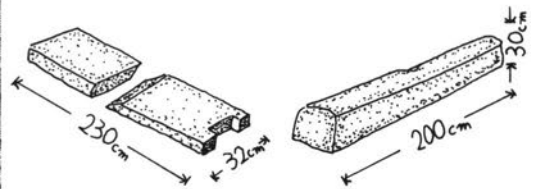


Fig. E4

Fig. F1

〔H外壁〕台地の中央南側、G内壁の南8mの地点に位置。外壁を形成していたと思われる石垣である。東西8.3mにわたって伸びているが、全体的に崩れかけている。石材の大きさはまちまちであるが大きいものは60×30×20cm程度である。

〔I文字盤および石柱〕台地の南西緩斜面上に文字が刻まれた石盤と石柱と少数のレンガ片が見られる。

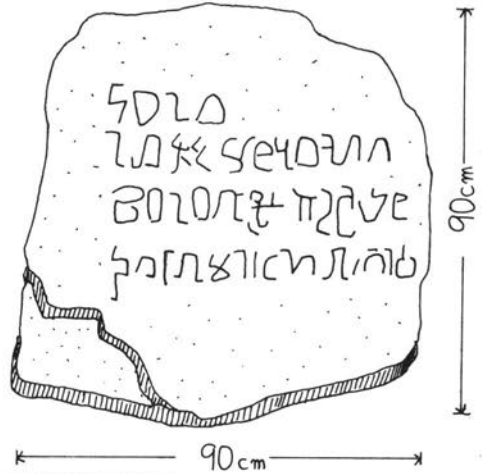
〈a文字石盤〉文字の刻まれた面を上にして倒れており、下部は土に埋もれている。大きさは縦横90cm、厚さ21cmで、平らな表面に古代のシンハラ文字が不鮮明ながら確認できる。ひとつの文字は、10cm四方ほどで、3通りにわたっていくつかの文字が刻まれている(写真I1・I2、図I参照)。

〈b石柱〉凹凸のある面を上にして倒れており、下部は土に埋まっている。大きさは幅33cm、厚さ8cm(地表に露出している部分)、長さ75cm。周囲には、自然石か人工的なものかどうか確認の難しい石片が幾つか散在している。

〔J石垣〕台地西側の北寄りに位置する。10m四方にわたりミドラネ川に向かって石片やレンガが土砂とともに流れ落ちている。おそらく外壁を形成していたものであろうが、崩壊が激しく、その形態はまったくわからない。

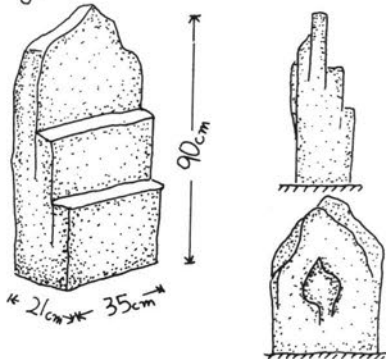
〔K石柱〕台地の西角南側に位置。大きさは21×35×90cm。表には3段の刻みがあり、裏はコブラの頭のような模様が彫られている(写真K、図K参照)。

Fig.1



写真I1

Fig.k.



写真K

〔L石片群〕平らな石片および石柱片と思われるものが、北北西から南南東へ向かって南側斜面上に多数散在している。

<a石柱>大きさは $21 \times 13 \times 60$ cmで石柱の断片だと推測される。

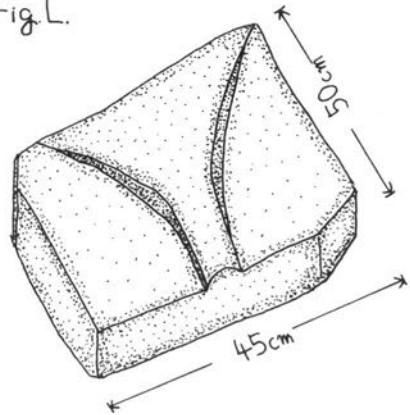
<b石柱>大きさは 20×8 (地表に露出している部分) $\times 41$ cmで、倒れており、下部は地中に埋まり正確な厚さはわからない。

<c石碑群>彫られた面を上にして倒れており、一部地中に埋もれている。彫り型は、その形状からコブラを型どったものだと推測される。大きさは地表に出ている部分が、 $50 \times 45 \times 10$ cm (写真L、図L参照)。

<d石列>表面が平らで、大きさが縦 $30 \sim 50$ cm、横 $20 \sim 30$ cmほどの石片が多数散在し、一部列を成しているかに見える。石片の厚さは土に埋もれているため不明。

〔M石柱〕台地の西角中央やや南寄りに位置する。石柱の破片と思われるものが1本地表に突き出ているだけで、まわりには他に何も無い。

Fig.L.



写真L

<84> ホラウェラ・ガラ寺院遺跡

HORAWELA-GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 2.4km. the east by north from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line. Alongside of the path in the jungle, there are another ruins of cave.

Summary;

The ruins are situated on the rock hill which extends over about 135m.from east to west, about 50m.from north to south, about 25m.in height. On top of the rock hill, here are the remains of a dagoba on the rectangular platform with many

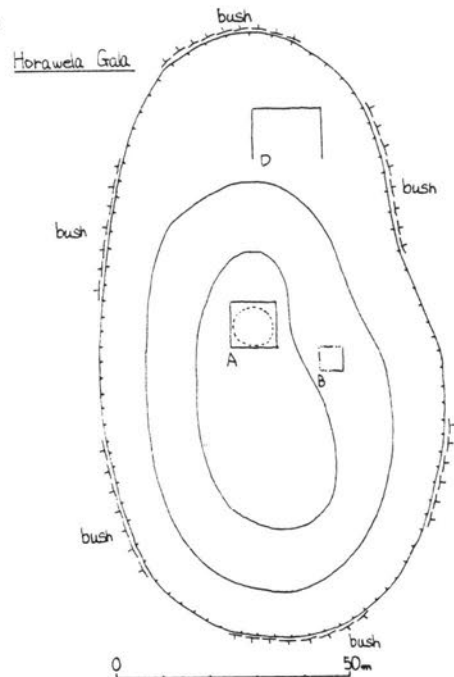
bricks (A, photo. A, fig. A). On the half way up of west by south slope of the rock hill, here are the remains of a structure with lying bricks (B, fig. B). On the southwest slope of the rock hill, here are the remains of a structure with stone foundations and many bricks (C). At the east foot of the rock hill, here are the remains of a structure with rectangular stone foundation, bricks and two stone pillars (D, fig. D). At the south foot of the rock hill, here are the remains of a sacred foot print stone (E, photo. E1). At the west of the dagoba, here are the remains of a water hole (F). On the halfway up the north slope of the rock hill, here are the remains of a water hole (G, photo. G1). On the halfway up the east slope of the rock hill, here are the remains of a water hole (H) with a ditch (I) which is carved on the rock.

【調査】10月15日

【スタッフ】田中、深谷、下坂、ワサンタ、サイネリス、ウバーリ、ブンチパンダ(7名)。

【位置】カドゥルピティヤの東北東約2.4kmの地点。ジャングル内の孤立岩丘上に位置。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティヤより、ハサラカ道路から分岐してマハウェリ河に通じるジープ道(通称ヨダガンナワ道路)を東へ約2km進む。この地点から北へ進路を変え、ジャングル内の小道を行く。150m程進むと草原に出るが真北に直進し、再びジャングルに入る地点より、進路を北西にとり行くと、ホラウエラ・ガラに到着する。このジャングル内の小道沿いに岩窟(<85>参照)が1つある。



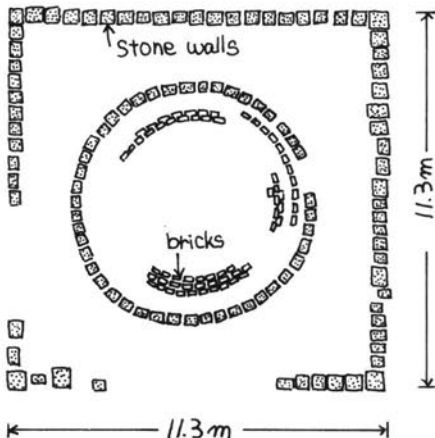
【全体的状況と位置関係】東西に細長い楕円形の孤立岩丘である。岩丘の規模は長径13.5m、短径5.0m、高さ2.5m程で、岩丘の頂上には仏塔跡がある。仏塔跡を中心とし、西南西斜面の中腹にB建造物跡、南斜面にC建造物跡、岩丘の東の麓にはD建造物跡がある。建造物跡にはレンガ片が散在し、土台の石組みが残存している。また、仏塔跡の南西、北、東の岩丘斜面には岩盤を穿ったパタハがある。岩丘の南の麓には仏足石がある。

全体的に崩壊が激しく、建造物の位置関係を知ることができるのみで、立体的な復元は不可能である。ただ、建造物の土台を形成している石組みは比較的残存度が良好である。

【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕岩丘の頂上部にある。仏塔は盗掘によって崩壊し、レンガ材が周囲に散在している。しかし、建造材の角石による石積みの土台は比較的残存度がよい(写真A参照)。土台は一辺11.3mの正方形をなし、東西南北に面している。北面は岩丘の斜面にあり、1.5mほどの高さに、5～6層の石積みがされている。角石の大きさは様々であるが、一辺が20～70cmほどのものである。東面は最も残存度がよく、角石の列がはっきりと残っている。南面と西面は流出したレンガ片

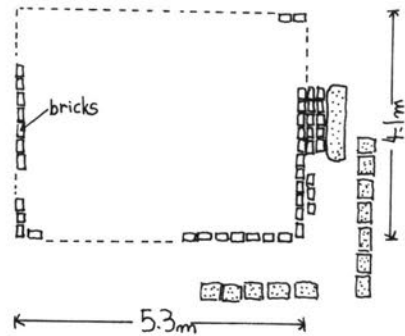
Fig.A



や土砂に埋もれ、一部が残っているだけである。レンガ積みによる仏塔は崩壊しているが、石積みの土台より50cmほど高く土盛り状になり、注意深く見ると、レンガ列が円形になっている(図A参照)。

〔B 建造物跡〕仏塔跡の西南西に位置し、レンガ材が多量に散在するが、崩壊が激しく形状は定かではない。東側にはレンガ材が50cm程の高さで階段状に組み立てられており、部分的に残存するレンガ列から、長方形を成していたと思われる(図B参照)。

Fig.B



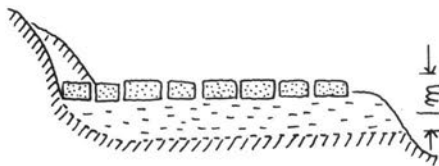
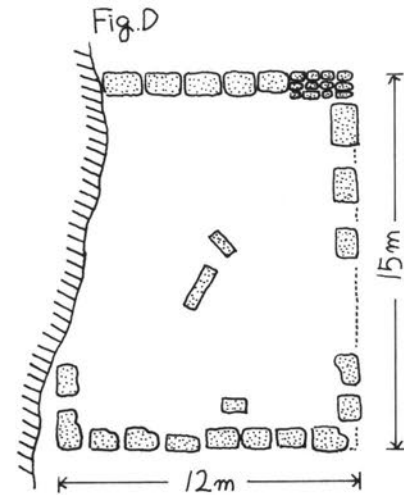
〔C 建造物跡〕仏塔跡の南10mに位置し、岩丘の南東側の斜面に面している。急斜面のため東側には石積みの土台が残存する。風化、崩壊が激しくレンガ材と土砂により10×6m程の土盛りと化している。レンガ材は周囲一面に散在し、また、石積みの角石の大きさは平均的なもので80×80×50cm程のものである。



写真A

〔D 建造物跡〕岩丘の東側の麓に位置する。角石積みによる 12×15 mの長方形の土台がある。レンガ材が散在し、2本の石柱がある。1本は倒壊し1本は埋もれている。全く崩壊しており、形状は不明(図D参照)。

〔E 仏足石〕岩丘の南の麓に仏足石と思われる正方形の石板がある。周囲はヤブと化し、他の遺跡物もない事から、頂上部より転がり落ちたものか、運搬されたものと思われる。表面に模様はないが側面は段状に彫られている。大きさは $90 \times 90 \times 25$ cmである(写真E1参照)。



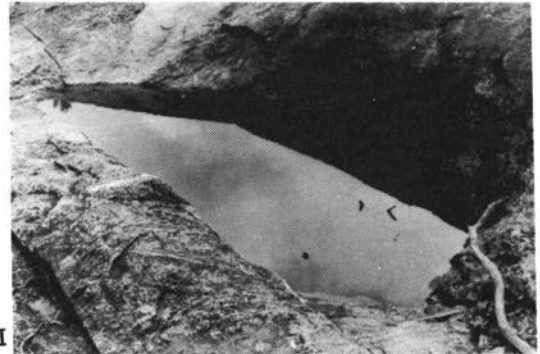
〔F パタハ〕岩丘の頂上部、仏塔跡の西側にある。長径5.2 m、短径1.6 m、深さ25 cmである。

〔G パタハ〕岩丘の北側斜面中腹に位置。三日月形で、岩盤を穿ったものである。長径6 m、短径2 m、深さ1 m程。また東角には浅く緩やかな溝が幅30 cmにわたって掘られている(写真G1参照)。

〔H・I パタハ〕岩丘の東斜面の中腹に位置。岩盤の亀裂を利用したもので、かなり深い。現在は低木が繁り、水は無い。パタハの周囲には幅2~10 cmほどの溝が掘られ、雨水が流れ込むようになっている。



写真E



写真GI

< 85 > ホラウェラ・ガラ南の岩窟

the south side of HORAWELA-GALA

Location;

The ruins exist about 100m the south from the Horawela-Gala (See No. 84). This site is located

about 2.4km.east by north from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

The ruins are situated at the east foot of the rock hill which is about 50m.in diameter. Here are the remains of a drip-ledged cave which is about 5m.in height, about 4m.in depth (photo., fig.).

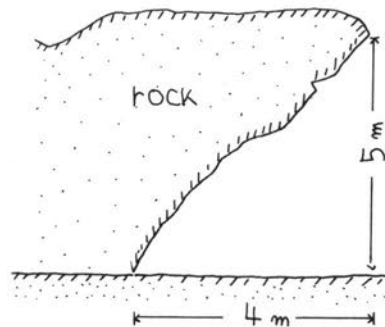
【調査】10月15日

【スタッフ】田中、深谷、下坂、ワサンタ、サイネリス、ウバーリ、ブンチパンダ(7名)

【位置】カドゥルピティヤの東北東約2.4kmの地点。ホラウェラ・ガラ寺院遺跡<84>の南約100mの地点。ホラウェラ・ガラへ通じる小道沿いにある。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】ホラウェラ・ガラの寺院遺跡<84>へのアプローチ参照。

【概要】直径約50mの円形の岩丘の東側の麓にある。岩窟というより、岩丘の突出した岩盤を利用したひさしで、高さ5m、奥行き4m程のものである。岩盤の突出した部分には人為的に彫られた雨ドイがあり、雨水が天井伝いに内部に入り込まないようにしてある。おそらく、僧舎跡と思われる。しかし、岩丘上に他の遺跡物はなく、ホラウェラ・ガラの寺院遺跡の付属遺跡である可能性もある(写真、図参照)。



<86> 南ホラウェラ・ガラのパタハ

SOUTH-HORAWELA-GALA (ruins of water hole)

Location;

This site is about 0.5km. the south from the Horawela-Gala. This site is located about 2.7km. the east by north from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

Here are the remains of a water hole on the northwest foot of the low rock hill which extends over 250m. from north to south, 200m. from east to west (See photo).

【調査】10月16日

【スタッフ】田中、境、下坂、ワサンタ、サイネリス、ウパーリ、ペーマダーサ(6名)

【位置】カドゥルピティヤの東北東約2.7kmの地点。ホラウェラ・ガラ寺院遺跡<84>の南方約0.5kmの孤立岩丘上にあるバタハ。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティヤよりヨダガンナワへと続くジープ道を東へ約2km進んだ地点から、獣道を北へ300mほど進むと草原に出る。草原の西端の高さ30mほどの岩丘を迂回すると裏手に小岩丘があり、その小岩丘上にバタハがある。

【概要】岩丘は東西200m、南北250mほどの規模で、頂上部北東側の平坦部にバタハがある。

バタハは三角形を呈し、長さ4.2m、幅1.7mほどのものである(写真参照)。このバタハは現在も水を貯え、象の水場となっている。

岩丘上に他の遺跡物を発見することはできなかった。



<87> ウィルミティヤ・ウェワ南西の遺跡

SOUTHWEST-WILMITIYA WEWA

(ruins of stone pillars)

Location;

This site is located about 3.7km. the east by north from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line. This site has a mark of Tank on the "Map".

Summary;

At the back of one villager's house, here are the remains of sixteen stone pillars (A, fig. A1, photo. A1), stone steps and bricks (A, photo. A2, A3). Some of bricks are carved patterns on those face. Apart from these re-

mains, there is a small rock hill about 60m. the northwest from the group of the remains of stone pillars. The small rock hill is about 10m. in high and 60m. in diameter. The rock hill is almost covered with vegetation. Here are the remains of two water holes (B,C) and a small hole (D).

【調査】10月4日

【スタッフ】田中、境、深谷、サイネリス、ウバーリ、ワサンタ、アーナンダ(7名)

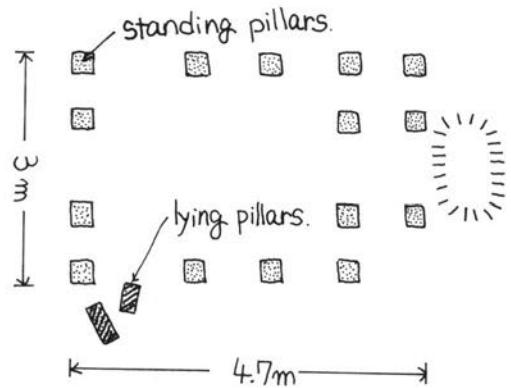
【位置】カドゥルピティヤの東北東約3.7kmに位置。ウィルミティヤ貯水池跡より南へ700mの地点に位置する。「地図」上に貯水池跡の印はあるが、遺跡印はない。

【アプローチ】カドゥルピティヤからヨダガンナワへ続くジープ道(通称ヨダガンナワ道路)を東へ約4km行くと、ウィルミティヤ貯水池跡の草原に出る。草原の南には5~6戸の小さな開拓部落があり、遺跡は南端の民家の裏手にある。

【全体的状況と位置関係】民家の裏手に16本の石柱が立ち並んでおり、地表にレンガが多量に露出している。村人の話によると多量のレンガ片の

ため耕作することができないとのことである。石柱群より北西約60mに、高さ10m、直径60m程の小岩丘があり、その岩丘上にバタハがある。岩丘上に他の遺跡物は発見できなかった。

Fig. A1.



写真A1



写真A2

【各部分の状況】

〔A建造物跡〕16本の石柱が縦4.7m、横2.7mの敷地内に等間隔に立ち並んでいる。正面と推

測される東側には階段跡とおぼしき石段とレンガ積みが残存する。石柱の下部は地下に埋もれ、露出部分の高さは約60cmである。一部の石柱を掘り起こしたところ1.65mのものが確認できた(写真A1、図A1、A2参照)。また、一部の石柱とレンガ材の中に、表面に模様や溝が彫られたものがあつた(写真A2参照)。
〔Bパタハ〕岩丘の頂上に位置する。規模が長径6.7m、短径2mの細長いパタハである。内部は

土砂が堆積し、正確な深さは不明。現在、貯水能力はない。

〔Cパタハ〕Bパタハの東南東約50mの緩斜面に位置。長径1.7m、短径0.7m、深さ0.8mの小さなものである。山側は更に50cm程岩を穿っており、貯水量を増加させている。

〔D小穴〕Cパタハの南南東10m、岩盤の平坦部に半径10cm、深さ15cmの穴が掘られているが、用途は不明。

<88> ウィルミティヤ・ウェワ北東の遺跡

NORTHEAST-WILMITIYA WEWA

(ruins of stone pillars)

Location;

This site is located about 5.1km. the east by north from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

Here are the remains of sixteen stone pillars (A, photo.A1, photo.A2). Around it are the remains of a circular brick wall (B). Many brickbats lie scattered around them. Almost those site might be burried under the ground. There are the remains of a water hole (C) on the flat rock outcrop which is 100m the west from the pillars.

【調査】10月5日

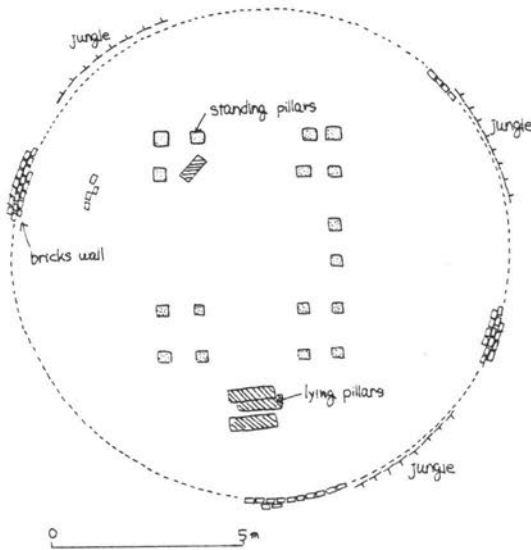
【スタッフ】境、サイネリス、ウパーリ(3名)。

【位置】カドゥルピティヤの東北東5.1km、ウィルミティヤ貯水池跡より、北東1.1kmのジャングル内に位置する。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティヤよりヨダガンナワへ続くジープ道を東へ約4km進むと、ウィルミティヤの貯水池跡に出る。さらにジープ道を1.5

km進む、そこから北へジャングルと原野を交互に越えて1kmほど進むと、ジャングル内の遺跡に到着する。

【全体の状況と位置関係】遺跡は16本の石柱を中心にレンガ片が散在しており、それをとり囲むようにして、レンガ積みの外壁がある。しかし、大部分は崩壊して地表にわずか露出しているのみである。岩丘上の遺跡と違い、落葉や土砂により遺跡全体が埋もれてしまっている。遺跡の西



約100mには小岩丘上にパタハがある。

【各部分の状況】

〔A石柱群〕石柱が地表に露呈している部分は、わずか60cmほどで、合計16本の石柱が等間隔に並んでいる（写真A1、写真A2参照）。石柱の高さは一定しているが、太さはまちまちである。中には模様が刻まれているものもある。東側には同じ大きさの石柱が3本重なって倒れている。

〔B外壁〕石柱を中心に半径5～6mで円形の外壁がとり囲んでいる。レンガ積みの壁で、現在は風化が激しく地表に10cmほど露呈している。壁の厚さは55cmもあり、高さはどの程度のものかわからないが、レンガ片が多量に散在していることからかなり高く積まれていたと推測される。ハンターの話によると、外壁の内側に石柱をとり囲

んで、レンガの壁があったということだが、わずかにレンガを積んだ跡が確認できるのみで、その敷地形状は不明である。

〔Cパタハ〕A石柱群より西方約100mに、半径30m、高さ7～8mの小規模な岩丘がある。岩丘の頂上部に長径6m、短径0.9mの細長いパタハがある。岩丘の表面の風化が激しく、パタハに水が流れこむような溝の跡は確認はできない。このパタハは、水場として独立したものではなく、A石柱群遺跡の付属遺跡であると推測される。



写真A1



写真A2

<89> ヴェヘラ・ガラの寺院遺跡

VEHERA-GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 4.2km. the east by north from the Kadurupitiya (II.B.C) in a

straight line.

Summary;

The ruins are surrounded with the bush.

The remains are situated on the small rock hill which extends over about 70m. from east to west, about 30m. from north to south, about 7m. in height. On top of the rock hill, there are the remains of a dagoba (A, fig. A, photo. A1-A4) and many bricks. At the east side of the dagoba, there are the remains of three water holes (B, photo. B, C, D). At the southwest side of the dagoba, there are the remains of a corner stone (A, fig. A1, photo. A5).

【調査】9月29日

【スタッフ】田中、境、深谷、サイネリス、アーナンダ(5名)

【位置】カドゥルピティヤから東北東4.2 km、マハウェリ河とエラコタリヤ川の合流地点の西北西約3.2 kmのジャングルの中に位置。「地図」には名称、遺跡印ともになし。

【全体的状況と位置関係】岩丘の周囲は濃密なジャングルであり、岩丘は長径70 m、短径30 mの楕円形、高さ7 mほどの小規模なものである。仏塔は頂上部にあり、仏塔の中心は盗掘され周囲には多量のレンガ片が散在している。岩丘の中央

【アプローチ】カドゥルピティヤよりマハウェリ河に向い東に続く開拓道(通称ヨダガンナワ道路)を約6.5 km東進すると、カダビンチッチャ川の支流に出会う。そこから、更にヨダガンナワ道路沿いに1.1 km行くと、北北西へ向う獣道(象の道)があり、その獣道を行くと草原に出る。草原を北北西に直進するとカダビンチッチャ川につきあたる。茨の密生したジャングルの中の獣道沿いに北へ500 mほど進むと小岩丘上の遺跡に到着する。

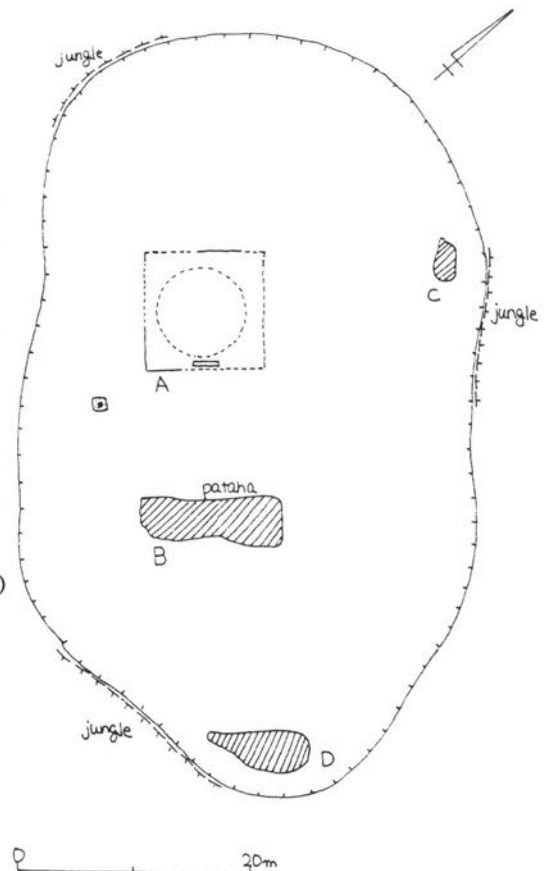
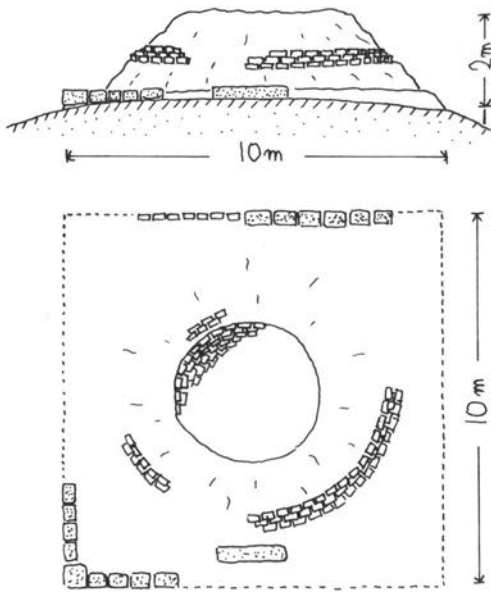


Fig.A



部、北部、東部にそれぞれパタハがあり、現在でも使用できる状態で象などの水場となっている。

【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕土台の石垣は西側、南側に数段露呈しているのみで、ほとんど土に埋もれ明瞭ではないが、一辺が10mの正方形であると推測される。北東側斜面にはドーム状のレンガ積みが数段組まれているのが確認できる（写真A1、A2、A3、A4、図A参照）。仏塔の東側の土台の下に石柱が1本倒壊しているが、用途は不明。更に仏塔の南西13mの地点に礎石が1つだけある（写真A5 図A1参照）。

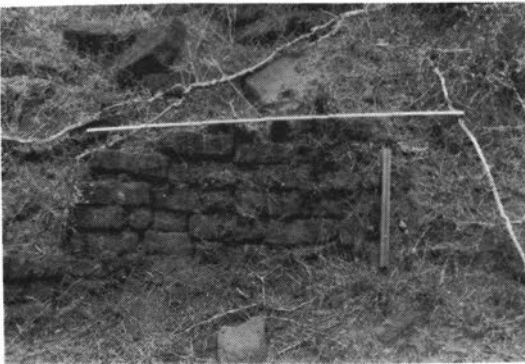
〔B パタハ〕A 仏塔跡の東16m、緩やかな斜面上に、岩の亀裂を利用して岩盤の内側を穿ってある。南北に細長い形をしており、長径13m、短径4mである。また、パタハの西側に岩盤に掘られた小さな穴がある（写真B参照）。



写真A1



写真A3



写真A2



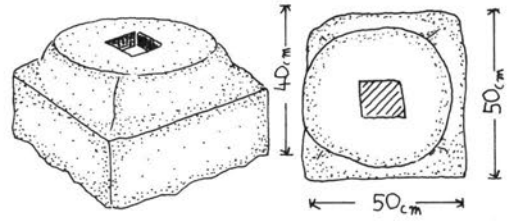
写真A4



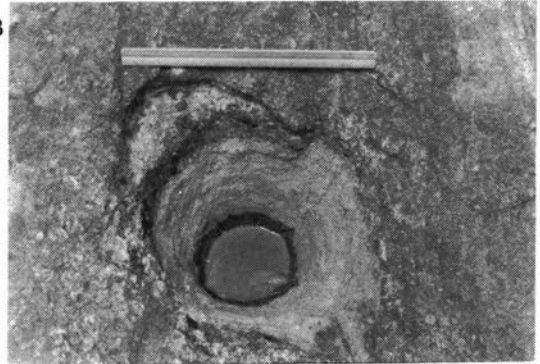
写真A5

〔Cバタハ〕A仏塔跡の北東25mの急斜面下に位置する。長径2.8m、短径1.3mの楕円形を呈している。片側には岩盤の下を更に奥深く穿っている。南側斜面は、雨水がバタハに流れ込みやすいようにすりばち状になっている。

Fig.A1



写真B



〔Dバタハ〕A仏塔跡の東36mの岩丘の端に位置する。岩盤の風化が激しく岩片がバタハの中に落ちこんでいる。バタハは三角形で長さ6.4m。

<90> アンバガハラ・ウェラの遺跡 AMBAGAHALA - WELA

Location;

This site is located about 8.5km. the north by east from the Maraka (B.C) in a straight line.

Summary;

The ruins are situated in the plain which is dotted with bushes. Some rubbles and many bricks lie scattered in the bush. This site is indistinct.

【調査】10月17日

【スタッフ】田中、下坂、境、サイネリス、ペー
マダーサ(5名)

【位置】マラカの北北東約8.5km、カドゥルピテ

イヤの東約7km、ヨダガンナワ分岐点の南方約1.1kmの草原に位置する。「地図」には名称のみ記入され、遺跡印はない。

【アプローチ】マラカからバス道路を北上、ヴェ

ヘラ・ガラ<89>に向かう支道を東に進むとマハウェリ河沿いを通るトラクター道に出会う。このトラクター道を北上するとヨダガンナワの草原の南端に到着する。ここから北東に400mほど行くと遺跡に着く。草原上にあるため発見するのに手間がかかる。

【概要】マハウェリ河西岸に近く、草原とジャングルとの境に位置する。草と低木が生い茂り遺跡を

発見するのは極めて困難である。明確な建造物跡はなく、埋没した石材を中心とした少量のレンガ片とヤブの中に散在した多量のレンガ材が発見できるのみ。代表的なレンガ材の大きさは、 $20 \times 20 \times 7 \text{ cm}$ 、 $22 \times 16 \times 6 \text{ cm}$ 、 $22 \times 27 \times 8 \text{ cm}$ 、 $21 \times 17 \times 8 \text{ cm}$ である。大きな遺跡物を確認することはできなかったが、その大部分は地下に埋没しているものと考えられる。

<91> マヤランウェラ・ガラのパタハ

MAYALANWELA-GALA (ruins of water hole)

Location;

This site is located about 1.6km. the northwest from the Yodagannawa. This site has a mark of Gala on the "Map".

Summary;

The ruins are situated on the small rock hill which is 50m.in the longest diameter, 40m.in the shortest diameter. On the east slope of the rock hill, here are the remains of a water hole.

【調査】9月30日

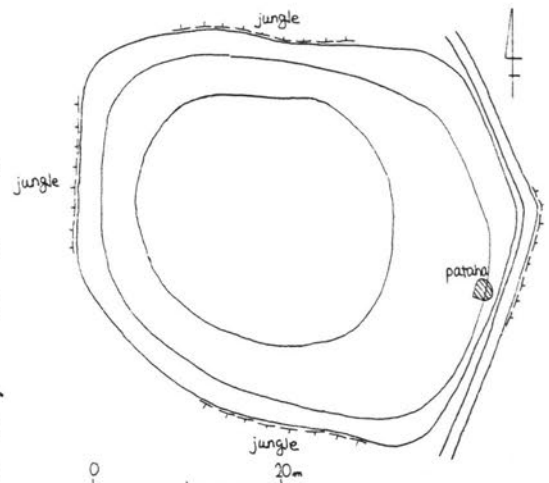
【スタッフ】田中、境、深谷、サイネリス、ウーリ、ワサンタ、アーナンダ(7名)

【位置】ヨダガンナワ北西約1.6kmに位置するマヤラン貯水池南端の小岩丘にある。「地図」には岩丘の印のみあり、遺跡印はない。

【アプローチ】ヨダガンナワよりアンバガハラ貯水池跡をジープ道沿いに北西へ約15分進むとカダピンチッチャ川に出会う。川を渡り更にジープ道を100m程進むとマヤラン貯水池南端の小岩丘に到着する。

【概要】ジープ道に面した小岩丘で、長径50m、短径40m程のひし形を呈している。岩丘上に建造物跡などは確認できない。岩丘の東斜面に長さ

Mayalanwela Gala



1.1 m、幅1 m、深さ1 mの小さなパタハがある。 ろう。パタハは、現在も水を貯えている。
おそらく街道筋の水場として利用されたものであ

<9 2> カルワラ・ゴラ・ガラの寺院遺跡

KARUWALA GOLLA-GALA (ruins of temple)

Location;

The site is located about 4.1km. the north-west from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

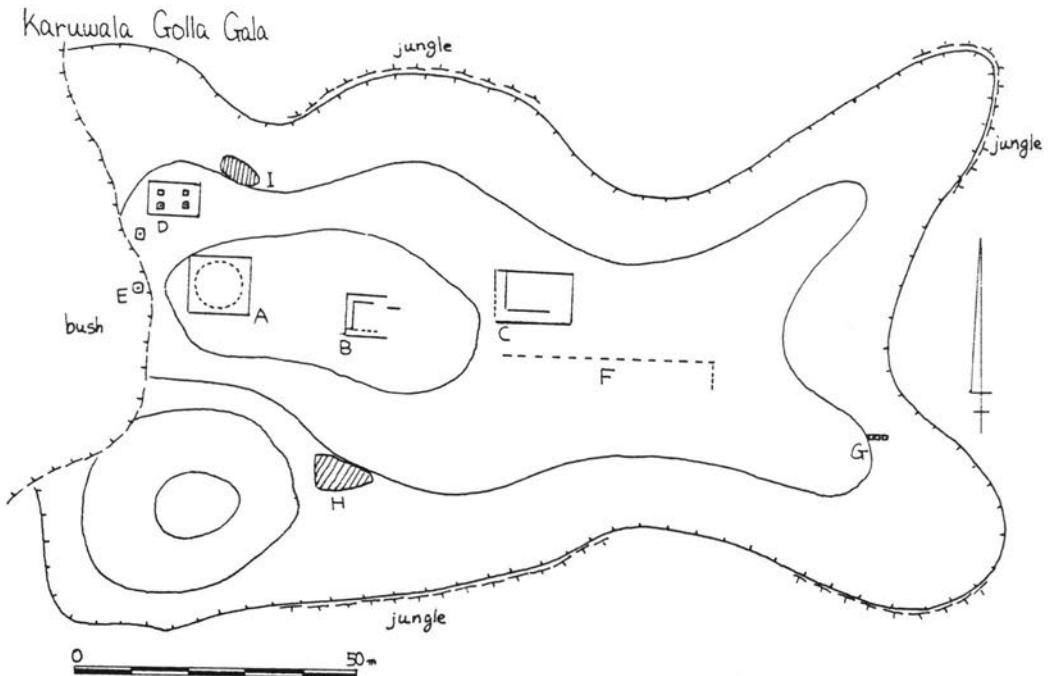
The ruins are situated on the rock hill which extends over 200m.from northwest to southeast, 100m.from northeast to southwest, and is about 50m.in height. At the center point by north on the hill, there are the remains of a dagoba on the base platform with the remains of two flight of stone steps, a stone plate and many bricks (A. fig. A, photo.A1-A3). The dagoba had been dug out by thieves. At the southeast of the dagoba, there are the remains of a rectangular structure (B, fig. B) with double layered brick foundation, two sacred foot print stone (photo. B2, fig. B2), a corner stone (B3), a flight of stone steps (B5) and building stones (B4, B6, fig.B6, B7, B8, B9, fig. B9). At the east by south of the dagoba, there are the remains of a rectangular structure with double layered brick foundation and one corner stone (C, fig. c, photo. C1). At the northwest of the dagoba, there are the remains of a rectangular structure with brick lines, brick steps, two corner stones, a stone plate and some materials of a building (D, fig. D).

Here also are the remains of a terrace made of stones. At the west of the dagoba, there are the remains of a structure with two pillar stumps, many brickbats and rubbles (E). At the south-east of the remains of a structure (B), there is a ruined stone wall extends over 18m. from east to west (F, photo. F1) with one corner stone (photo. F2). At the southwest of the dagoba, there are the remains of a brick wall like a flight of steps (G, fig. G). Here are the remains of two water holes on the rock hill. One is found at the south of the dagoba (H, photo. H) and the other is at the north of the dagoba (I, photo. I).

【調査】10月9日

【スタッフ】田中、境、下坂、深谷、ワサンタ、サイネリス、ウバーリ、ソーマパーラ(8名)

【位置】カドゥルピティヤの北西4.1kmに位置する。エッレオラ川中流部の分流が再び合流する地点から北へ500mに位置。「地図」には遺跡印、



名称が記載されている。

【アプローチ】カドゥルピティヤよりワスゴムワ川に続くジープ道(通称ワスゴムワ・ロード)を北へ約0.5 km進み、周囲に広がる草原を北東に直進する。約1 km進むとエッレオラ川に出る。その出合より、川床を3.5 kmほど下流に行くと、エッレオラ川の分流が再び合流する地点に到着する。この合流点よりジャングルに入り、北北西へ約500 m行くとカルワラ・ゴラ・ガラに到着する。

【全体的状況と位置関係】遺跡はジャングル内の孤立岩丘上であり、岩丘は北西より南東に約200 m、幅100 mの楕円形で、高さ約50 mの規模である。頂上部は緩やかなスロープとなっているが、南側と東側は急斜面となっている。岩丘の中央部北寄りに仏塔跡、南東部にはレンガ列が残存しているB建造物跡があり、それと並びC建造物跡がある。仏塔跡の北西側のテラスにもやはりD建造物跡がある。また、岩丘の南側には、外壁跡らしき石列がある。東斜面には、レンガ材を階段状に積みあげた遺跡物がある。パタハは、仏塔跡の北と南の2ヶ所にあり、現在も水を貯え象の水場ともなっている。

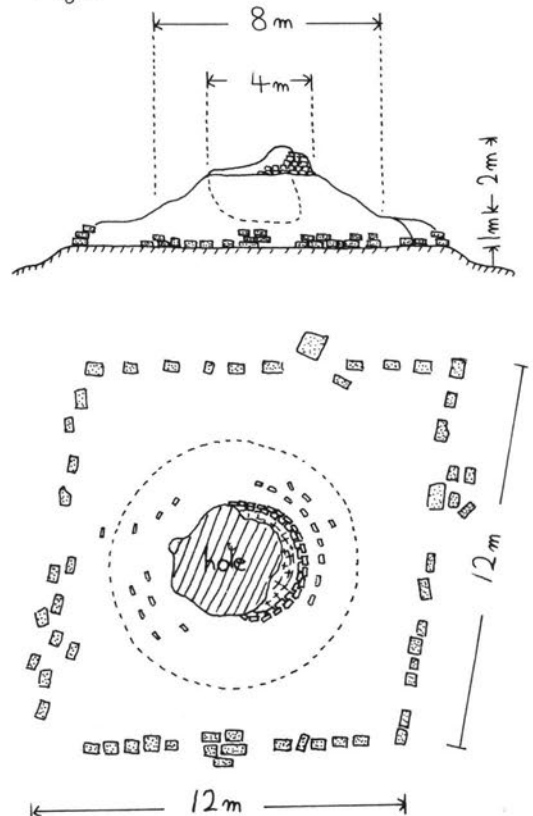
【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕方形の基壇とアーチ部分より成っており、崩壊が激しく盗掘跡もあるが、ほぼ原形の規模を推測できる。基壇は、北側底辺14.8 m、南側と西側底辺12 m、東側底辺14 mで、 $30 \times 20 \times 20 \text{ cm}$ ほどの角石を数段に積み上げてできているが、ところどころ風化崩壊し、土に埋没している部分も多い。西側と南側には、幅約1 mで3~4段の石段跡がある。また、基壇東側には表面に線刻が施され、縁が6段に刻まれた $60 \times 50 \times 18 \text{ cm}$ の石盤がある。仏塔のアーチ部分は2段になっており、最下部の直径8 m、二段目の最下部の直径4 m。深さ2 m、直径3 mの盗掘跡があり、それと連続して北側が大きく崩れてい

る。表面の崩壊も進行しており、積まれたレンガが露出していたり、崩れて埋没していたりで、南側部分を除いては、ほとんど原形を留めてはいない。また、南側部分もアーチの頂上部は崩壊していて不明。しかし、盗掘跡内部のレンガ積みは明瞭に残存している。典型的なレンガの大きさは、 $22 \times 21 \times 7 \text{ cm}$ (写真A1、A2、A3、図A参照)。

〔B 建造物跡〕仏塔跡の南東20 mに建造物跡がある。10 m四方にレンガ片が散在し、レンガ材による敷地が残存する。建造物の中ではもともと仏塔に近い位置である。全体の崩壊は激しいが、敷地形状は確認可能である。敷地は東西南北の方位に面し、東に入口がある。レンガ材による外壁は $7.5 \times 7.5 \text{ m}$ 、内壁が $5.5 \times 5.5 \text{ m}$ で、東側に突出してい

Fig.A.



る。周囲には、2つの仏足石(B1、B2)と礎石(B3)が1つある。また用途不明の石材(B4)があり、入口付近には、階段跡(B5)と用途不明の石材(B6、B7、B8、B9)がある(図B参照)。

<B1 仏足石> 100×100×20 cmの石板。模様はない。

<B2 仏足石> 90×90×27 cmの石板。二片に崩壊している。表面には模様があり、側面が二段にほられている(写真B2、図B2参照)。

<B3 礎石> 60×40×14 cm。柱穴15×15×10 cm。表面の風化が激しい。

<B4 石材> 62×34×23 cm。風化し、岩表がもろくなり、表面に直径54 cmの円形のくぼみがある。用途は不明。

<B5 階段跡> 4本の石材で形成された階段跡。35×28×9 cm、58×28×9 cm、30×25×11 cm、15×25×4 cm。

<B6 石材> 石の表面に左右両端に穴が彫られている。110×25×10 cm、穴7×8×3 cm(写真B6参照)。

<B7 石材> 半分以上が土に埋もれ、長さは不明である。端に2つの穴が彫られている。

<B8 石材> 土に埋もれ、大きさ不明。

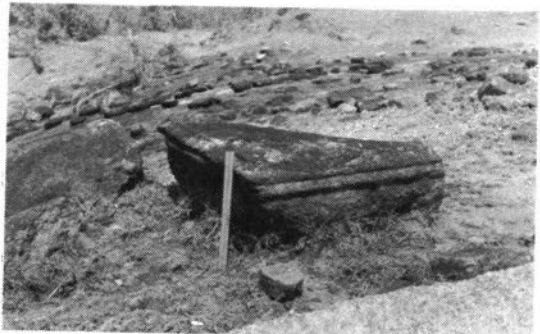
<B9 石材> 石の表面には大小6つの穴が彫られている。225×40×22 cm、穴13×6×6 cm、6×6×5 cm(写真B9、図B9参照)。



写真A1



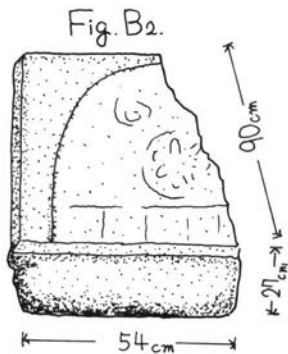
写真A2



写真B2



写真A3



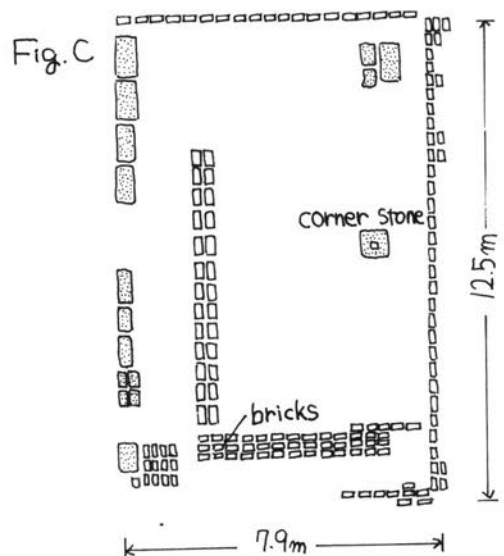
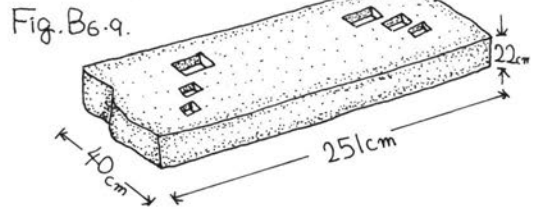
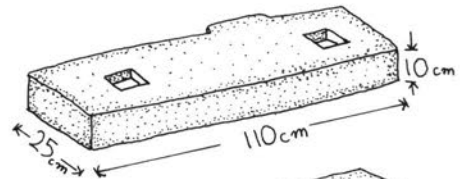
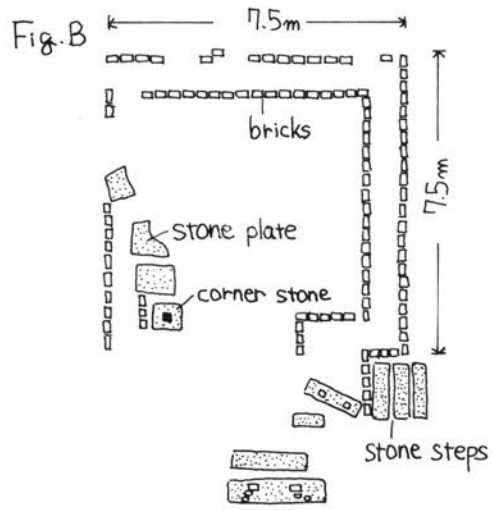
〔C建造物跡〕仏塔跡の東南東36mの地点に位置する。レンガ列が残存し敷地形状を確認することができる。外壁と内壁は崩壊しているが、外壁は、 8×12.5 m、内壁は 7×5 mのものである。建造物は東西南北の方位に面している。また、礎石が一つある。 $60 \times 70 \times 13$ cm、柱穴の大きさ $13 \times 14 \times 7$ cmである（図C参照）。

〔D建造物跡〕A仏塔跡の北西約30mに位置。西側7.5m、東側7.7m、北側9.6m、南側9.7mのレンガ列の外郭を持ち、その内側には石柱片らしきものや彫刻された石板も見られる。北側には幅2mのレンガの階段跡と入口を形成していたらしきレンガ材の散在が見られる。また、北側より約1m内側の地点に、入口跡と同じ間隔を置いて2つの柱穴のない礎石らしきものが並んでおり、さらにその奥に柱穴のある礎石が2つ並んでいる（図D参照）。外郭を形成するレンガの大きさは $40 \times 20 \times 6$ cm。内側に散在するレンガ材の大きさは $21 \times 19 \times 8$ cm。

また、D建造物跡北方7mの岩丘斜面上には人為的な石積みが見られる。石積みは東西10mにわたって確認できる。

〔E建造物跡〕仏塔跡の西25mのヤブの中に、建造物跡がある。全体は盗掘されたため崩壊が激しく土砂に埋もれ、その形状は不明である。周囲にはレンガ材と石片が散在し、倒壊した石柱が2本確認できる。2本の石柱は、長さ1.1mである。

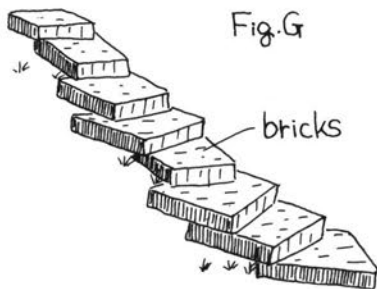
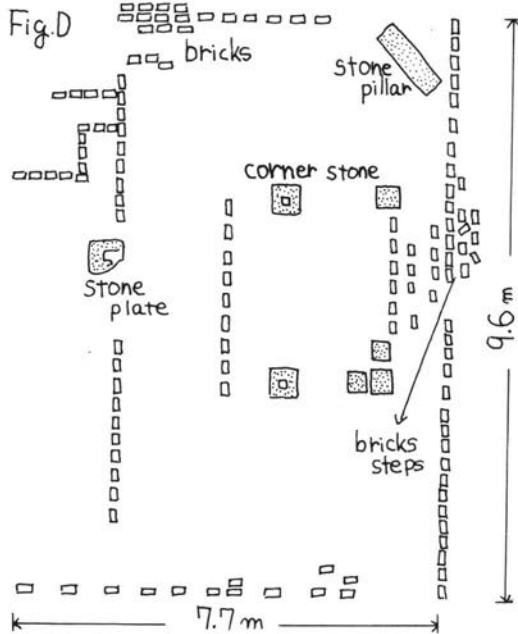
〔F外壁〕仏塔跡の南東40mの地点より東に18mにわたって石列がある。石材の大きさは一辺の長さ $10 \sim 80$ cmほどであり様々である。また、土砂に埋もれているため高さは不明だが、現在、地表より $10 \sim 20$ cmほど露出している。石材の間隔は $20 \sim 100$ cmであり、一定していない（写真F1参照）。石列の東端に礎石（ $75 \times 76 \times 26$ cm、柱穴 $16 \times 16 \times 12$ cm）が1つある（写真F2参照）。



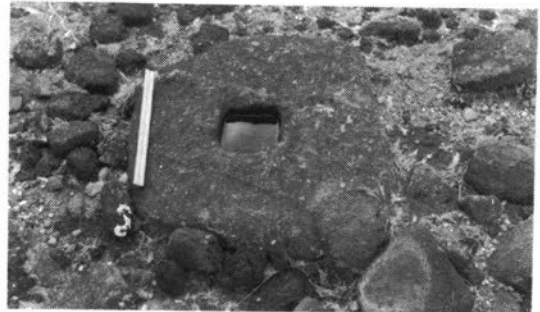
〔Gレンガ積み〕仏塔跡の南西7.3m、岩丘の東斜面に階段上のレンガ積みがある。急斜面上に幅22cmのレンガ材が若干弧を描いて積まれているが、用途は不明である。レンガ積みの高さは110cmである(図G参照)。

〔Hバタハ〕仏塔跡の南15mに位置し、岩盤が2mほどの段差をもつところに掘られている。楕円形で長径7.5m、短径3m、深さ50cmである。岩盤を穿ったもので現在も水を貯えている(写真H参照)。

〔Iバタハ〕仏塔跡の北約30mに位置する。岩盤の亀裂を利用して穿ったもので、長径5m、短径3m、深さ1mである(写真I参照)。



写真F1



写真F2



写真H



写真I

<93> ヴェヘラゴダの寺院遺跡

WEHERAGODA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 10.7km. the north-east from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line. This site has the name and a mark of ruins on the "Map".

Summary·

The ruins are situated on the level ground which is surrounded by the jungle. Here are the remains of a dagoba dug into by thieves on the square platform with lying bricks (A, fig. A). At the point about 40m. the west from the dagoba, there are the remains of a structure with fifteen stone pillars and a square hole whose wall is made of bricks. The hole is about 1.5m. in width, about 1m. in depth (B, fig. B). At the point about 18m. the west by north from the dagoba, there are the remains of a structure with seven standing stone pillars (C, fig. C). At the point about 50m. the west by south from the dagoba, there are the remains of a structure with many stone pillar stumps (D, fig. D). The remains of three corner stones are also there. Almost this site must be buried under the ground.

【調査】10月1日

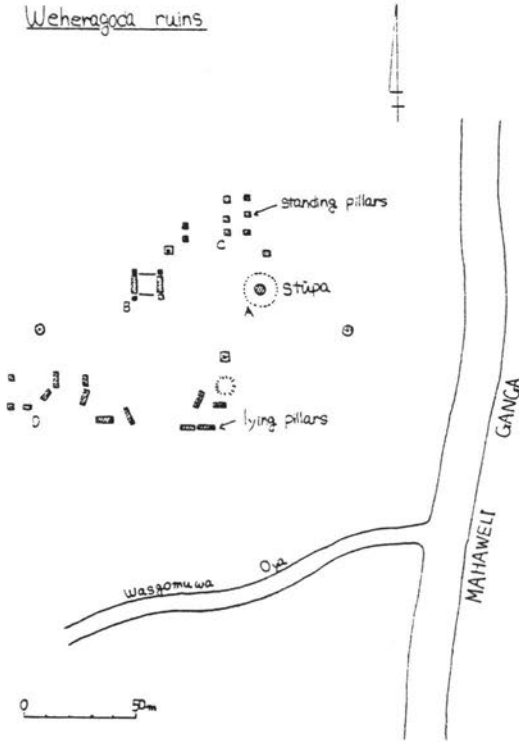
【スタッフ】田中、境、深谷、サイネリス、ワサ
ンタ(5名)

【位置】カドゥルピティヤの北東10.7km、マラカより北方約16.1kmの地点。マハウエリ河とワスゴムワ・オヤ(川)の合流地点より北西約200m、ジャングル内の平坦地に位置する。「地図」

には名称、遺跡印が記入されている。

【アプローチ】カドゥルピティヤより北方に伸びる開拓道を1.2kmほど行くとエッレオラ川に出る。ここから河床沿いに約9km下流に行くと、ワスゴムワ川と合流し、更に河床伝いに進むと1kmほどでマハウエリ河に出る。マハウエリ河沿いに約150m北上し、そこから西方へジャングル内を約

Weheragga ruins



100 m 進むと遺跡に到着する。

【全体的状況と位置関係】濃密なジャングルに覆われ、樹木の浸蝕により崩壊が激しい。仏塔跡を中心に半径約50 m 内に建造物跡が2ヶ所確認できるが、本来の敷地形状は不明確である。石柱やレンガ片が広範囲にわたり数多く散在しているが、その大部分は土砂や落葉の下に没している。礎石は遺跡全体を通して3個確認できるが、それぞれの位置はばらばらで他の遺跡物は地下に没しているものと考えられる。

【各部分の状況】

〔A 仏塔跡〕崩壊が激しく、外形は単なる土盛りとなっている。仏塔中央部には半径2 m、深さ2 m ほどの盗掘跡があり、内部のレンガ組みを露呈させている。土台は土に埋もれ明瞭ではないが、ほぼ一辺15 m の正方形である(図A参照)。

〔B 建造物跡?〕A 仏塔跡の西約40 m に位置す

Fig.A

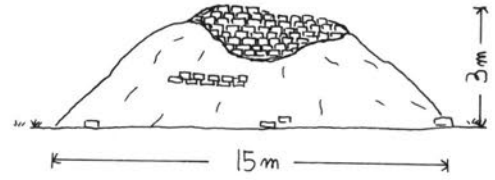
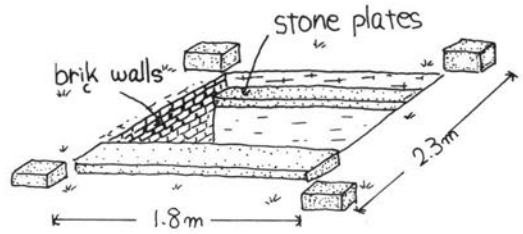
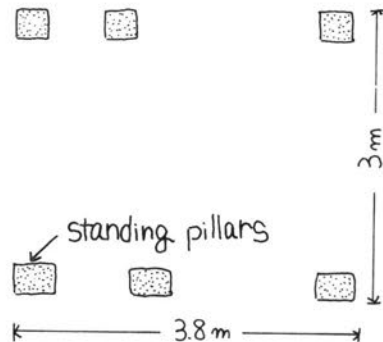


Fig.B

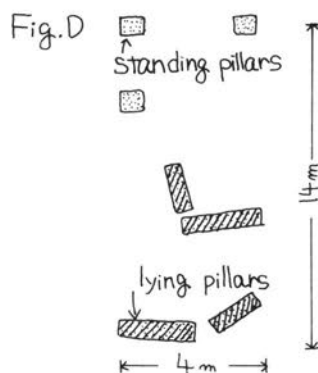


る。石柱が15本、約3 m 四方にわたって散在し、中央には四本の石柱を主柱として、一辺1.5 m、深さ1 m ほどの正方形の穴がある。穴の内側にはレンガを積み上げた壁が明瞭に残っている。他の遺跡では例を見ない作りである(図B参照)。〔C 建造物跡〕A 仏塔跡の西北西約18 m に位置する。7本の石柱が3.8 m × 3 m の敷地内に立ち並んでいる。地表に約30 cm ほど露呈しているが、石柱と石柱の間の距離は一定でない。平地上の遺跡であり、かなり深く地下に没しているため、正

Fig.C



確な敷地形状は全く確認できない(図C参照)。
 (D 建造物跡) A 仏塔跡の西南西約50mに位置する。石柱が14m四方にわたって散在している。石柱のほとんどが折れていて原形をとどめていない。西端の石柱2本は4mほど間隔をおいて地表に50cmほど露呈している。これらのことから、何らかの建造物があったと思われるが、レンガ片などは確認できず、敷地形状は不明である(図D参照)。



<94> ダンバイェラ・ガラ の遺跡

DHAMBAYELA - GALA (ruins of temple)

Location;

This site is located about 3.2km. the north from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

The ruins are situated on the round rock hill (the Dhambayela Gala) which extends over 85m. from north to south, 75m. from east to west, about 20m. in height. On the west slope of the hill, here are the remains of two rectangular foundations of terraces made of bricks and stones (A, fig. A, fig. B, photo. B). The remains of one corner stone are on the summit of the hill (C, photo. C). This site is all weathered. There might be more ruins, but almost are covered with jungles.

【調査】10月13日

【スタッフ】田中、下坂、境、深谷、ワサンタ、サイネリス、ウパーリ、ソーマパーラ、ブンチバンダ(9名)

【位置】カドゥルピティヤの北方約3.2kmの地点。ジャングルにある孤立岩丘上にある。「地図」に

は名称、遺跡印ともになし。

【アプローチ】カドゥルピティヤよりワスゴムワ川に至る道(通称ワスゴムワ道路)を北上する。約2km進むと北西方向にのびるジープ道(通称ダハンバヤラ道路)との分岐点に到着する。このジープ道を北西に約300mほど進んだ地点から、

Dhambayela Gala

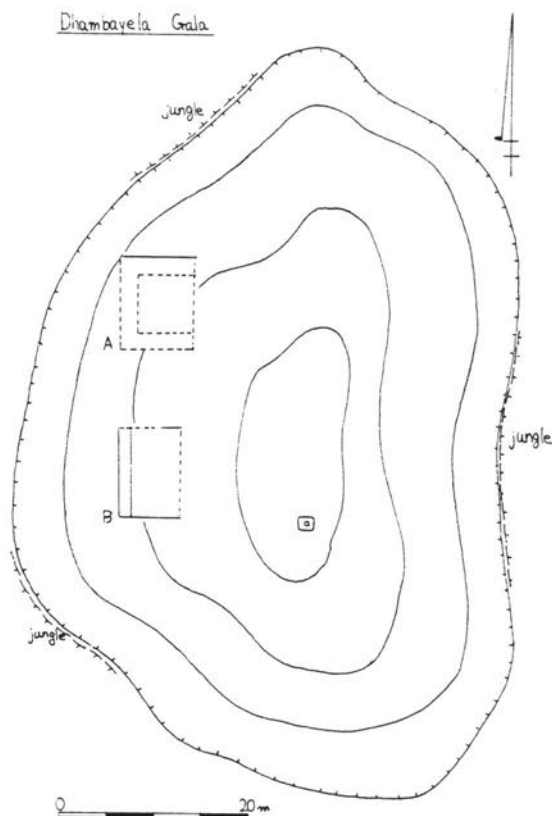
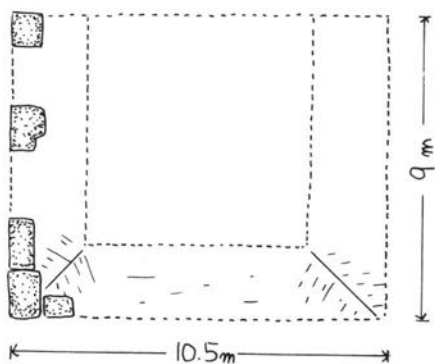


Fig.A.



写真B

ジープ道を離れジャングル内に入る。南南西方向の獣道に沿って約400mジャングルの中を抜けるとダンバイエラ・ガラに到着する。

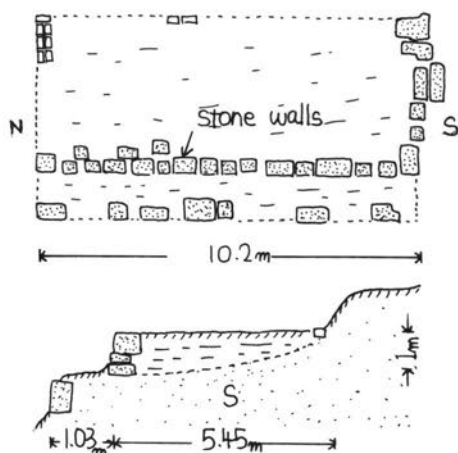
【全体的状況と位置関係】ジャングルの中にある孤立岩丘上にある遺跡である。岩丘はほぼ円形で東西75m、南北85m、高さ20mである。遺跡物は岩丘の西側の中腹部に2ヶ所建造物跡らしきものがあり、頂上部の南東側に礎石がある。岩丘上は風化が激しく、他に見るべきものはない。

【各部分の状況】

〔A建造物跡〕岩丘の西側斜面に位置する。B建造物跡と南北に並んでいる。崩壊、風化が激しく土盛り状のテラスと化している。基礎を形成していたと思われる石材が部分的に残存している下層と、レンガ質のテラスになっている上層との二層よりなる。下層は1.05×9mで、上層は7.5×7mである(図A参照)。

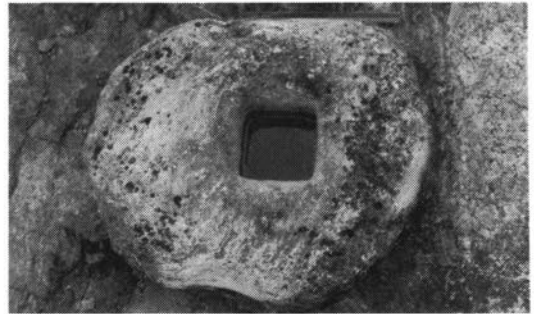
〔B建造物跡〕A建造物跡と同じく崩壊が激しく、上層部はテラス状になっている。しかし、西側の基礎の石組みはその形状を留めている。全体は、10×5.5mの長方形を成し、部分的にレンガ列が表出している。石組みは2段になり、下段は高さ50cm程で、上段は高さ1m程石が生まれ、岩

Fig.B



丘の斜面に対し建造物の土台が水平となるようになっている。石組みの角石の形、大きさは様々である（写真B、図B参照）。

〔C礎石〕岩丘の頂上部の東寄りに1個の礎石がある。岩質は花崗岩であり、表面は風化している（写真C参照）。



写真C

< 95 > ワスゴムワ・オヤ上流部の寺院遺跡

THE UPPER STREAM OF WASGOMUWA OYA

(ruins of temple)

Location;

The site is located about 5.9km. the north from the Kadurupitiya (II.B.C) in a straight line.

Summary;

The suins are situated on the low rock hill which extends over 230m. from north to south, 50m. from east to west. On the center point of the hill, here are the remains of a rectangular base of dagoba with stone steps and bricks. It is consists of threefold platform made of stones (B, fig. B). At the center point by north of the hill, there are the remains of a circular stone line which is about 3.3m. in diameter (A, fig. A, photo. A). Near the circular stone line, here are the ramains of one corner stone (D, fig. D, photo. D). On the north side of the hill, here are the remains of structures with two corner stones (E, F), brick bats, brick lines (C) and many rubbles (G). At the east side of the hill,

there are the remains of a stone pillar 1.55m.in height (h). This site is all weathered. There might be more ruins, but almost are covered with jungles.

【調査】10月14日

【スタッフ】田中、境、下坂、深谷、ワサンタ、サイネリス、ウパーリ、ソーマバーラ、ブンチバンダ(9名)

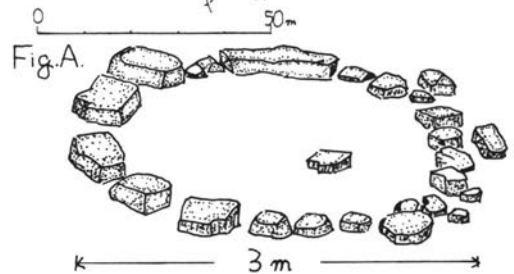
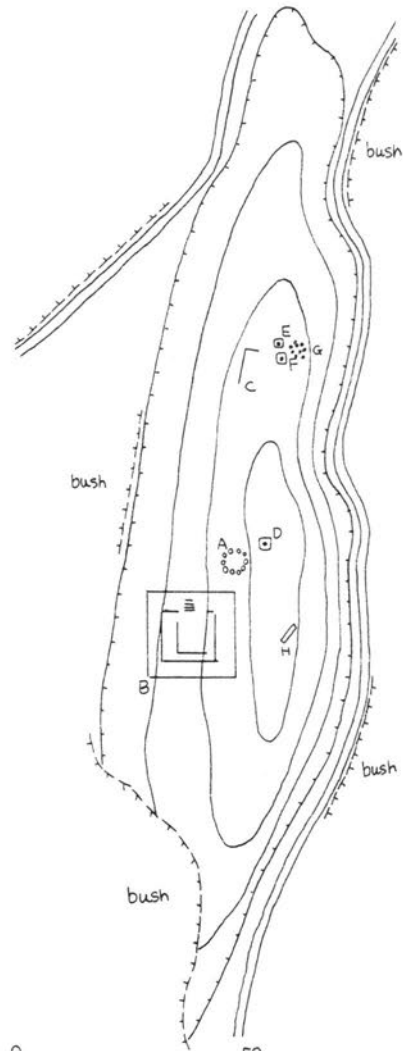
【位置】カドゥルピティヤの北方約5.9kmのジャングル内の孤立岩丘上に位置。スドゥカンダ山(ピーク1543m)が西方に、エルネカンダ山(ピーク1646m)が北西方に望める。「地図」には、遺跡印、名称ともになし。

【アプローチ】ダンパイェラ・ガラの遺跡<94>より進路を真北にとり、ジャングル内を約2.5km進むと、この遺跡の存在する孤立岩丘に出る。他の経路としては、カドゥルピティヤよりワスゴムワ道路を北上し、ワスゴムワ川の本流、支流と道路が交差している地点より、南西方向に、支流沿いに約450m進むと到着する。この経路では全行程約9.5kmとなる。

【全体的状況と位置関係】濃密なジャングルに囲まれ、ほぼ南北に長く伸びた岩丘上に位置。岩丘は南北230m、東西50mの規模で、北西側と東側には幅2~3mの沢が岩丘を囲むように流れ、そこに多量の石片が落ち込んでいる。岩丘上には、環状の列石や仏塔の基壇らしき建造物跡、レンガ列、礎石、石柱がある。

【各部分の状況】

(A環状の列石)岩丘のほぼ中央北寄りに位置する。大小様々な岩石を円形に並べたもので、大きさは南北方向直径約3m、東西方向直径約3.3m。岩石の大きさは、132×67×29cm、116×110×64cm、76×54×26cm、50×34×26cm等である。用途は不明(写真A、図



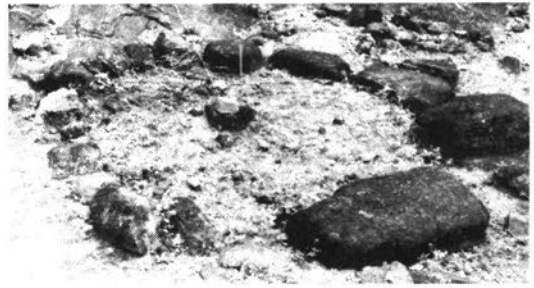
A参照)。

〔B 仏塔跡〕環状の列石より南へ約30mの岩丘のほぼ中央に位置。方形に角石を組み、その間に小石を詰め、土砂を積み上げたもので、三段になっている。規模は最下段が 19.6×17.1 m、中段部が 12.5×12 m、最上段が 9.5×9.5 mとなっている。西側と南側面は比較的明確にその形跡を留めているが、北側は崩壊が激しく、東側は岩丘の高みと接続して中段部まで確認できるのみで、それ以下は露岩の石片が不規則に散在するのが見られるだけである。北側斜面の中段部と最下段とのほぼ中間には幅1mほどの石の階段跡があり、その上下端は崩壊して不明であるが、さらに上下に伸びていたことが推測される。最上段中央にはレンガが散在している。中央部がごくわずかに盛り上がり、低木が生えている。最上部の石組みの個々の石の大きさは $30 \times 30 \times 20$ cm、 $25 \times 25 \times 15$ cmといったものが多く、中段部の石もほぼそれと同じで、最下段は $40 \times 30 \times 20$ cm程度のもが多い。また、角には $60 \times 60 \times 50$ cmの大きな石が使われている(図B参照)。

〔C レンガ列〕環状の列石の北38mの地点より、ほぼ北へ7.5mにわたってレンガ列が続いているのが確認できる。また、その北端より東方向にレンガ片が散在しており、レンガ列が東へ続いていたことが推測される。レンガの大きさは 23×21 cmで厚さは下部が土中に埋もれているため不明。これらは建造物の一部分を形成していたものと思われる。

〔D 礎石〕環状の列石の東北東約6mに位置。全体の大きさは $46 \times 44 \times 32$ cmで、柱穴の大きさは $16 \times 15 \times 3$ cm。周囲に他の遺跡物は見当たらない(写真D、図D参照)。

〔E 礎石〕岩丘の北側東斜面で、環状の列石より北北東へ50mの地点に位置。風化が激しく正確な原型は不明であるが、大きさは $48 \times 32 \times 3$



写真A

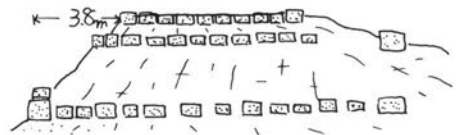
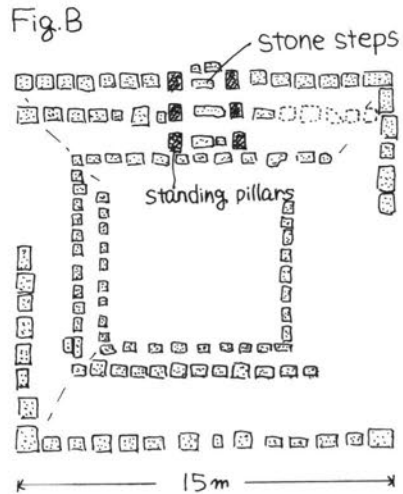
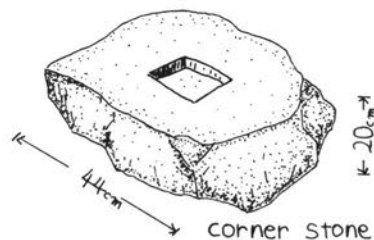


Fig. D



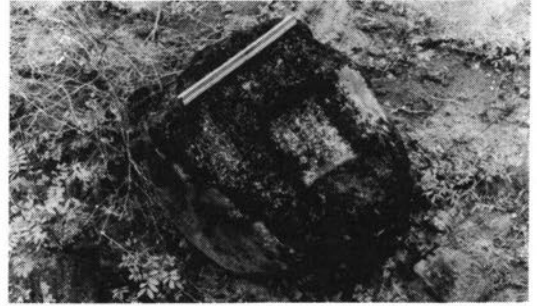
4 cm。

〔F 礎石〕E 礎石の南1.5mの地点に位置。風化が激しく、柱穴も浅くはつきりしない。大きさは

55×35×21cm。

〔Gレンガ片と石片の散在〕環状の列石の北北西約50mの岩丘斜面上に多数のレンガ片と石片が散在している。Gレンガ列、E、F礎石とともに何らかの建造物を形成していたと推測される。

〔H石柱〕仏塔跡の東側岩丘斜面に1本のみ倒れている。長さ155cmで断面は20×15cm。模様や彫刻はない。



写真D

隊務報告・資料編

第2次隊行動記録(1975年6月23日～9月30日)

【6.23】先発の八木(リーダー)、羽田出発

【6.30】先発の堀江、羽田出発(八木、堀江の両隊員はインドで合流ののち、7月17日にスリランカ入国。7月21日から本隊のコロンボ到着まで、日本大使館、考古学局、観光局などを訪れ、手続き、情報収集などの隊務に当たった)

【7.21】角谷、東、執行の各隊員および岡村顧問隊員の4名は本隊として羽田出発。(執行は一人空路、ボンベイからスリランカに入国し先発隊と合流。角谷、東、岡村の3名はボンベイより鉄道にて、ラメスワラムに向かう。ここからフェリーで28日スリランカに入国)

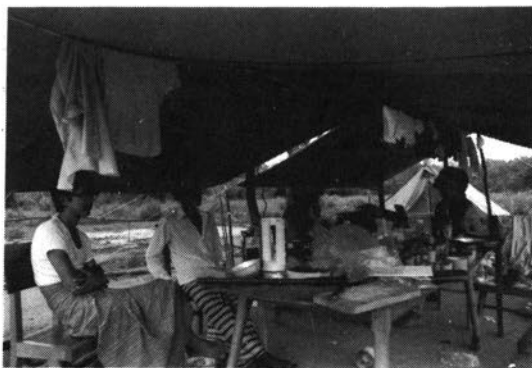
【7.29】本隊コロンボ到着。先発隊と合流。

【7.30～8.2】八木、角谷の両名はベースキャンプ設営予定地であるピンブラッタワ村偵察。岡村、東、執行は日本大使館、考古学局へ挨拶と別送の荷物の通関、輸送の準備を行なう。

【8.3～8.6】八木、堀江の両名はコロンボで、通関、輸送の交渉にあたる。他の隊員はそれぞれ見学等に出かける。角谷はマタレへ。岡村、執行はアダムス・ピークへ登山。東はゴールへ。

【8.7～8.8】隊の荷物を乗せた船が入港。通関等の打ち合わせと同時に食糧、装備等の買い出しの下見を行なう。

【8.9～8.10】土、日曜日にあたり隊務もなし。八木、東の両名は前夜、キャンディを經由して、前回の探査活動のベースキャンプであったヘンペラワ村を訪問。他の隊員はコロンボで休養。



【8.11～8.12】通関が間もなく行なわれることとなり、食糧、装備の買い出しを行なう。

【8.13】朝から通関手続きにあたり、午前11時に完了する。トラックに前日買い出した食糧、装備、私物等も合わせて乗せ、八木、岡村が同乗し、ポロナルーワへ向かう。堀江、東は夜、鉄道でポロナルーワへ。角谷は執行の体調不良のためコロンボに二人残る。

【8.14～8.15】ポロナルーワで八木、岡村と堀江、東は合流。14日午後ピンブラッタワ村のベースキャンプ予定地に到着。4名でベースキャンプの設営、整備にあたる。

【8.16】遺跡調査を開始する。岡村、東の両名で、スィリバーレナ、スィルミニサーヤの遺跡の調査を行なう。八木はコロンボに残っている角谷、執行と連絡のため、ポロナルーワに出る。

【8.17】八木、堀江、岡村の三人でヴェヘラガラ遺跡を調査。角谷、執行は先日の夜行でコロンボを発ち、この日ポロナルーワに到着。

【8.18～8.24】セイロン島最大の祭りであるベラヘラを見学に交替でキャンディへ。18日からは堀江、東、執行、21日から、八木、角谷、岡村、と分かれて見学する。

【8.25～8.29】第1回目の密林遺跡の探査活動を開始。ハンターのスィリル、ポーターのペーマラトナを加え、アッレワワ部落の南方の地域にある遺跡の探査を行なう。同部落を基地にワラシガラ、パダナガラ、カルカンド、チーナガスカンダの岩丘上の遺跡の他、無名パタハ2ヶ所を調査し、29日、ベースキャンプに戻る。

【8.30～9.3】第1回目の探査活動の資料整理を行なう。東は日本大使館との連絡、手紙等の受取りにコロンボに行く。また、スィルミナ紙のカメラマン、チャンドラグプタ氏と会い、取材行の打ち合わせをし、共にベースキャンプに戻る。9月3日、スィルミナの取材を兼ね、カンデガマの遺跡の調査を行なう。

【9.4～9.5】アッレワワ村の北方の遺跡探査と前回のベースキャンプであったヤックレ村の村人に学用品、衣料の寄贈のためポロナルーフへ行くがジープの手配がつかず、結局、アッレワワ村の北方の遺跡調査も中止しベースキャンプに戻る。

【9.6～9.8】第2回目の密林遺跡の探査活動を行なう。アッレワワ村の北方の遺跡探査が中止になったため、急ぎ、マドゥル・オヤ(川)東岸の遺跡探査を行なう。ウェヘラゴダッラ、ワラマンディヤ、モタガラ、ウェンペンダガラの遺跡の他、無名パタハ2ヶ所を調査する。

【9.9～9.11】分散隊による探査活動に移る。岡村、東は1泊2日の予定で、B・C北方の遺跡探査とディンブラガラの再調査に行くが、途中、岡村の体調不良のため、中止しB・Cに戻る。角谷、堀江、執行は10日にカンデガマ北方に遺跡があるとの情報を得、探査に向かうが、遺跡は発見できずB・Cに戻る。八木、東はダンバナウル



ボタの遺跡探査に向かい、無事、調査を完了してB・Cに戻る。堀江、執行は11日B・Cを立ち、カダッラの遺跡探査に成功し、調査を完了し無事B・Cに戻る。

【9.12】ヤックレ村、ピンブラッタワ村の小学校で、ポロナルーフ知事、教育長の出席のもとに学用品、衣料のプレゼントを行なう。

【9.13～9.15】2隊による第3回目の密林遺跡の探査活動を行なう。八木、東、執行はアッレワワ村北方の密林遺跡の探査活動を行なう。カブラッタラガラ、アンペーネガラ、ダーミニヴェヘラの遺跡を調査し、15日、B・Cに戻る。角谷、堀江はマドゥル・オヤ東岸の遺跡探査に向かうが角谷の体調不良のため、途中で中止。予定を変更し、15日マドゥル・オヤ近くの二つの無名遺跡を調査する。

【9.16～9.22】遺跡調査と並行して個人活動に移る。岡村、堀江は17日から22日までピンブラッタワ部落～ヘンベラワ部落を踏破。途中ダマネウエラ部落の遺跡を調査して、マヒヤンガナのベッタベラヘラ、ギランドル・コッテ遺跡を見学。八木は17日よりクダガラの遺跡調査を行なう。角谷は17日より19日まで隊務によりコロンボへ。東は17日より19日までカンデガマ北方にあるゴラカカンダの岩窟を調査。執行は20日、八木と共にマドルオヤ東岸の探査に向かい、

パタヴェンダガワッタの遺跡を調査。21日は角谷とデーワガッラの遺跡調査を行なう。

【9.23～9.24】B、C撤収とポロナルーワの関係者に挨拶。23日、B、Cを撤収するとともに、ピンブラッタワ小学校長のパーティに招待され、先生たちとお別れ会となる。夕方、村人に見送られ、荷物を乗せたトラックに便乗してポロナルーワのホテルに落ち着く。ホテルに於て、これまで我々と行動を共にしてくれた、ハンターのスィリル、ポーターのペーマラトナを交え、食事を共にする。24日、八木は早朝、トラックの荷物をコロンボに届けるためコロンボへ向かう。他の隊員はポロナルーワ知事ら、御世話になった人々への挨拶。

【9.25～9.29】キャンディの郊外にあるセイロン大学ベラデニア・キャンパスで資料整理を行



なう。25日キャンディで全員合流し、26日から29日までセイロン大学ベラデニア・キャンパスの静かな環境のもと、資料整理に励む。29日夕方、鉄道にてコロンボに向かう。

【9.30】隊解散。朝から日本大使館、セイロン考古学局に活動終了の挨拶。夜、市内のレストランで解散パーティを行なう。隊活動を無事終えたことを祝って乾盃し、翌日から個人活動に移る。

第3次隊行動記録(1976年8月15日～11月17日)

【8.15】田中、下坂、深谷、境の全隊員、羽田を出発。

【8.17～8.21】インドのカルカッタ着。鉄道で亜大陸南端のラメスワラムへ向かう。

【8.22～8.29】スリランカで開催中の非同盟諸国間会議のための入国制限を受け、ラメスワラムに滞在。

【8.30】フェリーでスリランカ入国。

【8.31～9.6】首都コロンボでの隊務開始。日本大使館、考古学局への挨拶、別送船荷の通関交渉、その他各種手続きをする。下坂、境は、3日から9月6日まで、ベースキャンプ設営予定地のマラカ村へ偵察、及び現地官庁への協力要請に出かける。

【9.7～9.13】通関を済ませ、入城前の準備終

了。スィルミナ紙のチャンドラグプタ記者と通訳のワサンタを伴って、荷物運搬用のトラックに便乗しマラカへ向かう。下坂は、9日に先発としてマラカへ行き、受け入れ準備をする。

【9.14～9.16】本隊マラカ着。ベースキャンプ(以下BCと略す)の設営を行なう。

【9.17～9.18】調査活動開始。田中、境、下坂、ワサンタ、チャンドラグプタ記者とハンターのサイネリス、村人数名で、BCの北西約4kmのクブカンダナ・ガラの遺跡を調査。18日、メンバーを交替して同遺跡へ向かう。

【9.19】下坂、境、ワサンタの3名は、BCの北約1kmのムトゥコヴィラ・ガラの遺跡を調査。深谷は21日まで隊務のためコロンボへ向かう。

【9.20～9.22】体調不良の田中が食中毒とわ

かり、火傷をした下坂と共にパッレガマの病院へ入院。境はBCで資料整理。下坂は22日BCに戻る。

【9.23】深谷、境、ワサンタ、ハンターのサイネリスは、BCの西約4kmに位置するレンディヤン・ガラ付近の遺跡を調査。田中がBCに戻る。

【9.24】深谷、境、ワサンタは、BCの西約1kmに位置するミーガスワラ・ガラの遺跡調査。

【9.25～9.26】田中、深谷、境、ワサンタ、サイネリスは、クブカンダナ・ガラの遺跡の未調査部分とトゥンギリヤ貯水池付近(トゥンギリヤ・ガラ)の遺跡を1泊2日の行程で調査に行く。

【9.27】カドゥルピティヤ部落のガミニ氏宅の一室を、調査活動の第二拠点として借りることになり、装備、食料の移動のためパッキング。

【9.28～10.2】カドゥルピティヤを拠点に、田中、境、深谷、サイネリス、ウバーリ(ハンター)、ワサンタ、ポーター1名の7名は、4泊5日の予定で。マハウェリ河流域付近のヴェヘラ・ガラ、マヤランウエラ・ガラ、ウエヘラゴダの3遺跡を調査。

【10.3】カドゥルピティヤへ装備、食料を輸送。下坂は6日まで隊務のためコロンボへ向かう。

【10.4～10.5】カドゥルピティヤを拠点にウィルミティヤ・ウエワ南西の遺跡とウィルミティヤウエワ北東の遺跡を調査。

【10.6】カドゥルピティヤ付近の2つの遺跡(クンブック・オヤ・ガラの遺跡、ミドゥラネ・エラとキヴレ・エラ合流点の遺跡)を調査。

【10.7～10.8】マラカへ戻り、カドゥルピティヤへの本格的な必要物資の移動をする。

【10.9】田中、下坂、境、深谷、他4名で、カドゥルピティヤの北東約4kmのカルワラゴラ・ガラの遺跡を調査。

【10.10】田中、下坂、境、深谷、他4名でエッレオラ川源流近くのムッカカンダの遺跡調査



を行なう。

【10.11】田中、下坂、深谷、他4名でハサラカ道路沿いの遺跡(無名寺院遺跡№3)を調査。境はマラカへ食料、医療品の補給に行く。

【10.12】田中、下坂、境、他4名は、カドゥルピティヤ北西に遺跡があるとの情報を得て探査に向かうが発見できず、カドゥルピティヤへ戻る。

【10.13～10.14】田中、下坂、境、深谷、他4名で、カドゥルピティヤ北西のダンバイエラ・ガラとワスゴムワ川源流近くの遺跡を探査する。

【10.15】田中、下坂、深谷、他3名でカドゥルピティヤ東のホラウエラ・ガラの遺跡を調査。境はヘッティボラヘガソリンの購入に出かける。

【10.16～10.17】田中、下坂、境、他3名で、カドゥルピティヤからホラウエラ・ガラ、ヨダガンナワを経て、アンパガハ・ウエラ、ウエラナ・バラッサ・ガラの遺跡を調査し、マラカに戻る。

【10.18】下坂、深谷、ワサンタの3名で、マラカから出発し、マーナ・ガラの遺跡を調査。田中、境は21日まで隊務のためコロンボへ向かう。

【10.19～10.20】下坂、深谷はマラカ村からカドゥルピティヤへ移動。

【10.21】下坂、深谷、他3名でクンブック川付近の遺跡を調査。

【10.22】通訳のワサンタがコロンボに帰ることになり、田中がマラカまで見送る。下坂、深谷

は、クンプック川付近のダハナメ・ヤーヤの遺跡を調査。境は体調を崩し、寝込む。

【10.23】深谷は足に火傷を負い休養。下坂はハンドゥンゴムワ付近のハタ・ヤーヤとアコラハ・ヤーヤの遺跡を調査。田中は境をヘッティ・ボラの病院へ連れていく。

【10.24】田中はハンドゥンゴムワ付近のイエバ・ガラ、パンサラ・ガラ、ハサラカ道路沿いの無名遺跡の3つの遺跡を調査。境の容態は悪化し、マラリヤであることがわかる。

【10.25】田中はエケ・アラの遺跡を調査。下坂はバルピティヤ・ガラとカドゥルピティヤにある無名遺跡を調査。

【10.26】田中は前日に引き続き、エケ・アラの遺跡調査。下坂はカラウガハ・ウェラ付近の遺跡を調査。雨期の接近のため、これをもって調査打ち切りを決定。

【10.27】午前中はマラカへの移動準備。午後からはガーミニ家で、付近の村人と共に別れパーティー。

【10.28】田中、下坂、深谷の3名は、ハンドゥンゴムワ小学校に招待され、教師、生徒らと共に交歓会を行なう。夕方、ガーミニ家の人々に見送られ、荷物を乗せたトラクターに便乗してマラカ



へ向かう。

【10.29】田中、下坂、深谷はマラカ小学校での交歓会に出席し、学用品をプレゼントする。境は次第に回復してきたが、田中がマラリヤのため体調を崩し始め、一週間苦しむ。

【10.30～10.31】ベースキャンプ撤収の合間に、村人から食事の招待を受ける。

【11.1】早朝、荷物をトラックに積み込み、村人に別れを告げマタレへ向かう。田中、下坂、境はマタレで降り、深谷は通関手続きのためそのままコロンボへ向かう。

【11.2～11.12】マタレのレストハウスにて、資料整理に励み、その間、マタレ県知事、ポロンナルワ県知事、セイロン大学考古学科教授ブレマティラカ氏、ノリタケ・カンパニーの日本社員の方々など関係各方面に活動終了の挨拶を行なう。12日朝、鉄道にてキャンディーへ向かう。

【11.13～11.14】キャンディーにて資料整理。14日朝、バスにてコロンボへ向かう。

【11.15～11.16】大使館、考古学局にて、調査活動終了の挨拶及び報告を行なう。

【11.17】船便荷物のパッキングを完了。夜、市内のホテルのレストランにて、隊の解散パーティーを行なう。これをもって隊活動を全て終了。

装備報告（第2次・3次隊）

2次隊は、1次隊とほぼ同じ活動形態をとったため、ゴムボート類を除いて、装備に関してはほとんど前例を踏襲した。

ベースキャンプでは、長期の滞在のため快適な生活を旨とした。まず、熱帯の強烈な日射を遮るために、フライシート（10人用2張）を張って、日中はほとんどその下で過ごした。また、近くの家具屋から机、イスを借用できたので、食事、資料整理、村人の接待などに何かと便利であった。夜はフライの下に蚊帳を吊って、ランプの光に魅き寄せられる大量の昆虫類を防いだ。また、照明用の加圧式ランプは現地の人々にとっても必需品で、非常に明るく重宝だったが、中古品のためか故障が多かった。テント2張はもっぱら就寝用で、日中は蒸し風呂のようでとても入ってられない。また、アリやその他の昆虫類、ヘビ、トカゲなどがテント内に住みつくなどして、快適とは言い難かった。飲料水は簡単な濾過器を作り、近くの運河から汲んできた水を濾過し、さらに煮沸して利用した。探査行中とベースキャンプでの炊事はすべて持参した3台のガスリンコンロで間に合った。ガスリンの消費量は全期間（41日）で15.9ガロン（=71.55リットル）と、かなり多いようだが、これは飲料水用の水を煮沸するのに使用したためだと思われる。その他の炊事用具はすべて間に合った。隊員の心を慰めてくれたのがラジオカセットで、日本の歌を吹き込んだテープは特に重宝した。またラジオは村人の羨望的でもあった。

次に探査行中に関してだが、2次隊ではベースキャンプからの日帰り調査と、各部落の小学校や民家に前進基地を設けての探査が多く、幕営用具の携帯の必要はさほどなかった。夜は乾電池使用のサーチライトを使ったが、接触不良や豆球切れ

等の故障が多く不便だった。ジャングル行動中の服装、装備は、1次隊に準じた。測量器具については、探査行パーティーの分散行動の際、メジャー（50m）が不足し、簡単な平面測量にも不自由した。遺跡到着までのアプローチを記録するのに万歩計が役立った。現地購入装備は粗悪品が多く、値段も高い。工業製品については極力日本から持っていった方がよいらろう。

3次隊の装備概要に関しては、上述の2次隊とほぼ同様であるので詳述はしないが、以下に3次隊の目立った特色を述べる。

最も重要な役割を果たしたのはモーターバイクである。3次隊の活動地域の範囲は、活動不可能な雨期の接近に追われたため、中距離程度の移動を速やかにして、活動の能率を高める必要があった。そこで、モーターバイクは遺跡の偵察、買い出し、緊急時の連絡等において、その機動性をいかんなく発揮した。また村人が発病した際に、医師との連絡に活用するなど、現地の人々との交流の媒介ともなった。車種は低価格で、輸送に手軽なものとして中古のダックスホンダ（排気量50cc）を使用した。輸出入に際しては、JAFを通じてカルネ手帳と国外用ナンバープレートを購入し、他の装備類と共に、船便輸送で日本への持ち帰りを原則とした。モーターバイクは平坦地走行用の車種であり、開拓地の未整備の悪路での使用過多と馬力不足のため、エンジン部分にたびたび故障が生じ、車体の備品にも破損があったが、パンク等タイヤの破損はなかった。燃料の入手には少々苦労したが、ある程度の道さえあれば、充分の利用価値があったと言えよう。また、整備や修理の的確な技術があれば一層よかった。

ラジオカセットは、村人の歌や、フォークダンスのドラム等の収録に使い、村人との交流にも役

立った。水の煮沸や炊事の燃料としては、2次隊と異なり、まきを頻繁に使用した。

測量器具は、1次隊当時の種類のをそのまま継承してきたわけだが、測量の精密化を計るならともかく、簡易平面測量には、これらのもので十分であろう。

1次から3次を通じて、大がかりな重装備の遠征隊となったが、今後の課題としては必要最低限

の装備のみを持参し、他は現地調達する軽装備の遠征の試みがなされてもよからう。重装備だと実質的な調査活動の前後の隊務が累積して大変であるし、現地での管理にも相当な労力を払わなくてはならない。もし、現地の食糧事情が極端に悪化していれば別だが、これからは、調査中心の身軽な形態が考慮されてしかるべきだと考える。

装備リスト

品 目	2 次 隊		3 次 隊		寄 贈 元	備 考
	数 量	重 量(kg)	数 量	重 量(kg)		
(幕営用具)						
テント(6人用)	2組	11.0	1組	6.0		蚊帳付きが涼しくて快適。
フライシート(6人用)	2枚	2.0	1枚	1.0		ナイロン製は雨に強いが、日射をさえぎらない。
〃 (10人用)	2枚	3.0	1枚	1.5		ビニロン製の厚い布地で、日射をさえぎり、快適。
ツェルト(2~3人用)	2張	2.0	2張	2.0		探査行用あるいは装備倉庫として使用。
蚊 帳	1張	3.0	1張	3.0	小林氏	夜は昆虫類が多いので必需品。
グランドシート	2枚	1.4	3枚	2.7		多様な利用価値あり。
ビニールシート	2枚	0.5	2枚	0.5		雨期には、雨よけとなる。
ベ グ	30本	1.5	20本	1.0		
(炊事用具)						
ガソリンコンロ	3台	4.2	3台	4.2		長期の使用に耐え、故障はなかった。
〃 備品	1式	0.1	1式	0.1		
メ タ	10箱	2.0	7箱	1.4		
ポリタンク(20ℓ)	2	2.0	1	1.0	清水氏	飲料水用
(10ℓ)	2	1.4	2	0.3	佐藤氏	〃 3次隊は、携帯用の軽いものを使用。
(2ℓ)	2	0.4	2	0.4		ガソリン用
(1ℓ)			2	0.2		調味料用
(0.5ℓ)			2	0.05		〃
アルミ水筒(1ℓ)	4	1.2	2	0.6	角谷氏(3次)	ハンター、ポーター用
中鍋セット	2式	1.6	2式	1.6		主にB.C用
コップエル	1式	1.1	1式	1.1		主に探査行用
中華鍋	1	1.0	1	1.0		利用範囲広く便利

品 目	2 次 隊		3 次 隊		寄 贈 元	備 考
	数 量	重 量(kg)	数 量	重 量(kg)		
やかん	1	0.4	1	0.4		
茶こし	2	0.1	2	0.1		
メソツ(食器)	20枚	1.4	15枚	0.9		応用範囲広く便利
プラスチック皿	11枚	0.5	8枚	0.4		
アルミ皿			8枚	0.8		
さいばし	2 <small>ぜん</small>	0.1	1 <small>ぜん</small>	0.05		
フォーク	10本	0.2	8本	0.16		共同使用としたため、整理が容易
スプーン	18本	0.9	10本	0.5		〃
包丁	2	0.6	1	0.3		
まな板	1	0.8	1	0.8		
しゃもじ	2	0.1	2	0.1		
おたま	2	0.2	2	0.2		
フライ返し			1	0.1		
缶切り	2	0.1	2	0.1		
たわし	3	0.15	4	0.2		
焼網	2	0.2	2	0.2		ほとんど使用せず
おろし金	1	0.05	1	0.05		〃
アルミホイール	4本	0.5	2本	0.3		〃
お盆(プラスチック製)			2	0.6		
つまようじ			1 <small>パック</small>	0.1		
(生活用具)						
サーチライト (単1×6本)	2台	1.5	2台	1.5		電池の消費が激しい。 球がよく切れた。
ラジオカセット レコーダー	1台	3.0				
〃			1台	3.5	アイワより借用	現地で村人の歌等収録
カセットテープ	10	0.5	6	0.3	アイワ(3次)	
ラジオ	1台	1.2	1台	1.0		
乾電池(単1)	180本	18.0	200本	20.0	東芝 N.E.C ソニー・エバレディ	
〃(単2)	40本	2.4	60本	3.6		
〃(単3)	32本	1.2	40本	1.4		
細引(4mm)	50m	3.5	30m	2.5		
〃(6mm)	50m					
目覚まし時計	1	0.3				

品 目	2 次 隊		3 次 隊		寄 贈 元	備 考
	数 量	重 量(kg)	数 量	重 量(kg)		
裁縫用具	1式	0.3	1式	0.2		
スコップ (折りたたみ式)	1	1.0	1	1.0		
のこぎり	2	0.7	1	0.3		
モンキーレンチ	2	0.2	3	0.3		
ドライバー	2	0.3	3	0.45		
ペンチ	1	0.3	1	0.3		
釘抜き	1	0.5	1	0.5		
金づち	1	1.0	1	1.0		
木づち	1	0.2	1	0.2		
金のこ	1	0.05	1	0.05		
釘	50	1.0	70	1.5		
針 金	20m	0.3	20m	0.3		
の み	1	0.3	1	0.3		
紙やすり	3枚	0.05	3枚	0.05		
布やすり	3枚	0.05	3枚	0.05		
接着剤	2	0.2	3	0.3		
ビニールテープ	10本	0.8	3本	0.3	山田紙店	
荷造りベルト			10	1.0	ニチパン	装備等の梱包に役立った
荷造り用紙テープ			5	0.5	ニチパン	
輪ゴム			1箱	0.1		
移殖ごて	2	0.4	2	0.4		
ガムテープ	10本	6.0	5本	3.0	山田紙店	荷造りのみでなく、修理その他に利用価値高い
洗濯ばさみ	30	0.2	30	0.2		
カッター	1	0.1	1	0.1		
電気コード	5m	0.2	5m	0.2		
マッチ(大)	4	0.4	1	0.1		
〃 (小)	120	0.8	152	0.9		日本製マッチは現地で非常に好評
トイレトペーパー	46巻	3.0	40巻	2.7		消費量28巻(2次隊)
ろうそく	5	0.6	8	1.0		
クレンザー	4	2.0	5	2.3		
洗濯洗剤	2	1.0				
洗濯石けん	9	1.0	21	2.0		
石けん	49	2.5	11	1.0		

品 目	2 次 隊		3 次 隊		寄 贈 元	備 考
	数 量	重 量(kg)	数 量	重 量(kg)		
ビニール袋(大)	50枚	0.5	100枚	0.7		2次隊では不足した。利用価値大
〃 (小)	250枚	0.8	50枚	0.3		
砥石			1	0.5		
背負子	2	3.0	2	3.0		
モーターバイク(50cc)			1台	74kg		機動性発揮
パッキング用木箱	3		1		日本通運 永井氏	大きさ(1.0×1.5×1.0m)
(記録用具)						
ボールペン	77本	0.5	20本	0.1	三菱鉛筆	ゼブラ
サインペン	10本	0.1			トンボ鉛筆	
鉛筆(黒)	14ダース	0.8	1ダース	0.6	三菱鉛筆	
〃 (赤)	3ダース	0.2			コーリン鉛筆	
					三菱鉛筆	
色鉛筆	3セット	0.3	1セット	0.2	コーリン鉛筆	
					三菱鉛筆	
フェルトペン	34本	0.6	12本	0.3	三菱鉛筆	
フェルトペン (8色セット)			2セット	0.4	三菱鉛筆	
ふでペン	30本	0.5			セーラー万年筆	
アンダーラインペン	15本	0.1	20本	0.1	コーリン鉛筆	
水性12色マジック	1セット	0.3				
コンパス	2	0.2				
定規	3	0.1	2	0.1		
三角定規	1	0.1	1	0.1		
消しゴム	22	0.3			コーリン鉛筆	
ノート	17冊	2.5	25冊	2.0		
スケッチブック	5冊	1.4	4冊	0.5		
コピー用箋	5冊	1.4	5冊	1.0		
方眼紙	5冊	1.1	5冊	0.8		
カード	1000枚	3.8	500枚	2.0		
のり	2	0.2	3	0.2		
ホチキス	2	0.3	1	0.2		
〃 針	3箱	0.1	3箱	0.1		
クリップ	1箱	0.3	2箱			
ルーペ	2	0.2				
画板	5枚	2.5	3枚	0.5		

品 目	2 次 隊		3 次 隊		寄 贈 元	備 考
	数 量	重 量(kg)	数 量	重 量(kg)		
(測 量 用 具)						
巻尺 (5 0 m)	1	0.8	1	0.8		
〃 (5 m)	1	0.2	1	0.2		
〃 (2 m)	1	0.2	1	0.2		
間縄 (5 0 m)	2	0.5	2	0.5		
折り尺	2	0.5	2	0.5		
クリノメーター	1	0.7	1	0.7		ほとんど使用せず
分度器	2	0.1	2	0.1		
万歩計	2	0.6	1	0.3		1つ破損(2次隊)
乾湿温度計	1	0.3	1	0.3		
最高最低温度計	1	0.2				
工業用糸			2巻	0.2		ほとんど使用せず
ビニール製たこ糸			100m	0.1		ほとんど使用せず
(撮 影 用 具)						
カメラ 35ミリ	1台		1台			
〃 1眼レフ	4台		2台			
〃 2眼レフ	1台					
交換レンズ						
135mm望遠			1			
75~150mmズーム			1			
8ミリカメラ(ムービー)	1台					
フィルム(白黒)	100本		40本		広中氏(2次)	
〃 (カラーネガ)	100本					
〃 (カラーリバーサル)	100本		30本			
8ミリフィルム	10本					
三脚	1					
ストロボ	1		1			

現地購入品リスト

品目	2次隊		3次隊		備考
	数量	単価(RS)	数量	単価(RS)	
ガソリン	15.9ガロン	12.0	9.6ガロン	13.3	単位は1ガロンあたり
灯油	3.2ガロン	3.8	4.4ガロン	4.8	〃
ハリケーンランプ	1	59.6	1	32.0	
加圧式ランプ	1	150.0	1	450.0	二次隊は中古品。故障しやすい。
灯油缶(4ガロン)	2	11.0			
〃(1ガロン)	2	4.0	1	9.0	
バケツ	1	35.0			
〃大	1	12.0	1	28.0	
〃小	1	10.0	1	15.0	
ポリタン(0.5ガロン)	2	11.0			ふたのパッキンが不十分で水もれあり
マッチ	多量				軸が折れ易く、火持ちが短い
ナタ	5	25.0			
土がめ	1		1	3.0	水の貯蔵用および煮沸用
ヤシナワ			50m	4.9	荷造り用

食糧報告(第2次・3次隊)

2次、3次隊ともに1次隊の食糧計画を踏襲し、日本から多くの食糧を持参した。2次隊の場合は、米、麺類、ビスケット、小麦粉など主食類を日本から持参し、副食類については現地購入を主とした。このことは、たんぱく源としての肉類の不足を招き、活動中の大部分はベジタリアン(菜食主義者)の生活を余儀なくされた。3次隊ではこの点を考慮し、魚、肉類の缶詰を日本で購入し持参した。その他、嗜好品に多少の相違点があるが、全体的には1次隊から3次隊まではほぼ同様の日本食を持参したことになる。(個々の食品に関しては食糧リストの備考覧参照)。

このように日本から多量の食糧をもちこんだことにより、輸送費の増大、関税の負担という問題

を起こしたが、大部分の食糧を各食品会社、部関係者より寄贈していただいております、調達資金の節約ができたので、金銭的にはそれほどの負担とはならなかった。

全体として、きつい行動後の日本食は隊員が現地食に慣れるまでの間体力の回復に十分役立ち、また現地食糧を利用しての料理も日本風の味つけにするなど単調になりがちなキャンプ生活に変化をあたえた。また、無人のジャングルを探査する実際の行動中には、缶詰、インスタント食品、ビスケットなどが保存もきき、軽量化をはかるためにも非常に便利であった。現地では米、野菜類の入手は可能とはいえ、携帯食の類はほとんどなく、この点からも食糧を持参したのは有効であった。

現地では、近くの町、村でタマネギ、ナス、ニンジン、オクラ、キャベツ、トウガラシ、サツマイモ、マニョーカ、トマトなどの野菜類、パイナップル、バナナ、マンゴスチン、パパイヤ、ココナッツなどの果物、タマゴ、牛乳、パンなどを入手することができた。また、コロomboではジャム、ケチャップも購入した。しかし、たんぱく源としての肉類の入手は困難であり、肉を販売している店でも在庫のないことが多い。時々、ハンターがうさぎ、鹿などを獲ってくるが足しにはならず、特に2次隊の場合は、肉類の調達に苦勞した。しかも、熱帯であるため腐敗の進行度が恐ろしく早い。そのため入手した場合は極力、即座に食べてしまうようにしたが、余ったものは醤油で煮込んだり、味噌漬けにしたりした。

隊活動後半においては、持参食糧も大部分底をつき現地米など主食類も購入することになったが、一般的に持参食糧の量は適量であった。主食類、野菜類、調味料類はだいたい現地調達が可能であ

る。

活動中の食事は朝食にラーメン、スパゲティ、昼食にラーメン、ビスケット、パン、チャパティ、夕食には、スパゲティ、チャーハン、カレーといった組み合わせが多かった。特にカレーは多種の香辛料を使った現地風のもので、隊員の自慢料理であった。

最後に食糧の梱包についてであるが、防水のためダンボールの上に耐水性のペンキを塗り、さらにビニール袋で内・外側をくるんだ。米はポリタンクに入れたが変質することはなかった。バック入りの食品、ビン詰類も開封さえしなければ十分に保存がきく。ただ、漬物類は多少変質した。現地は毎日40℃を超える暑さであるが、大部分の食糧は変質することがなかった。梱包に関しては特に問題はなかったが、ダンボール箱は水に弱く、ブリキ罐の方が雨の中での輸送の時などには便利であろう。

持参食糧リスト

品 目	2 次		3 次		寄 贈 元	備 考
	数 量	重 量(kg)	数 量	重 量(kg)		
<主食類>						
日本米	—	53.0	—	20.0	魏氏(2次) 購入(3次)	現地米でも可, 変質なし
スパゲッティ	15袋	15.0	30袋	30.0	ニッポン食糧	好評, 料理法多様で良
インスタントラーメン	120袋	15.0	103袋	4.0	エースコック, 明星食品	軽量化に良, 変質なし
アルファ米	—	—	24袋	3.8	岳稜会(3次)	行動に便利
ホットケーキ	20箱	9.5	30箱	13.5	日清製粉	むしろパンなど作れるが, 手間がかかる
小麦粉	—	18.0	—	13.0	〃	料理法多様
クラッカー	80箱	12.0	45箱	5.2	山崎ナビスコ	不足した, 行動食
ビスケット	20箱	4.0	30箱	6.0	〃	〃 〃
ポテトチップ	—	—	4パック	0.5	〃	
そうめん	6束	1.5	8束	2.0	岳稜会(3次)	特別食として好評
<副食類>						
コンビーフ	—	—	50缶	4.5	(購入)	非常に便利, 料理法多様

品 目	2 次		3 次		寄 贈 元	備 考
	数 量	重 量(kg)	数 量	重 量(kg)		
肉・魚類缶詰	23缶	6.5	119缶	24.5	大洋漁業(2次)	非常に便利
フルーツみつ豆	1缶	0.7	—	—	〃	
桃缶詰	24缶	22.0	—	—	日本リビー(2次)	特別食
コンデンスミルク	—	—	5缶	1.5	岳稜会(3次)	〃
漬物	98袋	14.0	69袋	9.2	東海漬物	日本風のおかずとして良
ハチミツ	2ビン	1.0	3本	1.0	岳稜会(3次)	砂糖の代用になる
ジャム	2ビン	1.8	—	—	大洋漁業(2次)	好評, 現地で入手可
ワカメ	—	0.5	—	0.2	岳稜会(3次)	みそ汁に良
干しシイタケ	—	—	6袋	0.3	〃	〃
ノリ	30枚	0.1	—	—		特別食
山菜釜めしの素	—	—	10袋	1.2	岳稜会(3次)	便利
高野豆腐	—	—	2箱	0.1	〃	
カレー(ヒートパック)	—	—	2袋	0.4	〃	便利
シチュー(〃)	—	—	2袋	0.4	〃	〃
とり釜めし	7箱	1.4	—	—		〃
五目めし	8箱	1.8	—	—		〃
＜飲料類＞						
インスタントコーヒー	1ビン	0.6	1ビン	0.2	(購入)	好評
緑茶	5袋	2.0	2缶	0.3		〃
粉ジュース	—	—	—	1.8	岳稜会(3次)	好評
コンソメスープ	45個	0.4	1袋	0.5	テーオー食品	
中華スープ	—	—	1袋	0.5	テーオー食品	
インスタントスープ	—	—	3箱	0.1	岳稜会(3次)	
インスタント味噌汁	200袋	2.0	—	—	宮坂醸造(2次)	便利
＜調味料類＞						
粉クリーム	—	—	4ビン	1.2	岳稜会(3次)	
醤油	2本	2.0	4本	4.0	(購入)	必要, 利用法多様
粉末醤油	2袋	2.0	—	—	〃	
食塩	2袋	1.3	2袋	1.2	〃	必要, 現地入手困難
味の素	1袋	0.25	1缶	1.0	〃	
サラダ油	3缶	4.5	2缶	2.0	〃	不足, ヤシ油で代用
天ぷら油	—	—	1缶	1.4	〃	
酢	2ビン	2.4	1ビン	0.5	〃	

味噌	—	—	6袋	6.0	宮坂醸造(3次)	過多
砂糖	15袋	15.0	20袋	2.0	三井精糖(2次)	不足, 現地入手困難
ソース	5本	2.0	3本	1.0	(購入)	
マヨネーズ	—	—	2ビン	1.0	〃	大好評, 開封後要食
コショウ	11ビン	1.5	9ビン	0.2	エスビー食品 テーオー食品	不足, 現地入手可
粉末しょうが	7ビン	1.5	10ビン	0.3	〃	
七味唐がらし	10ビン	1.5	5ビン	0.1	〃	不足, 現地入手可
粉わさび	8缶	0.8	5缶	0.1	〃	
ゴマ塩	20袋	0.1	—	—	エスビー食品	日本米に良
塩ガーリック	—	—	10ビン	0.4	〃	
洋風からし	8缶	0.8	5チューブ	0.2	〃	
シチューの素	—	—	8箱	0.8	〃	
炒飯の素	40袋	0.1	32袋	1.0	〃	現地米に最適
チキンライスの素	—	—	20袋	1.0	〃	〃
カレー粉	3袋	0.3	10箱	1.1	〃	日本風カレー好評
ベーキングパウダー	1缶	0.1	1缶	0.1	〃	
スパゲッティソース	—	—	30袋	2.0	〃	ケチャップの代用も可
片栗粉	2袋	0.3	—	—		
ゼラチン	2箱	0.1	—	—		
寒天	2箱	0.1	—	—		
さらしあん	1袋	0.2	—	—		特別食
あずき	3袋	1.0	—	—		特別食

医療報告(第2次・3次隊)

第2次、3次隊を通じ隊員の疾病には、本来調査に費すべき多くの時間をさかれてしまった。特に各隊員が現地に順応するまでの下痢、発熱などには悩まされた。

熱帯地方特有の細菌や気候に対する免疫が我々日本人には少なく、現地人にはかかりにくい病気も罹患しやすい状況であった。特にジャングル地帯に長期滞在して毎日調査活動を行なっていたために体に無理のかかることも多かった。個々の疾病については下記の通りであるが、細菌性の内臓

疾患や、ひふ病、傷口の化膿などが目立った。

また、2次隊の執行隊員が自然気胸を出発前にわずらい、現地での再発が心配されたが幸いに発病せずにすんだ。当隊では英文のカルテを日本から持参し、コロomboの中央病院とも連絡を取って万一の時にそなえた。

なお、第1次、2次隊では、ジャングルでの活動中マラリヤの予防薬を定期的に服用していたが、3次隊では薬の副作用を考え、現地で流行している時のみ服用する事とした。しかし結果的には

1度も服用せず、田中、境の2名が現地で発病した。帰国後も、最初の発病から3ヶ月後に再発し、約2週間入院した。

〔主な疾病〕

マラリヤ 田中、境が現地にて発病、3ヶ月後日本にて再発、2週間入院。
 食中毒 田中が地酒(トディ)の飲み過ぎで発病、3日間入院。
 ポウコウ炎 3次隊全員と2次隊の岡村が発病、生水を飲み過ぎたためと思われる。
 急性発熱 執行、八木、下坂が原因不明の発熱

やけど

虫さされ

痔

〔薬品〕

を起こす。執行は3日間入院。
 下坂、深谷が基地生活中に、田中がバイクにてやけどを負う。
 夕方になると蚊やブヨが多く、毎日悩まされた。
 数名の隊員が悩まされた。苛酷な活動と、辛い食事によると思われる。
 薬品に関しては、その多くが各製薬会社より寄贈していただいたもので、残余分は支障のないものに限り現地住民に残してきた。

薬品・医療用具リスト

薬品名	2次隊		3次隊		寄贈元	
	持参量	使用量	持参量	使用量		
ビタミン剤	ガルタF10	235t ^錠	20t	500t	50t	日清製薬
	ビタミンE(糖衣錠)			200t	0	日清製薬
解熱・鎮痛剤	ボンカイン	240t	60t	240t	40t	中外製薬
	ネオグレンA	600t	180t	100t	20t	日清製薬
	ドロラン錠	70t	0			
風邪薬	強力ルルゴールド	200t	20t	100t	15t	
	新エスタックW	12 ^錠	12 ^錠			
抗生物質	テトラサイクル	300 ^錠	150 ^錠	200 ^錠	80 ^錠	中外製薬
広範囲化学療法剤	チアマイゾン	100	25			中外製薬
	ホモスル			24包	10包	中外製薬
整腸剤	パスラ	235 ^錠	150 ^錠	30 ^錠	10 ^錠	中外製薬
	三共整腸薬	60t	0	60t	16t	
	正露丸	500t	20t	250t	50t	
	カートン			108包	40包	中外製薬
緩下剤				100t	45t	
下痢止	アピアン			96t	30t	
抗マラリア剤	レゾヒン	現地購入				
外用薬	メーザソフト	24g	24g			
かゆみ止	ムヒS	24g	24g	120g	120g	
	新キーメントコース	60g	60g	150g	150g	

薬品名	2 次 隊		3 次 隊		寄贈元
	持参量	使用量	持参量	使用量	
			120ml	120ml	
			100ml	100ml	
			40t	20t	
ひふ病薬	50g	10g	50g	25g	
			10g	10g	
	50g				
			40mg	40mg	
	60g	60g			中外製薬
防虫	36g	36g			
			60g	60g	
防虫スプレー	160ml	160ml	800ml	800ml	中外製薬
消炎薬	24枚	6枚	10枚	5枚	
	20g	0			
	200g	10g	100g	30g	
	500ml	80ml	100ml	20ml	
	100ml	10ml			
	600cc	60ml	300cc	300cc	
	500cc	60ml	50cc	10cc	
	120枚	5枚	60枚	30枚	
眼薬	45ml	15ml	15ml	7ml	
仁丹	2160粒	300粒	1750粒	300粒	
	20g	0			
	1本	0			
殺虫剤	10本	10本	20本	20本	
			1缶	1缶	
			2缶	2缶	中外製薬
			2缶	2缶	
			8本	4本	中外製薬
蚊取り線香	200本	200本	150本	150本	
医療器具					
	2本	2本	1本	1本	
	1本	1本	1本	1本	
	1本	0			
	23本	0			

体温計	3本	3本	1本	1本
眼帯	3組	0	2組	0
繙帯	20巻	4巻	6巻	5巻
ガーゼ	30cm×10m	30cm×1m	30cm×10m	30cm×2m
油紙	68枚	0	50枚	15枚
脱脂綿	500g	50g	150g	100g
バンドエイド	300枚	300枚	400枚	200枚
ビニール手袋	1組		1組	1組
綿棒	144本	144本		

第2次隊会計報告

収入総額

隊員負担金(25万円×6人)	1,500,000(円)
大学援助金	130,000
部援助金	15,000
OB会援助金	72,000
一般寄付	10,618
計	1,727,618(円)

国内支出総計

準備費用(事務・交通費等)	28,470(円)
諸装備購入費	
装備費	40,040
食糧費	10,562
医療費	20,070
記録費	27,580
渡航費(12万8千円×6人)	768,000
装備輸送費	60,098
計	954,820(円)

以上、全収入より国内支出分(円払い)を差引いた金額(772,798円)のうち771,900円=2573\$を隊持参金とし、残金898円は在京事務予備として残す。

外貨収入総計

隊持参金(1\$=300)	2,573(\$)
装備売却	7(\$)
計	2,580(\$)

現地支出(外貨)

①インド滞在期間

分散して日本を出発した為、各隊員に60\$支給。その他交通費として90\$支出。

インド滞在費(60\$×6人)	360(\$)
その他交通費	90
計	450(\$)

②スリランカ滞在期間

スリランカルピー (1\$=1184RS.)

交通費	623.30(RS)	53(\$)
宿泊費	1700.50	144
食費	624.35	53
食糧費	1069.60	90
装備費	722.38	61
資料費	447.10	38
医療費	83.48	7
通関・輸送費	395.625	334

通信・連絡費	137.15	11
雇用費(ハンター)	564.35	47
隊員生活費	4828.08	408
その他(記念品等)	188.25	16
計	14944.79(RS)	1262(\$)

国内残金	898円
計	261,298(円)
帰国後支出総計	

上記の現地支出分(①+②)を外貨総収入から差引いた金額を、帰国後の諸経費にあてる。

$$2580(\$) - [450(\$) + 1262(\$)] = 868(\$)$$

(1\$ = 300)

会計残金、260,400円

装備輸送(コロンボ→日本)	29,135(円)
通関費用	3,286.2
輸送費	9,200
交通費	470
フィルム現像	31,130
スライドケース	6,000
その他	1,760
計	110,557(円)

帰国後収入総計

$$\text{残金 } 261,298 - 110,557 = 150,741(\text{円})$$

会計残金 260,400円

第3次隊会計報告

収入総額

隊員負担金(30万円×4人)	1,200,000(円)
大学援助金	215,000
OB寄付	30,708
隊員バイト収入	40,000
一般寄付	13,010
計	1,498,718(円)

その他	830
渡航費(158,300円×4人)	633,200
装備輸送費	50,329
カルネ関係費	36,200
在京事務局費	14,420
計	933,527(円)

国内支出総計

準備費用(事務・交通費等)	71,810(円)
諸装備購入費	
装備	37,840
食糧	259,830
医療品	18,635
記録費	4,140
フィルム	40,140

以上、全収入より国内支出分(円払い)を差引いた金額(565,191円) = 1,916\$が隊持参金となる。

外貨収入総計

隊持参金(1\$ = 295円)	1,916(\$)
日本陶器、夏目氏寄付	45
装備売却	11
計	1,972(\$)

現地支出(外貨)		
①インド入国以前(香港・タイ)		
食費	18(\$)	
諸経費(空港税等)	12	
計	<u>30(\$)</u>	

②インド滞在期間
インドルピー(1\$ = 8.7Rs.)

交通費	1 270.50(Rs.)	146(\$)
宿泊費	5 830.00	67
食費	30 500.00	35
諸経費(出国税等)	8.00	0.9
通信連絡費	10.10	1.2
隊員生活費	6 650.00	7.6
その他(チップ等)	2.50	0.3
計	<u>22 376.00(Rs.)</u>	<u>258(\$)</u>

③スリランカ滞在期間

スリランカルピー(1\$ = 13.4Rs.)

交通費	6 328.5 (Rs.)	47 (\$)
宿泊費	1,194.46	89
食費	977.57	73
食糧費	829.83	62
装備費	952.42	71
資料費	1,540.22	115
医療費	26.51	2
諸経費(関税等)	1,058.25	79

通信・連絡費	47 255	35
雇用費(通訳等)	95 871	72
装備現地輸送費 (スリランカ国内)	1,935.45	144
日用品(雑貨)	14.46	1
その他(記念品等)	2 127.0	16
隊員生活費	3,775.82	282
装備輸送費 (コロンボ→東京)	1,899.80	142
計	<u>16,481.60 (Rs.)</u>	<u>1230(\$)</u>

上記の現地支出分(①+②+③)を外貨総収入から差引いた金額を、帰国後の諸経費にあてる。

$$1972(\$) - [30(\$) + 258(\$) + 1230(\$)] = 454(\$)$$

(1\$ = 295円)

会計残金 = 133,930円

帰国後収入総計

会計残金(454\$)	133,930円
カルネ返却金	10,000
計	<u>143,930円</u>

帰国後支出総計

通関・装備輸送費	46,640円
スライド・マウント代	39,730
雑費その他	27,085
計	<u>114,455円</u>

$$\text{残金 } 143,930 - 114,455 = 29,475 \text{ (円)}$$

参 考 文 献

- ◇山田英世『セイロン、こめとほとけとナショナリズム』（桜楓社、1974年）
- ◇山田英世「古代シンハラ族における政教両権の源泉」（『哲学と教育』16号、1968年）
- ◇山田英世「古代シンハラ族の精神構造と近代化の展望」（アジア・エートス研究会編『アジア近代化の研究』御茶の水書房、1969年）
- ◇山田英世「セイロンのナショナリズムと精神構造」（『アジア・クォーターリー』第3巻第3号1971年）
- ◇山田英世「シンハラ族のセイロン定住と種族意識の形成」（『哲学と教育』20号、1972年）
- ◇山田英世「シンハラ族のセイロン定住と種族意識の形成（承前）」（『哲学と教育』22号、1974年）
- ◇中村尚司「セイロン島におけるプランテーション農業の成立」（『アジア経済』5-1、1964年）
- ◇中村尚司「スリランカ社会主義の課題」（『世界』345号、1974年）
- ◇中村尚司『共同体の経済構造』（新評論、1975年）
- ◇中村尚司「南インドの村落社会と海外移住」（『インド史における村落共同体の研究』辛島昇編、東大出版会、1976年）
- ◇中村尚司「スリランカの政権交替と新しい経済政策」（『アジア・クォーターリー』第11巻第1号1978年）
- ◇中村尚司「70年代日本における発展途上地域研究／地域編スリランカ」（『アジア経済』19巻1・2号、1978年）
- ◇中村尚司「スリランカ憲法」（大内穂編『転換期におけるインド憲法』アジア経済研究所、1978年）
- ◇林 理介「スリランカ民主連合政権の苦悩—パンダラナイケ政権が選んだ右寄り転換への道—」（『アジア』第9巻第8号、1974年）
- ◇林 理介「南アジアにおける近代化指向とその挫折—パキスタン・スリランカ・バングラデシュ」（『朝日アジアレビュー』8巻2号、南アジアの選挙〈特集〉、1977年）
- ◇アジア経済研究所編『セイロン経済』同研究所刊
- ◇岩本 裕『仏教入門』中公新書
- ◇斉藤吉史『東南アジアの構造』朝日新聞社刊
- ◇日本国際問題研究所編『セイロン便覧』外務省アジア局刊
- ◇平川 彰『インド仏教史』春秋社刊
- ◇山本達郎編『東南アジアの宗教と政治』
- ◇渡辺照宏『仏教』岩波書店刊
- ◇永井義雄「近代化におけるアジアのエートスと民族統一戦線」（『名城学』第16巻第4号、1967年）
- ◇根岸富二郎編『アジア新時代の国々に』（毎日新聞社、1972年）
- ◇辛島 昇編『インド入門』（東京大学出版会、1977年）

- ◇中村平治『南アジア現代史』（山川出版社、1977年）
- ◇栗本 弘『セイロンの経済開発』（アジア経済研究所、1963年）
- ◇日本セイロン協会（訳）『スリランカの憲法』（日本セイロン協会、1972年）
- ◇西村朝太郎『文化人類学論攻』（日本評論者）
- ◇小浪 充「スリランカの政治と社会」（『世界経済』第30巻第10号、1975年）
- ◇「セイロンにおける人種的抗争」（『エコフェ通信』198号）
- ◇「セイロンの社会構造」（『エコフェ資料』№28、日本エコフェ協会、1962年）

Alles. A.C.	<u>INSURENCY-1971"</u>	1976	Colombo
Brohier.R.L.	<u>SEEING CYELON</u>	1971	Colombo
Brohier.R.L.	<u>"ANCIENT IRRIGATION WORKS IN CEYLON"</u>		
	PART TWO (North,Western Area)		
		1934	Colombo
Brohier. R.L.	<u>ANCIENT IRRIGATION WORKS IN CEYLON</u>		
	PART ONE (North Eastern Area)		
		1934	Colombo
Brohier. R.L.	<u>DISCOVERING CEYLON</u>	1973	Colombo
Buddhadatta. A.P.	<u>THE NEW PALI COURSE (PART I)</u>		
		1962	Colombo
Ceylon Observer(ED)	<u>PICTORIAL</u>	1973	Colombo
Deraniyagara. S.	<u>ANCIENT CEYLON</u>	1972	Colombo
Disanayaka.J.B.	<u>SAY IT IN SINHALA</u>	1974	Colombo
Ellawala. H.	<u>SOCIAL HISTORY OF EARLY CEYLON</u>		
		1969	Colombo
Esmeè Rankine	<u>ISLAND INTERLUDE</u>	1971	Colombo

- Gausсен. H./Legris.P. /Viart.M. /Labroue.L. /
EXPLANATORY NOTES ON THE VEGETAION
MAP OF CEYLON 1968 Colombo
- Geiger. W. CULAVAMSA (PART1-2) 1953 Colombo
- Geiger. W. /Mendis. G.C./
THE MAHAVAMSA 1912 London
- Godakumbura. C.E. THE KOTAVEHERA AT DEDIGAMA
1969 London
- Hulugalle. H.A.J. GUIDE TO CEYLON 1969 Colombo
- Hulugalle. H.A.J. CEYLON OF THE EARLY TRAVELLERS
1969 Colombo
- Keble. W.T. KING IN KURUNEGALA 1963 Colombo
- Keuneman. H. CEYLON IN PICTURES 1963 Colombo
- Keyt. G. FOLK STORIES OF SRILANKA
1974 Colombo
- Liyanagamage. A. THE DECLINE OF POLONNARUWA AND
THE RISE OF DAMBADENIYA
1968 Colombo
- Lyn De Alwis NATIONAL PARKS OF CEYLON A GUIDE
1969 Colombo
- Malalasekera. G.P. BUDDHISM IN CEYLON 1971 Colombo
- Martin Wickramasinghe THE BUDDHIST JATAKA STORIES
1956 Colombo
- Medis. G.C. PROBLEMS OF CEYLON HISTRY
Colombo
- Mendis.M.W.J.G. the planning implications of the
MAHAVELI DEVELOPMENT PROJECT in
Srilanka 1973 Colombo

- Mudiyanse. N. MAHAYANA MONUMENTS IN SEYLON
1967 Colombo
- Nicholas. C.W. / Paranavitana. S.
A CONCISE HISTORY OF CEYLON
1961 Colombo
- N.G.S.
the NATIONAL GEOGRAPHIC MAGAZINE
Apr.1966 Washington
- Paranavitana. S. SINHALAYO 1967 Colombo
- Paranavitana. S. ART OF THE ANCIENT SINHALESE
1970 Colombo
- Paul-Wirz KATARAGAMA The Holiest Place In
Ceylon 1966 Colombo
- Parker. H. VILLAGE FOLK TALES OF CEYLON Vol.1
1910 Colombo
- Phillips. W.W.A. BIRDS OF CEYLON 1961 Colombo
- Pieris.R. SINHALESE SOCIAL ORGANIZATION
1956 Colombo
- Prematilleke. L. / Silva. R.
A BUDDHIST MONASTERY TYPE OF
ANCIENT CEYLON SHOWING MAHĀYĀNIST
INFLUENCE ARTIBUS ASIAE (Vol.XXX)
Institute of Fine Arts. New York
Univ.,
- Rahula.W. HISTORY OF BUDDHISM IN CEYLON
1956 Colombo
- Ranawake. E. SPOKEN SINHALESE FOR BEGINNERS
1968 Colombo
- Rankine. E. ISLAND INTERLUDE 1971 Colombo
- Raven-Hart. R. CEYLON HISTORY IN STONE
Colombo
- Raven Hart. R. TRAVELS IN CEYLON 1700-1800
1963 Colombo

Saparamadu. S.D. (ED)	<u>THE POLONNARUUA PERIOD</u>	1955	Colombo
Sarachchandra. E.R.	<u>THE FOLK DRAMA OF CEYLON</u>	1952	Colombo
Senaveratna. J.M.	<u>Guide to Mihintale</u>	1952	Colombo
Senaveratna. J.M.	<u>The Story of MAHIYANGANA</u>	1948	Colombo
Senaratne. S.P.F.	<u>PREHISTORIC ARCHAEOLOGY IN CEYLON</u>	1969	Colombo
Senarat Paranavitana	<u>Art of the Ancient Sinhalese</u>	1971	Colombo
Sinnatamby. J.R.	<u>CEYLON IN PTOLEMY'S GEOGRAPHY</u>	1968	Colombo
Spittel. R.L.	<u>WILD CEYLON</u>	1951	Colombo
Spittel. R.L.	<u>VANISHED TRAILS The Last of the Veddas</u>	1961	Colombo
Storey. H.	<u>HUNTING AND SHOOTING IN CEYLON</u>	1907	Colombo
Times of Ceylon (ED)	<u>Annual</u>	1973	Colombo
The Department of Archaeology	<u>THE KOTAVEHERA AT DEDIGAMA</u>	1969	Colombo
The Ministry of Cultural Affairs	<u>REGISER OF ANCIENT MONUMENTS</u>	1972	Colombo
Trehearne. C.	<u>THE GOLDEN RIVER</u>	1965	Colombo
Uduwara. J.	<u>ANCIENT MONUMENTS OF ANURADHAPURA</u>	1972	Colombo
Urmila Phacnis	<u>RELIGION AND POLITICS IN SRILANKA</u>	1976	New Delhi
Vijayatunga. J.	<u>ISLAND STORY</u>	1949	London
Walpola Rahula	<u>HISTORY OF BUDDHISM IN CEYLON</u>	1966	Colombo

- Weerasooria. N.E. CEYLON AND HER PEOPLE (Vol1-4)
1970-1971 Colombo
- Wickremesinghe. K.D.P. THE BIOGRAPHY OF THE BUDDHA
1972 Colombo
- William Peiris THE WESTERN CONTRIBUTION TO BUDDHISM
1973 Canada
- Disanayaka. J.B. NATIONAL LANGUAGES OF SRILANKA I
SHINHALA Colombo
- Godakumbure. C.E. LITERATURE OF SRILANKA
1973 Colombo
- Goonatilleka. M.H. SOKARI OF SRILANKA 1976 Colombo
- Goonatilleka. M.H. MASKS OF SRILANKA 1976 Colombo
- Kailasapathy. K. & Sanmugadas. A.
NATIONAL LANGAGES OF SRI-LANKA II
TAMIL Colombo
- Kalatillake. C.De.S. & Ranjan Abeysinghe.
A BACKGROUND TO SINHALA TRADITIONAL
MUSIC OF SRI-LANKA 1976 Colombo
- Mukulloluwa. W.B. DANCES OF SRI-LANKA Colombo
- Nandadeva Wijesekera ANCIENT PAINTINGS AND SCULPTURE
OF SRI LANKA 1976 Colombo
- Tilakasiri. J. PUPPETRY IN SRI LANKA
1976 Colombo
- Goclakumbura. C.E. TERRACOTTA HEADS Colombo

◇ 法政大学セイロン島密林仏跡探査隊 セイロン島の密林遺跡』1975年 日本観光文化研究所

協 賛 者 芳 名 録

(敬称略・アイウエオ順)

〔法人の部〕

アイガースポーツ

アイワ

朝日新聞社

エスビー食品

エースコック

エバニュー

大阪商船三井船舶

オニツカ

共同通信社

佼成出版社

構文社

小林紙店

コーリン鉛筆

在日スリランカ大使館

J I S U

ジャパン・エクスプレス

新日本電気

セイラー万年筆

セイロン観光局

ゼブラ

ソニーエバレディー

大洋漁業

D U C 国際交流開発

中外製薬

テーオー食品

東海漬物

東芝商事

トンボ鉛筆

ニチバン

日清食品

日清製粉

日通トラベルサービス

ニッポン食糧

日本リビー

三菱鉛筆

宮坂醸造

明星食品

ヤマザキ・ナビスコ

山と溪谷社

〔学内関係＝順不同〕

中村 哲(法政大学総長)

村串仁三郎(学生部部长)

岸 伸年(学生会館課課長)

丸田維彦

法政大学校友会

法政大学後援会

法政大学学生団体連合本部

法政大学岳稜会

丸山正文

上田明弘

上田 浩

植田哲郎

一瀬恭彦

金子敏弘

平岡良彦

津田宏毅

北嶋正喜

太田 剛

内田英隆

法政大学体育会山岳部

〔部関係＝順不同〕

故鶴谷研三郎(当時部長・教養部教授)

渡辺一夫(部長・地理学科教授)

川 成 洋(部顧問・教養部教授)

三井嘉都夫(地理学科教授)

市瀬由自(")
小川 徹(地理学科講師)
泰本 融(教養部教授)
田渕 洋(")
小西正捷(教養部助教授)
西尾博之(部顧問・日本テレビ)
永井忠興(以下OB)
清水功雄
野本清孝
北条欣吾
牛尾博美
古谷敏明
平 靖夫
竜田孝則
茂木好夫
有吉 孝
若林則夫
目賀田正治
岡 雅幸
山本哲也
中村輝義
西村 健
笠井芳郎
杉本哲郎
森井健一
今関直人
海老沼晴夫
塚越孝行
増永憲彦
増井外志
伊藤 修
高月真主幸
今村和子
甕 三郎
伊藤郁子
大竹由美子

甲斐哲夫
佐藤英郎
竹内 隆
荒川節子
鴨原悦代
大場由隆(以下現役部員)
浅野哲哉
岡野 豊(以下部友)
青島博幸
稲葉四郎
広中幹男
坂田邦雄
中野正行
石井洋一

[現地関係 List of helper in Srilanka]
(at Colombo)

Ministry of Cultural Affairs
Tourist Board
Archaeology Dept.
Mr. M.H. Sirisoma
Survey Dept.
The Silumina
Mr. C. Weerawardane
Sri Lanka Ex-Servicement Institute
在スリランカ日本国大使館
Ransir Transportee R.S.LTD
Security Shipping & Forwarding Co.
Mr. S.K.AMARASEKARE
Mr. V. Weerawardane
(at Peradeniya)
University of Sri Lanka
Dr. L. Prematilleke
(at Polonnaruwa)
Polonnaruwa Government Agency
Mr. A.Gunawardana

Mr. R.D. Fernando
Mr. A. Subusinge
Mr. M.R. Ranaweera
(at Pimburettawa)
Pimburettawa Elementary School
Mr. S. Ranasinhe

Mr. M.H. Siriljeyarathna
Mr. A.M. Thisahami
Mr. A.M. Sugathapala
Mr. P.K.R. Sanavirathna
Mr. M.H. Sanathjeyarathna
Mr. S.M. Premarathna
(at Allewewa)

Mr. P. Chandrathisa
(at Kudagala)
Mr. A.M. Senevirathne
Mr. H.M. Kirivandha
Mr. H.M. Jayawarudena

(at Golakakanda)
Mr. R.M. Darumadasa
(at Dewagala)
Mr. E.R.M. Bandar

(at Matale)
Matale Government Agency

Noritake Company (日本陶器)
夏目浩美
(at Pallegama)
Mr. A. Athurugiriya
Mr. K.D. Piyadasa
(at Hettipola)
Mr. Amaradasa
(at Maraka)
Mr. R.M.K. Sirinama Bandara
Mr. M.G.P. Banda
Mr. E.A. Sayneris
Mr. Gunaratna
Mr. Ananda
(at Kadurupitiya)
Mr. A.G.P. Walagedara
Mr. A.G.G. Dayaratne
Mr. N. Uderathna
Mr. U. Karunarathna
Mr. Somadasa
Mr. Genadasa
Mr. Punchibanda
Mr. Tirakarathna
Mr. Pemadasa

あ　と　が　き

1969年に法政大学インド洋モルディブ諸島探検隊がスリランカに上陸し、マハウェリ河下りを試みるとともに各地の仏教遺跡を訪れ、その後の調査活動の端緒を開いてから、もう足かけ10年になる。その間、われわれ法大探検部は3次にわたる遠征調査のために、のべ17人の隊員を投入し、通算1年余の現地行動時間を費して、同国マハウェリ河中流域の歴史遺産の解明に力を注いできた。そして、その結果、今日までに95ヵ所の遺跡地点とその概要を明かにすることができた。これらの結果に対する評価は、現地当局あるいは後代の研究者にまかせるとしても、一国の一地方をこれだけ縦横に歩き回り、これだけの密度でひとつのテーマを追いかけられたことに、われわれ自身がひそかな自負を抱かないといえは嘘になるだろう。

しかし、同地方の古代の繁栄をしのぶには、あまりにも絶望的なジャングルの広がりの中であって、これらの遺跡の数や、われわれの入手したデータが実際はまだまだ物の数ではなく、これからさらに際限のない調査活動が必要であろうことも、われわれ自身には一番よくわかっているつもりで

ある。その意味ではこれまでの3次の調査に続く第4次、第5次の遠征派遣こそが、今後のわれわれに課せられた義務であろうし、2巻目を数えた本報告書の続編を出し続けることで、その責任を果たしてゆかなければならないだろうと考えている。いわば、われわれにとって本報告書の刊行は、そのための1里塚にしかすぎないのである。

第2次隊の帰国から3年、第3次隊帰国からもすでに2年が過ぎ、報告書刊行の時期としては遅きに失した感もある。ひとえに著者、編者の怠惰によるものであるが、そのわれわれを叱咤激励し、さらに資料写真の印刷原稿作りから編集作業の細かなアドバイスまで、何かと面倒を見ていただいた日本観光文化研究所の宮本千晴氏のおかげで、この報告書はようやく刊行にこぎつけることができたのである。第1次隊のレポートに引きつづいて資金面でお世話になった日本観光文化研究所をはじめ、遠征隊の組織時から現地行動を経て報告書刊行に到るまで多くの御援助をいただいた関係の各位には、厚く御礼を申し上げる次第である。

(岡村)

セイロン島の密林遺跡(II)

1978年10月31日発行

限定 500部
頒価 1500円

著者 法政大学セイロン島密林仏跡探査隊
編集人 岡村 隆
発行人 宮本 千晴
表紙 西山 妙
発行所 日本観光文化研究所
東京都台東区台東1-12-11
第2コモダビル, 近畿日本ツーリスト内
TEL. (03)832-0982
印刷所 言游社
東京都新宿区東五軒町7番地

AMKAS · AMKAS · AMKAS · AMKAS · AMKAS · AMKAS